

(財)群埋文発掘調査事業団調査報告書第14集

昭53県営畑総土地改良清里地区報告書第1集

清里・陣場遺跡

昭和53年度県営畑地帯総合土地改良事業
清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

1981年

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

清里・陣場遺跡正誤表

ページ	行または番号	誤	正	ページ	行または番号	誤	正
例言2	4	大木伸一郎	大木伸一郎	168	2-4号溝-36	螺旋状の暗文	螺旋状の暗文
例言2	4	金子真土	金子真土	207	溝113-12	口縁胎部 ⁵	口縁胎部 ⁵
6	2	道路部分	道水路部分	216	溝114-29	高台付點付点	高台の點付点
6	10	図1	第1図	221	表様-3	①褐色	①褐色
6	18	有馬義理	有馬義生	222	6	住居形態等	住居形態等
8	14	類以する。	類似する。	222	26	把握する	把握する
8	下から3	塚	塚	232	合計	7	47
10	下から6	兼理制水田	兼理制水田	245	5	総数164片	総数168片
27	9日-南土丘4	小型塚	小型塚	247	縁輪-21	合子	合子
29	11日-1	小さい塚	小さい塚	284	28	溝144-2号	溝114-2号
29	11日-2	小さい塚	小さい塚	271	5	第170図3	第170図1
29	11日-3	小型塚	小型塚	285	21	おけての時期	かけての時期
36	18日-1	小型の塚	小型の塚	285	22	もと推定される	もと推定される
42	23日-3	塚	塚	285	下から3	大きな筒瓦	大きな筒瓦
54	30日-14	粘付ている。	粘付ている。	301	5	器内の厚い裏	器内の厚い裏
112	54日-15	内面 目紋	内面布目紋	302	23	底部糸切後	底部糸切後
116	55日-8	④水	④密	303	16	42号位	42号位
127	16	1.85m	1.85m	313	下から6	竈	土塚
131	13	塚等出土。	塚等出土。	314	8	「続日本紀巻11」	「続日本紀巻十七」
158	1溝-150	③口縁-床面 ⁵	③口縁-底面 ⁵	314	下から5	3・4期類	2・3期類
158	1溝-151	器内の厚い環	器内の厚い環	314	下から4	浅間山噴出の	浅間山噴出の
158	1溝-159	小さな高台が、	小さな高台を、	316	右から1	續日本紀	續日本紀
163	1溝-218	内面衣目	内面布目				

資料	群馬県埋蔵文化財	01-353
	調査事業団保管	
No. 1-2446	平成2年3月3日	(6)

清里・陣場遺跡

昭和53年度県営畑地帯総合土地改良事業
清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

1981年



1 89-34グリット出土緑釉陶器碗



2 墓壇出土菊皿(1)



3 墓壇出土菊皿(2)



4 41号住居址出土灰釉陶器碗



5 63号住居址出土灰釉陶器碗



6 45号住居址出土金銅製丸柄



7 耕114号出土石製丸柄



8 緑釉陶器破片(1)



9 緑釉陶器破片(2)

序

昭和53年度は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が、前橋市平和町の旧前橋土木事務所の建物を仮用して、ここに声を上げた年であります。設備も、調査体制も不十分ななか、われわれは、新機構の中で、埋蔵文化財保護の使命感に燃えて、遺跡調査にとりくんできました。

その中の、清里陣馬遺跡の発掘調査報告書が上梓の運びとなり、その成果を公刊できますことは、感慨ひとしおのものがあります。

この遺跡は、榛名山東南麓の畑地帯総合土地改良事業にかかわる埋蔵文化財の発掘調査で、調査は道水路部分に限定されましたが、平安時代を中心とする多数の住居跡の検出、それと関連する縦横の溝とそこからの多く出土遺物、中世土壇の検出等の成果がありました。

特に、平安時代の住居の重複関係による土器編年、多量の緑釉、灰釉陶器の出土、巡方、丸柄など特殊遺物の発見など、この遺跡の性格ともからめて注目されるものとなりました。また、製鉄関連遺構の発見も、少ないこの種遺跡の調査例を加えた点で、大きな意義があるものと考えます。

本報告書は、こうした点についてその実態を報告し、合せて考察を加えるなかで、遺跡の性格についても追求しています。特に、この地域が従来想定されてきた「有馬君」の本貫地に比定されることから注目されるものと考えます。

本報告書が、そうした観点からみて少しでも資するところとなり、地域史を構成するための基礎資料として活用されますことを期待し、この発掘調査・整理作業に関連された人たちの労を多として敬意を表し、序といたします。

昭和57年3月25日

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1 本書は清里地区畑地帯総合土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。

2. 発掘調査は3年計画で行なわれ、今回の調査は初年度にあたる。

3. 事業主体 群馬県農政部（耕地改良課）

4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

5. 調査組織 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

調査研究員 西田健彦

（現群馬県教育委員会文化財保護課文化財保護主事）

調査研究員 中沢 悟

6. 調査地点 北群馬郡吉岡村陣場85他

前橋市池端町400他

7. 調査期間 昭和54年1月8日～3月24日

8. 本書執筆者の所属は次のとおりである。

花岡鉦一（群馬県工業試験場化学課）

梅沢信夫（群馬県県民生活部国民健康保険課参事・貨幣研究者）

井上唯雄（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査研究部長）

大江正行（ 同 上 調査研究員）

藤巻幸男（ 同 上 ）

西田健彦（ 同 上 、現県文化財保護課文化財保護主事）

中沢 悟（ 同 上 ）

9. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章第1節 発掘調査に至る経過……………井上唯雄

第2章第1節 遺跡の立地、第4章第1節59～63号住居址説明、第3章第3節……西田健彦

第4章第5節 縄文土壌の土器説明、第4章第6節(4) 縄文時代遺物観察表……………藤巻幸男

第5章第2節 古代、貨幣の分類と説明……………梅沢信夫

第4章第3節 1・2号井戸出土遺物観察表、第5章第2節 (3) 古代の遺

物3、(4) 中世の遺物1・2・3、第5章第4節(2)……………大江正行

第5章第3節 科学分析……………花岡鉦一

第2章第2節、第3章第1・2・3節、第4章第1節(59～63号住居址説明

を省く)第2節～第6節(第5節 縄文土壌の土器説明と第6節(4) 縄文時

代遺物観察表を省く)・第5章第1・2節古代(貨幣の分類と説明を省く)

第5章第4節(1)、第5節……………中沢 悟

10. 本書の遺構写真は中沢 悟、西田健彦が、遺物写真は佐藤元彦が撮影した。

11. 本書の作成にあたり次の人々の協力を得た。(敬称略)

相京建史	浅田貝由	浅野晴樹	有吉重藏	飯田陽一	石川克博
石川正之助	井田金次郎	井上喜久男	大木伸一郎	金子真士	木津博明
久保哲三	小島敦子	佐藤明人	下城 正	高橋一夫	田熊清彦
仲野泰裕	服部敬史	平野進一	福田健司	坂野和信	真下高行

(庶務関係者)

小林起久治	沢井良之助	飯塚喜代子	近藤平志	国定 均	笠原秀樹
山本朋子	吉田有光	柳岡良宏			

12. 本書の作成及び資料整理は次の者が担当した。

辻口敏子	小林ふく子	佐藤美代子	宮内菊江(主に土器実測、図版作成)
新井サイ子	石井弘子	皆川正枝	宮崎由美子(主に土器復元)
浜野和宗作	伊能敬司	関 邦一	(保存処理)

13. 本遺跡の発掘調査にあたり、次の方々にも多大の御世話になった。記して感謝の意を表わす次第である。

群馬県農政部耕地改良課、前橋土地改良事務所清里土地改良区

発掘参加者

(神奈川大学考古学研究会)

伊藤晴康	小出正義	佐藤淳一	奥迫直也	萩原通裕	馬場好雄
泉谷 薫	宮崎充慶	西出 司	在塚裕子	伊藤玲子	

(地元の主な参加者)

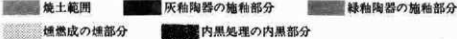
岡田康吉	飯島栄子	羽鳥アイコ	吉沢タツ子	神保ケン	前原多吉
馬場ナツ	富岡かつ子	内山頼司	筑井美代子	蜂須賀トミ子	金子フキ子
高橋サト	飯塚トモ子	高橋 茂	小林シャウ	飯出フサ子	松田千津子
高橋 茂	富岡千代子	新井清江	本多 透	井上直光	笹沢浩幸
蜂巣馬吉	伊藤初夫	大山一夫	高橋マス子	笠井久義	蜂巣ツル
筑井敬子	本多 透	木村美重子	羽鳥考志	竹淵 泉	小林和之

14. 出土遺物は現在、群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。

15. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図(前橋・高崎・榛名山・富岡)を使用した。

16. 本書の編集は中沢悟が担当した。

凡 例

1. 遺構挿入中に記した断面基準線は標高で表わした。
2. 遺構及び遺物挿入中におけるスクリントーンは次のことを表わす。


焼土範囲 灰釉陶器の施釉部分 緑釉陶器の施釉部分
焼成中の焼部分 内黒処理の内黒部分
3. 本書における遺構の実測図は住居址_区、住居址_区、溝_区、土壇_区を原則とした。
4. 本書における遺物の実測図は環・埴類_区、甕類_区、瓦類_区大型壺_区を原則とし、_区以外の実測図にはそれぞれの遺物に縮尺を数字で記入した。
5. 遺物写真図版は埴約_区、甕約_区を原則とし、甕は実測図の大きさに近づけたが、環は実測図よりやや大きくした。他の遺物に関しては不統一である。
6. 本書における遺物記述のうち、土器観察については表組とした。出土位置はフク土、床面、カマド内の3区分で取り上げた。遺存度は実測に対するものである。色調は青灰色、灰白色（以上還元焼成のものを中心とする）、灰褐色、褐色（以上酸化焼成を中心とする）として取り扱った。
7. 遺物実測図のすべてに出土遺構名、遺物番号を付し、_区以外の縮尺についてはその縮尺をつけ、最後に須恵器にはS、灰釉陶器にはKをつけて器種の違いを表わした。土師質土器についてはSを入れていない。個々の遺物実測図につけたHは House の略であり、住居址を意味する。
8. 遺物写真図版中の番号は、出土遺構名と遺物番号である。

目 次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

第1章 発掘調査に至る経過	3
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	5
第1節 遺跡の立地	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の方法	13
第1節 発掘調査の方法と進め方	13
第2節 標準土層図及び遺跡内の地形について	14
第3節 発掘調査の経過（調査日誌）	15
第4章 検出された遺構と遺物	17
第1節 住居址	18
第2節 溝・古墳	130
第3節 井戸・小鍛冶	183
第4節 1号集石	187
第5節 縄文土壇・土壇・墓壇	192
第6節 その他の遺物	202
(1) 耕113号	202
(2) 耕114-1・2号	211
(3) 耕116-2号	217
(4) 縄文時代	219
(5) 表 採	221
第5章 調査成果の整理と考察	222
第1節 遺構について	222
(1) 住居址のとらえ方について	222
(2) 住居址の在り方について	223
(3) 1-4号溝について	225

(4) 第1期～第6期の住居形態について	226
第2節 遺物について	229
(1) 遺物の取り扱いについて	229
(2) 遺構別遺物出土状況一覧表及び住居址等の遺構放棄後に持たられた遺物の問題について	229
(3) 古代の遺物	233
1 土師質土器について	233
2 灯明皿について	236
3 瓦類	241
4 緑釉陶器、墨書・刻書土器、鉄製品、丸柄について	245
5 出土貨幣について	254
6 製鉄関連遺構と遺物	264
(4) 中世の遺物	267
1 中世前半の土器群について	267
2 中世後半の土器群について	271
3 舶載陶磁について	276
第3節 科学分析	278
土器の胎土分析について	278
第4節 出土土器の分類と福年	284
(1) 平安時代を中心とした土器群について	284
(2) 清里・陣場遺跡出土瓦の考古学的位置	320
第5節 清里・陣場遺跡の特徴と問題点について	323

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置・地形・周辺遺跡	4
第 2 図	標準土層（準幹 1 号）	14
第 3 図	1 号住居址実測図	18
第 4 図	1 号住居址竈実測図	18
第 5 図	2 号住居址実測図	19
第 6 図	2 号住居址竈実測図	19
第 7 図	3 号住居址実測図	20
第 8 図	4 号住居址実測図	20
第 9 図	5 号住居址実測図	21
第 10 図	6 号住居址実測図	21
第 11 図	7 号住居址実測図	22
第 12 図	7 号住居址竈実測図	22
第 13 図	8 号住居址実測図	23
第 14 図	8 号住居址竈実測図	23
第 15 図	1・6・7・8 号住居址遺物実測図	24
第 16 図	9・10 号住居址実測図	26
第 17 図	9 号住居址・9 号住居址南土壇遺物実測図	27
第 18 図	11 号住居址実測図	28
第 19 図	12 号住居址竈実測図	28
第 20 図	11 号住居址遺物実測図	29
第 21 図	13 号住居址竈実測図	30
第 22 図	14 号住居址竈実測図	30
第 23 図	13・14 号住居址遺物実測図	31
第 24 図	15 号住居址実測図	33
第 25 図	16 号住居址実測図	33
第 26 図	17 号住居址実測図	33
第 27 図	18 号住居址実測図	34
第 28 図	18 号住居址竈実測図	34
第 29 図	19・20 号住居址実測図	35
第 30 図	18・19・20 号住居址遺物実測図	36
第 31 図	21 号住居址実測図	37
第 32 図	21 号住居址竈実測図	37
第 33 図	21 号住居址遺物実測図	38
第 34 図	22 号住居址実測図	39
第 35 図	22 号住居址竈実測図	39
第 36 図	22 号住居址遺物実測図	40
第 37 図	23 号住居址実測図	41
第 38 図	23 号住居址竈実測図	41
第 39 図	23 号住居址遺物実測図	42

第 40 图	24号住居址实测图	43
第 41 图	24号住居址毫米实测图	43
第 42 图	25号住居址实测图	44
第 43 图	25号住居址毫米实测图	44
第 44 图	26·27号住居址实测图	45
第 45 图	28号住居址实测图	46
第 46 图	28号住居址毫米实测图	46
第 47 图	26号住居址遗物实测图	47
第 48 图	27·28号住居址遗物实测图	49
第 49 图	29号住居址实测图	51
第 50 图	30号住居址实测图	51
第 51 图	29号住居址遗物实测图	52
第 52 图	30号住居址遗物实测图	53
第 53 图	31·32·33号住居址实测图	55
第 54 图	31号住居址毫米实测图	57
第 55 图	32号住居址毫米实测图	57
第 56 图	31号住居址遗物实测图	58
第 57 图	32号住居址遗物实测图	60
第 58 图	33号住居址遗物实测图	62
第 59 图	34·35号住居址实测图	64
第 60 图	34号住居址毫米实测图	64
第 61 图	35号住居址毫米实测图	64
第 62 图	34·35号住居址遗物实测图	65
第 63 图	36号住居址毫米实测图	67
第 64 图	37号住居址实测图	67
第 65 图	38号住居址实测图	68
第 66 图	38号住居址毫米实测图	68
第 67 图	39号住居址实测图	69
第 68 图	39号住居址毫米实测图	69
第 69 图	36号住居址遗物实测图	70
第 70 图	37·39号住居址遗物实测图	71
第 71 图	40号住居址毫米实测图	73
第 72 图	41号住居址实测图	73
第 73 图	41号住居址遗物实测图(1)	74
第 74 图	41号住居址遗物实测图(2)	75
第 75 图	42·44号住居址实测图	77
第 76 图	42号住居址毫米实测图	77
第 77 图	44号住居址毫米实测图	77
第 78 图	42号住居址遗物实测图(1)	79
第 79 图	42号住居址遗物实测图(2)	80
第 80 图	42号住居址遗物实测图(3)	81
第 81 图	42号住居址遗物实测图(4)	82

第 82 图	44号住居址遺物実測図	86
第 83 图	43号住居址実測図	88
第 84 图	43号住居址竈実測図	88
第 85 图	43号住居址遺物実測図(1)	89
第 86 图	43号住居址遺物実測図(2)	90
第 87 图	45号住居址実測図	92
第 88 图	46号住居址実測図	92
第 89 图	45号住居址遺物実測図	93
第 90 图	46号住居址遺物実測図	94
第 91 图	47号住居址実測図	95
第 92 图	47号住居址竈実測図	95
第 93 图	47号住居址遺物実測図	96
第 94 图	48号住居址実測図	97
第 95 图	48号住居址竈実測図	97
第 96 图	49号住居址実測図	98
第 97 图	50号住居址実測図	98
第 98 图	48・49号住居址遺物実測図	99
第 99 图	50号住居址遺物実測図	101
第100图	51号住居址実測図	102
第101图	51号住居址遺物実測図	102
第102图	52号住居址実測図	103
第103图	52号住居址竈実測図	103
第104图	52号住居址遺物実測図(1)	104
第105图	52号住居址遺物実測図(2)	105
第106图	53号住居址実測図	107
第107图	53号住居址竈実測図	107
第108图	53号住居址遺物実測図	108
第109图	54号住居址実測図	109
第110图	54号住居址竈実測図	109
第111图	54号住居址遺物実測図(1)	110
第112图	54号住居址遺物実測図(2)	111
第113图	55号住居址実測図	113
第114图	55号住居址内製鉄関連遺構実測図	113
第115图	55号住居址遺物実測図	115
第116图	56号住居址実測図	117
第117图	56号住居址竈実測図	117
第118图	57号住居址実測図	118
第119图	58・59・60号住居址実測図	119
第120图	59号住居址竈実測図	121
第121图	60号住居址竈実測図	121
第122图	56・57・58号住居址遺物実測図	122
第123图	59号住居址遺物実測図	124

第124回	60号住居址遺物実測図	126
第125回	61・62・63号住居址実測図	127
第126回	61・62・63号住居址遺物実測図	128
第127回	64号住居址実測図	129
第128回	準幹1号1～4・17号溝実測図	130
第129回	準幹1号・1号溝遺物実測図(1)	132
第130回	準幹1号・1号溝遺物実測図(2)	133
第131回	準幹1号・1号溝遺物実測図(3)	134
第132回	準幹1号・1号溝遺物実測図(4)	135
第133回	準幹1号・1号溝遺物実測図(5)	136
第134回	準幹1号・1号溝遺物実測図(6)	137
第135回	準幹1号・1号溝遺物実測図(7)	138
第136回	準幹1号・1号溝遺物実測図(8)	139
第137回	準幹1号・1号溝遺物実測図(9)	140
第138回	準幹1号・1号溝遺物実測図00	141
第139回	準幹1号・1号溝遺物実測図01	142
第140回	準幹1号・1号溝遺物実測図02	143
第141回	準幹1号・1号溝遺物実測図03	144
第142回	準幹1号・1号溝遺物実測図04	145
第143回	準幹1号・1号溝遺物実測図05	146
第144回	準幹1号・1号溝遺物実測図06	147
第145回	準幹1号・2～4号溝遺物実測図(1)	164
第146回	準幹1号・2～4号溝遺物実測図(2)	165
第147回	準幹1号・2～4号溝遺物実測図(3)	166
第148回	準幹1号・17号溝遺物実測図(1)	169
第149回	準幹1号・17号溝遺物実測図(2)	170
第150回	準幹1号・A区遺物実測図(1)	173
第151回	準幹1号・A・B区遺物実測図(2)	174
第152回	5号溝実測図	177
第153回	6号溝実測図	177
第154回	5号溝遺物実測図	178
第155回	7号溝実測図	179
第156回	8号溝実測図	179
第157回	9号溝実測図	折り込み
第158回	10号溝実測図	折り込み
第159回	11号溝実測図	折り込み
第160回	12号溝実測図	折り込み
第161回	13号溝実測図	181
第162回	14号溝実測図	181
第163回	15号溝実測図	181
第164回	16号溝実測図	182
第165回	古墳実測図	182

第166図	1号井戸実測図	183
第167図	3号井戸実測図	183
第168図	2号井戸実測図	184
第169図	製鉄関連遺構実測図	184
第170図	1・2号井戸遺物実測図	185
第171図	1号集石実測図	187
第172図	1号集石遺物分布図	187
第173図	1号集石遺物実測図(1)	188
第174図	1号集石遺物実測図(2)	189
第175図	縄文土壇実測図	192
第176図	縄文遺物実測図	192
第177図	1号土壇実測図	193
第178図	2・3号土壇実測図	193
第179図	6号土壇実測図	193
第180図	1号土壇遺物実測図	195
第181図	2号土壇遺物実測図	196
第182図	4号土壇実測図	197
第183図	5号土壇実測図	197
第184図	7号土壇実測図	198
第185図	8号土壇実測図	198
第186図	9号土壇実測図	199
第187図	墓壇実測図	199
第188図	墓壇遺物実測図	200
第189図	10号土壇実測図	201
第190図	拵113号出土遺物実測図(1)	202
第191図	拵113号出土遺物実測図(2)	203
第192図	拵113号出土遺物実測図(3)	204
第193図	拵113号出土遺物実測図(4)	205
第194図	拵113号出土遺物実測図(5)	206
第195図	拵114号グリット出土遺物実測図(1)	211
第196図	拵114号グリット出土遺物実測図(2)	212
第197図	拵114号出土遺物実測図	213
第198図	拵116号出土遺物実測図	217
第199図	縄文時代遺物実測図(1)	219
第200図	縄文時代遺物実測図(2)	220
第201図	表採遺物実測図	221
第202図	第1・2期竪穴住居址例	227
第203図	第3期竪穴住居址例	227
第204図	第4期竪穴住居址例	228
第205図	第5・6期竪穴住居址例	228
第206図	灯明皿実測図(1)	238
第207図	灯明皿実測図(2)	239

第208図	瓦実測図(1).....	242
第209図	瓦実測図(2).....	243
第210図	緑釉陶器実測図.....	246
第211図	墨書・刻書土器実測図.....	248
第212図	丸斬・その他実測図.....	249
第213図	鉄製品実測図(1).....	251
第214図	鉄製品実測図(2).....	252
第215図	10号土城出土貨幣(1).....	255
第216図	10号土城出土貨幣(2).....	256
第217図	10号土城出土貨幣(3).....	257
第218図	10号土城出土貨幣(4).....	258
第219図	墓竈出土貨幣(1).....	259
第220図	墓竈出土貨幣(2).....	260
第221図	耕113号地区内出土貨幣(1).....	261
第222図	9号溝・耕113号出土貨幣(1).....	262
第223図	耕113号出土貨幣.....	263
第224図	羽口・鋳型・炉体実測図.....	265
第225図	2号集石遺構遺物実測図.....	269
第226図	内耳土器関係主要土器抽出図.....	273
第227図	内耳土器実測図.....	274
第228図	胎土分析遺物実測図.....	280
第229図	陣場遺跡土器の分析図.....	282
第230図	須恵器窯跡群との比較.....	282
第231図	推定常滑・聖美焼との比較.....	282
第232図	弥生土器との比較.....	283
第233図	第1期土器群.....	288
第234図	第2期土器群.....	290
第235図	第3期土器群(1).....	294
第236図	第3期土器群(2).....	298
第237図	第4期土器群(1).....	301
第238図	第4期土器群(2).....	304
第239図	第4期土器群(3).....	307
第240図	第5期土器群(1).....	309
第241図	第5期土器群(2).....	310
第242図	第6期土器群.....	311
第243図	笠懸窯跡出土の須恵器と国分寺創建瓦の破片.....	316
第244図	松井田愛宕山遺跡第4号住居跡出土遺物.....	316
第245図	観音山古墳周堀内土城出土遺物.....	317
第246図	鳥羽遺跡 S K 332.....	317
第247図	鳥羽遺跡 S K 332出土遺物.....	317
第248図	上野国分寺系瓦分布図.....	321

図 版 目 次

- | | |
|---|--|
| <p>図版1 兎掘風景 準幹1号(西から)
試掘風景 絆114号(東から)</p> <p>図版2 準幹1号南北部全景(南から)
準幹1号東西部全景(東から)</p> <p>図版3 1号住居址全景(北から)
2号住居址全景(南から)</p> <p>図版4 4号住居址全景(南から)
5号住居址全景(南から)</p> <p>図版5 6号住居址全景(南から)
7号住居址全景(南から)</p> <p>図版6 8号住居址全景(東から)
同上 竈(東から)</p> <p>図版7 13号住居址竈(南から)
同上(東から)</p> <p>図版8 31号住居址 竈・貯蔵穴(西から)
同上貯蔵穴遺物出土状況(西から)</p> <p>図版9 32号住居址全景(西から)
同上 竈(西から)</p> <p>図版10 33号住居址全景(南から)
35号住居址竈(南から)</p> <p>図版11 34号住居址全景(北から)
同上 竈(西から)</p> <p>図版12 38号住居址全景(西から)
同上 竈(北から)</p> <p>図版13 41号住居址全景(西から)
同上 竈(西から)</p> <p>図版14 42号住居址全景(西から)
同上 南西端部遺物出土状況(西から)</p> <p>図版15 42号住居址全景・遺物出土状況(東から)
43号住居址全景(西から)</p> <p>図版16 44号住居址全景(西から)
同上 竈(西から)</p> <p>図版17 41~51号住居址全景(西から)
42・44号住居址全景(西から)</p> <p>図版18 47号住居址全景(西から)
同上 竈(西から)</p> <p>図版19 48・49号住居址全景(西から)
48号住居址竈(西から)</p> | <p>図版20 49号住居址全景(北から)
同上竈(北西から)</p> <p>図版21 50号住居址全景(西から)
51号住居址全景(西から)</p> <p>図版22 52号住居址全景(南から)
同上 竈(西から)</p> <p>図版23 53号住居址全景(北から)
同上 竈(西から)</p> <p>図版24 54号住居址全景(西から)
同上 竈(西から)</p> <p>図版25 55号住居址全景(西から)
同上 製鉄関連遺構(南から)
同上 製鉄関連遺構(北から)
同上 付属土坑(南から)</p> <p>図版26 56号住居址全景(南から)
57号住居址全景(南から)</p> <p>図版27 58~60号住居址全景(北から)
同上(北西から)</p> <p>図版28 59号住居址竈・遺物出土状況(西から)
同上 竈(南から)</p> <p>図版29 1~4・17号溝全景(西から)
2~4号溝全景(南から)</p> <p>図版30 7・8号溝(西から)
9号溝(東から)
10号溝(北から)
11号溝(南から)</p> <p>図版31 1号井戸
2号井戸
2号集石遺構(火葬墓)(南から)</p> <p>図版32 1号集石遺構遺物出土状況(東から)
同上 全景(東から)</p> <p>図版33 縄文土坑(北東から)
2・3号土坑全景(南から)</p> <p>図版34 1号土坑全景(南から)
1号土坑遺物出土状況(西から)
1号土坑全景(西から)</p> <p>図版35 10号土坑全景(北西から)
10号土坑全景・貨幣出土状況(南か</p> |
|---|--|

- ら)
- 図版36 墓域全景・遺物出土状況(南から)
墓域内人骨出土状況(南から)
- 図版37 9・11・13号住居址 9号住居址南土城出土遺物
- 図版38 13・14・18・20・21号住居址出土遺物
- 図版39 21・22・23号住居址出土遺物
- 図版40 26・27・28号住居址出土遺物
- 図版41 28・29・30・31号住居址出土遺物
- 図版42 31・32号住居址出土遺物
- 図版43 33・34・36・37号住居址出土遺物
- 図版44 39・41号住居址出土遺物
- 図版45 41・42号住居址出土遺物
- 図版46 42号住居址出土遺物
- 図版47 42号住居址出土遺物
- 図版48 42号住居址出土遺物
- 図版49 42号住居址出土遺物
- 図版50 42・43号住居址出土遺物
- 図版51 43・44号住居址出土遺物
- 図版52 44・45・46号住居址出土遺物
- 図版53 47・48・49号住居址出土遺物
- 図版54 49・51・52号住居址出土遺物
- 図版55 52号住居址出土遺物
- 図版56 52・53・54号住居址出土遺物
- 図版57 54号住居址出土遺物
- 図版58 54・55号住居址出土遺物
- 図版59 55号住居址出土遺物
- 図版60 56・57・59号住居址出土遺物
- 図版61 59・60号住居址出土遺物
- 図版62 63号住居址出土遺物
- 図版63 単幹1号 1号溝出土遺物
- 図版64 単幹1号 1号溝出土遺物
- 図版65 単幹1号 1号溝出土遺物
- 図版66 単幹1号 1号溝出土遺物
- 図版67 単幹1号 1号溝出土遺物
- 図版68 単幹1号 1号溝出土遺物
- 図版69 単幹1号 1号溝出土遺物
- 図版70 単幹1号 1号溝出土遺物
- 図版71 単幹1号 1号溝出土遺物
- 図版72 単幹1号 2～4号溝出土遺物
- 図版73 単幹1号 17号溝出土遺物
- 図版74 単幹1号 17号溝・A地区出土遺物
- 図版75 単幹1号 A地区・B地区出土遺物
- 図版76 2号井戸・1号集石出土遺物
- 図版77 1号集石出土遺物
- 図版78 1号集石出土遺物
- 図版79 1号集石出土遺物
- 図版80 1・2号集石出土遺物
- 図版81 2号集石・2号土坑出土遺物
- 図版82 1号土坑出土遺物
- 図版83 縄文土坑出土遺物
墓域出土貨幣
- 図版84 緋113号出土遺物
- 図版85 緋113号出土遺物
- 図版86 緋113号出土遺物
- 図版87 緋113号出土遺物
- 図版88 緋114号出土遺物
- 図版89 1号溝出土・内黒土器の破片
1号溝出土灯明皿の破片
- 図版90 縄文時代の出土遺物
- 図版91 灯明皿
- 図版92 灯明皿
- 図版93 瓦
- 図版94 瓦
- 図版95 墨書・刻書土器
- 図版96 鉄製品
- 図版97 鉄製品
- 図版98 羽口、鋳型、炉体一括(表面)
羽口、鋳型、炉体一括(裏面)

清里・陣場遺跡

第1章 発掘調査に至る経過

清里地区畑地帯総合土地改良計画が持ち上がり、地域内の埋蔵文化財包蔵地のマッピングが実施されたのは昭和51年度のことであった。その結果、包蔵地5地点、古墳7基が確認された。それに基づいて保存計画を含めて県教育委員会文化財保護課と前橋土地改良事務所の間で調整が進められる一方、土地改良事業に対する計画が練られた。その結果、52年から7カ年計画で同事業の完成を旨すこと、埋蔵文化財については53年度から55年度の3カ年で調査を終了することの計画が打ち出された。

昭和53年度に入り、調査について具体計画の打合せに入り、次のような事前調整が行なわれた。

- 8月10日 前橋土地改良事務所 新井課長、星野技師来団、事業区域について説明、現地立合い調査。
- 9月10日 発掘調査費積算工程について打合せ。
- 9月15日 調査委託契約締結、県農政部と鉈群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 10月17日 前橋土地改良事務所で調査について打合せ。
- 12月2日 事業区内包蔵地で不明確な地点の掘削立合。
- 12月21日 清里土地改良区の役員会で発掘調査について説明、協力を要請。

こうした経過を経て、発掘調査が年明けの1月8日を期して開始することか確定したが、その概要は次のとおりである。

調査地点は、吉岡村陣場の田中病院の南から東部分の一部前橋市池端町を含む東西278m、南北1628mの範囲における道路、水路部分を中心に調査を行なうことになった。

この部分は、散布調査の際、田中病院の南から東の近接部に濃く、離れるに従いすくなる散布傾向を確認したことによる。地形的にみると散布範囲は、ほぼ低台地東縁辺部を中心に認められ、東側のやや低くなった部分は、午玉頭川の氾濫原の中に含まれるものとして、調査対象区からはずすことにしたものである。また、台地は、南緩傾斜をみせ、散布のきれる池端部落西北部は、ほぼ氾濫原と同標高まで下がり、そこから先は、水田地帯に変化するところから範囲を限定したものである。

かくして、調査は、現場事務所を前橋市池端町481番地に設置し、現地周辺の作業員約30名の体制で厳冬の中を実施したものである。なお、終始、前橋土地改良事務所、新井課長、星野技師、清里土地改良区、笹沢理事長以下職員の方々の協力を得た。

計 画

年度	土地改良面積	地 区	遺 跡 地
52	12.6ha	池端町(前橋市)	包蔵地該当なし
53	32.5	池端町(前橋市)陣場(吉岡村)	陣場遺跡
54	26.6	池端町(前橋市)上青梨子町(#)	庚申塚遺跡
55	32.6	池端町(前橋市)大久保(吉岡村)	長久保遺跡

調 査 概 要

項目	概 要
事業主体	群馬県農政部(耕地改良課)
調査主体	鉈群馬県埋蔵文化財調査事業団
組 織	鉈群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査研究員 中沢 悟 同 西田 健彦
調査地点	北群馬郡吉岡村陣場85地 前橋市池端町400地
調査期間	昭和54年1月8日～3月24日
調査面積	4,130㎡



第1図 遺跡の位置・地形・周辺遺跡 1:50,000

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

清里陣場遺跡が所在する前橋市池端町、北群馬郡吉岡村陣場は、前橋市街地中心部（県庁付近）から北西約6kmのところにある。遺跡の西約100mには主要地方道12号高崎・渋川線がほぼ南北に通っている。この高崎・渋川線は古代においては関東と越後を結ぶ要路であったといわれ、近世「三国街道」と呼ばれたものである。

遺跡の所在する地域は前橋台地と榛名山東麓斜面の移行部にあっており、標高188～192m、西高東低のゆるやかな傾斜地である。傾斜交換線は遺跡の西800mほどのところにあり、遺跡及び前述の「三国街道」も台地面に存在する。

榛名山中に源をもつ中小河川は、東南方向に並走し、台地を細長く画している。北から午王頭川、八幡川・染谷川により分断された台地の幅は600～800m内外で、遺跡は主にこの河川の流域に営まれている。

清里陣場遺跡は、この午王頭川と八幡川にはさまれた台地上にあり、特に午王頭川の氾濫原は遺跡のすぐ北まで達している。また、遺跡の東側端にはローム面の段差があり、東はやはり午王頭川の氾濫原となっている。

ところで、遺跡の占地する前橋台地を構成する地層は上部から表土（黒土）層、水成上部ローム層、火山泥流堆積物、砂礫層となっている。火山泥流堆積物は約24000年前に形成され、それにより平坦な前橋台地の原面がつくられた。そのため、それまでの排水系が消失してしまい、いたるところに沼沢のある湿潤地があらわれ、水成上部ローム層はこのようにして形成された湿地帯の堆積物とみなされる。ただし、清里陣場地域では、この頃榛名山から供給された新期の火砕流や土石流などの堆積がひき続いて行なわれ、現在あるような緩斜面地形をつくり上げたので、湿地性の環境からは比較的早く解放され、気成の上部ロームの堆積が行われている。（注1）

この気成の堆積物のひとつが「陣場熱雲」と呼ばれるものである。熱雲とはガスを含んだマグマが火口から吹き上げられることなく、山の斜面を急速度で煙のように流れ下ったものをいう。しかし、「陣場熱雲」の場合含まれている岩石自体の粘性が高かったため、前面がふくらんだ状態になり、末端に小高い丘を形成した。この丘は「流れ山」といわれ、陣場付近に、熱雲の落とし子のように点々と残っている。（注2）

このように遺跡周辺は、かなり早くから高燥化した土地であるということが出来る。従って、水田には不適であり、桑園を主とした畑として利用されてきている。

注1 『前橋市史』第1巻、「地形・地質」1971

注2 『吉岡村誌』一「地質」1980

『群馬のおいちをたずねて』下 上毛新聞社 1977

第2節 歴史的環境

清里・陣場遺跡は9世紀～11世紀中頃の集落遺跡である。調査は圃場整備事業に伴う道路部分のみの4,130㎡であったが、そのほとんどの範囲から密集して竪穴住居址が確認された。その範囲は東西約278m、南北約330m、総面積約91,700㎡に及ぶ。集落の密集度から推定すれば、遺跡全体の竪穴住居址の数は膨大な数にのぼると考えられる。その中で平安時代の住居址が大部分を占め、それ以前の住居は奈良時代のものが一軒検出されたのみである。又この遺跡からは県内最大量と思われる1,703個以上の灰釉陶器の破片や168片の緑釉陶器、金銅製丸柄、石製丸柄、海老錠、製鉄関連遺構等に見られるように、単なる集落址としては考えにくい要素を多く含んでいる。当遺跡をより理解するために、前史である古墳時代から周辺遺跡を調べていく。

古墳時代において、当遺跡周辺には多くの古墳が確認されている。図1に示したごとく、北側約1kmには後期群集墳の南下古墳群があり、その中には、終末期に属する截石切組石室を持つ南下A、E号古墳が認められる。西側約1kmには前方後円墳で埴輪を出土した高塚古墳、東側約1.3kmの午王頭川右岸には、後期群集墳の久保遺跡、南側約1.3kmには前方後円墳を含む群集墳の長久保古墳群等が存在している。遺跡南東約4kmの地点では、県内の最終末期にあたると思われる蛇穴山古墳、宝塔山古墳を含む総社古墳群がある。このように清里周辺においては、奈良時代に近い古墳時代終末期の古墳がみられることにより、奈良時代へ遺跡が続いていく可能性が高いのである。

奈良・平安時代に至ると、遺跡北約1.3kmの所に奈良時代の有馬麁寺、その北に有馬条理遺構が認められる。南側約5kmには古代群馬の中心地、国府、国分寺が位置し、両遺跡とも発掘調査が数回行なわれている。国分僧寺、尼寺の中間に関越自動車道建設に伴ない、現在発掘調査が行なわれており、しだいに内容が解明されつつある。このような状況の中で、当遺跡及び同じ清里の南部遺跡群では平安時代の住居址は大量に発掘されているにもかかわらず、奈良時代の住居址はほとんど確認されていない。しかもこの遺跡群からも灰釉陶器、緑釉陶器、硯、墨書土器、巡方丸柄等が出土している。これは清里地区という地域の一つの特色となるのであろう。当遺跡南約2.5kmの地点に関越自動車道に伴う北原遺跡⁽¹⁾の発掘がなされ、巨大な柱穴を持つ奈良時代の3間×5間の掘立建物址や、奈良時代の竪穴住居址11軒、平安時代の竪穴住居址7軒が発掘されている。竪穴住居址の平面形が張り出しを持つ特異なものであること、又県内において奈良時代の掘立遺構がほとんど発見されていないことなどとあわせて、この遺跡も単なる集落とは考えられない。このように清里地区の奈良・平安時代の集落は、特異な性格を持っている。関越自動車道はこの清里地区を南北に横切る。それに伴う発掘の成果と、これまでの成果とを総合的に検討し、清里地区という一地域の様相を今後とも注意深く追求していきたい。当遺跡周辺の遺跡について位置は地図上に、概要は以下表にして示した。

注1) 市産之「北原遺跡」『埋文月報No.3』(財.群馬県埋蔵文化財調査事業団)1981

周辺遺跡の概要

地図上の番号	遺跡名 (所在地)	時期	遺 構		遺 跡 の 概 略	注
			住居 水田 墓地 井戸	そ の 他		
1	南下D号古墳 (吉岡村大字南下)	古墳 (6C)	○		南に向かって開口する両袖型石室を主体部とした山寄せ古墳である。自然石乱石積、石材加工は全く認められない。	(1) (2)
2	南下C号古墳	古墳 (6C)	○		丘陵上に作られた古墳である。主体部は東に開口する。自然石乱石積の袖無型石室である。	(1) (3)
3	南下E号古墳	古墳 (7C)	○		緩傾斜面に構築されている。1辺17m前後の方墳と考えられるが不明。石室は南に向かって開口する両袖型の横穴式石室で精巧な支門を設置している。載石の切組石室で標名山、二ツ岳墳出のいわゆる、角閃石安山岩（以下角安と略す）を使用している。	(1) (3)
4	南下A号古墳	古墳 (7C)	○		南斜面に作られた山寄せの古墳。南に向かって開口。載石の切石切組積の両袖型の横穴式石室、支門柱あり角安使用、漆喰の塗布も見られる。	(1) (3)
5	南下B号古墳	古墳 (6C)	○	円墳	南斜面に作られた山寄せ古墳、高さ6mの円墳。主体部は基本的には自然石乱石積の両袖型石室であるが石材の一部に加工が認められる。支門にはやや粗雑な載石も用いられている。	(1) (3)
6	陣場遺跡 (吉岡村大字陣場)	奈良 平安 中世	○ ○	土 堀	本報告の遺跡	
7	高塚古墳 (吉岡村大字新井)	古墳 (6C)	○	前方後円墳	丘陵上に構築されている巨石の自然石を用いた乱石積の両袖型石室である。石室全長10m、支室長6.55m、間幅2.06m、間高2.88mの巨大な石室を持つ。器材、人物、朝顔型等の埴輪出土	(3)
8	長久保古墳群 (標東村新井長久保)	古墳 (7C)	○	円墳 前方後円墳	前方後円墳2基を含む16基の古墳群。昭和51年～53年にかけて長久保古墳群調査会で調査を行う。未報告	
9	庚申B号古墳 (群馬町大字金古)	古墳 (8C)	○	円墳	直径11mの円墳。石室は横穴式両袖型石室であり支門、支門を具備している。角安を載石加工し互目積みにして、部分的に切組を用いている。前庭は石組により三方を囲み、割れ石を敷きつめて構成している。	(4)
10	長久保遺跡	古墳	○	円墳	標名山、二ツ岳給源のF A降灰層上に構築された。石室床面及び裏込めに角安を使用している古墳である。横穴式石室で、袖無型と両袖型が認められ遺物として鉄鍋、耳環、直刀、玉環、ハニワ片、刀子、壺等出土。乱石積が多い。最大石室は全長6.91m、10数基を調査。	(5)

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

地図上の 遺跡名 の番号 (所在地)	遺跡名 (所在地)	時期	遺構		遺跡の概略	注
			住居 水田 墓地 井戸 その他			
11	庚申塚遺跡 (前橋市青梨子町)	弥生 古墳 中世	○	○	55年事業団で古墳1基を調査。 報告書近刊	
12	清里南郡遺跡群 (前橋市青梨子町)	縄文 平安 中世 江戸	○	○	縄文時代のピット1、平安時代の竪穴住居28軒、ピット18、溝3、井戸1基。中世の土趾。江戸時代の井戸5、溝5、ピット1等が確認された。遺物として縄文式土器、石器。平安時代では、土師器、須恵器、灰釉陶器、鉛線緑彩(三彩緑釉) 甕(風子甕、転用甕) 墨書土器、丸瓦、磁方鉄製品、鉄律、羽口、砥石。中世では板碑。近世では古銭、キセル、石臼等出土。陣場遺跡と近接しており、内容も類似する。	(39)
13	二子山古墳 (前橋市総社町)	古墳 (8.7C)	○	前方後円墳	前方部、後円部の二ヶ所に両袖の横穴式石室を持つ。全長約8.99m二段構築の古墳。周濠は盾型を想定する。幅24~25m。前方部石室は自然石乱石積。後円部石室の天井石以外は角安の削石を使用。	(6) (7)
14	愛宕山古墳	古墳 (7C)	○	円墳	巨石を使用した横穴式両袖型石室。石室内に家型石棺(凝灰岩製)が安置。壁石は巨石の輝石安山岩の山石を使用。角安も認められる。	(6) (8)
15	遠見山古墳	古墳	○	前方後円墳	主軸の長さは約70m。後円部東南部分は封土が流れ石室の位置を示す。墳丘南側には周濠の1部や葬石が認められる。	(9)
16	宝塔山古墳	古墳 (8C)	○	方墳	現状の墳丘規模は、1辺約50m前後高さ約11m 複室の両袖型石室。文室内部は安山岩製の家型石棺が置かれ脚部は格柵間に切られている。壁は角安と輝石安山岩(以下輝安と略す)の5面削りを使用。溝が残る。	(10)
17	蛇穴山古墳	古墳 (8C)	○	方墳	墳丘東西43.4m、南北39.1mの方墳。石室は角安使用の載石切組積の横穴式石室、典型左右型及び天井ともに一石づつの巨石で箱状に構成。石室と前庭がほぼ完全の形で残る。	(6) (11)
18	山王薬寺とその周辺 (前橋市総社町)	奈良 平安		住居 址 掘立 柱 礎物 跡 塔心 礎	昭和3年国指定史蹟。日枝神社の域内に塔心礎がある。石製鰐尾、礎石、埴輪水注等出土。前橋市教委で6次まで発掘。掘立柱建物跡、住居址36軒以上、溝等を確認。銅貨、整復仏頭片、素弁8葉蓮花文瓦、三彩等出土。	(12) (13) (14)
19	国分僧寺 (群馬町東国分)	奈良 平安		礎石 築地 堀	大正15年国指定史蹟。塔跡に12個の礎石が、金堂跡に15個の礎石が認められる。塔跡、又中門、南大門、東門、北門跡とされる地点にも礎石が認められる。発掘により築地、犬走り、堀等確認。B 軽石降下以前に築地が崩壊していた事が判明。	(15) (16) (17)

第2節 歴史的環境

地図上の番号	遺跡名 (所在地)	時期	遺 構		遺 跡 の 概 略	注
			住居	水田 墓地 井戸 その他		
20	国分寺周辺の遺跡	奈良平安		溝 築垣の基礎 住居址	国分僧寺、尼寺の中間地点及び僧寺西側の地域を含む。獨立柱建物跡、溝、築垣の基礎、住居址等発掘。「東院」と記した墨書土器、灰釉陶器、瓦、磁石等出土。住居内に瓦を持ち込む例は9世紀後半以降と調査者は指摘している。	(18) (19)
21	国分尼寺	奈良平安		中門跡 金堂跡 講堂跡	伽藍配置は南北に主要建物の並ぶ構造であり、その寺域は恐らく南北1.5町、東西1町の規模ではないかと考えられている。中門基段状遺構、金堂基段状遺構、講堂礎石群等発掘。B軒石降下以前に中門基段が崩壊し削平され、四圍の掘込中に主要な部分は埋立てられたものと推定される。	(20) (21)
22	中屋天神塚古墳 (群馬町大字中屋)	古墳	○	円墳	直径約12m、高さ約3mの円形を呈している。内部主体は、安山岩質崩れ石使用の乱石積み両袖型横穴式石室である。主軸方向はN-17°-W。主体部はFA上に構築されていた。	(24)
23	保茂田遺跡	古墳 奈良平安	○	獨立柱 建物跡 溝	神名山、二ツ岳降下火山灰層（FA）が5号住居の住居内床面直上に確認され、FAの降下期と同時期に比定される。古墳～平安時代の竪穴住居址63軒、獨立柱建物跡5棟、溝6条を検出。土師器、須恵器、灰釉陶器出土。	(22) (23)
24	三ツ寺田遺跡 (群馬町)	古墳 平安	○ ○	道路状遺構	丸高1-13軒、丸高11-2軒、国分-2軒が確認された。丸高1期には、FA降下期の遺構確認。	(25)
25	井出遺跡	弥生 平安	○	土 竃 溝	確認のトレンチ調査のみである。弥生～平安の竪穴住居、土竃、溝が確認されている。	(26)
26	重師塚古墳 (群馬町保茂田)	古墳 (6C)	○	前方後円墳	墳丘に凝灰岩製舟型石棺が墳丘上に現存。金銅製馬具（轡、鏡板、古葉、馬蹄、十字金具他）出土。	(9) (27)
27	八幡塚古墳 (6C)	古墳 (6C)	○	前方後円墳	幅広い周濠のくびれ部左右に中島1個。中島より多数の土師器出土。墳頂に凝灰岩製舟型石棺、形象埴輪出土。周濠内底部にFAの堆積が認められる。	(29) (30) (31)
28	愛宕塚古墳 (群馬町井出)	古墳 (6C)	○	前方後円墳	二重の周濠、舟石、埴輪配置がある。竪穴式石室で内部に凝灰岩製舟型石棺がある。鏡、鉏、金環が出土。形象、円筒埴輪、円筒鏡出土。	(32) (9)
29	阿道遺跡	弥生 古墳 平安 中世	○ ○ ○	溝	C、FP、FA、B軽石に埋もれた四重水田跡、浅間C降下軽石層（以下C軽石と略す）下のI期水田は約9,000㎡の広さに180畝。FA下のII期水田は4,000㎡で約270畝。FPFのIII期水田は5,000㎡に1,300畝、浅間B降下軽石層（以下B軽石と略す）下のIV期水田は約4,000㎡に19畝が確認された。	(33)

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

地図上の番号	遺跡名 (所在地)	時期	遺 構		遺 跡 の 概 略	注
			住居 水田 墓地 井戸 その他			
30	御市呂遺跡	弥生 古墳 平安 中世	○ ○ ○	土 堀 溝	C軽石下の水田、FA下の水田、FP下の水田、平安時代の住居、中世建物跡、井戸、土堀墓、東山道と思われる道路状遺構等が確認されている。カアラケ、磁鉢、内耳鏡、鳥の遺体、茶臼、すずり、砥石等出土。	(37) (38)
31	寺ノ内遺跡	古墳 中世	○ ○	居 館 址	二ツ岳軽石層を掘り込んで、東側にかまどを持つ住居が17軒発掘されている。水田は東西の微高地間の谷状低地に営む。	(36)
32	芦田貝戸遺跡	弥生 古墳 平安	○ ○ ○ ○	水 路 状 遺 構 大 溝 土 堀 溝	C軽石下の水田36面。平均的面積は30㎡の水田が多い、FA下水田1,260枚以上。1枚は3㎡前後が多く釜釜の目のように区画されている。B軽石下の水田は残りが悪く、形も不定形である。平安時代の住居址1軒、掘立建物遺構は2間×2間で西側に庇を持つ。土堀墓及び、井戸(中世)等を確認している。	(40) (41)
33	惣野堂遺跡	古墳 (石田川)			C軽石下の水田。3本の大畦とその間を小畦により区画している。FA下の水田はC軽石下の水田と類似する。浅い溝が大畦畔と平行して走る。水田面には足跡が無数に残り、指先まで確認されたものも多い。	(34) (35)
34	小八木遺跡	弥生 古墳 平安 中世	○ ○ ○	○ 溝 状 遺 構 土 堀 掘立柱遺構	C軽石下は水田、水路、住居址。古墳時代は、住居址、土堀、井戸、溝状遺構。平安時代のB軽石下の水田。中世の掘立柱遺構、溝状遺構等を確認する。	(42) (43)
35	正観寺遺跡	弥生 古墳 奈良 平安 中世	○ ○ ○	井 戸 溝	弥生～平安時代にかけての整穴住居址150軒前後発掘。他に土堀、掘立柱建物遺構、大溝、円墳、井戸等を検出。2m×2m高さ1.1mの巨石があり、土師器の坏、甕、須恵器の高杯、埴輪、須恵器など気高期の特徴を示す多くの遺物を伴って発掘された。	(44) (45)
36	日高遺跡	弥生 古墳 平安 中世	○ ○ ○ ○ ○	方形周溝墓 溝	開成道の路線内を県教委で調査を行ない、高崎市で弥生水田と住居の試掘を行なった。さらには埴原備にともない高崎市で行なった地域の二ヶ所を含む。県教委の調査時この遺跡は全国的に注目された。市で行なった昭和53年度の調査では1町109m四方の区画による表理制水田が確認された。	(46) (47) (48) (49)
37	中尾遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○	掘立建物跡 土 堀	古墳時代前期の住居4軒、中～後期の住居数軒奈良、平安時代の住居300軒以上確認。土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器、石製紡錘車、石製の道方等出土。	(50)

地図上の 番号	遺跡名 (所在地)	時期	遺 跡 構		遺 跡 の 概 略	注
			住居 水田 墓地 井戸 その他			
38	鳥羽遺跡	奈良 平安 中世 江戸	○ ○	○ 獨立建物	奈良、平安時代の住居跡、獨立建物跡、井戸跡、溝、塹穴遺構、墓壇、土壇、櫓列、中世墓等々を發掘。土壇中よりB群石の直上に土師質土器一括資料を得る。	(51) (52)
39	国府推定地Ⅰ	奈良 平安			總社神社をほぼ中心とした方八町の地域を推定。元總社小学校敷地内等発掘調査。群馬県最古の曹海域の一部はこの範囲内に含まれる。金坂清則氏の説	(53)
40	国府推定地Ⅱ	奈良 平安			国分寺の東縁より6町東方に国府の西縁、南縁より5町南に国府の北縁がある。總社神社を東側に含む6町四方の地域を想定する。松島栄治氏の説	(54) (55)
41	上の2説以外の 国府推定地域	奈良 平安				(56) (57) (58)
42	王山古墳	(6C)	○	前方後円墳	墳丘全長75.6m F A上に構築。2～3段の葎石が全面にまわる。石室は全長16.37mで渠下最長。両袖型通目積。玄室幅に對する同長の比は2.7。	(59)
43	推定東山道				旧町村境。現況の地割、航空写真、地輪図及び御布呂遺跡での発掘結果等から推定。金沢氏の所見により地図上に復元。一部の見解を異にしたものに峠岸氏の論文あり。	(37) (53) (57)

(注)

- (1) 松本浩一、桜場一寿、石島和夫、「新石切組横穴式石室における、構築技術上の諸問題上」『群馬県史研究11』1980
- (2) 小林敏夫「南下D号墳」『まえあし?号』1970
- (3) 尾崎喜左衛門「古墳文化」『北群馬・渋川の歴史』1971
- (4) 石川正之助「庚申B号古墳(群馬県の遺跡885)発掘調査概報」『昭和37・38年度における発掘調査』(群馬大学教育学部尾崎研究室・研究調査報告第一輯)1966
- (5) 細野雅男・中東結志・相京雄史「清里 長久保遺跡の古墳概略」『埋文月報№7』1981
- (6) 尾崎喜左衛門「豪族の支配と古墳の構造」『前橋市史 第1巻』1971
- (7) 田沢金五「上野国總社二子山古墳の調査」『日本古文化研究所報告 第4』1937
- (8) 川合 巧「愛宕山古墳」『群馬總社古墳群』(財 観光資源保護財団)1977
- (9) 『群馬県の遺跡』(群馬県教育委員会)1963
- (10) 川合 巧「宝塔山古墳」『群馬總社古墳群』(財 観光資源保護財団)1977
- (11) 『蛇穴山古墳調査概報』(前橋市教育委員会)1976
- (12) 尾崎喜左衛門「在地豪族の權威を示す山王廟寺」『前橋市史 第1巻』1971
- (13) 『山王廟寺跡第2～5次発掘調査概報』(前橋市教育委員会)1976～1979
- (14) 『山王塔址』『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告 第1輯』(群馬県)1929
- (15) 『上野国分寺跡』以下同上
- (16) 『上野国分僧寺 寺域縁辺の調査』(群馬町教育委員会)1975

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

- (17) 太田静六、沼田正一「上野国分寺伽藍の研究」『建築学会論文集 22号』1942
- (18) 『上野国分寺周辺地域発掘調査報告』(群馬県教育委員会)1971
- (19) 『上野国分寺隣接地域発掘調査報告』(群馬県教育委員会)1979
- (20) 『上野国分尼寺跡発掘調査報告』(群馬県教育委員会)1970
- (21) 『上野国分尼寺跡発掘調査報告』(群馬県教育委員会)1971
- (22) 須田 茂「保波田遺跡」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報』(以下「上越」と略す) W(群馬県教育委員会)1980
- (23) 井上雄雄、都丸 肇「保波田遺跡」『考古学ジャーナル157』1979
- (24) 中東耕志「中里天神塚古墳」『上越 W』(群馬県教育委員会)1980
- (25) 都丸 肇「三ツ寺田遺跡」『上越 W』(群馬県教育委員会)1980
- (26) 飯塚幸二「井出遺跡」『上越 W』(群馬県教育委員会)1980
- (27) 『上野村誌』1979
- (28) 『上野国保波田薬師塚古墳出土品』(群馬県教育委員会)
- (29) 福島武雄「八幡塚古墳」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告 第二輯』1932
- (30) 石塚久則「八幡寺古墳」『考古学ジャーナル 157号』1979
- (31) 岩沢正作、吉沢澄浩「保波田八幡塚(古墳番号第二号)外周発掘概報」『上毛及上毛人146』1929
- (32) 後藤守一「上野国受宕塚」『考古学雑誌 39の1』1953
- (33) 能登 健、石坂 茂「岡道遺跡」『発掘された古代の水田』(群馬県立歴史博物館)1980
- (34) 細野雅男「高崎市惣野堂遺跡の水田址」『月刊文化財』1978
- (35) 細野雅男「惣野堂遺跡」『発掘された古代の水田』(群馬県立歴史博物館)1980
- (36) 『寺ノ内遺跡』(高崎市文化財調査報告書 第13集)1979
- (37) 『矢島遺跡、御布呂遺跡』(高崎市文化財調査報告書 第7集)1979
- (38) 『御布呂遺跡』(高崎市文化財調査報告書 第18集)1980
- (39) 『清里南部遺跡群』(前橋市教育委員会)1980
- (40) 『芦田貝戸遺跡』(高崎市文化財調査報告書 第9集)1979
- (41) 『芦田貝戸遺跡』(高崎市文化財調査報告書 第19集)1980
- (42) 『小八木遺跡調査報告書 (I)』(高崎市文化財調査報告書 第8集)1979
- (43) 『小八木遺跡 (II)』(高崎市文化財調査報告書 第15集)1980
- (44) 『正観寺遺跡群 (I)』(高崎市文化財調査報告書 第11集)1979
- (45) 『正観寺遺跡群 (II)』(高崎市文化財調査報告書 第14集)1980
- (46) 平野達一「日高遺跡」『関越自動車道(新路線)地域埋蔵文化財発掘調査概報(以下「関越」と略す) W』(群馬県教育委員会)1978
- (47) 平野達一、大江正行、中沢 信「群馬県高崎市日高遺跡の調査」『考古学ジャーナル 152号』1978
- (48) 『日高遺跡 (I)』(高崎市文化財調査報告書 第10集)1979
- (49) 『日高遺跡 (II)』(高崎市文化財調査報告書 第17集)1980
- (50) 『中尾遺跡』『関越 W』『関越 Y』(群馬県教育委員会)1978、1979
- (51) 『鳥羽遺跡 1-19』(群馬県教育委員会 鳥羽事務所)1979-1981
- (52) 『鳥羽遺跡』『関越 W』(群馬県教育委員会)1980
- (53) 金坂清則「上野国府とその付近の東山道及び群馬佐位塚家について」『交通の歴史 地理』(歴史地理学記要 16)1974
- (54) 尾崎喜左雄「上野国国分寺遺跡」『上野国国分寺遺跡を守る会』1971
- (55) 松島栄治「上野国府」『歴史公論 10』1978
- (56) 尾崎喜左雄「国府跡推定地の発掘調査」『前橋市史 第1巻』1971
- (57) 峰中純夫「東道一東山道の復元」『群馬県佐位塚家村誌』1979
- (58) 川草嘉久治「推定上野国府跡地覚え書き試み 1」『鳥羽遺跡 月報№16』(群馬県教育委員会 鳥羽事務所)1980
- (59) 中村富夫「王山古墳」『群馬総社古墳群』(財 観光資源保護財団)1977

第3章 調査の方法

第1節 発掘調査の方法と進め方

昭和53年後半に発掘調査の具体的な打ち合わせが行なわれ、調査対象地域及び面積が決められた。その経過を経て発掘調査は、年明けの1月8日を期して開始された。整地対象地は平地であり、大量の土の移動は行なわれない、そこで整地後作られる道路部分、道路に付設する水路部分を発掘調査の対象とした。道路には圃場整備事業の計画にそって、名前がつけられており、調査担当者である我々は、この道路につけられている名前をそのまま発掘区の名前として使用した。

調査区北東部の「L」字形を呈している約10m幅の調査区は、両側に水路が付設される道路であり、準幹1号道路と名付けられている。調査区全体の北側を約240mの長さで東西に走り、東端で北上し準幹1号道路に合流する約5m幅の道路は、水路の付設されない道路であり、耕114号道路と名付けられている。この道路は中央西寄りに南北に走る道路により東西に分けられる。西側を耕114-1号と名付け、東側を耕114-2号と名付けられている。耕114号道路を東西に分けた道路は、片側に水路を持つ約7m幅の道路であり、耕113号と名付けられている。この道路は南に直進し、圃場整備では対象としない既設の水路付き道路に合流し、付設水路はそこで終わり、5m幅の道路となってさらに南へ延びてゆく。その道路南端から西側に延びている調査区は、水路の付設されていない5m幅の道路であり、耕118号と名付けられていた。調査区全体のほぼ中央を約190mの長さで東西に走る調査区は、水路の付設されない5m幅の道路であり、耕116号道路と名付けられていた。耕113号により東西に分断されており、西側を耕116-1号、東側を耕116-2号と名付けられていた。

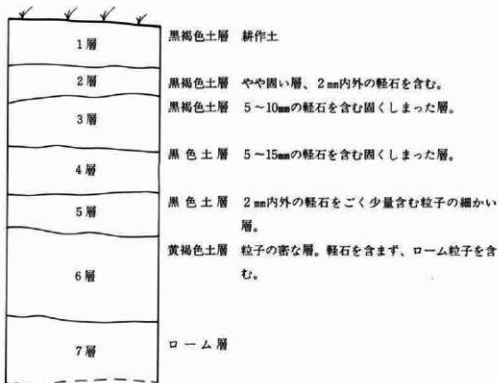
発掘調査を行なうにあたって、遺跡全体を5m四方のグリッドで割り付け区分した。グリッドの呼び方は通常算用数字とアルファベットが使用されるが、当遺跡では対象面積が広大なため、26文字では覆いきれない、そこで準幹1号道路の北東端の近くの任意な地点を0地点とした。又その地点は西を0とする東西方向グリッドの100と呼ぶことに決めた。グリッド基本線は準幹1号の南北方向にそって任意に採用した。グリッドの呼び方はグリッド交点の左下の地点をもってグリッド名を決めて、東西方向の数字を先に、南北方向の数字を後に付けて呼んだ。

発掘調査は10m毎に2×3m又は2×4mのトレンチを1本設定し、ほぼ全域に試掘坑を入れて、その結果をふまえて重機を用いて表土をとりのぞいた。遺構は黒褐色土層又は黒色土層を切り込んで作られており、覆土も同じような土であったため、遺構検出には非常な困難が伴った。

初年度の圃場整備事業に伴う発掘のため、発掘作業員たちはすべて未経験の人であり、発掘、実測になれるまで時間を費した。調査期間後半に至り、学生の参加を得て実測を進めた。

調査期間が短いのに対して、調査面積が広大なため、道路外に延びる遺構については、原則として発掘調査を行っていない。一部カマド等に関してのみ拡張して発掘調査を実施した。

第2節 標準土層図及び遺跡内の地形について



第2図 標準土層（準幹1号）図

地形は、権名山に近い西北部が高く、東南部が低い。この地域が権名山の裾野の一部である為、全体的になだらかに傾斜している。耕114-2号の1号住居址と耕118号の16号溝との比高差は、1号住居址が194.9m、16号溝が188.8mで6.4mに及ぶ。発掘区域は東西約270m、南北が約330mの広さで、遺跡全体の比高差が大きいため場所によっては、1・2層、3・4層の混入が認められる部分がある。

準幹1号東側は池端と呼ばれる地域であり、1段低くなっている。耕114号はロームが第7層として認められ、6層中には多くのローム粒子が含まれているが、耕116号の6層ではローム粒子のほかに砂利を大量に含んでいる。このように地区による違いが認められる。

しかし、平安時代の遺構はすべて4層の黒色土層を切り込んで作られている。本来は3層の黒褐色土層からの切り込みであると思われるが、そこからの切り込みを確認できる遺構はほとんど認められなかった。

第3節 発掘調査の経過（調査日誌）

調査は東西約270m、南北330mの範囲で道水路部分を対象として行った。面積は約4130㎡であり、調査期間は昭和54年1月8日から3月23日まで、実働日数は55日間であった。以下、工事計画の道路呼称にあわせて調査経過の概要を記すこととする。

1月8日(月) 発掘調査器材搬入。トレンチ(2×3m)を10mごとに設定し、準幹1号道路部分から調査を開始する。

1月9日(火)～13日(土) 準幹1号・耕114号・耕113号道路部分をトレンチ調査。耕作土中から遺物が多く出土する。

1月16日(火)～19日(金) 耕113号道路部分トレンチ調査継続。準幹1号道路部分を機械により表土除去。耕114号道路との接点付近に土器片が多く出土する。表土除去後は精査プラン確認。

1月20日(土) 耕114号道路部分を東から表土除去作業。

1月22日(月) 耕114号道路部分、表土除去作業、土壇を検出。住居址の調査を開始。

1月23日(火) 耕113号道路北部、耕114号道路部分表土除去作業終了。

1月24日(水)～26日(金) 耕116号道路部分表土除去作業。耕113号道路北部精査。

1月27日(土)～2月3日(土) 寒休みのため作業なし。

2月5日(月)～7日(水) 準幹1号道路部分、集石遺構、1～4・17号溝の発掘調査、写真撮影。溝からは土器が非常に多く出土し、中には緑釉土器片も含まれる。

2月8日(木) 準幹1号道路部分実測開始。耕113号道路部分精査。

2月9日(金)～10日(土) 耕114号道路西部の精査。住居址のプランを検出。

2月13日(火)～14日(水) 準幹1号道路部分実測終了。耕114号道路部分発掘調査開始。

2月15日(木)～17日(土) 耕113号道路北端部の井戸、土壇の調査、写真撮影、実測。耕114号道路西部の実測終了。耕116号道路部分表土除去作業。

2月19日(月) 耕113号道路部分、墓及び住居址の調査。耕114号道路部分、住居址の調査。耕116号道路部分、表土除去作業及び遺構検出作業。緑釉環が出土。

2月20日(火)～22日(木) 耕113号道路部分、住居址の調査、写真撮影、実測。耕114号道路部分、土層図、住居址の調査・写真撮影・実測。耕116号道路部分、住居址調査。金銅製丸柄等出土。耕113号道路南部に2×4mのトレンチを設定し調査。

2月23日(金)～24日(土) 雨のため室内作業。

2月26日(月) 耕113号道路南端部表土除去。耕113号道路北部、耕114号道路部分調査。耕116号道路部分表土除去後精査。

2月27日(火) 耕113号道路北部住居址の調査、南部トレンチ調査。耕114号道路部分西部の平面図、東部の土層図。耕116号道路部分発掘調査終了。

2月28日(水) 耕113号道路北部土層図終了、南部プラン確認。耕114号道路部分、平面図・

第3章 調査の方法

土層図・住居址の調査。耕118号道路部分表土除去。

3月1日(木) 耕113号道路南部プラン確認。耕114号道路西部全景写真、東部住居址の調査・実測。

3月2日(金) 耕113号道路北部の住居址・溝・井戸の調査・実測・南部は住居址の調査開始。耕114号道路、土層図・住居址写真、実測。耕116号道路西部全景写真。

3月3日(土) 耕113号道路北部住居址のカマド調査、南部は住居址の調査。耕114号道路東部住居址の調査。耕118号道路部分、溝、古墳周溝の調査。

3月5日(月) 耕113号道路北部住居址の調査。耕114号道路東部住居址の調査。耕118号道路部分古墳周溝の調査。

3月6日(火)～7日(水) 耕114号道路東部住居址の調査・写真撮影・実測。

3月8日(木) 耕113号道路南部実測。耕114号道路東部全景写真、住居址の調査。耕118号道路部分全景写真。

3月9日(金) 耕113号道路南部実測。耕114号道路東端部全景写真。耕116号道路東部実測開始。

3月12日(月) 耕116号道路、住居址の調査・写真撮影。土器洗い。

3月13日(火)～14日(水) 耕113号道路南部、住居址の調査・写真撮影・測量。耕116号道路東部、住居址の調査。土器洗い。

3月15日(木) 歴史散歩の会吉岡村支部来跡。

3月16日(金) 耕113号道路南部、住居址の調査・土層図。耕116号道路東部住居址の調査・写真撮影。

3月17日(土) 耕116号道路東部、全景写真、実測終了。

3月19日(月)～20日(火) 耕113号道路北部、住居址の調査、写真撮影。

3月21日(水) 耕113号道路南部、住居址カマド調査終了、全景写真。

3月22日(木) 耕113号道路部分全景写真。土器洗い。

3月23日(金) 耕113号道路南部、実測終了、83-34グリットに属する製鉄関連遺構の調査終了。野外作業のすべてを終了する。

越冬期の調査であり、毎朝土は凍り、昼頃にはそれが解けて軟弱となる。又、この季節特有のからっ風のため、砂ぼこりの中での調査もあった。発掘調査には最適の条件とはいえなかったが、予定通り調査は終了し、平安時代の集落の貴重な資料を得ることができた。

第4章 検出された遺構と遺物

1月から3月にかけての3ヶ月間にわたり、発掘調査を行ない多くの竪穴住居址、溝、土坑等が検出された。またそれらの遺構に伴って34,000個を超える大量の遺物が出土した。以下この章では、それぞれの遺構や遺物についてくわしく説明する。ここではそれに先だち、その概要について簡単に時代順を追って述べてゆく。

縄文時代

遺構 耕114-2号に位置する縄文土坑1基のみしか確認できなかった。

遺物 土坑より加曾利E4式に属する鳥類を摸した、大型の形象把手が付けられている深鉢の一部が出土した。他に遺構に伴わないで出土しているものに、石器として石鏃、粗大石匙、打製石斧、石核等があり、土器として深鉢の破片等が出土している。それらは一括して実測図及び観察表をのせてある。

奈良時代

遺構 耕114-2号に位置する20号住居址1軒が発掘されたのみである。この住居址は、床面をロームまで掘り込んだ唯一のものであり、柱穴、周溝等が明確に確認できた。

遺物 全体に丸く、口縁部の内傾する環の大型のものが2個体、小型のものが2個体認められた。遺構に直接伴わない遺物として環の破片が数点認められたのみである。

平安時代

遺構 竪穴住居址が耕114-1号に7軒、2号に18軒、耕113号に23軒、耕116-2号に15軒の計63軒が発掘調査された。溝は単幹1号に位置する1-4号溝・17号溝、耕114-2号に位置する5号溝、土坑は耕113号に位置する2号土坑がそれぞれ発掘調査された。溝や土坑はその他にも多数検出され、覆土の検討によりそれらの多くは平安時代に属する可能性があるが、遺物を出土していないため時代決定の決め手を欠いている。

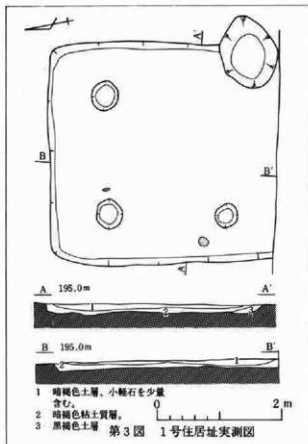
遺物 多くの竪穴住居址、1-5号溝中より大量の遺物が出土した。それを細かく分類、編年することにより、それを出土した遺構を年代順にならびかえて、遺跡の性格について検討することが可能となる。それについては第5章で行なっている。それぞれの遺構から出土した土器の種類、数量に関しては第5章で一覧表を示し、その傾向、特色について簡単に述べてある。

中世

遺構 耕113号に位置する1号土坑・1号井戸・2号井戸、耕116-2号に位置する2号集石遺構が発掘調査された。

遺物 1号土坑より内耳鍋3ヶ体の破片、1ヶ体は底部以外ほぼ完形である。2号集石遺構より土師質土器環、鉢、陶磁壺、甕、1号井戸より軟質陶器の鉢、天目釉の甕、中世土師質土器皿、青磁甕、陶器壺等が出土している。

第1節 住居址



1号住居址

位置及び概略 発掘区域最西端の耕114-1号55-15・16グリットに属する。標高は、194.9m前後で発掘区域中最も高い。住居は黒色土層上の黒褐色土層中より掘り込んで構築されている。柱穴は3本検出され、その径は40cm、深さ、10~15cmある。竈付近の柱穴は認められない。

規模 東西3.52m、南北は南側未完掘のため不明である。現状では南北3.72mを示す。壁高は20cm前後ある。

遺物 住居覆土中に土師器の燹破片、灰白色の須恵器破片等。

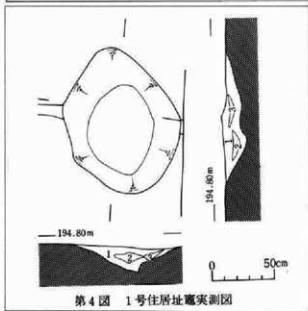
1号住居址竈

位置及び概略 住居東壁南端近くの壁を切込んで構築されている。竈の天井部は調査前に攪乱を受けている。焼土は燃焼部付近に堆積し、また灰層は煙道部付近に堆積していた。袖部・煙道部共に不明確であった。

規模 掘り方で、煙道方向1.16m 両袖方向0.94mを計る。

遺物 土師器の燹の破片のみ出土。

1 暗褐色土層、焼土・灰・炭化物を少量含む。
2 暗褐色土層、焼土・灰を多量に含む。
3 灰層。



2号住居址

位置及び 1号住居址東側に位置し、耕概略 114-2号、62-15・16グリットに属する。北側は発掘区域外のため未完掘。調査時において耕114-2号地区の住居掘り込み面は比較的高い位置で確認出来たはずであるが、試掘時に不明確であったため、遺構確認面を掘り下げてしまった。柱穴は不明確ではあるが、竈南側に掘り込みが認められる。

規模 東西3.15m、南北は現状で2.4mを示す。壁高は10cm前後ある。

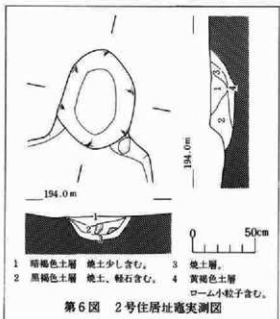
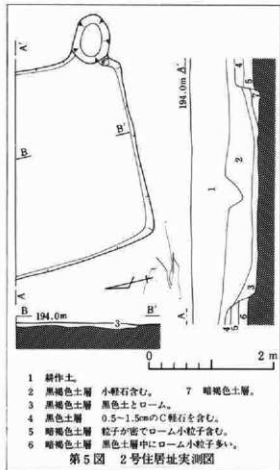
遺物 全く出土していない。

2号住居址竈

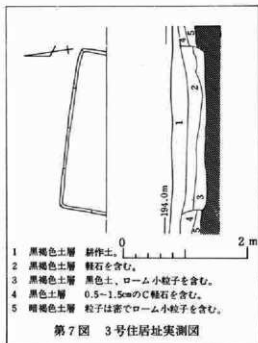
位置及び 住居東壁南端の壁を切り込んだ概略 で構築されている。竈部分が住居址の外に張り出した状態で残る。裾部・煙道部は1号住居址と同様攪乱を受けているために不明、竈内には焼土層・灰層が少量認められるが残りは悪い。南東部に袖部を使用したと思われる8×12cmの石が認められた。

規模 掘り方で煙道方向80cm、両袖方向は60cm、最も深い部分で18cmを計る。

遺物 全く出土していない。

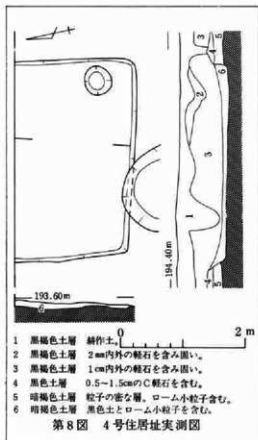


第4章 検出された遺構と遺物



3号住居址

位置及び 5号住居址の南東部に位置し、耕
 概 略 114-1号、67-16、68-16グリ
 ットに属する。遺構の大部分は道
 路南の発掘区域外にあたるので、
 全体を知ることが困難である。
 規 模 東西2.6m、南北は現状で0.74mを
 示す。壁高は8cmある。
 遺 物 全く出土していない。



4号住居址

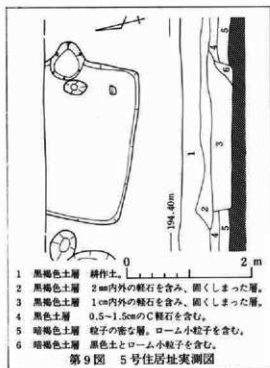
位置及び 5号住居址の西側に近接して位置
 概 略 し、耕114-1号、66-15グリッ
 トに属する。北側は発掘区域外の
 ため未完掘。南壁は一部を土壇に
 切られていており、良い状態では
 検出されていない。東南端にピット
 が認められたが、用途は不明で
 ある。竈は覆土中に焼土・灰など
 が混入していないため現状ではそ
 の痕跡が認められない。
 規 模 東西3.2m、南北は北側未発掘のた
 め不明。現状で1.95m、壁高は現
 状で5-10cm。
 遺 物 全く出土していない。

5号住居址

位置及び 4号住居址の東側に位置し、耕概 略 114-1号、67-15グリットに属する。北側が調査区域外で、北壁は確認出来ない。竈は他の住居址とは異なり、東壁のほぼ中央に位置していると推定される。遺存状態は極めて悪く、付近に少量の焼土を残すのみである。竈前にピット、南東部に20×35cmの石が出土している。

規模 東西2.95m、南北は北壁未発掘のため不明。現状で1.55m。壁高は現状で10cmを計るが、土層断面から30cm前後と思われる。

遺物 全く出土していない。

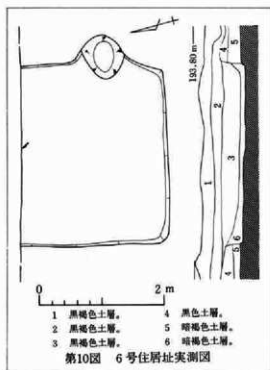


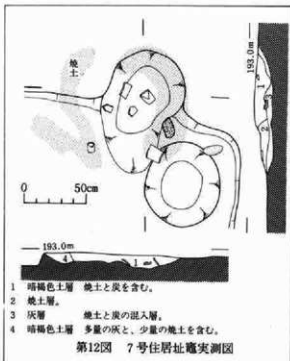
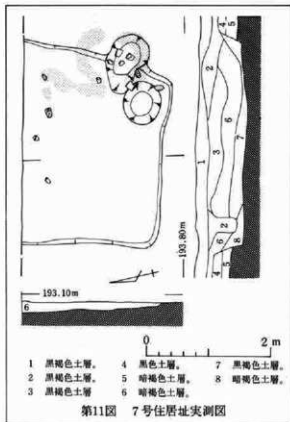
6号住居址

位置及び 7号住居址の西側に位置し、耕概 略 114-1号、70-15・16、71-15・16グリットに属する。北側は調査区域外で確認出来ないが、壁面とほぼ平行していると思われる。竈は東壁南寄りに切り込んでいる。付近より焼土・灰等が少量確認された。

規模 東西2.85m、南北は北側未発掘のため不明。現状で2.3m。壁高は現状で6cmの高さを示すが実際には40cm前後あったと思われる。

遺物 北壁の中央から鉄器の刀子、竈内から土師質甕の底部が出土。





7号住居址

位置及び 6号住居址の東側に接して位置し、耕114-1号、71-15-

概 略 置し、耕114-1号、71-15-16、72-15・16グリットに属する。北側は発掘区域外で確認出来ない。柱穴は不明。竈は東壁を切り込んで構築されている。竈内とその北側周辺に、焼土の堆積があった。竈西南部には貯蔵穴と思われる土坑が検出された。

規模 東西3.28m、南北は北側未発掘のため不明。現状で2.5m。壁高は現状で10cmを計る。但し実際は40cm前後を示したと思われる。

遺 物 土器の出土はないが、竈内外の粘土中に、数個の石が散乱していた。

7号住居址竈

位置及び 住居址の東壁南寄りを切り込んで構築されている。全体に焼土の多い竈である。竈前面に粘土の散乱を確認した。

規模 堀り方で、煙道方向1m、両袖方向0.6mを計る。

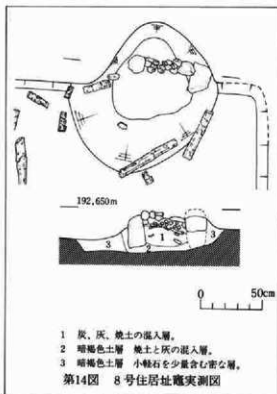
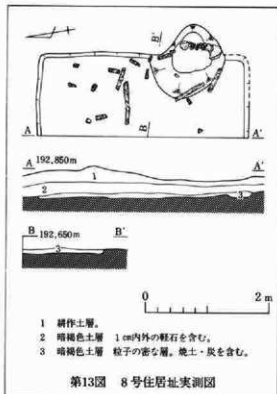
遺 物 竈内袖石の内側から、長菱の破片や土師質土器の碗、灰釉陶器の破片等が出土した。住居址の中央部南寄りて約10cm浮いた状態で土師質土器碗等が出土した。

8号住居址

位置及び 概略 耕114—1号中を東西に走る9号溝の東端部南側にあたり、耕113号、75—17・18グリッドに属する。発掘調査以前にブルドーザーにより8—15号住居址の上部を削り取っているため、この地区の遺存状態は極めて悪い。住居床面に多量の炭化材が散乱していた。大きなものでは径5cm、長さ70cm等も確認された。

規模 東西は西側未発掘のため不明。現状で1.32m。南北は北壁付近擾乱されていたが現状で3.45m。壁高は現状の最高で10cm。

遺物 土師器の燹破片出土。



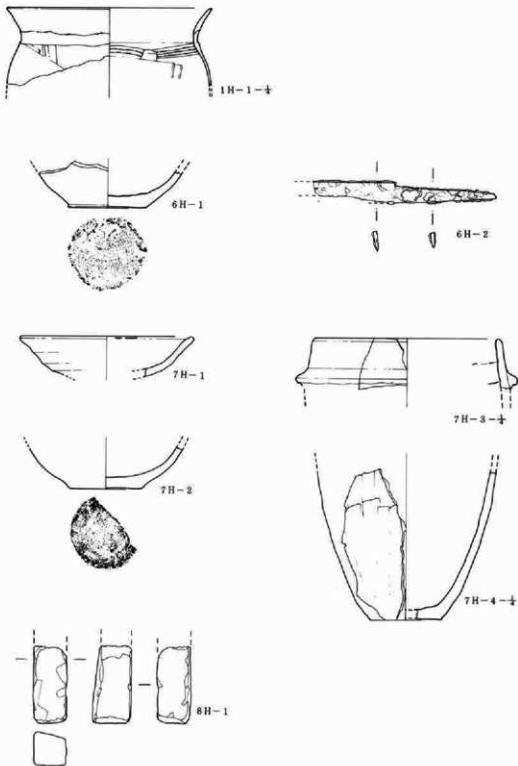
8号住居址竈

位置及び 概略 住居址東壁南寄りに、壁を切り込んで構築されている。両袖石とその上に乗せた天井石が、原形をある程度留めて遺存していた、天井石は熱を受けて、表面からボロボロに砕けていた。

規模 掘り方で煙道方向1.2m、両袖方向で0.8m、深さ35cm。竈の前方部はやや広がっている。

遺物 床面に灰釉陶器の破片。竈周辺から土師器の燹破片が数個体出土した。

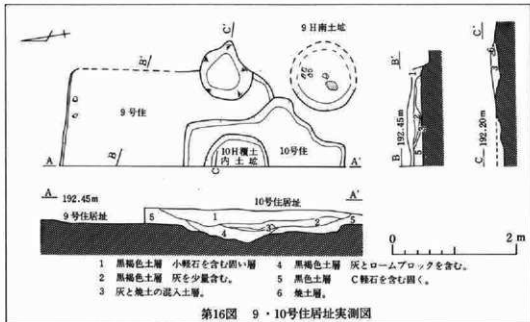
第4章 検出された遺構と遺物



第15図 1・6・7・8号住居址遺物実測図

1・6・7・8号住居址出土遺物観察表

住居及び番	器 形	寸 法 (cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1H-1	突-土師器	— 2.2 —	フク土	頸部より上方横ナデ。下方横方向削り、頸部内側ハケ目。器内の薄い長突、頸部「コ」の字を少し意識させる。	①褐色②酸化、良③口縁④密
6H-1	施-土師質	— — 6.3	カマド内	底部より内反しつつ外側へ大きく広がる。内側ロクロ目残る。底部ロクロ右回転糸切残れる。	①褐色②酸化、堅緻③④密
6H-2	刀子— 鉄製品	長さ15cm	フク土	鉄製刀子の茎及び刀身の一部。茎に近い刀身刀部は、使用によりかなり短く幅狭くなっている。	⑤茎の長さが、刀部より長い。茎も短くないため、刀子としても、かなり大きなものが、長く使用されたため短く、幅狭くなったように思われる。
7H-1	施-土師質	— — 5.8	フク土	6H-1同様。底部が小さく、体部が内反しつつ大きく外へ広がる。ロクロ右回転。	①灰褐色②弱酸化、堅緻③④密
7H-2	施-土師質	14 — —	カマド内	底部右回転糸切残れる。体部が強く外側へ広がる器形である。	①褐色②酸化、堅緻③④密
7H-3	羽 蓋	— 20 —	フク土	断面、口縁部内側に輪積み残れる。刃の付け方が強である。口唇部が少し丸くなっている。口縁の長い羽蓋で、54号住-11の羽蓋に似ている。	①灰褐色②酸化、堅緻③口縁④密
7H-4	羽 蓋	— — —	カマド内	外面、輪積み後に縦方向へ削り、内側ナデ。直立気味に立ち上がる胴部である。羽蓋の胴部と思われる。	①黒褐色②酸化、良③胴④③～5mmの軽石含む。
8H-1	砥 石		フク土	断面台形を呈するが、正方形に近く、規格性を持っている。2面を砥石として利用しており、磨耗している。	①灰褐色



9号住居址及び9号住居址南土城

位置及び概略 10号住居址と重複している。10号住居址に住居の大部分を切られている。綫113号、75-25・26グリットに属する。遺存状態は極めて悪く、特に北壁はほとんど消失に近い状態であった。南に径1.1m、深さ10cmほどの円形土城があり、10号住居址内土城と同様の焼土・灰等が埋没していた。

規模 東西は西側未発掘のため不明。現状で1.58m、南北3.25m、壁高は残りが悪く2~5cmを計る。

遺物 住居覆土中から土師質土器破片2個体・腕体部破片1個体、南土城より土師質土器腕体部及び底部破片3個体、坏破片1個体出土。

10号住居址及び10号住居址覆土内土城

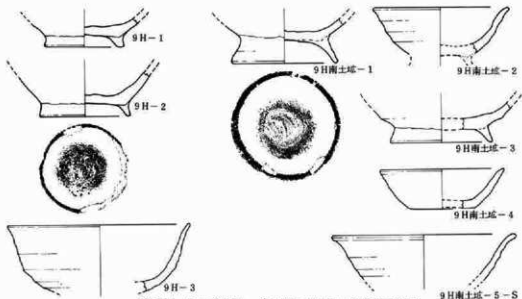
位置及び概略 9号住居址南側に重複し、同一グリットに属す。両住居址共に、擾乱が著しく、住居址大半が発掘区域外にあたるため大部分は不明。遺存状態は9号住居址と同じく悪い。

土城は覆土中を幅1.05m、深さ10cm程の円形を呈し遺構を切り込んでいる。土城中からは焼土・灰・炭等が検出された。

規模 東西は、西側未発掘のため不明。現状で0.76m、南北2.6m、壁高10cmを計る。

遺物 住居床面・覆土中・及び覆土内土城を含めて、出土していない。

第1節 住居址

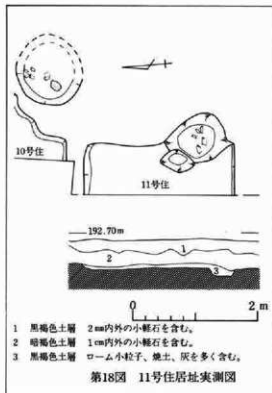


第17図 9号住居址・9号住居址南土坑遺物実測図

9号住居址・9号住居址南土坑出土遺物観察表

住居及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
9H-1	丸-土師質	— — 6.4	フク土	やや還元の高台付碗、高台部内側炭素吸着、ロクロ右回転。	①黒褐色②酸化、堅緻③高台底部④2-3mmの軽石含む。
9H-2	丸-土師質	— — 7.2	フク土	ロクロ回転による横方向の粒子の混れが全面に認められる。	①褐色②酸化、堅緻③④⑤密
9H-3	丸-土師質	— 18.4 —	フク土	口径に比し、器高の低い碗、体部に、ロクロ残れる。	①灰白色②還元、堅緻③④⑤密
9H-南 土坑1	丸-土師質	— — 8.6	フク土	内面底部に渦巻状のロクロ残れる。高台の高い碗である。	①灰褐色②酸化、堅緻③高台部④2-4mm軽石含む。
9H-南 土坑2	丸-土師質	— 11 —	フク土	胴部外側にロクロ目わずかに残る。内外面とも磨十デ。	①灰褐色②酸化③④⑤密⑥断面中央に黒色還元部残る。
9H-南 土坑3	丸-土師質	— — 8.2	フク土	高台部内側回転糸切残れる。碗底部周辺削り後、高台部貼付。	①灰褐色②酸化③④⑤密、赤色粒子含む。
9H-南 土坑4	片-土師質	3.2 9.9 5.6	フク土	回転糸切で平底な底部をもつ。碗の体部は、高台付碗より鋭角に立ち上がる。	①灰褐色②酸化③④⑤密⑥高台部
9H-南 土坑5	丸-須恵器	— 14.8 —	フク土	軟質須恵器、口唇部が大きく外反する。ロクロ右回転。	①灰白色②還元、軟質③口縁④密

第4章 検出された遺構と遺物

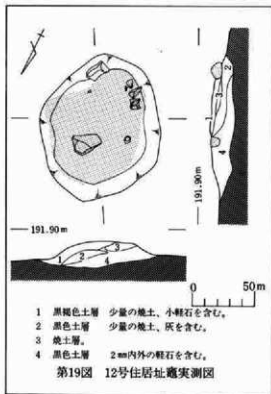


11号住居址

位置及び 概略 9号・10号住居址の南に位置し、
概略 耕113号、75-26グリットに
属する。遺構は、大部分が西側
の発掘区域外にあたる。北隣の
9号・10号住居址と同様に攪乱
が著しく、床面の確認なども極
めて困難であった。竈は、東壁
南寄りに切り込んで構築されて
いる。

規模 東西は、西側が未発掘のため不
明。現状で0.87m、南北2.42m、
壁高8cm。

遺物 住居址東側から、土師質土器の
坏と羽蓋の口縁部を出土。竈内
より、灰白色を呈する須恵器坏
が2個体出土。



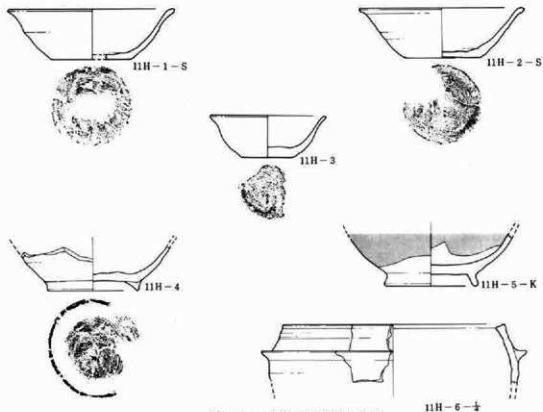
12号住居址

位置及び 概略 9号住居址北東部、4号土壇北
概略 側に位置し、耕113号、76-
23・24グリットに属する。調
査直前にブルドーザーで削平さ
れており、遺構の床面、壁など
ほとんど失われており、わずか
に竈底部を残していた。床面の
確認はできなかったが住居址と
して扱った。

規模 竈の東西は掘り方で0.96m、南
北は1.08m。

遺物 住居址覆土と思わる土層中から
土師質土器の碗や坏、長甕の口
縁部や胴部破片を出土。

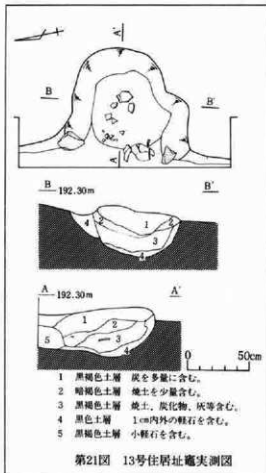
第1節 住居址



第20図 11号住居址遺物実測図

11号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
11H-1	环-須恵器	4 13.4 6	カマド内	右回転糸切痕残る。口径に比し底径の小さい丸、底部板目残る。	①灰白色②還元、軟質③劣④密
11H-2	环-須恵器	3.9 13.2 6.2	フク土	右回転糸切痕残る。口径に比し底径の小さい丸。	①灰褐色②酸化、軟質③劣④密
11H-3	环-土師質	3.3 9.3 4.2	フク土	右回転糸切痕残る。小型丸、胴部に比し、底部が厚い。	①褐色②酸化③劣④3~5mmの軽石含む。
11H-4	丸-土師質	— — 7.3	フク土	右回転糸切痕残る。底面及び高台部は楕円形、高台部接合雑。	①灰白色②還元、軟質③劣④1~3mmの軽石含む。
11H-5	丸-灰輪	— — 7.6	フク土	高く、外へ張り出した高台を持つ丸、施物は漬け漬けによる。	①黄地灰白色、釉濃い緑②良③劣④密
11H-6	羽蓋	— 24 —	フク土	口縁部が内側に内彎しつつ傾く。口唇部ほぼ水平になり内彎する。	①灰褐色②酸化③劣④密

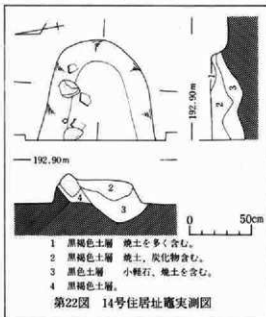


13号住居址竈

位置及び 14号住居址の北側に位置し、概略 緯113号、75-31・32グリットに属する。調査区域内には竈の先端部がわずかに表われていたため、発掘は竈部分のみ拡張して行った。竈の入口・袖部は、比較的に残存状態が良く、両側に袖石が各1個置かれていた。竈内には焼土や炭化物を含む層が認められた。

規模 竈は堀り方の現状で煙道方向72cm、両袖方向93cmを計る。

遺物 竈内から、器内の薄い「コ」の字状口縁の長甕が本遺跡中最大量出土した。3個体が接合によりほぼ完璧近く復元された。



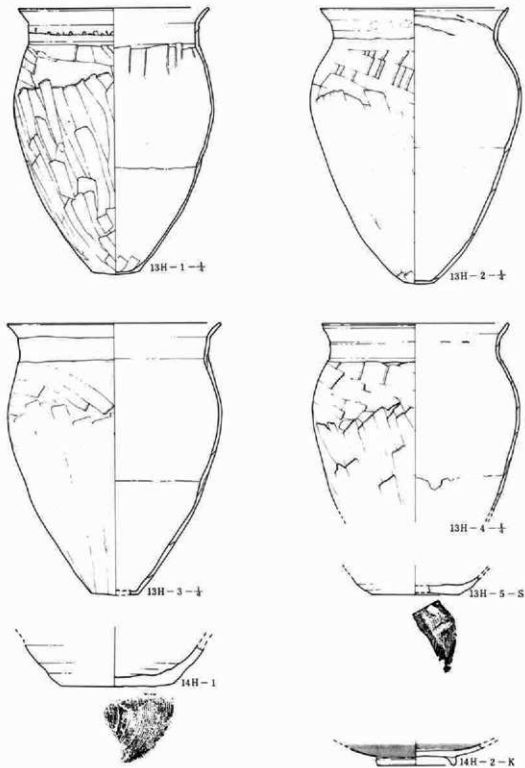
14号住居址竈

位置及び 13号住居址南側に近接して位置し、概略 緯113号、75-32グリットに属する。13号住居址同様で、竈部分をわずかに拡張し発掘した。竈内北側に、袖石と思われる石が2個体検出された。

規模 竈掘り方で、煙道方向0.8m、両袖方向0.82m。

遺物 竈内より、羽釜口縁部破片、土師質土器の塊、灰釉陶器の塊等出土。

第1節 住居址

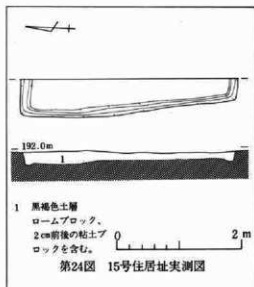
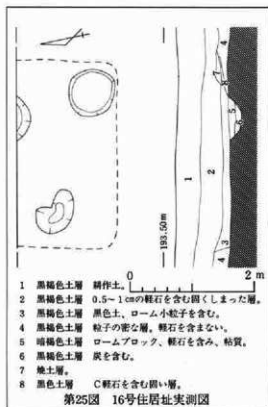


第23圖 13・14号住居址遺物実測図

第4章 検出された遺構と遺物

13・14号住居址出土遺物観察表

住居及び 番号	器 形	寸 法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
13H-1	甕-土師器	28.2 20.5 5.2 頸部径-18.2 胴部径-21.6	カマド内	「コ」の字口縁の裏、器壁が薄く、一定の厚さで底面まで至る。接合面が頸部、胴中央部に残る。器壁の特に薄い「コ」の字口縁の裏。	①褐色②堅緻③ほぼ完形④精選良好
13H-2	甕-土師器	29 20 4.1 頸部径-17.5 胴部径22.5	カマド内	「コ」の字を意識させる頸部を持つ。肩部に左横方向のヘラ削り。胴部最大径を呈する。肩部から底部付近まで右下方向へラ削り。	①褐色②堅緻③口縁部の一部以外完形④精選良好
13H-3	甕-土師器	28.8 22.6 5 頸部径-20 胴部径-22.6	カマド内	「コ」の字口縁の裏。「コ」の字状を意識させるための頸部上下を削る。胴中央部から底部にかけて右傾下方向にヘラ削り。	①褐色②堅緻③④精選良好
13H-4	甕-土師器	— 20.1 —	カマド内	「コ」の字口縁の裏、外側口唇部手前下で弱い隙を持ち上がり、丸味を持った口唇部に至る。13H-1・2・3に比して赤褐色が強い。	①褐色②堅緻③胴上半分残存④精選良好
13H-5	杯-須恵器	— — 7	カマド内	底部右回転糸切。底部の大きな杯と思われる。断面やや黄色を帯びており、弱い還元を示す。	①灰白色②還元、軟質③④密
14H-1	杯-土師質	4.8 16.1 8.9	カマド内	内側底部中央が凹状になる。整形技法等から鉢を想定させる。底部回転糸切。	①灰白色②還元③底部-体部の一部④密
14H-2	皿-灰釉	— — 6.4	カマド内	低い高台部のため、皿と思われる。内面底部（見込みの部分）を除いて厚く灰釉がかけられている。灰釉が気化している。刷毛塗りによるものと思われる。	①素地灰白色、釉緑色②還元③底部-体部の一部④密



15号住居址

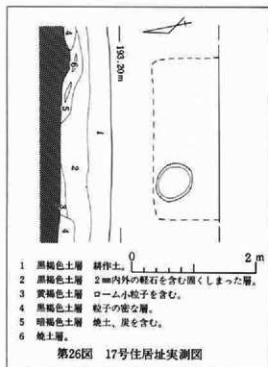
位置及び 9・10・11号住居址東側に位置
 概 略 し、耕113号、76-26グリット
 に属する。周溝は壁下をまわる。
 規 模 東西は東側未発掘の為不明。現
 状で0.62m。南北3.55m。

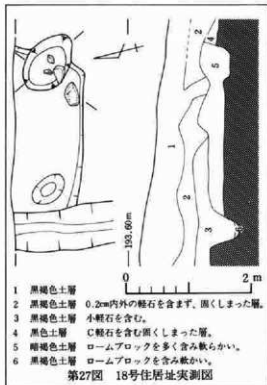
16号住居址

位置及び 18号住居址西側に位置し、耕
 概 略 113号、77-15・16グリットに属
 する。竈は東壁に構築される。
 規 模 東西2.55m。南北は北側の付近
 くを未発掘の為不明。

17号住居址

位置及び 16号住居址南側に位置し、耕
 概 略 113号、77-16グリットに属す
 る。
 規 模 東西2.61m。南北は南側未発掘、
 遺構確認面を下げすぎた住居。



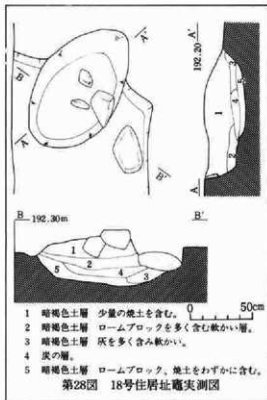


18号住居址

位置及び 概略 16号住居址の東側に位置し、耕113号、78-15グリットに属する。住居址北側は発掘区域外のため確認出来ない。西側は8号溝に切られている。住居址西南端に60×38cm、深さ30cmの柱穴が検出された。竈南側に20×20×40cmの石が置かれている。

規模 東西は西側を溝に切られているため不明。現状で2.68m、南北は北側の大半が未発掘のため不明、現状で1.15m、壁高は竈周辺で20cm前後を計る。

遺物 覆土中より灰釉陶器碗の破片が2点、土師質土器杯の破片等、わずかに出土。



18号住居址竈

位置及び 概略 住居址東壁南寄りに壁を切り込んで構築されている。竈は南壁と平行ではなく、住居中央に傾いている。袖部は遺存していないが、袖石として使用されたとと思われる石が3個竈内より出土している。第1層暗褐色土層は少量の焼土を含み、第3層は灰を多く含む軟かい土層である。

規模 掘り方で煙道方向1.1m、両袖方向0.66m、深さ31cm。

遺物 竈内より、羽釜口縁部破片、胴部から底部までの破片数片、及び土師質碗破片を2片出土。

第1節 住居址

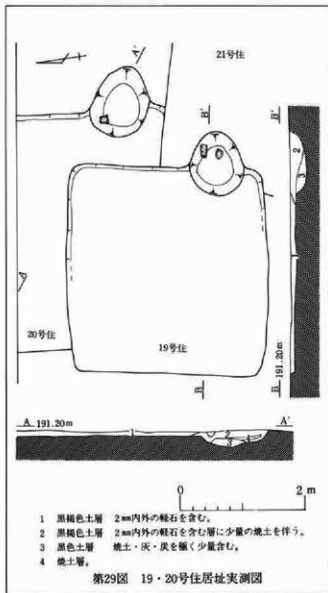
- 規模** 東西3.31m、南北は3.12m、壁高は最も高い所で2~3cm。
- 遺物** 竈内より須恵器環数片、覆土中より須恵器環・甕、土師器の甕の破片出土。

20号住居址

- 位置及び概略** 19号住居址に竈手前の西側半分を切られ、21号住居址に南壁を切り込まれている。遺構の北側は発掘区域外なので北壁を確認出来ない。かろうじて、竈周辺及び北側床面が残った。本遺構は3つの住居址中最も古い時期にあると推定される。

- 規模** 東西3.7m、南北は両壁ともに不明。現状で2.45m。

- 遺物** 竈内から底部へラ削り調整土師器の環が1個体出土。また最大径を口縁部に有すると思われる器内の厚い甕の口縁部~肩部破片が出土。

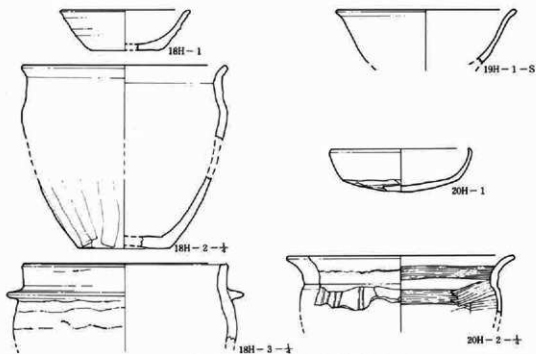


第29図 19・20号住居址実測図

19号住居址

- 位置及び概略** 19・20・21号住居址と3重に重複している。これらの遺構はすべて遺存状態が悪く、切り合い関係の検出が極めて困難であった。本遺構は3軒の中で最も新しいものである。耕114-2号の87-15・16、88-15・16グリットの4グリットに属する。竈は東壁南寄り構築されている。西壁はほとんど残存しない。

第4章 検出された遺構と遺物



第30図 18・19・20号住居址遺物実測図

18・19・20号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
18H-1	杯-土師質	3.2 10.4 6.1	カマド内	ロクロ右回転、底部糸切痕残る。小型の甕である。	①褐色②酸化、堅緻③ㄨ④1-2mmの軽石と酸化鉄を含むが全体に密
18H-2	土釜	19.4 22.1 10	カマド内	口縁部から底部にかけて厚い器壁を持つ。雑な作りの土釜。通水性の強い器壁を持つ。	①褐色②酸化、軟質③ㄨ④2-3mmの軽石を多く含む。
18H-3	羽釜	— 21.8 —	カマド内	内彎気味の胴部が、筒を併に直立に立つ。胴部に輪積み痕残る。	①赤褐色②酸化、堅緻③口縁部ㄨ④3-4mmの白色軽石を含む。
19H-1	陶一須恵器	— 14.5 —	カマド内	11H-2に似ている。ロクロ右回転、口唇部が外反する。	①灰白色②還元、軟質③ㄨ④褐色粒含む。
20H-1	杯-土師器	3.4 11.2 —	カマド内	口唇部横ナデ、底部手持ちへう削り、内側全面ナデ。平底に近い。他住居からの搬入品?。	①赤褐色②酸化③ㄨ④密
20H-2	甕-土師器	24.6 — —	フク土	口縁部が厚く、胴部の薄い壁、外反する口縁部手前に接合痕。	①赤褐色②酸化、堅緻③口縁部ㄨ④白色軽石含む。

21号住居址

位置及び 概略 19号住居址の竈が西側床面上に構築され、20号住居址の南側を一部切り込んでいた。

3住居は共に遺構確認面が低かった為、遺存状態は極めて悪い。特に西壁は残りが悪く、ほとんど残らない。貯蔵穴と推定される土竈は、東南壁端の竈手前に幅55cm、深さ25cmを計る。

規模 東西3.14m、南北は3.08m、壁高1～2cm。

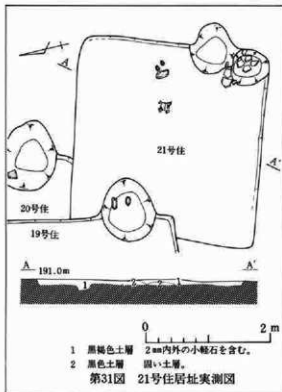
遺物 住居址内貯蔵穴と推定される土竈内から、多量の土器が出土している。長壁の破片は竈内出土の破片と接合出来た。須恵器甕の二次焼成1個体出土。又、竈西北の地点より焼締のない須恵器碗・环2個体出土。

21号住居址竈

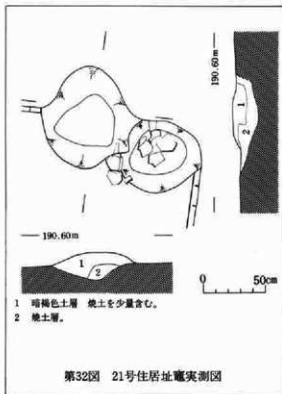
位置及び 概略 住居東壁南寄りに壁を切り込んで構築されている。遺存状態は住居と比較してやや良好。

規模 掘り方で煙道方向80cm、両袖方向60cm、深さは20cm。

遺物 竈手前の焼土層の中から、器内の薄い「コ」の字口縁甕2個体を出土。

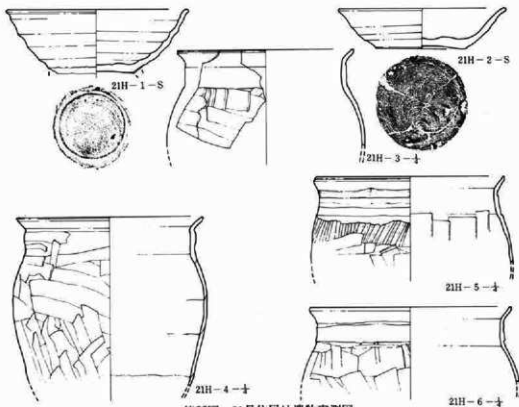


第31図 21号住居址実測図



第32図 21号住居址竈実測図

第4章 検出された遺構と遺物



第33図 21号住居址遺物実測図

21号住居址出土遺物観察表

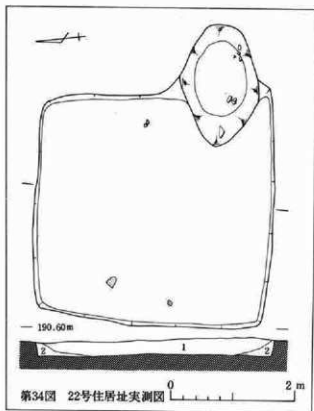
住居及び番	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
21H-1	浅一須恵器	5.1 14.6 —	カマド内 カマド北	胴部内外面に明確なロクロ目残る。 底部周辺高台貼付痕あり。	①灰色②還元、焼締でない③劣④白色粒子含む。
21H-2	浅一須恵器	3.2 13.5 6.9	カマド内 西側壁面	器高に比し、底径の大きな坯。 21H-1に比しロクロ目弱い。	①灰色②還元、弱い焼締③劣④白色粒子含む。
21H-3	甕一土師器	— 18.8 —	カマド内	「コ」の字状口縁の壁。口縁部が直立し、口唇部下で短く外反する。	①赤褐色②酸化③口縁～胴部劣④密
21H-4	甕一土師器	— 21.6 —	カマド内	住居内で最も「コ」の字状を強く表現している。口唇部外側に沈線。	①赤褐色②酸化③口縁～胴部劣④密
21H-5	甕一土師器	— 18.8 —	カマド内	「コ」の字状口縁の壁。口唇部外側に沈線。口縁と胴部の境明確。	①褐色②酸化③口縁部～胴上部劣④密
21H-6	甕一土師器	— 21.6 —	カマド内	「コ」の字状口縁の壁。口唇部内側直立気味に立ち上がる。	①赤褐色②酸化③口縁部～胴部劣④密

22号住居址

位置及び 23・24号住居址西側に近接概略して位置し、耕114-2号、93-15・16、94-15・16グリットに属する。遺存状態は比較的良好である。貯蔵穴、柱穴、周溝等は検出出来ない。南北にやや長い形態を示す長方形の住居である。

規模 東西3.65m、南北3.8m、壁高は12cmを計る。

遺物 住居覆土から、須恵器の坏が3個体、羽釜胴下部より底部の破片、灰軸陶器碗等破片4片出土。新しい時期の遺物を混入している。



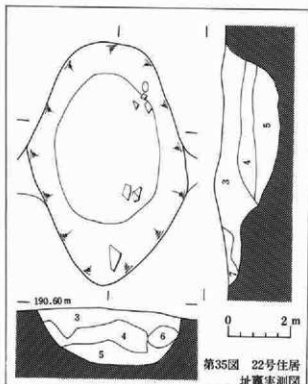
第34図 22号住居址実測図

22号住居址竈

位置及び 住居東側南端の壁を切り込概略して位置し、張り出し部分と遺構内の燃焼部ともしっかり遺存している。

規模 掘り方で煙道方向1.95m、両袖方向1.28m、深さ46cm。

遺物 土師器碗、灰軸陶器碗破片。「コ」の字状口縁甕等出土。

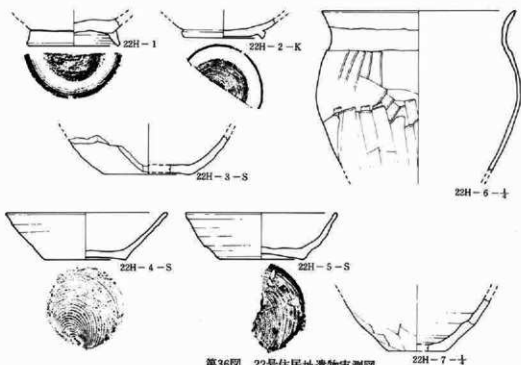


第35図 22号住居址竈実測図

土層説明

- 1 暗褐色土層 5-10mmの軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土層 黒色土、ローム小粒子を含む。
- 3 焼土層 多量の焼土と細かい軽石。
- 4 黒褐色土層 焼土、灰を少量含む。
- 5 暗褐色土層 焼土と2mm内外の軽石を含む。
- 6 焼土層に礫が混じる。
- 7 暗褐色土層 5-10mmの軽石を含み固い。

第4章 検出された遺構と遺物



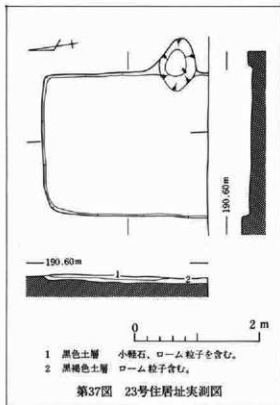
第36図 22号住居址遺物実測図

22号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法(m) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
22H-1	浅-土師質	— — 7.4	カマド内	高台部内側回転ナデ、丁寧な作りの高台である。内側底部中央凸状になる。	①褐色②酸化、堅緻③高台部④⑤密
22H-2	皿-灰物	— — 6.7	カマド内	低い高台から見て皿と思われる。高台部内側右回転ロクロ糸切痕が残る。	①素地灰白色②堅緻③高台部④⑤密
22H-3	杯-須恵器	— — 7	フク土	底部右回転ロクロ糸切痕、軟質でロクロ目はほとんど認められず。	①灰白色②還元、軟質③④⑤密
22H-4	杯-須恵器	3.5 13 6.6	フク土	底部右回転ロクロ糸切痕、切離後未調整。底部より直線的に口唇部に至る。	①灰色②還元、焼締③④⑤白色粒子含む。
22H-5	杯-須恵器	3.7 12.2 6.9	フク土	底径が広く、底部中央が凹状になっている。底部右回転糸切痕。	①灰色②還元、焼締③④⑤密
22H-6	浅-土師質	— 20.8 —	カマド内	「コ」の字状口縁の発。口唇部外側沈線が走る。	①赤褐色②酸化③口唇部-胴中央部にかけて④⑤密
22H-7	羽蓋	— — 6.2	フク土	器壁が厚い。右下方の隅が認められ、羽蓋と思われる。	①赤褐色②酸化③胴下半部と底部の一部④⑤密

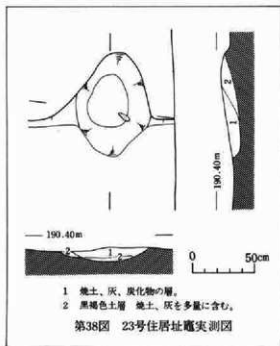
23号住居址

- 位置及び概略** 22号住居址東側、北側は24号住居址と接して位置する。併114-2号、94-15・16、95-15の4グリットに属する。南側は発掘区域外にあたり、確認が出来ない。床面は、地表面から20~30cmのため擾乱が著しく不明確である。
- 規模** 東西2.32m、南北は南側未完掘のために不明。現状で2.68m、壁高は8cm。
- 遺物** 覆土中から灰白色の焼結りのない須恵器坯底部・底の2個体、鍋型の口縁~底部までの破片、灰釉陶器破片等出土。

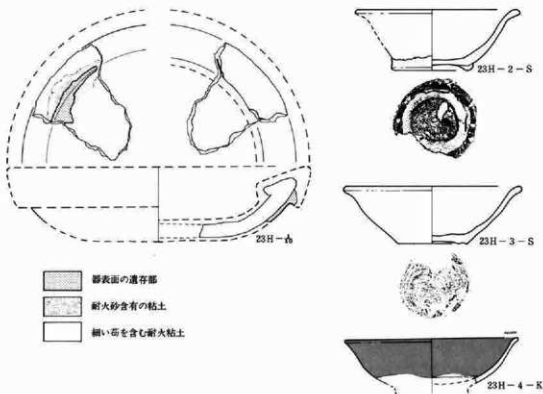


23号住居址竈

- 位置及び概略** 住居東壁南寄りに壁を切り込んて構築されている。竈内からは袖石として利用されたとと思われる石を1個体発掘した。張り出し部の煙道から、焼土・灰・炭化物の層が確認出来た。燃焼部は黒褐色土層で、多量の焼土と灰を混入している。
- 規模** 掘り方で煙道方向82cm、両袖方向58cm、深さ8cmを計る。
- 遺物** 全く出土していない。



第4章 検出された遺構と遺物



第39図 23号住居址遺物実測図

23号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②胎成③残存④胎土⑤備考
23H-1	鉢型	現状 4.7 22 — 推定 5.9 24 —	フク土	器形は、僅かな残存部から推定すると浅鉢形と思われる。口辺部の上面は平らで内斜し、折り返し口縁を呈す。底部は平底。断面の中央部分の色調は、黒色を帯びる。	①内面褐色、外面灰褐色②数度の胎成の為不明確③④二種類の粘土使用。硝を含む耐火粘土と、1mm程の砂を含む耐火粘土である。
23H-2	丸一須恵器	4.9 13.2 6.8	フク土	右回転糸切痕。高台部は粗雑なつくり。体部は底部から直線的に大きく広がりが口辺部で外反する。	①内外面ともに灰白色②還元、軟質③底部及び高台部成形、体部④2-4mmの長石粒多く含む。
23H-3	丸一須恵器	4.8 14.2 5.8	フク土	右回転糸切痕。底部は平底で、体部は23H-2に近似している。両者ともに底部から体部に炭素吸着が認められる。	①内外面ともに灰白色②還元、軟質③底部④、体部⑤⑥2-4mmの砂粒を含む。
23H-4	丸一灰胎	— 14.2 —	フク土	高台付陶と思われるが、底部分、欠損の為不明。丸みを持って立ち上がる体部からやや外反する口辺部を呈す。	①素地灰白色、釉漬緑色②堅緻③口辺-体部④胎全体が風化の為白色を帯びている。

24号住居址

位置及び 23号住居址北側、耕114-2号、

概略 94・95-15グリットに属す。
北側は発掘区域外にあたる。
遺存状態は極めて悪い。東部分に焼土が検出されたために辛うじて住居址の存在が確認できた。精査を続けて、遺構の東側半分が竈周辺から確認されたが、西側半分は確認出来なかった。

規模 東西は西側に著しい攪乱があるために不明。現存で2.45m。南北は北側未完掘のため不明。現状で1.53mを計る。壁高は不明。

遺物 住居覆土がほとんど残っていないためか、全く出土していない。

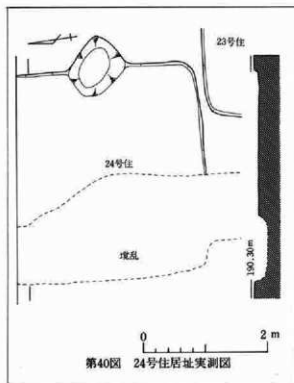
24号住居址竈

位置及び 住居東側中央よりわずかに南寄り

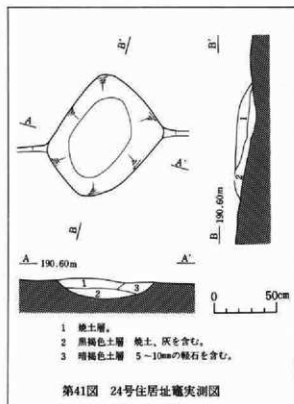
概略 略りに壁を切り込んで構築されたと思われる。形態は不定形である。竈内には焼土層や、焼土・灰・炭を含む土層、軽石を含む土層が堆積していた。

規模 掘り方で経道方向98cm、両袖方向90cm、深さは12cmを呈する。

遺物 全く出土していない。

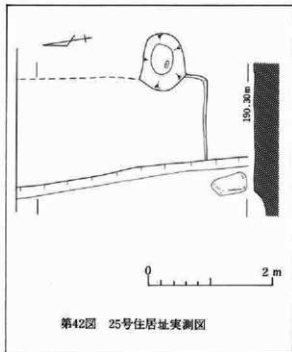


第40図 24号住居址実測図

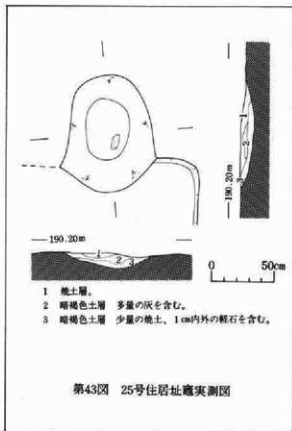


- 1 焼土層。
- 2 黒褐色土層 焼土、灰を含む。
- 3 暗褐色土層 5-10mmの軽石を含む。

第41図 24号住居址竈実測図



第42図 25号住居址実測図



第43図 25号住居址竈実測図

25号住居址

位置及び概略 23号住居址東側、耕114-2号に位置し、94・95-15グリットに属する。住居址の西側半分程を南北に走る5号溝に切られている。24号住居址同様に遺存が極めて悪い住居である。遺構としての確認は、竈部の焼土に依ってなされた。精査を行なったのにもかかわらず、竈の範囲と南壁の確認だけであった。

規模 東西は東壁不明確、西壁は溝に切られて不明。北側は未発掘、南壁一部分の確認である。従って東西、南北ともに計ることが出来ない。

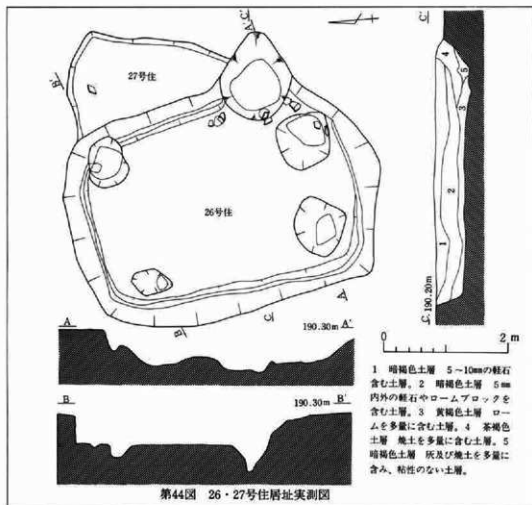
遺物 全く出土していない。

25号住居址竈

位置及び概略 住居東壁南寄りに壁を切り込んで構築されていたと思われる。遺存が非常に悪いため、少量の焼土が検出されて辛うじて確認することが出来た。

規模 掘り方で煙道方向93cm、両袖方向は73cm、深さは5cmを計る。

遺物 全く出土していない。



26号住居址

位置 25号住居址に近接した東側、28号住居址西側にあたり、耕114-2号、97-15-

概略 16、98-15の3つのグリットに属する。27号住居址と重複している。平面及び断面における切合関係の追求で、27号住居址を26号住居址が切り込んで構築されているとの判断をした。しかし遺物から見ると誤った可能性が高い。ローム層まで掘った唯一の遺構である。

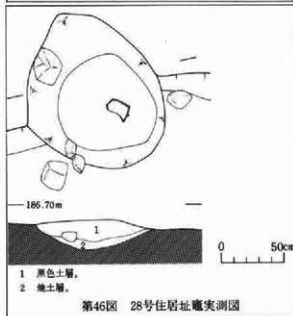
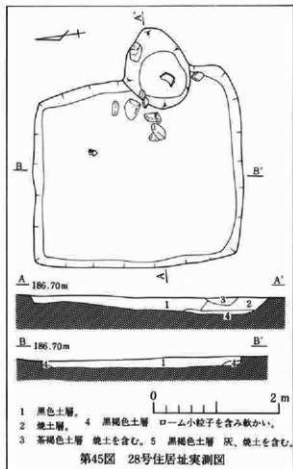
規模 東西3.54m、南北4.86m、壁高43cm。

遺物 竈内より口唇部が内彎する丸底の环4個、他破片多数、小型甕。覆土中より土師質の碗、須恵器の环等出土。

27号住居址

位置 26号住居址と重複。その新旧は26号住及びより新しいと思われる。竈は26号住と同位置の構築と推定するが不明である

遺物 覆土より土師質土器碗、須恵器碗、26号住居址覆土の土師質土器碗、須恵器碗。环蓋、灰釉陶器碗、小型甕等は27号住居址の遺物と思われる。



28号住居址

位置及び概略 26・27号住居址東側、29号住居址の西側に近接しており、耕114-2号、99・100-15グリットに属する。南北が長い方形を呈す。遺構の残りが悪く、壁や床面の検出が困難であった。竈手前に10~20cm四方前後の石が合計8個不規則に散乱していた。

規模 東西2.94m、南北3.35m、壁高は8cmを計る。

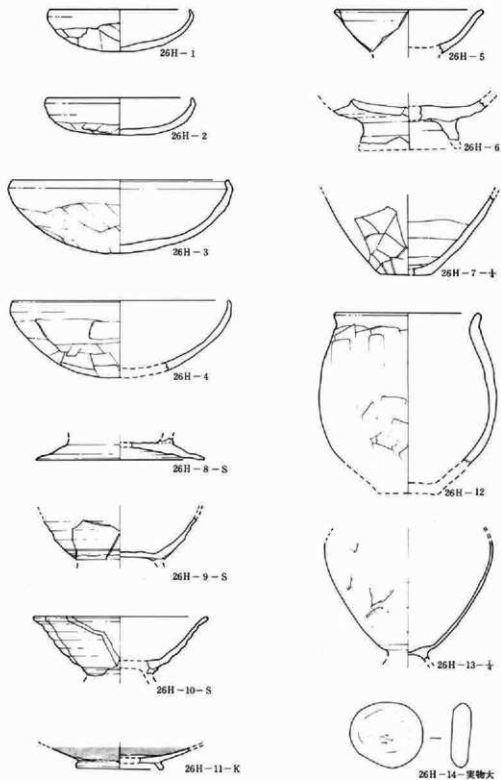
遺物 床面より灰白色の須恵器杯の完形1個体出土。覆土中から須恵器の杯、土師質土器の碗、灰軸陶器の段皿の破片を出土。他に和釘の一部分が伴出している。

28号住居址竈

位置及び概略 住居東壁の中央よりやや南寄り切り込んで構築されている。遺存状態は良い方であった。竈内は灰・焼土を少量含む黒褐色土層が認められた。竈内や手前から石が多く出土した。

規模 掘り方で煙道方向1.32m、両袖方向1.08m、深さ20cm。

遺物 竈内から羽釜口縁部3個体、灰軸陶器碗・長頸壺等出土。

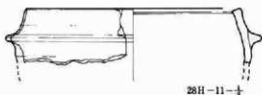
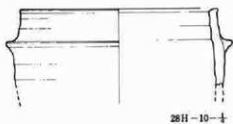
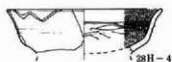
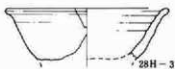
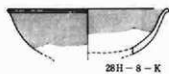
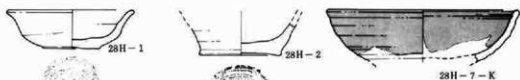
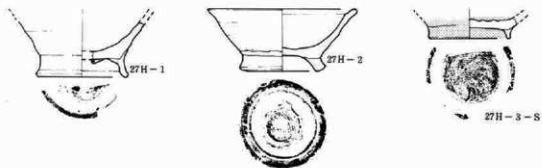


第47圖 26号住居址遺物実測図

第4章 検出された遺構と遺物

26号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地文③残存④粘土⑤備考
26H-1	杯-土師器	3.3 11.2 —	カマド内	口縁部が強く内彎する丸底の杯。口辺部横ナデ、体部ヘラ削り。	①内外面赤褐色②酸化、堅緻③丸形④長石粒を少量含むが密
26H-2	杯-土師器	3 11.6 —	フク土	26H-1に近似した器形だが、底部は扁平な丸底を呈する。口辺部ヨコナデ。	①内外面赤褐色②酸化、堅緻③丸形④長石粒少量含むが密
26H-3	杯-土師器	5.8 16.9 —	カマド内	26H-1・2より大型の器形。丸底、手持ちヘラ削り。口辺部ヨコナデ。	①内外面赤褐色、②酸化、堅緻③丸形④長石粒少量含むが密
26H-4	杯-土師器	6.1 17.7 —	カマド内	26H-3に近似。いずれも口辺部は内彎ぎみでヨコナデ。	①内外面赤褐色②酸化、堅緻③丸形④長石粒少量含むが密
26H-5	碗-土師質	— 12 —	フク土	体部は緩やかに立ち上がり、外反する口辺部に続く。右回転。体部ヨコナデ。	①内外面褐色②酸化、堅緻③丸形④3-4mmの白色軽石含む。
26H-6	碗-土師質	— — —	フク土	高台付碗。厚く大きな高台を呈し、内側底部が平ら。碗の中では特異な器形。	①内外面灰褐色②酸化、堅緻③丸形④赤色粒子を少量含むが密
26H-7	寛-土師器	— — 5.6	フク土	胴部中央一下半部に最大径。小さな平底から直線的に急な立ち上がり。	①内外面褐色②酸化、堅緻③胴下半部-底部④3-5mmの軽石含む
26H-8	蓋-須恵器	— 13.6 —	フク土	つまみ内側、回転糸切り。	①内外面青灰色②還元、地締③丸形④密
26H-9	碗-須恵器	— — —	フク土	高台付碗。高台部欠損し、接合部分に回転糸切り残る。口辺-体部ヨコナデ。	①内外面灰白色②還元、軟質③丸形④密
26H-10	碗-須恵器	— 14 —	フク土	高台付碗。短い高台部。ロクロ右回転。口辺部は外反する。	①内外面灰白色②還元、軟質③丸形④密
26H-11	皿-灰釉	— — 7	フク土	高台付皿。高台部内側は糸切り状をナデ削し。釉、浸けて透明。	①素地灰白色、釉透明②堅緻③底部及び高台-体部④内面重焼痕
26H-12	小形甕	— 11.8 —	フク土	口縁部短かく外反。口縁部ヨコナデ。胴部縦方向ヘラ削り。器面粗い。	①黒褐色②酸化③丸形④2-4mmの白色粒子含む。
26H-13	台付甕 土師器	— — —	フク土	器厚の薄い台付甕。胴部縦方向のヘラ削り。	①内外面ともに褐色②酸化、堅緻③丸形④密
26H-14	玉石	1.9×1.6×0.5	フク土	楕円形を呈しているが、厚さは一定で全面研磨されている。	①黒色



第48圖 27・28号住居址遺物実測図

第4章 検出された遺構と遺物

27・28号住居址出土遺物観察表

住居及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
27H-1	陶-土師質	— — 7.4	フク土	右回転、やや高い高台付焼。高台部は丁寧なナデを行っている。	①外面灰褐色、断面内側灰黒色②弱酸化③④酸化鉄含む。
27H-2	陶-土師質	4.9 12 6.9	27Hフク土 26Hフク土	高台付焼。丁寧な高台を接合している。高台内側に右回転糸切り痕。	①灰褐色②弱酸化③④水産し粘土⑤色調は灰白色に近い。
27H-3	陶-須恵器 イブシ	— — 6.6	フク土	高台付焼。高台部欠損。高台内側に右回転糸切り。内面底部にロクロ痕残る。	①黒色、断面灰褐色②酸化③体部下半-底部④3~4mmの砂粒
28H-1	灰-土師質	3 10.1 4.5	床 面	右回転糸切り痕。重ね焼痕残る。口辺部は外反する。	①褐色②酸化、堅緻③完形④酸化鉄含む密
28H-2	灰-土師質	— — 6.5	フク土	燃りの荒い赤による右回転糸切り痕。体部は大きめの底部から直線的に広がる。	①灰褐色②弱酸化③体下部-底部④酸化鉄含む。
28H-3	陶-土師質	— 13.1 —	フク土	体部下半は丸みを持ち、口辺で外反する。内面の上半部にロクロ痕あり。	①褐色②酸化③口辺-体下部④3~5mmの砂粒含む。
28H-4	陶-土師質 内黒	— 12.4 —	フク土	ロクロ右回転。内面は平滑にヘラ研磨の後、炭素吸着による黒色処理。	①内面黒色、断-外面褐色②酸化③口辺-体下部④精選良好
28H-5	陶-土師質 内黒	— 14 —	フク土	ロクロ右回転。28H-4に類似し、やや還元ざみである。	①内面黒色、断-外面灰褐色②弱酸化③口辺-体下部④良好
28H-6	陶-灰物	— — 8	フク土	高台付焼。高台部内側に糸切り痕残る。内面底部に重ね焼き痕あり。	①紫地灰白色、釉洗練②良③体下半-底部の一部、高台部④密
28H-7	陶-灰物	— 13 —	フク土	丸みを持った体部から口辺で強く外反する。施物は濃掛け。	①紫地灰白色、釉は緑を帯びているが透明②良③体下部-口辺部④
28H-8	陶-灰物	— 15.3 —	カマド内	28H-7に類似。釉は厚く掛けられているが風化し、白色化している。	①紫地灰白色、釉内面白、外面は透明
28H-9	羽 蓋	— 18 —	カマド内	口縁部は鈎から内彎ぎみに立ち上る。口唇部は平らで、内傾している。	①褐色②酸化、堅緻③口縁-胴上部④少量の砂粒含む。
28H-10	羽 蓋	— 21 —	カマド内	口縁部は胴部から直立ぎみに立ち上る。口唇部はほぼ平らで厚く内傾。	①褐色②酸化、堅緻③口縁-胴上部④5mm位の砂及び砂粒含む。
28H-11	羽 蓋	— 23 —	フク土	口縁部は鈎から内彎ぎみに立ち上る。口唇部、刷毛目整形。丸みを持つ胴部。	①灰褐色②弱酸化、堅緻③口縁部-胴上部④多量の雲母を含む。

29号住居址

位置及び 28号住居址東側に
概略 近接した耕114-2
号に位置し、100
-14・15グリットに
属する。耕作面から
20cm前後で住居址床
面となるため、遺存
状態が非常に悪く、
住居の検出は困難で
あった。東西が長い
方形である。竈は東
壁の南寄りに構築さ
れている。

規模 東西2.20m、南北は
3.41m、壁高5~6
cm。

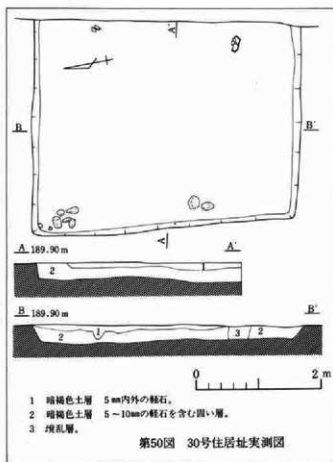
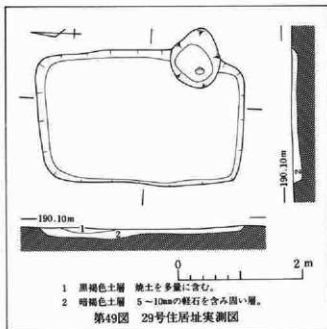
遺物 住居址覆土から羽釜
口縁部、土師質土器
碗、灰軸陶器3片、須
恵器环破片出土。

30号住居址

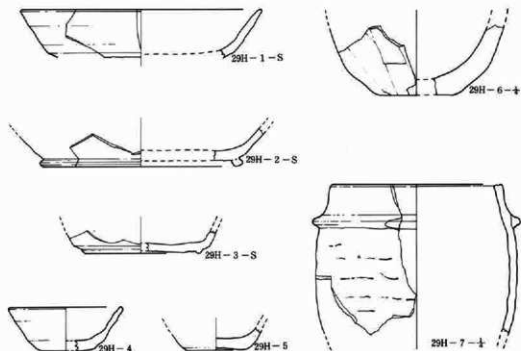
位置及び 29号住居址東北方向
概略 耕114-2号、100-
14・15、101-14・15
の4グリットに属す
る。住居東側は発掘
区域外。竈は不明。

規模 東西は現状3.4m、南
北4.3m、壁高20~30
cm。

遺物 床面から羽釜数個
体。覆土より須恵器
环、灰軸10片等出土。



第4章 検出された遺構と遺物

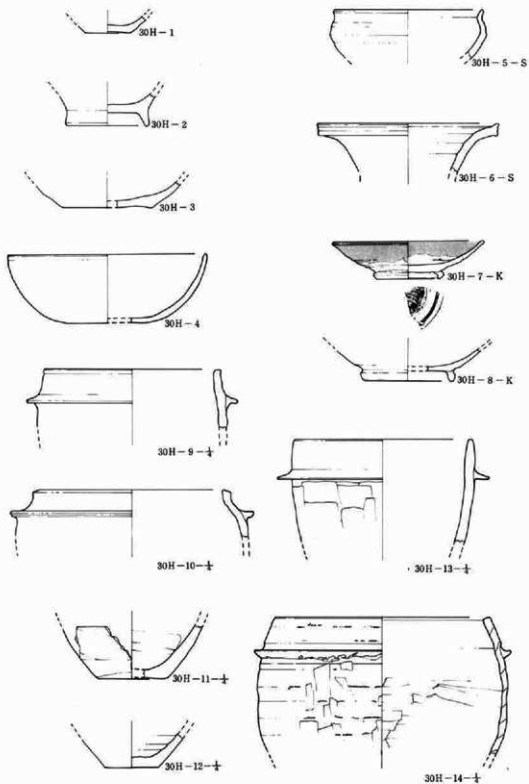


第51図 29号住居址遺物実測図

29号住居址出土遺物観察表

住居及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
29H-1	環一須恵器	— (19.4) —	フク土	底部周囲、へう削り。	①青灰色②還元③片④堅硬⑤堅く焼結されている。
29H-2	環一須恵器	— — (16.4)	フク土	高台部接合の後、高台を丁寧に削り出している。	①灰白色②還元③体部下半～底面及び高台部④良⑤やや軟質
29H-3	環一須恵器	— — 9.4	フク土	右回転削り出し高台。低い高台が削り出されている。	①青灰色②還元③底部片④密
29H-4	環一土師質	3.4 9.15 4	フク土	右回転。底径の小さい杯。	①褐色②酸化③片④1mm内外の砂粒含む。
29H-5	環一土師質	— — 4.8	フク土	右回転。底部に未切り残る。	①褐色②酸化③底部のみ完形④2～5mm位の砂利を含む。
29H-6	壺	— — 6	フク土	土蓋の底部付近と思われる。胴部下半は縦方向のへう削り。	①褐色②酸化③胴下部～底部片④酸化鉄含む。
29H-7	羽蓋	— 18.2 —	カマド フク土	口縁部は筒から内唇ぎみに立ち上り、筒のなで丁寧に、胴部に輪積み痕残る。	①褐色②酸化③口縁部～胴部中央④5mm位の砂利含む。

第1節 住居址

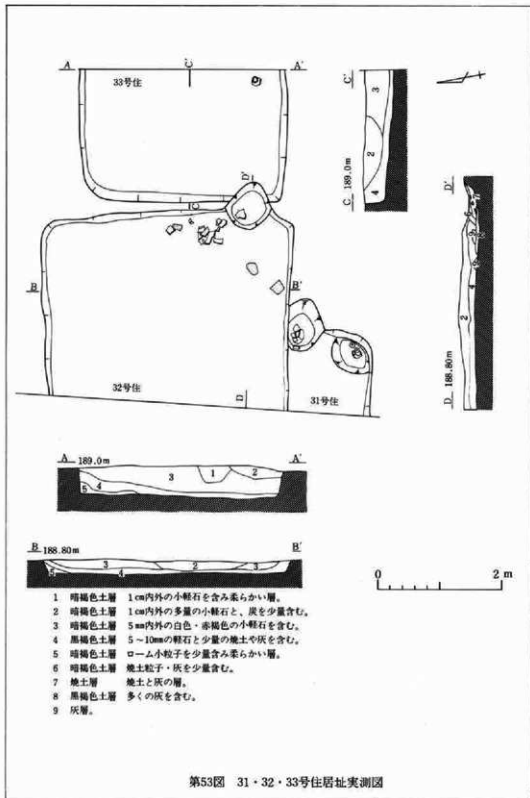


第52図 30号住居址遺物実測図

第4章 検出された遺構と遺物

30号住居址出土遺物観察表

住居及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
30H-1	坏-土師質	— — 3.8	フク土	底部右回転糸切痕、底径の小さな灯明皿に似た器形と思われる。	①褐色②酸化③底部のみ④密、酸化鉄含む。
30H-2	甕-土師質	— — 6.4	フク土	高台部内側右回転糸切痕残る。高台をていおいに貼付している。	①褐色②酸化③底部④酸化鉄を多く含む。
30H-3	甕-土師質	— — (7.1)	フク土	底部右回転糸切痕、内側横ナデ、体部が大きく開く甕である。	①褐色②酸化③体部下半～底部④砂粒含む。
30H-4	坏	5.5 16.0 —	フク土	底部ヘラ削り、体部ナデ、内側横ナデ	①褐色②酸化③口辺～底部④2～3mmほどの砂粒を含む。
30H-5	小型短頸壺 須恵器	— 12.0 —	フク土	つまみ上げによる小さな頸部が直立気味に付く。内外面ナデ。	①灰白色②還元③口縁部～体部④密⑤内面に降灰による自然釉
30H-6	壺-須恵器	— 19.4 —	フク土	口縁部内外面とも横ナデ、口唇部つまみ出しにより整形されている。	①灰白色②還元③口縁部④2～3mmほどの砂粒を含む。
30H-7	皿-灰物	3.0 12.0 5.6	フク土	回転糸切痕高台を付ける、高台部内側に糸切痕残る。高台断面三ヶ月形を呈す。	①紫地灰白色、釉透明②良好③④密
30H-8	甕-灰物	— — 7.4	フク土	付高台による高い高台を貼付、高台の形からみて甕と思われる。	①灰白色②良好③高台1部残存④密
30H-9	羽蓋	— 19.0 —	フク土	細く長い罫が付着、口縁部内外面とも横ナデ。	①褐色②酸化③口縁④密
30H-10	羽蓋	— 21.2 —	フク土	罫から上の口縁部が強く内彎し、口唇部で直立ぎみに立ち上る。	①褐色②酸化③口縁④密
30H-11	羽蓋	— — 7.4	カマド内 フク土	外面ヘラ削りによる整形、内面ヘラによるナデ。	①褐色②酸化③底部～胴下半部にかけて1部残存④酸化鉄含む。
30H-12	甕	— — 5.8	フク土	体部内外面ともていおいなナデ。	①褐色②酸化③底部～胴下半部1部残存④酸化鉄含む。
30H-13	羽蓋	— 19.2 —	フク土	細く長い罫が付着、胴部から口縁部にかけて外反ぎみに立ち上る。	①褐色②酸化③口縁部④酸化鉄含む粒子が細かい。
30H-14	羽蓋	— 23.0 —	床直 フク土	胴部に輪轆痕残る、罫は細いひもをナデ付けたようにぎつに粘付している。	①灰白色②還元③口縁～胴部④密



第53図 31・32・33号住居址実測図

第4章 検出された遺構と遺物

31号住居址

- 位置及び概略** 31・32・33号住居址は3軒が重複した住居である。耕114-2号に位置し100-13グリットに属する。33号住居址の覆土を切り込んで32号住居址竈が構築されている。また31号住居址覆土を切り込んで32号住居址が構築されている。31号住居址と33号住居址について、遺物によって比較すると31号住居址に古い要素が認められる。3軒の重複住居址についての新旧関係は、31号住居址→33号住居址→32号住居址という順で新しくなると考えられる。住居西側部分は発掘区域外であり、竈の北側一部分から北も不明である。竈は東壁南寄りを切り込んで構築されており、貯蔵穴は東南端に認められた。遺構内に貯蔵穴が検出された例は当遺跡内では数少なく、7号住居址・21号住居址とこの31号住居址のみであった。貯蔵穴からは、21号住居址同様に多数の遺物が出土している。
- 規模** 東西は西側未発掘のため不明、現状で1.34m、南北は現状で1.3m、壁高75cm。
- 遺物** 覆土中から褐色須恵器壺・羽釜・灰釉陶器・土師質土器碗の破片等。貯蔵穴内から高台部の高い土師質碗・軟質須恵器環や碗等が重なって出土、他に完形の須恵器壺出土。

32号住居址

- 位置及び概略** 31・33号住居址を切り込んで構築されており、3軒の重複住居の中で一番新しい。住居の西側部分は、発掘調査区域外で西壁の確認は出来ないが、遺存状態は3軒の中で最も良い。竈は東壁南寄りに33号住居址を切り込んで構築されている。南壁は、31号住居址の竈北側を切り込んでいる。
- 規模** 東西は西壁が未発掘のために検出されていない。現状で3.05m、南北4.07m、壁高は23cmである。
- 遺物** 竈内より土師質土器碗・土釜、竈手前の床面から頸部に直径1cm位の穿孔のある土釜・羽釜、覆土中より羽釜胴部・土師質土器の碗・内面にかえりのある須恵器の蓋・環破片を出土。他竈手前に3個の石が残っていた。

33号住居址

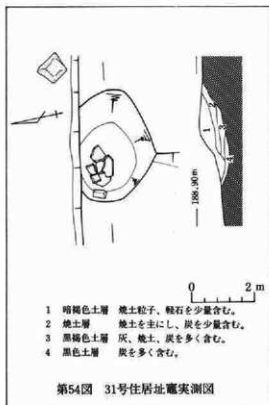
- 位置及び概略** 住居址の西壁南寄りの一部が、32号住居址に切られている。また住居址の東側は発掘調査区域外のため東壁の確認が出来ない。竈は東壁に構築されていたと推定されるが詳細は不明である。
- 規模** 東西は西壁が確認出来ず現状で2.11m、南北3.37m、壁高40cm。
- 遺物** 覆土から土師質土器碗。焼成須恵器碗、軟質須恵器壺・壺、灰釉陶器6片、土釜、羽釜、内黒碗等。

31号住居址竈

位置及び 竈北端の一部を含めて、住居北概略 側大部分を32号住に切られている。西側大部分は発掘区域外にある、そのため発掘できた範囲は狭い。焼燃部の床面は掘下げられていて、基部は炭の多い黒色土層が認められている。さらに灰・焼土の黒褐色土層の上に焼土層が堆積している。上層は焼土・軽石の暗褐色土層である。

規模 掘り方で煙道方向76cm、両袖方向57cm、深さ15cm。

遺物 竈内より羽釜口縁部・須恵器で二次焼成がなされたと思われる甕1個体出土。



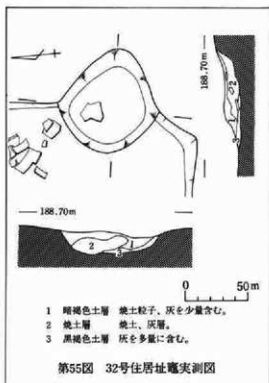
第54図 31号住居址竈実測図

32号住居址竈

位置及び 住居址東壁南寄りに、33号住覆概略 土を切って構築されている。他の竈と比較して、遺存状態が良好であった。煙道部の立上りは浅めでやや急である。焼燃部基底は灰の多い黒褐色土層、竈内は焼土層の上に焼土粒子と灰の暗褐色土層を堆積。

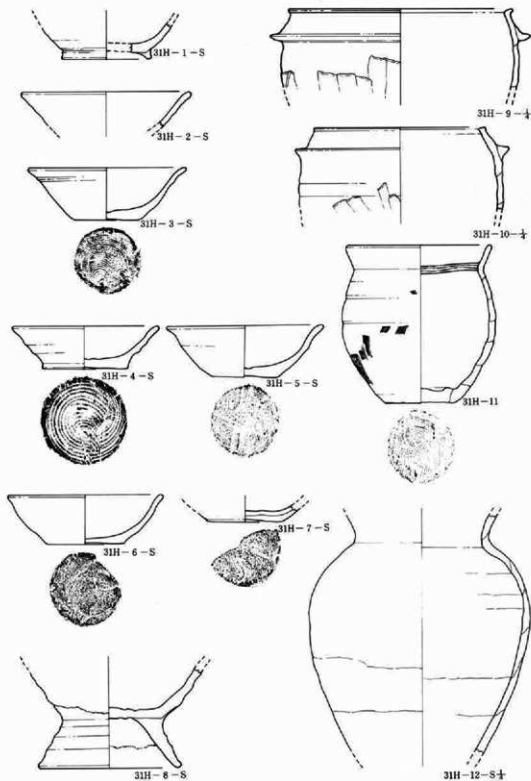
規模 掘り方で煙道方向82cm、両袖方向80cm、深さ15cm。

遺物 竈内から羽釜・土釜の破片、土師質土器片出土。羽釜が少なく、土釜を多く出土する住居である。



第55図 32号住居址竈実測図

第4章 検出された遺構と遺物

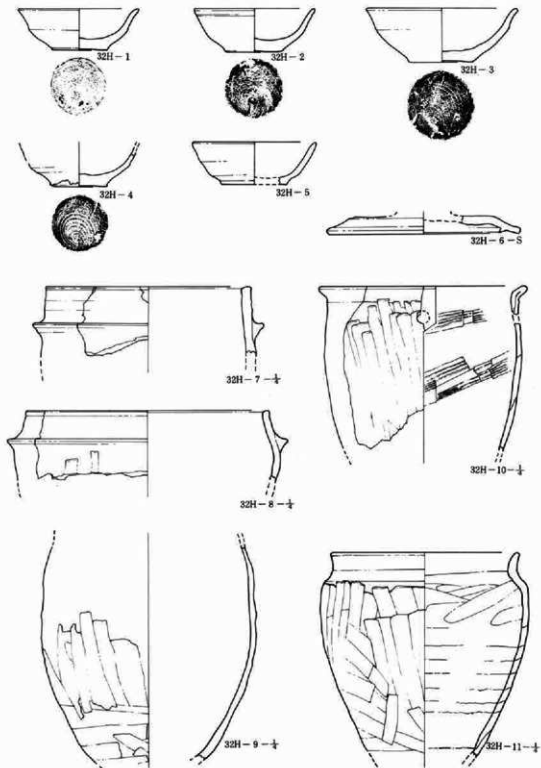


第56図 31号住居址遺物実測図

31号住居址出土遺物観察表

住居及び 番 号	器 形	寸 法 (cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
31H-1	丸一須恵器	— — (7.2)	フク土	高台部周辺のみの残存であるが、須恵器高台付焼と思われる。高台の幅は一定していない。	①灰白色②還元③高台部一底部下半④2～3mmの砂粒含む。
31H-2	杯一須恵器	— (13.6) —	貯蔵穴	同住居内の3、5に似た器形と思われる。口縁部が大きく外反している。	①灰白色②還元③口縁部④密
31H-3	杯一須恵器	4.1 12.7 5.0	貯蔵穴	底部右回転糸切痕、口径に比して、底径の小さな杯である。口縁部外反。	①灰白色②還元③ほぼ定形④1～2mmの砂粒含む。
31H-4	杯一須恵器	3.4 11.5 6.7	貯蔵穴	目の荒い糸による右回転糸切痕。底径が大きく、底部と体部との境に段を持つ。	①灰白色②還元③④1～2mmの砂粒含む。
31H-5	杯一須恵器	4.0 12.6 5.2	貯蔵穴	同住居内3にはほぼ同じ器形、成形である。底径のみやや大きい。	①灰白色②還元③④1～2mmの砂粒含む。
31H-6	杯一須恵器	3.9 (12.2) 6.0	貯蔵穴	底部右回転糸切痕、口縁部はほとんど外反しない。底部が薄い。	①褐色②酸化③④1～2mmの砂粒含む。
31H-7	杯一須恵器	— — 6.0	カマド内 フク土	底部右回転糸切痕。表面は全体に黒色を帯びており、断面はやや褐色。	①灰白色②還元③底部のみ④1～2mmの砂粒含む。
31H-8	丸一須恵器	— — (11.4)	カマド内	高い高台を持つ焼と思われる。他に出土例のない特異な形である。高台部は別にロクロで作り粘付している。	①灰白色②還元③高台部一底部下半までは定形。杯口縁部は全く残存していない④1～2mmの砂粒含む。
31H-9	羽 蓋	— (24.2) —	カマド内	口縁部が内湾しつつ、口唇部に至る。器内の薄い羽蓋、大きな罫がつく。	①灰褐色②酸化③口縁部のみ④1～2mmの砂粒含む。
31H-10	羽 蓋	— 18.5 —	カマド内	口縁部が内湾している。断面三角形の罫が付着。	①灰白色②還元③口縁部④1～2mmの砂粒含む。
31H-11	小型甕	12.5 11.3 5.5	フク土	底部右回転糸切痕。底部に板目が残る。輪轆み痕らしき痕跡残る。器壁内外面全面に横ナデ痕。	①褐色②酸化③④1～2mmの砂粒含む。
31H-12	壺一須恵器	最大径 23.6cm	カマド内 フク土	外側表面はほとんど剥離、内側表面は一部を残して剥離。内側表面は横方向の傾り痕。外側表面にかすかに横ナデ痕が認められる。	①褐色②酸化③胴一頸部④1～2mmの砂粒含む⑤一部に灰白色を残すが、ほぼ全面に褐色を呈する。2次的に火を受けて、須恵器壺が変色。

第4章 検出された遺構と遺物

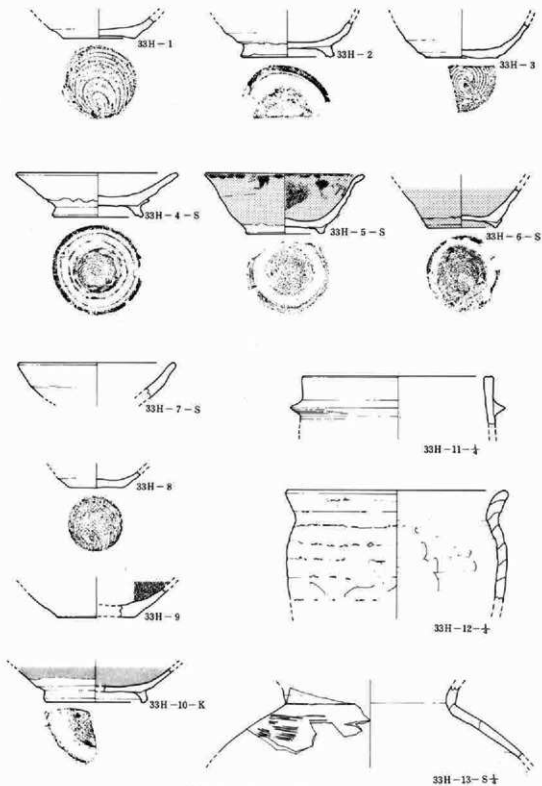


第57図 32号住居址遺物実測図

32号住居址出土遺物観察表

住居及び番	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②酸化③残存④粘土⑤備考
32H-1	坏—土師質	3.2 9.6 4.6	フク土	底部右回転糸切痕、口径、器高、底径ともに小さな坏である。	①灰褐色②酸化③定形④密
32H-2	坏—土師質	3.4 9.6 4.5	フク土	底部右回転糸切痕、ほとんど1に同じ。	①灰褐色②酸化③定④密
32H-3	坏—土師質	4.3 (12) 5.0	フク土	底部右回転糸切痕、口径に比して、器高、底径の小さな坏である。	①灰褐色②酸化③定④密
32H-4	坏—土師質	— — 4.6	フク土	底部右回転糸切痕、住居内1、2によく似た坏である。	①灰褐色②酸化③定④密
32H-5	坏—土師質	3.4 (10) 5.2	カマド内	住居内1、2によく似た器形と思われる。少しゆがんでいる。	①灰褐色②酸化③定④密
32H-6	坏— 須恵器	— (15.6) —	フク土	内側に明瞭なかえりを持つ須恵器坏である。器高が低い。他からの混入品である。	①青灰色、断面がわずかに赤色を帯びている②還元、焼き締めてある。③ \times ④1-2mmの長石粒を含む。
32H-7	羽蓋	— (22) —	フク土	口縁部が長く、直立する。両は細く断面三角形を呈する。	①褐色②酸化③口縁部のみ \times ④1-3mmの砂粒含む。
32H-8	羽蓋	— 30 —	カマド 周 辺	口縁部が長く、やや内傾している。両は断面三角形を呈している。	①褐色②酸化③口縁部のみ \times ④1-3mmの砂粒含む。
32H-9	羽蓋	— — —	カマド内	羽蓋胴部である。胴中央部に輪積み痕らしき凸凹が帯状に残る。胴下手に縦方向、下端に横方向のへら削り。	①褐色②酸化③胴部のみ \times ④2-4mmの砂粒含む。
32H-10	土蓋	— (25) —	カマド内	胴内では土蓋と呼ばれている器である。口縁部は短く、外反する。口縁部下より底部に向かい縦方向へら削り。口縁部下に、発成後に穿けられた穴がある。内側全面ナデ。	①褐色②酸化③口縁部—胴部 \times ④2-3mmの砂粒含む。
32H-11	土蓋	— (20) —	カマド内	土蓋の一種である。口縁部は内側に大きくせり出して、ゆるやかに外反する。最大径を胴部を持つ特異な形である。他に頸例が少ない。胴部内側に輪積み痕が残る。胴部外側は口縁部横ナデ後へら削り。	①褐色②酸化③ \times ④1-3mmの砂粒含む。

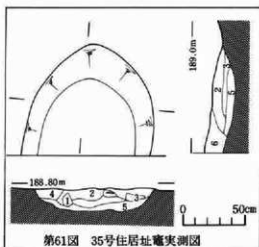
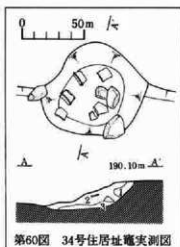
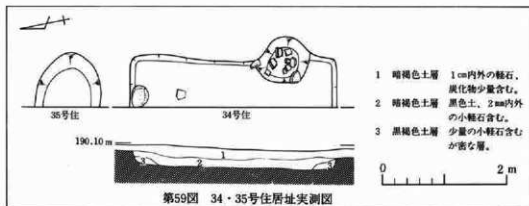
第4章 検出された遺構と遺物



第58図 33号住居址遺物実測図

33号住居址出土遺物観察表

住居及び番 号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
33H-1	坏-土師質	— — 5.6	フク土	回転糸切痕残る。底径の大きい坏である。	①褐色②酸化③体部下半～底部のみ④酸化鉄を含む。
33H-2	甕-土師質	— — 7.5	フク土	付け高台。右回転糸切痕。高台の内側に糸切り痕あり。	①褐色②酸化③体部下半～底部及び高台④2～8mmの砂粒含む。
33H-3	坏-土師質	— — 5.8	フク土	右回転糸切痕。底部の小さな坏。体部内外面横ナデ。	①褐色②酸化③体部下半～底部④密
33H-4	甕-須恵器	3.5 12.8 7.2	フク土	付け高台。右回転糸切痕。高台部接合痕が体部に残る。	①灰褐色②還元③ほぼ完成④器⑤全体が薄い褐色を帯びる。
33H-5	甕-須恵器 イブシ	4.8 12.8 6.4	フク土	付け高台。右回転糸切痕。内面イブシ処理の後灯明として利用。油煙付着。	①イブシ黒色。断面灰白色。高台部灰褐色②還元イブシ③灰④密
33H-6	甕-須恵器 イブシ	— — 5.4	フク土	付け高台。右回転糸切痕。高台部の整形は袖。	①黒色。断面灰黒色②還元イブシ③体部下半～底面及び高台④密
33H-7	坏-須恵器	— 12.6 —	フク土	体部内外面とも横ナデ。	①灰白色②還元③口辺～体部上半④密
33H-8	坏-土師質	— — 4.4	フク土	右回転糸切痕。底部の小さい坏。	①褐色②酸化③体下部～底部のみ④密
33H-9	坏-土師質 内黒	— — 6.4	フク土	内面を平滑に研磨した後、炭素吸着を施す。	①内面黒色処理。外面褐色。断面灰白色②酸化③体下半部～底部④精選良好④密
33H-10	甕-灰釉	— — 8.4	フク土	付け高台。内面に重ね焼痕あり。	①濃地灰白色②還元③体部下半～底面及び高台④良好
33H-11	羽蓋	— 20.4 —	フク土	直立ぎみに立ち、比較的長い口縁部。肩は断面が正三角形を呈し丁寧な整形。	①褐色②酸化③口縁部～胴上部④5～8mmの砂粒含む。
33H-12	土蓋	— 23.8 —	フク土	胴部外面に幅2cmの輪積痕あり。口縁部横ナデ。体部内面へラナデ。外面下半へラ削り。器厚は口縁部が特に厚みを持つ。	①褐色②酸化③口縁部～胴部上半④2～4mmの砂粒を含み酸化鉄が器面に付着。
33H-13	甕-須恵器	— — —	フク土	やや大型の甕。肩部外面に印目あり。内面ナデ。	①灰白色②還元③頸部～肩部④密



34号住居址

位置及び概略 31・32号住居址北側に近接し、
 耕114-2号、100-11・12グリットに属する。住居址の西側近く発掘調査区域外である。発掘部分は少ない。竈は東壁に構築されていた。

規模 未完掘部分の多い遺構である。東西は現状で0.84m、南北は3.34m、壁高は20cm前後。

遺物 覆土中より羽釜、須恵器環、灰釉陶器段皿・碗各1片等出土。

34号住居址竈

位置概略 住居東壁南寄りに遺存している。煙道部は比較的短い。

規模 掘り方で煙道方向73cm、両袖方向72cm、深さ20cm前後

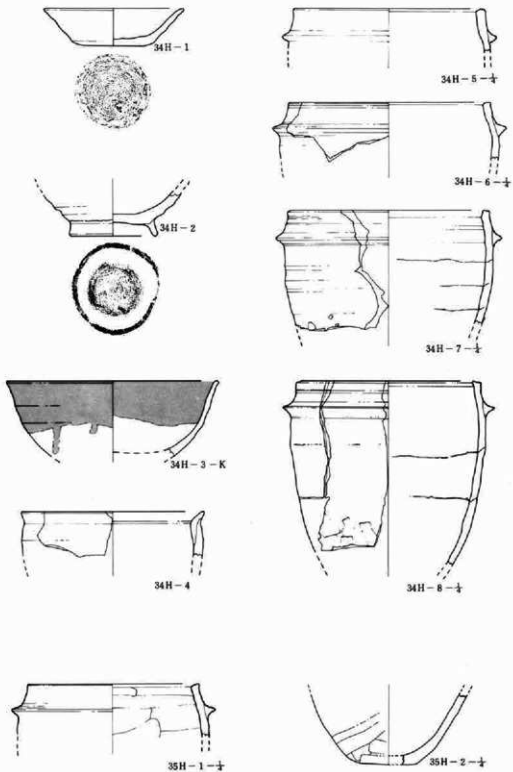
遺物 土師質土器で完形品の環

35号住居址竈

位置概略 34号住居址北側、耕114-2号に位置し、100-11グリットに属する。西側の遺構は全部発掘区域外である。

規模 掘り方で煙道0.9×両袖1.3m

遺物 羽釜の破片出土。

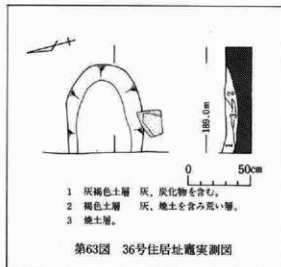


第62图 34・35号住居址遺物実測図

第4章 検出された遺構と遺物

34・35号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
34H-1	杯-土師質	3 11.2 6.6	カマド内	右回転糸切痕。底部から大きく立ち上る体部を持ち、口辺部はわずかに外反する。器高は低い。他の土師質土器とは、胎土・色調が異質である。	①赤褐色②酸化③完形④石英・長石粒や、3-5mmの砂粒含む。
34H-2	甗-土師質	— — 7	カマド内	付高台。右回転糸切痕。高台部接合の後糸切り痕をナデにより消している。体部内外面横ナデ。42H出土の高台付甗に比べ丁寧な整形である。	①灰褐色②弱酸化③体部下半～底面及び高台のみ④精選良好
34H-3	甗-灰釉	— 17 —	カマド内	高台付甗で器高が高いと思われる。影らみを持つ体部から口辺部が外反し、口唇部が丸みを持つ。施釉は横掛け。内面には自然釉も付着。	①素地灰白色、釉は透明な淡緑色②還元③口辺部～体下部④緻密
34H-4	小型甗	—(14.6) —	フク土	小型甗と思われる。器厚は厚めである。頸部から短い口縁部が大きく外反。胴上部内面に輪積痕残る。	①灰褐色②酸化③口縁～体部上半④精選良
34H-5	羽蓋	—(21.6) —	カマド内	口縁部は直立ぎみに立ち上り、胴部は影らみを持つ。甗は正三角形に近く、口縁部側は横ナデ。口縁部が特に厚い。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴上部④5-10mmの砂粒含む。
34H-6	羽蓋	—(20.2) —	カマド内	口縁部は内彎ぎみに立ち上る。甗を接合した後横ナデ整形で、正三角形を呈する。口縁部及び体上部横ナデ。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴上部④5-10mmの砂粒含む。
34H-7	羽蓋	—(21.8) —	カマド内	口縁部はわずかに内彎、口唇部は横ナデ整形を行ない平らである。甗接合の後横ナデ。胴部内面輪積痕残る。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴上半④2-4mmの砂粒含む。
34H-8	羽蓋	—(9.8) —	カマド内	口縁部は直立ぎみに立ち上り、口唇部は平らで内面にわずかに張り出している。甗は指で丁寧な横ナデを施す。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴下部④2-4mmの砂粒含む。
35H-1	羽蓋	— 8.2 —	フク土	口縁部は内傾し、口唇部は内面に傾く。甗の上下は指による丁寧な横ナデ。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴上部④2-4mmの砂粒含む。
35H-2	羽蓋	— — (7.4)	カマド内	羽蓋の胴下半部と思われる。外面はへら削りを施す。	①褐色②酸化③胴部下半④2-5mmの砂粒含む。



36号住居址竈

位置及び 35号住居址北側、耕114-2号、
概 略 100-10グリットに属する。本遺構は住居址部分全体が発掘区域外であり、竈部分が発掘対象だけである。竈についても完掘されておらず、熱焼部は確認出来ない。袖部の南側には、袖石として使用されたと思われる20×20×15cm程の石が1個認められた。

規 模 掘り方で煙道方向70cm、両袖方向59cm、深さ50cmを計る。

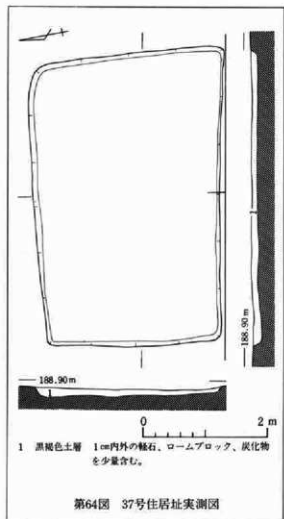
遺 物 竈内から土師質土器・灰、軟質の須恵器環底部、羽蓋と土蓋の口縁部、灰釉陶器碗等出土した。

37号住居址

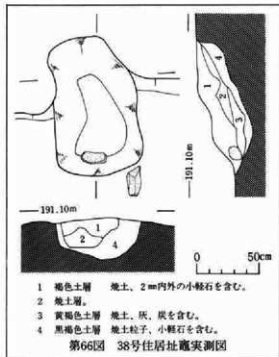
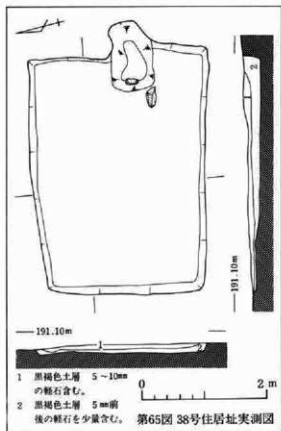
位置及び 36号住居址東北部、耕114-2
概 略 号、100-9・10、101-9・10グリットに属する。住居址は全体の発掘調査を行ったが床面に炭化物を少量含むだけで竈は検出されなかった。北側の1-4号溝、1号石組などの多量の遺物を出した遺構との関連が考えられる。

規 模 掘り方で東西は4.66m、南北は3.15m、深さ15cm。

遺 物 覆土より土師質土器碗6個体、軟質の須恵器蓋、灰釉陶器碗4片・長頸壺1片、甕底部、内黒土器碗等出土



第4章 検出された遺構と遺物



38号住居址

位置及び 調査区中央を東西に走る耕
概 略 116-2号、11・12号溝の東側、
39号住居址の西側に位置す
る。82-34・35、83-34・35
グリットに属する。遺構の東
隣は火葬墓とも思われる2号
集石が接している。東西に長
い住居址で、東壁が西壁より
僅かに広い台形状を呈する。
竈は、東壁の中央からやや南
側寄りを切り込んで構築され
ている。

規 模 東西3.82m、南北2.84m、壁
高6~25cm。

遺 物 床面及び覆土中ともに、遺物
は検出されなかった。

38号住居址竈

位置及び 住居東壁のほぼ中央部に検出
概 略 された。不定形な楕円を呈し
ている。遺構の確認面は低い
が竈は遺存状態が良い方であ
る。遺構図及び写真の通りに
焼土が煙道部方向の立上がり
にそって堆積しているのが認
められた。竈内基底は少量の
粘土を敷いている。袖石とし
て使用されたと思われる石が
両袖付近に検出された。

規 模 掘り方で煙道方向1.11m、両
袖方向0.7m、深さ35cm。

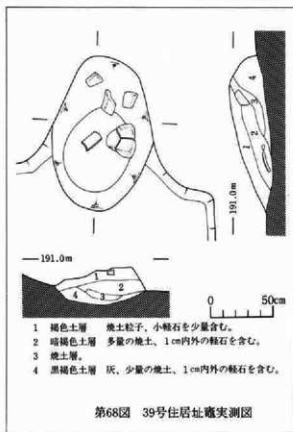
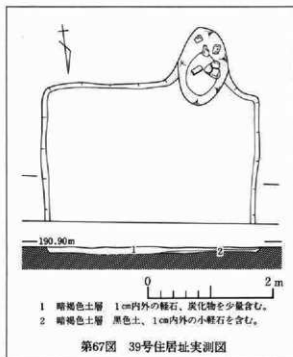
遺 物 全く出土していない。

39号住居址

位置及び 概略 38号住居址東側、耕116-2号に位置し、84・85-34グリットに属する。住居址北側は発掘区域外のため確認が出来ない。竈は、本遺跡中唯一南に向いている。遺構確認面が低いため、遺存状態は悪い。

規模 東西3.52m。南北は住居北側が未発掘のため不明。現状で2.19m。壁高12cm。

遺物 覆土中から土釜、羽釜の口縁部、土師質土器底の底部・完形品の坏・碗の高台、平瓦破片等出土。



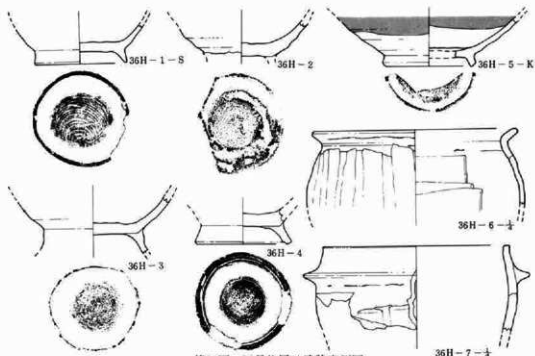
39号住居址竈

位置及び 概略 住居南壁、中央から西寄り壁に壁を切り込んで構築されている。住居の残りが悪く、検出は困難を伴ったが、竈の残りは比較的良好であった。煙道部は大きく立ち上がり、焼土が上層に、灰混りの黒色土がその下に薄く認められた。燃焼部には多量の焼土が残っていた。

規模 煙道方向1.22m、両袖方向0.79m、深さ30cm。

遺物 全く出土していない。

第4章 検出された遺構と遺物

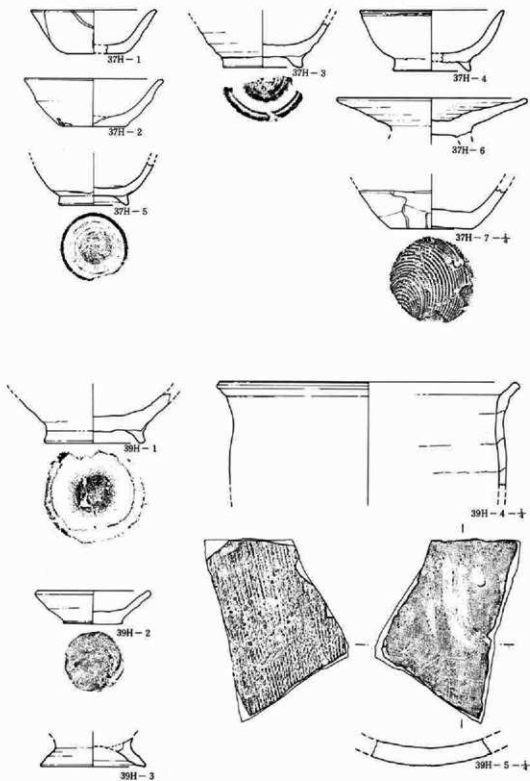


第69図 36号住居址遺物実測図

36号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法(mm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地文③残存④胎土⑤備考
36H-1	焼-須恵器	— — 7.4	カマド内	付高台。回転糸切痕。高台部内側に糸切り痕残る。混入品と思われる。	①灰白色②還元③体下半~底面及び高台のみ④良⑤胎土分析に使用
36H-2	焼-土師質	— — —	カマド内	高台付碗と思われるが高台部欠損。高台部内側回転を伴うナデ。	①褐色②酸化③体下半部~底面のみ④良
36H-3	焼-土師質	— — (7)	カマド内	付高台。回転糸切痕。高台部内側は回転を伴うナデ。長い高台の大型の碗。	①灰褐色②酸化③体部下半~底部及び高台のみ(裾部欠損)④良⑤胎土分析に使用
36H-4	焼-土師質	— — 7.6	カマド内	付高台。回転糸切痕。高台部裡合は丁寧なナデ。内側は回転を伴うナデ。	①褐色②酸化③底面及び高台のみ④密
36H-5	焼-灰物	— — (7.6)	カマド内	口径の大きい高台付碗。高台部内側に回転糸切痕残る。	①素地灰白色②還元③体下半~底面(中央部除く)高台④密
36H-6	土 釜	— (22.2) —	カマド内 1号溝	頸部はくびれて「く」の字状に外反する口縁を呈す。胴部外面、縦へら削り。	①灰褐色②酸化③口縁部~胴部上半④②~3mmの砂粒含む。
36H-7	瓦 釜	— (20) —	カマド内	口縁部は平らで、比較的大きな窪と口縁部は横ナデ。胴部外面縦へら削り。	①褐色②酸化③口縁部~胴部上半④②~5mmの砂粒含む。

第1節住居址



第70图 37・39号住居址遺物実測図

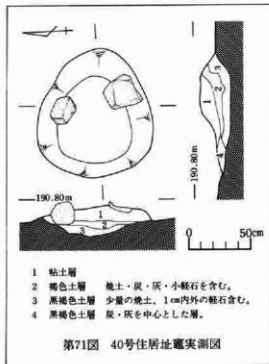
第4章 検出された遺構と遺物

37・39号住居址出土遺物観察表

住居及び 器 形 号	器 形	寸 法 (cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
37H-1	杯-土師質	3.5 (10) (4.2)	フク土	平底で器高が低い、回転糸切痕。	①褐色②酸化③口辺-底部(中央を除く)瓦④良好
37H-2	杯-土師質	3.8 (11.2) (5)	フク土	回転糸切痕、底径の小さな平底。体部内外面の整形は丁寧な様ナす。	①褐色②酸化③口辺-底部瓦④密
37H-3	甕-土師質	— — (6.4)	フク土	付高台。高台の接合は丁寧で内側に糸切り痕残る。丸みを帯びた体部。	①灰褐色②酸化③体部下-底面及び高台瓦④酸化鉄を含む。
37H-4	甕-土師質	4.8 (11.6) (6.2)	フク土	付高台。体部は内背ぎみに立ち上る。厚みを持ち、薄い口唇部。	①褐色②酸化
37H-5	甕-土師質	— — 5.6	フク土	付高台。体部に丸みを持つ。高台内側に糸切り痕残る。丁寧な整形。	①灰白色②還元③体部下-底面及び高台④精選良好
37H-6	皿-土師質	— (15.2) —	フク土	体部にログロ目か明瞭に残る。高台部分欠損。出土例は少ない。	①褐色②酸化③体部のみ瓦④精選良好
37H-7	甕	— — 8.6	フク土	器形は甕と思われるが、他に出土なく不明。後の混入品とも思える。	①灰褐色②酸化③胴下部-底面④2-5mmの砂粒を含む。
39H-1	甕-土師質	— — 8.1	フク土	高台付甕。器面が荒れている。高台内側の糸切り痕は回転を伴うヨコナズにより消している。	①灰褐色②酸化③体部下-底面及び高台部④砂粒含む。
39H-2	杯-土師質	2.7 9.2 4.8	フク土	左回転糸切痕、底径が大きく厚みのある小型の杯である。当住居の高台に接している中世火葬墓からの混入品の可能性が高い。	①灰褐色②酸化③完整④密
39H-3	甕-土師質	— — 8.4	フク土	裾部分が大きく外に張り出している。体部との接合部は明瞭に残る。	①灰褐色②酸化③高台部のみ瓦④精選良
39H-4	土 釜	— 32.4 —	フク土	直線的な胴部から口辺部はやや大きく外反する。	①灰褐色、外面に炭灰吸着あり。②酸化。③口縁部-胴部上半瓦。④1-5mmの砂粒含む。
39H-5	瓦	— — —	カマド内	平瓦。表面、縄目状。裏面、桶巻き作りによる麻布目。	①灰褐色②酸化③3-5mmの砂粒含む。

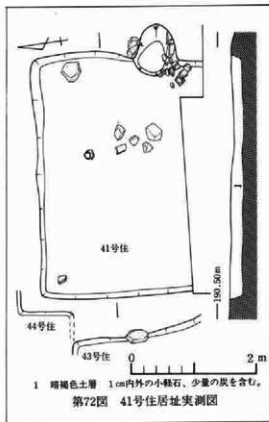
40号住居址竈

- 位置及び 概略 39号住居址東側、41～44号住居址西側に位置し、耕116-2号、87-34グリットに属する。39号住居址と同じく、確認面が低く、住居址の床面、壁などは全く不明で竈のみ検出された。竈西側部分は焼けて固く、また断面の立上がり状態から判断すると、竈は住居東壁にあった可能性が高い。
- 規模 掘り方で煙道方向1.10m、両袖方向0.93m、深さ25cm。
- 遺物 全く出土していない。

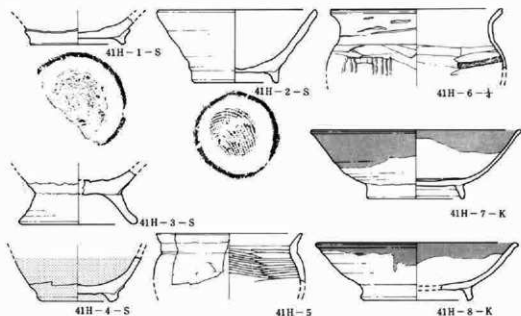


41号住居址

- 位置及び 概略 42～44号住居址東側に近接する、耕116-2号、91・92-34グリットに属する。住居址南側は発掘区域外のために不明。竈は東壁の南寄りを取り込んで構築されている。竈は石で組まれており、その一部が残存し、また床面には多くの石が散乱していた。
- 規模 東西4m、南北は南側未完掘のため不明、現状で2.74m、壁高20cm。
- 竈は煙道方向42cm、両袖方向33cm、深さ28cm。
- 遺物 床面、竈内、覆土から羽釜、軟質の須恵器杯・甕、灰陶器碗等を多数出土。



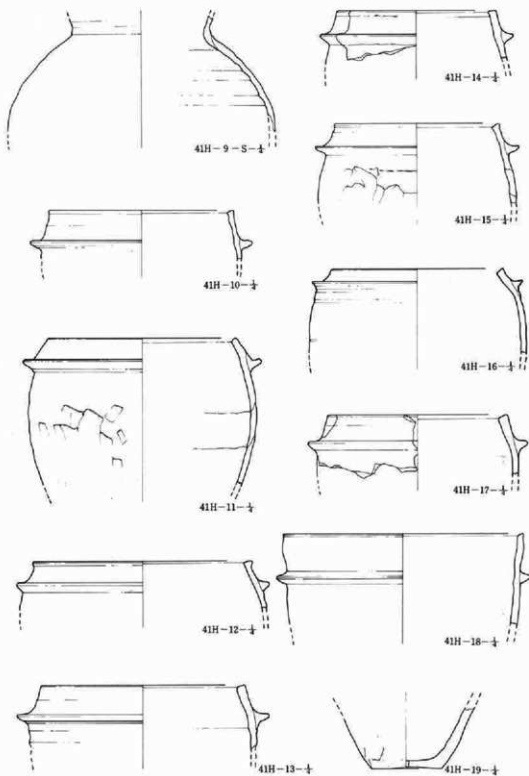
第4章 検出された遺構と遺物



第73図 41号住居址遺物実測図(1)

41号住居址出土遺物観察表(1)

住居及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
41H-1	碗-須恵器	— — (7.4)	フク土	底部、右回転糸切り後付高台。 接合部の残る雄な整形である。 糸切り痕あり。	①灰褐色②焼化③底部-高台部④密
41H-2	碗-須恵器	5.8(12.5) (6.5)	フク土	底部、右回転糸切り後付高台。 器種、器形が他の土器とは異質 土器である。	①灰白色②還元③口辺-体部④底 部及び高台部⑤密
41H-3	碗-須恵器	— — (9.4)	フク土	足が長い高台で、高台階部は外 反する。	①灰褐色②焼化③底部-高台部④ 密
41H-4	碗-須恵器 イブシ	— — 6.6	フク土	還元イブシ。高台部内側に糸切り 痕残る。	①黒色、断面灰色②還元③体部下 半-底面及び高台④密
41H-5	小型甕	— (11.6) —	フク土	「コ」の字状口縁を呈す器内の 薄い小型甕である。	①褐色②焼化③口縁部-肩部④ 密
41H-6	甕	— (18.4) —	フク土	「コ」の字状を呈する器内の薄 い甕。口唇部に浅い溝が走る。	①褐色②焼化③口縁部-肩部④ 密
41H-7	碗-灰釉	55 17 7.8	床 面 フク土	高台部内側、回転を伴うナデ。 体部下半回転ヘラ削り。漬け掛 け。重焼成。	①素地灰白色、釉淡い緑色②還元 ③口辺-体部④密
41H-8	碗-灰釉	4.6(16.2) (9)	フク土	高台部内側、回転を伴うナデ。 体部外面横ナデ。施釉は漬け掛 け。	①素地灰白色②還元③口辺-底部 及び高台部④密



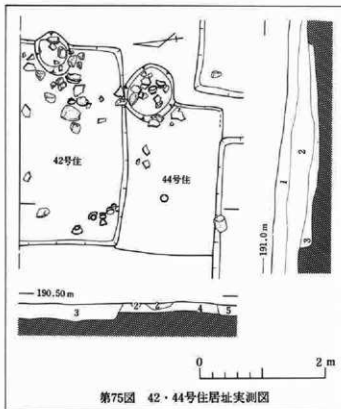
第74圖 41号住居址遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構と遺物

41号住居址出土遺物観察表(2)

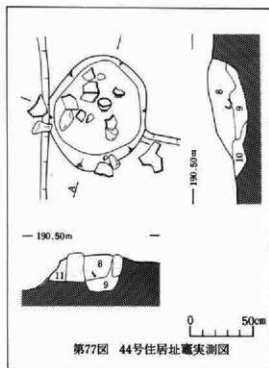
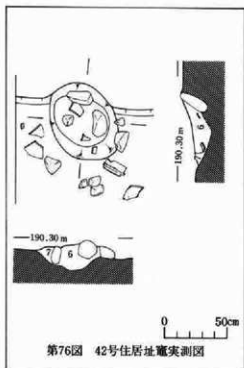
住居及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
41H-9	壺・煎煮器	— — —	カマド内	丸みを帯びた肩部から外反する口縁部に続く。器面全体は、風化によって剥離。内面に回転を伴う横ナデが残る。	①灰白色②還元③頸部～胴上半部迄④5～8mmの砂粒を少量含む。
41H-10	羽蓋	—(19.6) —	フク土	僅かに内傾する口縁部から、口唇部で内彎。鈎は丁寧に整形されている。	①褐色②酸化③口縁部～鈎迄④密
41H-11	羽蓋	— (20) —	フク土	丸みのある頸部から、緩やかに内傾する口縁部。鈎はやや長く上向きだ。	①灰白色②還元③口縁部～胴中央部迄④密
41H-12	羽蓋	—(23.4) —	カマド内	内傾する口縁部の口唇部は僅かに外反する。鈎はやや短かく丸みを呈す。	①灰褐色②酸化③口縁部～鈎迄④密
41H-13	羽蓋	—(21.8) —	フク土	胴上部から緩やかに内傾する口縁部を有し、口唇部はほぼ平ら。器内は口縁部が胴部より僅かに厚い。鈎は長い。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴上部迄④密
41H-14	羽蓋	—(17.2) —	フク土	胴上部から直線的に内傾する口縁部。口唇部は上端が平らである。鈎は外面に接合痕が僅か残る。短かくやや太い。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴上部迄④密
41H-15	羽蓋	—(17.6) —	カマド内	胴上半から緩やかに内傾する口縁部に続く。口唇部は内斜する。鈎は細長い。器厚は比較的薄い。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴上半部迄④密
41H-16	羽蓋	—(18.2) —	床 面	緩やかに内傾する胴上部から、三角を呈する先の細い鈎を境に強く内傾する。最大径は胴上部にある。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴上半部迄④密
41H-17	羽蓋	—(19.2) —	フク土	口縁部は胴上部、鈎を境にして急に内傾。口唇部は平ら。器厚は口唇部が最も多い。鈎は太く短かい。	①黒褐色②酸化③口縁部～胴上部迄④2～3mmの砂粒を含む。
41H-18	羽蓋	—(25.8) —	フク土	胴上部から口縁部まで直線的に開く。鈎は他の羽蓋より下方に貼付てあり、口縁部は長い。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴上部迄④密
41H-19	羽蓋	— — (7.5)	フク土	羽蓋の底部付着と思われる。胴下部。底部等に横方向のヘラケズリ。	①黒褐色②酸化③胴下部～底部迄④密

第1節 住居址



42・44号住居址・竈 土層説明

- 1 黒褐色土層 耕作土。
- 2 黒褐色土層 0.2cm内外の軽石を含む。
- 3 黒褐色土層 0.5～1 cmの軽石を含む固い層。
- 4 褐色土層 ローム粒子、軽石を含む。
- 5 暗褐色土層 軽石を多く含み、ややしまりのある層。
- 6 黒褐色土層 焼土と灰を含む。
- 7 黒褐色土層 焼土を含まない層。
- 8 暗褐色土層 0.5cm内外の軽石を少量焼土を多量に含む。
- 9 黒褐色土層 焼土粒子、炭、灰を含む。
- 10 暗褐色土層 焼土を多量に含む。
- 11 暗褐色土層 0.2cm内外の軽石を含む。粒子の細かい層。



第4章 検出された遺構と遺物

42号住居址

- 位置及び概略** 41号住居址西側、42・43・44号住居址3軒の重複住居址中の一軒である。耕116-2号、91-33グリットに属する。北側は発掘区域外のため発掘していない。南壁は、44号住居址の北側半分程の覆土を切り込んでいる。竈、床面の遺存状態は悪い。本住居は遺跡中最も多量の遺物を出土した。遺物は竈周辺に羽釜、須恵器甕、西壁南寄に土師質土器碗、住居址の中央部分からは出土しなかった。
- 規模** 東西3.30m。南北は北側が未完掘のため北壁が不明、現状で1.76m。壁高は40cm。
- 遺物** 床面、覆土中から土師質土器碗、須恵器坏・大型甕、羽釜、灰釉陶器碗・長頸壺等を出土した。

42号住居址竈

- 位置及び概略** 住居址東壁、中央から僅かに南寄り部分で構築されている。竈は、あまり壁面から張り出さず、床面に大部分を残している。煙道方向が少しずれて楕円を呈している。竈内、及び竈手前の床面上に10数個の石が検出された。竈内の両袖部と煙道部付近で3個の石が固定されていた。
- 規模** 掘り方で煙道方向62cm、両袖方向92cm、深さ18cm。
- 遺物** 竈内より土師質土器碗、軟質の須恵器坏、羽釜破片等出土。

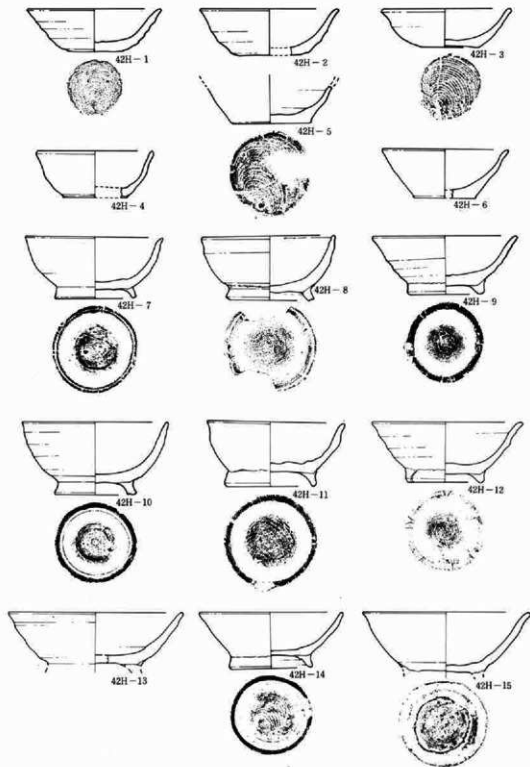
44号住居址

- 位置及び概略** 42・43・44号住居址と重複している住居中の一軒である。42号住居址に竈北側と住居の近近くを切られている。住居址南側は、43号住居址に切られている。3軒の住居址の中で最も床面が高く、土層断面からも重複関係は明瞭に確認出来た。耕116-2号、91-33・34グリットに属する。床面は他の住居址同様遺存が悪い。竈は、42号住居址より遺存状態が良い。
- 規模** 東西2.42m、南北は北壁・南壁ともに遺存しないため不明である。現状で1.50m。壁高16cm。
- 遺物** 竈周辺と床面東南部から出土している。竈周辺から羽釜。床面から土師質土器碗、須恵器の黒色イブシ碗・坏等出土。

44号住居址竈

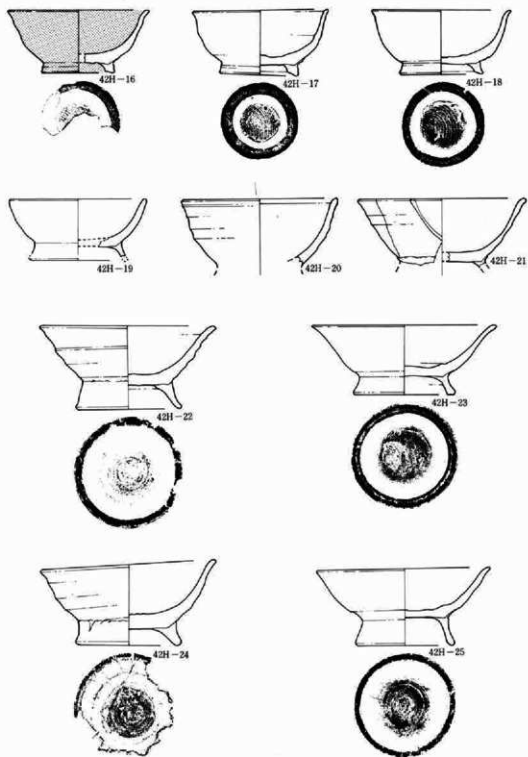
- 位置及び概略** 住居址東壁の中央から南寄りを切り込んで構築されている。竈内袖部近くから袖石が直立の状態で1個、さらに42号住居址の壁へ落ち込んだ石が1個検出された。竈上面はかなり削られており残りが悪い。煙道の残りも良くない。燃焼部の基底は炭・灰を含む層で、焚口付近は焼土の層である。
- 規模** 掘り方で煙道方向93cm、両袖方向82cm、深さ28cm。
- 遺物** 黒色イブシ碗、羽釜等出土。

第1節 住居址

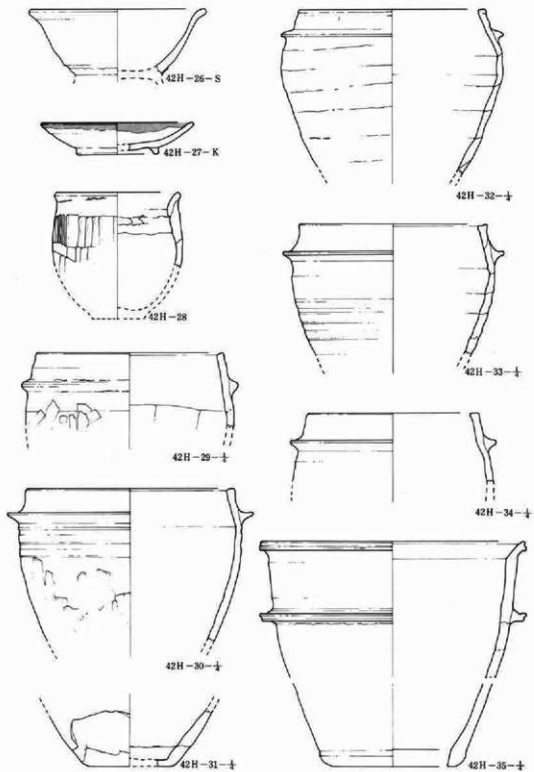


第78图 42号住居址遺物実測图(1)

第4章 検出された遺構と遺物

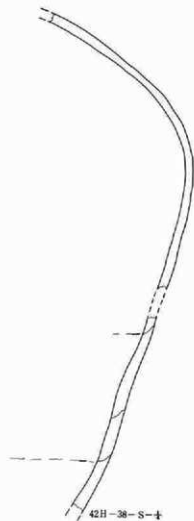
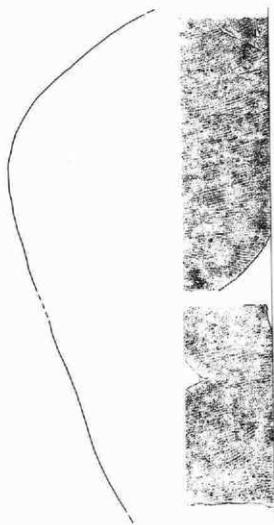
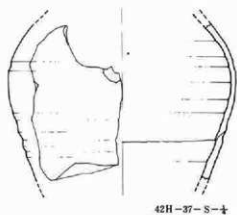
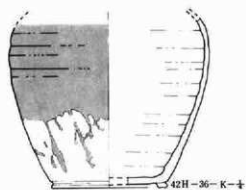


第79図 42号住居址遺物実測図(2)



第80圖 42号住居址遺物実測図(3)

第4章 検出された遺構と遺物



第81図 42号住居址遺物実測図(4)

42号住居址出土遺物観察表(1)

住居及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
42H-1	坏-土師質	3.4 10.6 4.6	床 面	底部右回転糸切痕。体部に丸みを持つ。	①褐色②酸化③完形④密
42H-2	坏-土師質	3.7 11.2 6.4	フク土	底部中央が欠損。42H-1に類似。	①褐色②酸化③口辺～底部④密
42H-3	坏-土師質	3 10.4 5.4	カマド内	体部にイブシを受けて一部還元。器高低く、器内は口辺と底部がやや薄い。	①灰白色②還元③口辺④～底部完形④密
42H-4	坏-土師質	3.7 (9.4) 5.2	フク土	体部中央が膨らみ、口辺外反、底部厚い。	①灰褐色②酸化③④⑤密
42H-5	坏-土師質	— — 6.4	床 面	底部、右回転糸切痕、底部の器厚が最も多い。内面にロクロ整形が残る。	①灰褐色②酸化③体下半～底部④密
42H-6	坏-土師質	3.9(10.2) 5	フク土	底部中央欠損、糸切り痕残る。厚い底部。体上部で膨らみを有し口唇部外反。	①褐色②酸化③口辺～底部④密
42H-7	陶-土師質	4.9 11 6.6	床 面	高台付筒、ロクロ右回転。高台部内側回転を伴うナデ。体部は丸み帯びる。	①赤褐色②酸化③完形④密
42H-8	陶-土師質	5.1 10.6 7	床 面	42H-7と類似する土器。高台部の接合及び整形はやや悪い。	①褐色②酸化③口辺～体部及び底部完形、高台部④密
42H-9	陶-土師質	4.6 11.6 6.2	床 面	42H-7・8と類似。直線的に外反する体部から口辺で外反。高台は太い。	①褐色②酸化③口辺④欠損他完形、④密
42H-10	陶-土師質	5.7 11.8 6.6	床 面	42H-7と類似。外面体部に、ロクロ整形が残る。	①褐色②酸化③口辺④欠損他完形④密
42H-11	陶-土師質	5.2 (12) 7.4		42H-7に類似。内面にロクロ整形が残る。高台接合が残る。	①褐色②酸化③口辺～体部④、底面及び高台完形④密
42H-12	陶-土師質	4.8 12.4 6.2	床 面	42H-9に類似。口辺部内面、接線。	①褐色②酸化③完形④密
42H-13	陶-土師質	— 14 —	フク土	42H-9に似ている。やや大きく、内面底部周囲に接線がある。	①褐色②酸化③口辺～底部④密
42H-14	陶-土師質	4.5 11.8 6.6	フク土	42H-9に類似。体部外面は丁寧にナデ整形。高台部内側にロクロが残る。	①灰褐色②酸化③口辺部④～底面及び高台④密
42H-15	陶-土師質	— 13.4 —	床 面	42H-9に類似。体部外面は丁寧にナデ整形。	①褐色②酸化③口辺～底部完形(高台部欠損)④密

第4章 検出された遺構と遺物

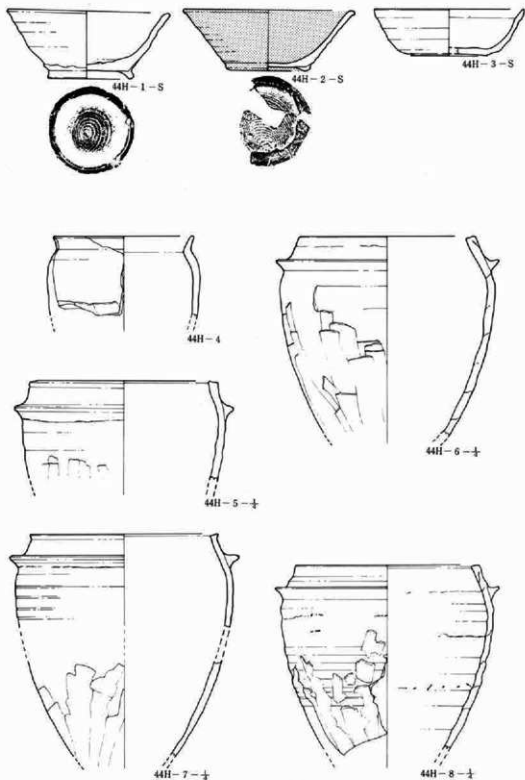
42号住居址出土遺物観察表(2)

住居及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
42H-16	陶-土師質 イブシ	5(11.4) 5(8)	床 面	42H-7に類似する。高台部は裾部が平らで太い。高台内側、底部中央に回転糸切り痕残る。	①黒色②酸化③口辺～体部片、底部及び高台部片④密
42H-17	陶-土師質	5.1, 10.8 6.2	床 面	42H-16に類似。口唇部、体部中央に稜線ロクロ整形痕残る。高台裾部の内側に稜残る。	①灰白色②還元③完形④密
42H-18	陶-土師質	5.1 11.2 6.6	フク土	42H-17に類似。	①灰白色②還元③口辺～体部片、底部及び高台部完形。④密
42H-19	陶-土師質	— (11) —	床 面	口唇部は丸みを持つ体部から僅かに外反する。高台部は細く、42H-16・17に比べ長いと思われる。	①褐色②酸化③口辺～底部及び高台部片④密
42H-20	陶-土師質	—(12.6) —	フク土	体部外面にロクロ整形痕、口唇部内側に一本のロクロ整形痕残る。	①灰褐色②酸化③口辺～体部片④密
42H-21	陶-須恵器	—(13.6) —	フク土	厚い底部から丸みを呈しながら立ち上がり、口辺で外反する。体部中央の器厚はやや薄い。ロクロ整形痕残る。	①灰白色②還元③口辺～底部片④密
42H-22	陶-土師質	6.7 14.2 8.5	床 面	やや長めの高台を呈する。底部から体部に丸みをもちながら口辺で外反する。体部外面にロクロ整形痕が明瞭に残る。高台裾部は僅かに外反する。	①灰褐色②酸化③高台裾部片欠損するがほぼ完形④密
42H-23	陶-土師質	5.6 14.8 8.2	床 面	42H-22に類似。体部内外面は丁寧な整形で器厚もやや薄い。高台部内側にロクロ整形痕。高台裾部は太く平ら。	①灰白色②還元③口辺～体部片欠損するが他完形④密
42H-24	陶-土師質	6.4 14 8.4	床 面	42H-9を大きくした様な類似した器形。口辺の高さには多少違いがある。高台部接合痕が観察出来る。やはり高台の長い瓶である。	①灰褐色②酸化③口辺片、高台部片欠損④密
42H-25	陶-土師質	6.1(13.8) 8	床 面	42H-22に類似。器厚は4個体のうち最も薄い。高台部は最も細く長い器形を呈す。	①褐色②酸化③口辺～体部片、底部及び高台完形④密

42号住居址出土遺物観察表(3)

住居及び番	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
42H-26	瓶-須恵器	—(14.2)—	42Hカマド 43日7ク土	体部下部に丸みを有し、口辺で外反する。高台接合痕残る。軟質須恵器。	①灰白色②還元③口辺-体部片④密
42H-27	皿-灰釉	2.5 12.2 (6.6)	フク土	短かい高台部。器厚は均一。地釉、内外面共に塗け付け。	①素地灰白色、釉透明②還元③口辺-底部及び高台部片④密
42H-28	小型甕 土師器	—(10.2)—	フク土	「コ」の字状口縁裏の器内を厚くした小型の甕。整形方法共通する。	①褐色②酸化③口縁部-胴上半部片④密
42H-29	羽蓋	—(19.8)—	フク土	丸みを帯びた胴部から、口縁部は内傾する。蓋は短い。	①褐色②酸化③口縁部-胴上半部片④密
42H-30	羽蓋	—(21.8)—	フク土	胴上部に膨らみを有し、肩付着部から内傾する口縁部に至する。蓋長い。	①灰褐色②酸化③口縁部-胴下部片④密
42H-31	羽蓋	— (8.6)	フク土	羽蓋の底部と思われる。胴下部から上方向に縦方向へラケズリ。	①灰褐色②酸化③胴下部-底部片④密
42H-32	羽蓋	— (20)	カマド内	胴上部は強い丸みを帯び、肩を含めて最大径。口縁部は内傾。口唇部は平ら。	①灰褐色②酸化③口縁部-胴下部片④密
42H-33	羽蓋	— (20)	フク土	胴上部に丸みを有し、最大径を呈す細長い肩付着部から内傾す口縁部に続く。	①褐色②酸化③口縁部-胴下半部片④密
42H-34	羽蓋	—(18.4)—	フク土	僅かな丸みを呈する胴部。丁寧な整形の筒部から口縁部は内傾。口唇平ら。	①灰褐色②酸化③口縁部-胴上部片④密
42H-35	甕	— (28)	床 面	胴下部から僅かに丸みを帯びながら、口縁部まで外反し、更に口辺部が強く外反。内面に稜を呈する。口縁部長い。	①灰褐色②酸化③口縁部-胴下部片④密
42H-36	長頸瓶 -灰釉	— (12.4)	床 面	円形粘土板の底部に、裾部平らな粘土帯高台貼付。肩部に最大径を呈す。地釉、外面刷毛塗りで胴下半まで。	①素地灰白色、釉透明②還元③胴部-底部及び高台部片④密
42H-37	甕-須恵器	— — —	フク土	器内の薄く、内外面にロクロ整形成。軟質須恵器の甕。	①灰白色②還元③胴部のみ片④密
42H-38	甕-須恵器	— — —	床 面	大型の水甕と思われる。焼結の須恵器。整形は内面ナデ、外面平行印目。	①青灰色②還元③胴部-胴下部片④3~5mmの砂粒含む。

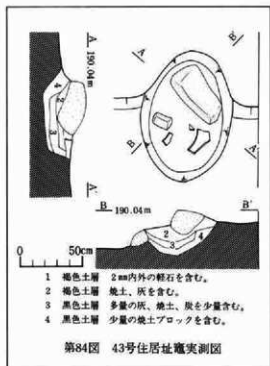
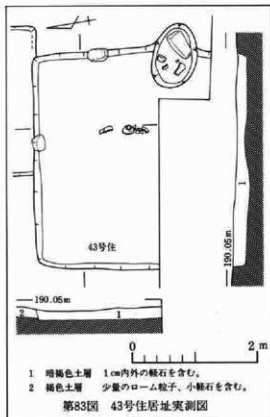
第4章 検出された遺構と遺物



第82図 44号住居址遺物実測図

44号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
44H-1	瓶-須恵器	5.4 13 6.6	フタ土	底部ロクロ右回転糸切痕、切り離した後高台を貼付、体部との境に高台付着時の粘土の余りをそのまま残している。やや褐色を呈し、酸化気味の焼成であるが、器彩は須恵器の延長上にある。	①灰褐色②酸化③突起④2~4mmの砂粒含む。
44H-2	瓶-須恵器 イブシ	4.8 (14) 6.8	カマド内 フタ土 床面	1とはほぼ同じような器形であり、須恵器の一種である。高台の付け方はさらに雑になり低く、左右不対称となる。全体に焼しが強くなされている。	①黒色②酸化③口縁~高台④密
44H-3	杯-須恵器	3.7 (12) (6.2)	フタ土	9世紀代の須恵器杯と思われる。本住居は10世紀代と考えられ他からの混入品と思われる。底部右回転糸切痕残る器高に対し、底径の大きな杯である。	①灰白色②還元③口縁~底部④密
44H-4	小型甕	—(11.2)—	床面	直立気味の胴部から内彎し、短い口縁部に至る。内外面ナデ。この小型甕は「コ」の字状口縁を持つ小型甕の延長上にくるものと思われる。	①灰褐色②酸化③口縁~胴部④密
44H-5	羽蓋	—(20.2)—	カマド内	外側へ開く胴部が、鈎を境にやや内彎して厚い口縁部に至る。口唇部の多くは水平でやや内側へ傾いているのが多いが、これはやや外側へ傾いている。	①灰褐色②酸化③口縁~胴部④2~5mmの砂粒を含む。
44H-6	羽蓋	—(18.8)—	床面	外側へ開く胴部が、鈎を境にやや内彎して厚い口縁部に至る。鈎は断面三角形を呈している。胴部のへら削りは、中央から下方に向けて行なう。	①灰褐色②酸化③口縁~胴下半部④2~5mmの砂粒含む。
44H-7	羽蓋	—(20.2)—	カマド内	6にはば共通、器内が薄いため、口唇部は厚く作られている。	①灰褐色②酸化③口縁~胴下半部④3~5mmの砂粒含む。
44H-8	羽蓋	—(19.2)—	カマド内	6にはば共通。	①灰白色②還元③口縁~胴下半部④3~5mmの砂粒含む。



43号住居址

位置及び 概略 42・43・44号住居址と重複している住居址中で南側の住居である。跡116-2号、90・91-34グリットに属する。住居址北側は44号住居址を切り込んで構築されている。南側は発掘区域外にあたり確認出来なかったが竈部分は1m四方の範囲を拡張して調査した。41号住居址が東側60cmに位置し、44号住居址の竈との距離は近い、床面は西側半面がわずかに低い。東壁の北寄りに石が検出されている。

規模 東西3.5m。南北は南側未完掘のため不明、現状で2.86m。壁高は21cm

遺物 床面から土師質土器碗、羽釜、覆土中から灰釉陶器碗、土師質土器碗、羽釜等出土

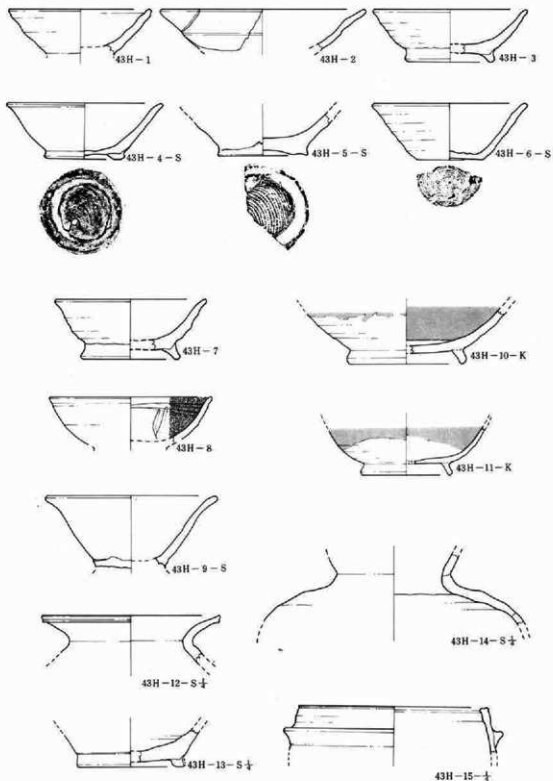
43号住居址竈

位置及び 概略 住居址東壁の中央から南寄りを切り込んで構築されている。東西に長い楕円形を呈す。竈内中央部分の基底面は掘り込まれており、少量の焼土ブロックが混入していた。その上に灰を主にした層、焼土・灰を主にした層が続く、竈内に50×24cm及び16×10cmほどの石が落石していた。

規模 掘り方で煙道方向1.06m。両袖方向72cm、深さ22cm

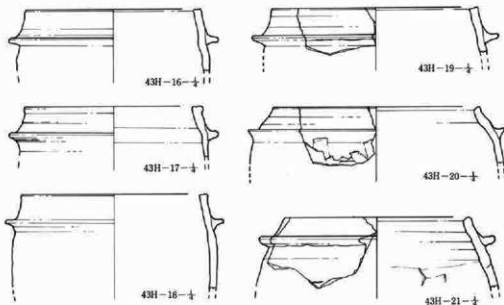
遺物 羽釜口縁部~胴上部破片出土

第1節 住居址



第85图 43号住居址遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第86図 43号住居址遺物実測図(2)

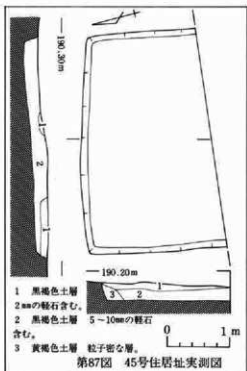
43号住居址出土遺物観察表(1)

住居及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
43H-1	甕-土師質	—(11.4)—	フク土	器内の厚い高台付焼。	①灰褐色②酸化③口辺部～体部④⑤密
43H-2	甕-土師質	—(16.6)—	フク土	体部内外に稜を呈す。	①灰褐色②酸化③口辺部～体部④⑤密
43H-3	甕-土師質	4.2(12.4) (7.2)	床 面	器高に比べ口径の大きな高台付焼。高台部丁字な整形。器内底部が厚い。	①褐色②酸化③口辺～底部及び高台部④⑤密
43H-4	甕-須恵器	4.5 12.6 6.4	床 面	器内底部薄く、体部厚い。高台部短い。高台内側底部回転糸切り痕。整形粗雑。	①灰褐色②酸化③完形④密
43H-5	甕-須恵器	— — 7.2	フク土	高台付焼。高台部は体部下端と底部外縁のつまみ出し。整形粗雑。軟質須恵。	①灰褐色②酸化③体下半～底部及び高台部④⑤密
43H-6	が-須恵器	4.5(12.4) (5.2)	カマド内	内外面クロコ整形痕。	①褐色②酸化③④⑤密
43H-7	甕-土師質	(4.7)(12.2) 8	フク土	還元気味高台付焼。	①灰褐色②酸化③④⑤密
43H-8	甕-土師質 内黒	— (13) —	フク土	内面体部ヘラケツマ。口辺内外面及び内面全体黒色処理。還元気味。	①灰褐色②酸化③口辺～体部④⑤密

43号住居址出土遺物観察表(2)

住居及び番	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
43H-9	甕-須恵器	— (19) —	フク土	器高の高い軟質須恵器。長い体部から口辺部は外反する。高台部接合痕残る。	①黒色②酸化③口辺～体下部反④密
43H-10	甕-灰釉	— — (9.6)	フク土	やや長い高台部を踏付。胴部は丸みを帯びる。施釉は濃け掛け。重ね焼き肌。	①黄地灰白色。釉透明②還元③体部下半～底部及び高台部反④密
43H-11	甕-灰釉	— — (7.4)	フク土	43H-10に類似するが器内薄く、小型。施釉は体部上半内外面濃け掛け。	①黄地灰白色。釉透明②還元③体部下半～底部及び高台部反④密
43H-12	甕-須恵器	— (18.8) —	フク土	焼締の須恵器。広口甕。狭い胴部から口縁部は大きく外反する。混入品と思われる。	①灰白色②還元③口縁部～胴部反④密
43H-13	甕-須恵器	— — (8.6)	フク土	内面にロクロ整形痕。赤色顔料付着。器内厚い。高台部は裾部が平らで短い。	①灰白色②還元③体部下半～底部及び高台部反④密
43H-14	壺-須恵器	— — —	カマド内	軟質須恵器。胴部に最大径を有す。内外面ロクロ整形ヨコナテ痕。	①灰白色②還元③口縁部～胴部反④密
43H-15	羽蓋	— (20.2) —	カマド内	筒は丁寧な整形。口縁部は僅かに内傾。	①灰白色②還元③反④密
43H-16	羽蓋	— (18.8) —	フク土	口縁部は直線的で僅かに内傾。口唇部平ら。筒はやや細く丁寧な整形。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴上部反④2～4mmの砂粒含む。
43H-17	羽蓋	— (19) —	フク土	器内の薄い胴部。筒接合部から内傾する口縁部は厚みを持つ。口唇部は平ら。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴上部反④2～5mmの砂粒含む。
43H-18	羽蓋	— (20) —	カマド内	43H-16に類似。筒状の胴部から、口縁部は僅かに内傾。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴上部反④2～5mmの砂粒含む。
43H-19	羽蓋	— (22) —	カマド内	43H-16に類似。やや大型の羽蓋。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴上部反④2～5mmの砂粒含む。
43H-20	羽蓋	— (22) —	フク土	最大径は筒・胴上部にある。口縁部は比較的大きく内傾。口唇部で外反。	①褐色②酸化③口縁部～胴上部反④2～4mmの砂粒を含む。
43H-21	羽蓋	— (19.6) —	床面	胴上部から口縁部にかけて大きく内傾。口唇部は丸みを帯びている。筒先端も丸みを持つ。43号住居址内の羽蓋とはやや違いがある。	①褐色②酸化③口縁部～胴上部反④2～4mmの砂粒含む。

第4章 検出された遺構と遺物

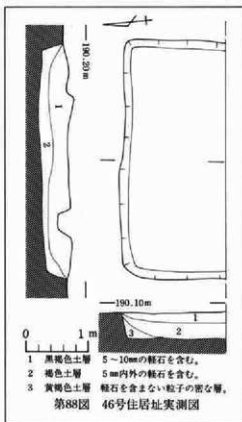


45号住居址

位置及び概略 41～44号住居址東側、46・47号住居址には1m程で接している。耕116-2号、93・94-34、94-33グリットに属する。住居址の南側は発掘区域外で確認出来ない。竈は、他の住居例にならえば東側にあたると思われる。その部分は発掘されていない。比較的高い位置で住居址の確認が出来た。

規模 東西3.50m、南北は南側が発掘区域外のため不明、現状で2.25m、壁高23cm。

遺物 覆土中より「赤」と思われる刻書のある塊底部、羽釜の口縁部-胴上部、小形甕の口縁部-肩部、内黒塊の破片等出土。他に灰釉陶器施、須恵器環等出土。



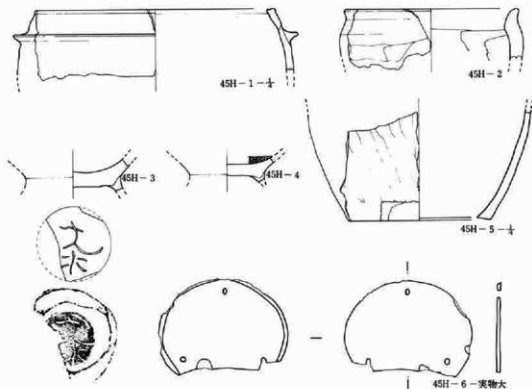
46号住居址

位置及び概略 45号住居址東側に接して位置する。耕116-2号、94-33・34、95-33・34の4グリットに属する。住居は45号住居址と類似している。住居の大半が発掘区域外のため竈の位置、その他は確認出来なかった。

規模 東西3.78m、南北は住居南側が未完掘のため不明、現状で1.70m、壁高36cm。

遺物 覆土中から焼締めのない須恵器塊の高台部を欠損したもの、環、サヤ金具等出土。

第1節 住居址

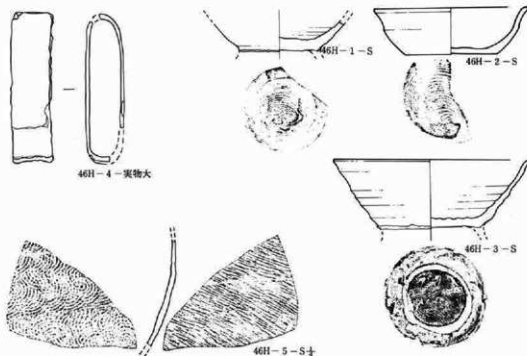


第89図 45号住居址遺物実測図

45号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
45H-1	羽蓋	— (25.4) —	フク土	筒状の胴部、羽先端が細く、粘付部分から口縁部は内傾する。口唇部平ら。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴上部④2～4mmの砂粒含む。
45H-2	小型甕	— (14) —	フク土	最大径は胴上部に位置。短い口縁部は胴部で外反。器内は厚い。	①褐色②酸化③口縁部～胴上部④2～5mmの砂粒含む。
45H-3	甕一土師質	— — —	フク土	高台付甕。高台部内側底面に「赤」の刻書文字。	①褐色②酸化③体部下半～底部及び高台上部④密
45H-4	甕一土師質 内黒	— — —	フク土	高台付甕。体部内面丁寧なヘラケンマ。黒色処理を施す。	①褐色②酸化③体部下半～底部及び高台上部④密
45H-5	瓶	— — (15.2)	フク土	胴下部、ヘラ削り成形。底部は平ら。胴部は縦方向ヘラ削り。下部横方向ヘラ削り。	①褐色②酸化③胴中央～底部④3～5mmの砂粒含む。
45H-6	金銅製丸駒	長径-3.4 短径-2.3	フク土	平面に3つの穴を持つ。裏地は銅。器面の表側に塗金を施す。	①裏地青味を帯びた黒色

第4章 検出された遺構と遺物



第90図 46号住居址遺物実測図

46号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
46H-1	高須恵器	— — —	フク土	高台付碗。体部内面、ロクロ整形痕。やや軟質で比較的硬めの須恵器。高台内側底面に回転糸切り痕残る。	①青灰色②還元③体部下半～底部④2～3mmの砂粒含む。
46H-2	環須恵器	3.7(12.4) (7.4)	フク土	器高に比べ口径は大きい。右回転糸切断。丸みを帯びた体部から口辺部で外反。	①灰白色②還元③口辺部～底部写④密
46H-3	碗須恵器	— 16 —		外面体部、内面体部及び高台部ロクロ整形痕。器高く比較的焼跡の強い軟質須恵器。高台接合部糸切り痕残る。	①灰白色②還元③口辺～体部写、底部完形。(高台部欠損)④密
46H-4	サヤ金具?	0.1 (3.9) 1	フク土	銅製品、サヤ金具と思われる。現在は青銅びが付着。ボロボロに腐蝕。	①素地青白色、器面黒色。
46H-5	雙須恵器	— — —	フク土	当遺跡出土の実測可能な雙の中でも大型遺物。内面青海成文、外面平行文印き目で強く体部を調整。	①青灰色②還元③頸部～底部写④密

47号住居址

位置及び 46号住居址の北側にあたり、概略 45号住居址とも近接している。耕116-2号、94-34グリットに属する。住居の北側が発掘区域外のため北側は確認出来ない。竈は東壁の南端に検出されている。床面は、約2mmの軽石を含む固い層で平らである。住居址東壁付近は覆土と地山の差がほとんどなく、遺構の検出は困難だった。

規模 東西2.7m。南北は遺構の北側が未完掘のため不明。現状で2.8m。壁高17cm。

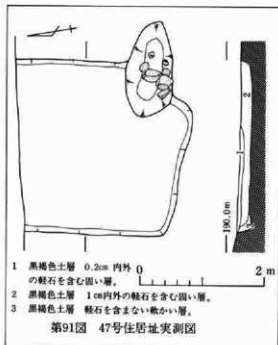
遺物 遺構北側で南壁付近の床面から、ほぼ完形灰釉陶器碗が口辺部を下に向けた状態で出土。覆土中から、軟質の須恵器碗、土師質土器碗、他に完形の金銅製丸柄等出土。

47号住居址竈

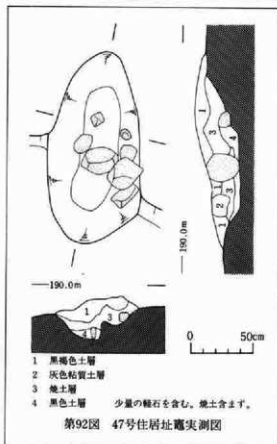
位置及び 住居址東壁南寄りの壁を切り込んで構築されている。残りは比較的良好である。竈内からは7個の石を検出、うち南寄りの3個の重なった石は袖石、中央の大きな石は天井石と思われる。

規模 煙道方向1.48m、両袖方向71cm、深さ34cm。遺存良好。

遺物 軟質須恵器碗の破片出土。

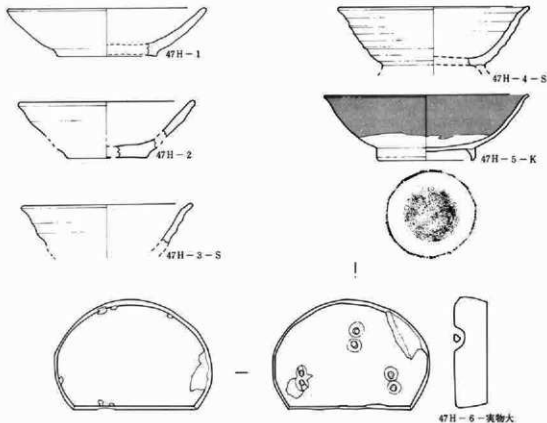


第91図 47号住居址実測図



第92図 47号住居址竈実測図

第4章 検出された遺構と遺物



第93図 47号住居址遺物実測図

47号住居址出土遺物観察表

住居及び番	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
47H-1	杯-土師質	3.8 (16) 8	フク土	口径に比べ、器高の低い杯。底部に糸切り痕残る。	①灰褐色②酸化③口辺部～底部④密
47H-2	杯-土師質	(4.5) (14.2) (6.4)	フク土	器肉やや厚い。底部右回転糸切り痕残る。	①褐色②酸化③口辺部～底部④密
47H-3	杯-須恵器	—(13.8) —	フク土	体部内外面口クロ整形痕、口唇部外反。	①灰白色②還元③④⑤密
47H-4	碗-須恵器	—(15.4) —	フク土	口径に比べ、器高の低い杯体部内外面口クロ整形痕。	①灰白色②還元③④⑤密
47H-5	碗-灰胎	5.2 (16.4) 7.2	フク土	器肉薄い。施軸は内外面体部漬け掛け、底部糸切り痕ナク消し。丁寧な整形。	①素地灰白色、釉透明②還元③口辺～底部及び高白部④⑤密
47H-6	石製丸碓	長径-4.2 短径-2.8	フク土	表面は磨きを施し光沢を持つ。表面は整形のきざみ痕、かがり穴3個突つ。	①黒色③はは完形

48号住居址

位置及び概略 45・46・47号住居址東側にあたり、48・49・64号住居址3軒の重複住居である。49号住居址床面上に構築されている竈は、東壁の中央から南寄りにあたる。耕116-2号、97-33・34、98-33・34グリットに属する。遺構確認面が低かったため、壁面は竈付近を除き、残りが悪い。

規模 東西4.16m、南北4.12m、壁高11cm。面積の広い大きな正方形に近い住居である。

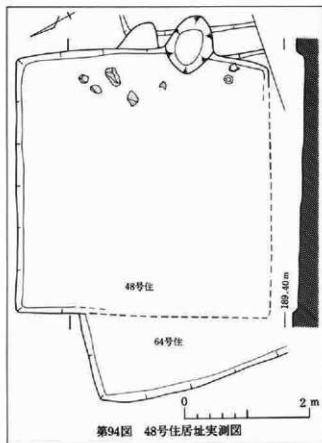
遺物 床面から、台付甕の高台部。床面中から須恵器蓋等出土。

48号住居址竈

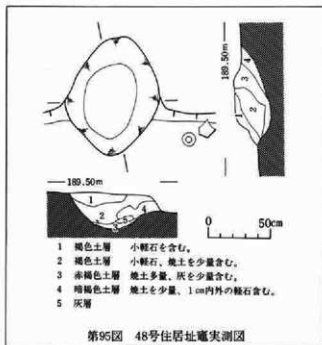
位置及び概略 住居址東壁南寄りを切り込んで構築されている。煙道方向がやや南に向いている。大小の石が竈内から2個竈前に4個出土、竈に使用したものと思える。

規模 煙道方向94cm、両袖方向76cm、深さ27cm。

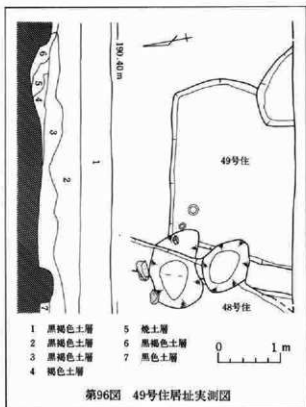
遺物 「コ」字状口縁甕、須恵器甕、坏等出土。



第94図 48号住居址実測図



第95図 48号住居址竈実測図

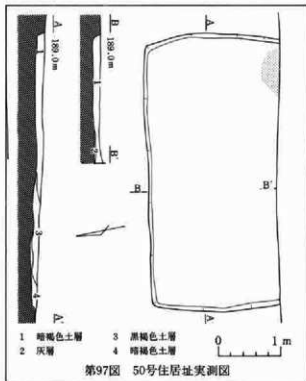


49号住居址

位置及び概略 48・49・64号住居址の重複中の1軒である。48・64号住居址の竈によって西壁の北側半分を切られている。耕116-2号、98-33・34、99-33・34グリットの位置に属する。遺構の南壁は発掘区域外のため確認出来ない。竈は、東壁を切り込んで構築されているが、南側が発掘区域外にあたるために十分な調査とならなかった。

規模 東西2.65m、南北は住居址南側未完掘のため不明、現状で2.00m。竈は煙道方向1.33m、深さ28cm。

遺物 床面から軟質須恵器碗、竈内から土師器环、須恵器环、土師器長甕等出土。



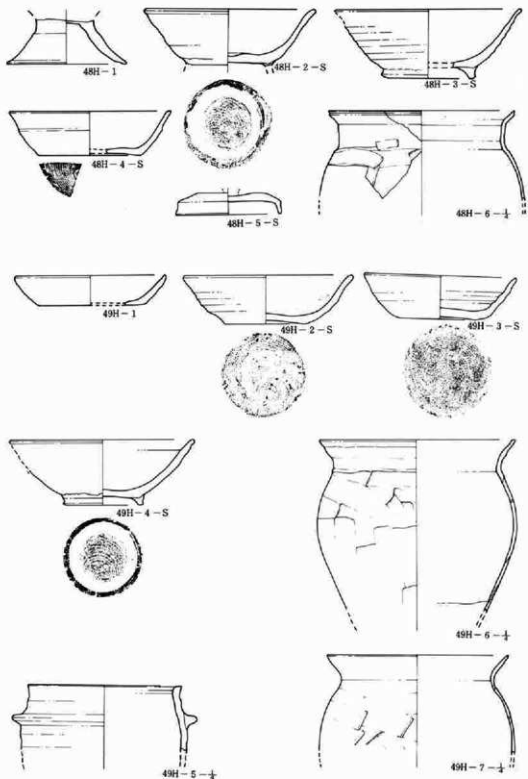
50号住居址

位置及び概略 49号住居址の東側、51号住居址の南側に位置する。耕116-2号、101-33グリットに属する。住居南側及び竈は、発掘区域外のため不明。

規模 東西4.45m。南北は未完掘のため不明、現状で2.20m。壁高6cm。

遺物 須恵器环、碗等出土。

第1節 住居址



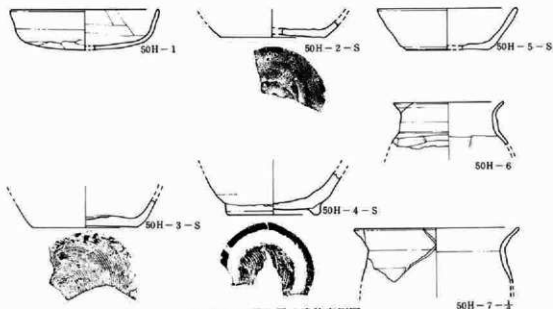
第98圖 48・49号住居址遺物実測図

第4章 検出された遺構と遺物

48・49号住居址出土遺物観察表

住居及び 番号	器 形	寸 法 (cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
48H-1	台付甕一 土師器	— — 9.6	カマド内	台付甕の台部。内外面丁寧な十字整形。本遺跡中唯一の完形の台部。口縁部から底部までは欠損。	①褐色②酸化③台部のみ完形④密
48H-2	瓶一須恵器	— 14 —	カマド内	軟質須恵器。高台部右回転糸切り痕。高台部接合は粗雑。	①灰褐色②酸化③口辺部～底部④密
48H-3	瓶一須恵器	5.5(14.8) 7.6	カマド内 49H床下	体部外面ロクロ整形水掻き痕強く残る。49号住に属する可能性が高い。	①灰白色②還元③口辺部～高台部④4～5mmの砂粒含む。
48H-4	杯一須恵器	3.5 (13) (8.2)	フク土	軟質須恵器。平底。右回転糸切り痕。底径の大きな杯。	①灰白色②還元③口辺部～底部④⑤密
48H-5	蓋一須恵器	— 8.2 —	床 面	壺の蓋。つまみ部分欠損。ロクロ右回転。内面及び口辺部ヨコナデ。	①灰白色②還元③蓋部分のみ完形④密
48H-6	甕一土師器	—(19.8) —	カマド内	「コ」の字状口縁の甕。口唇部に細い沈線一本。	①褐色②酸化③口縁部～肩部④密
49H-1	杯一土師器	2.4(12.2) (8.2)	フク土	平底杯。口径に比べ器高の低い杯。底部へラ削り。	①褐色②酸化③口辺部～底部④⑤密
49H-2	杯一須恵器	3.9 14 6.6	カマド内	底部右回転糸切り痕。底径広い。内面大だすき状の痕跡あり。体部外面ロクロ整形痕。	①灰白色②還元③完形④密⑤焼締須恵器
49H-3	杯一須恵器	3.4 12 5.4	カマド内	底径広い杯。底部右回転糸切り調整後に軽くナデ。自然輪付着。	①灰白色②還元③完形④密⑤焼締めの須恵器
49H-4	瓶一須恵器	5.2(14.8) 6.4	床 下	高台部内側右回転糸切り痕。18Hカマド付近床下出土。48Hに属す可能性有。	①灰白色②還元③口辺部～底部及び高台部完形④2mmの砂粒含む。
49H-5	羽 蓋	—(16.6) —	フク土	他からの混入品と思われる。	①褐色②酸化③口縁部～胴上部④②～3mmの砂粒含む。
49H-6	甕一土師器	— (21) —	カマド内	「コ」の字状口縁を意図させる器内の深い甕。胴部外面肩部横方向、胴部縦方向へラ削り。	①褐色②酸化③口縁～胴下部④密
49H-7	甕一土師器	—(19.4) —	カマド内	49H-6に類似。更に「コ」字が弱くなってくる。	①褐色②酸化③口縁部～胴上半部④密

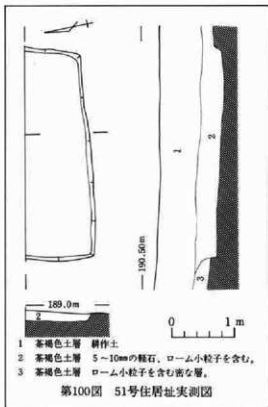
第1節 住居址



第99図 50号住居址遺物実測図

50号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法 (cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④粘土⑤備考
50H-1	环一土師器	(3.2) (12) —	フク土	扁平な浅い丸底。底部手持ちへラ削り、口辺部横ナデ。	①褐色②酸化③口辺部～底部に④1～3mmの砂粒及び石英粒含む。
50H-2	环一須恵器	— — (8.4)	フク土	底径の大きな环。底部、回転へラ切り痕。比較的機織めの強い須恵器。	①灰白色②還元③体下部～底部に④密
50H-3	环一須恵器	— — (8.4)	フク土	器高に比べ、底径の大きな环。底部右回転糸切り痕。体部外面に自然輪がかかる。	①灰白色②還元③体部下半～底部に④密
50H-4	环一須恵器	— — (7.4)	フク土	高台部内側に回転糸切り痕残る。器形・地成からみて、他からの混入品か。	①灰白色②還元③体部～底部及び高台に④密
50H-5	环一須恵器	3.3 (11.2) (6.6)	フク土	平底。底部右回転糸切り痕残る。糸切り後の調整認められない。	①灰白色②還元③口辺部～底部に④密
50H-6	小型甕一土師器	— (8.8) —	フク土	「コ」の字状口縁を呈す。器内の薄い小型甕。	①褐色②酸化③口縁部～胴部に④密
50H-7	甕一土師器	— (17.6) —	フク土	「コ」の字状口縁を呈する器内の薄い甕。	①褐色②酸化③口縁部～胴部に④密

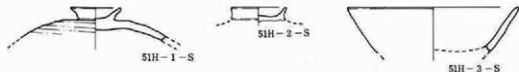


51号住居址

位置及び概略 50号住居址から北へ2m程に近接して位置し、耕116-2号、101-32・33グリットに属する。遺構北側の大半が発掘区域外のため調査出来なかった。従って北側や竈等のほとんどが不明であった。自然地形で東方約18m地点で一段約60cm下がっている。耕116-2号の発掘区域のうちで、51・52号住居址は最も東部分に該当する。

規模 東西3.36m。南北は北側が未完掘のため不明、現状で1.14m。壁高12cm。

遺物 覆土中から須恵器蓋、竈の体部破片出土。



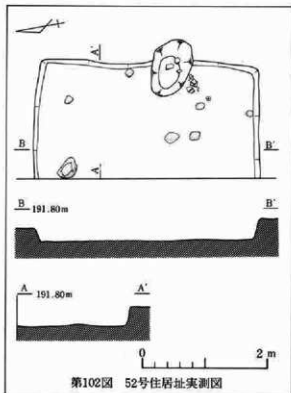
第101図 51号住居址遺物実測図

51号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
51H-1	蓋-須恵器	— — —	フク土	外面へう削り、内面ロクロ整形によるナデ、つまみの部分は横ナデ。	①灰白色②還元③ふた中心-中央部片④1~2mmの砂粒含む。
51H-2	蓋-須恵器	— — —	フク土	蓋のつまみのみ残存。そっくりはずれたものである。内外面横ナデ。	①灰白色②還元③蓋のつまみのみ残存④1~2mmの砂粒含む。
51H-3	杯-須恵器	(13.7) —	フク土	内外面とも横ナデ、弱い隙線が認められる。小さな破片である。	①灰白色②還元③片④1~2mmの砂粒含む。

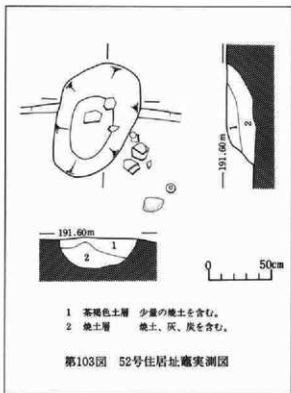
52号住居址

- 位置及び概略 耕113号に属し、14号住居址の南側17mの地点にあたる。76-36・37グリットに属する住居である。住居西側、約 $\frac{1}{2}$ は発掘区域外で西側は確認出来ない。竈は比較的良好な状態で検出された。床面より数個体の大きな石を検出した。
- 規模 東西は西側約 $\frac{1}{2}$ が未完掘のため不明、現状で1.92m。南北で3.15m、壁高34cm。
- 遺物 床面から還元焰と酸化焰焼成の羽釜、軟質の須恵器碗。覆土中から軟質の須恵器燗焼成碗・酸化焰焼成の羽釜・軟質の須恵器碗・灰釉陶器碗・甕等出土。

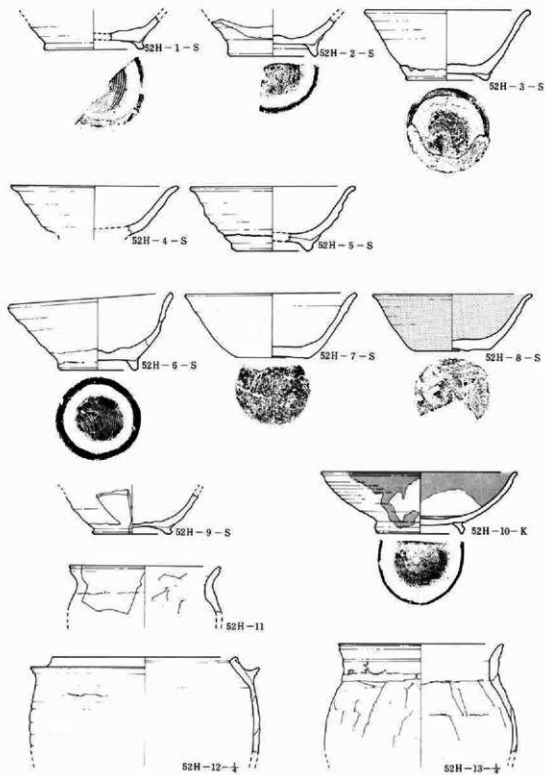


52号住居址竈

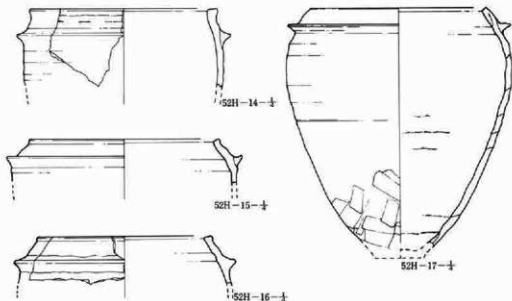
- 位置及び概略 竈は東壁の中央からわずかに南寄り切り込んで構築している。残りは悪い。底部に炭等を含む黒色土、その上層に灰、焼土を多く含んだ層が続く、竈上層は少量の焼土を含む層となる。
- 規模 掘り方で煙道方向96cm、両袖方向62cm、深さ22cm。
- 遺物 竈内から羽釜の破片多数出土。



第4章 検出された遺構と遺物



第104図 52号住居址遺物実測図(1)



第105図 52号住居址遺物実測図(2)

52号住居址出土遺物観察表(1)

住居及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②酸化③残存④粘土⑤備考
52H-1	陶-須恵器	— — (8)	フク土	底部回転糸切痕、蓋付高台、器形からみて、須恵器と思われる。	①褐色②酸化③底部-高台片
52H-2	陶-須恵器	— — (7.2)	フク土	高台部内側糸切痕を消してある。器形からみて須恵器と思われる。	①灰白色②還元③高台-底部片④密
52H-3	陶-須恵器	5.6(13.4) (6.7)	床 面	高台付内側右回転糸切痕、蓋付高台、直線的な体部から口唇部が外反する。	①褐色②酸化③口縁-高台片④2-5mmの砂粒含む。
52H-4	陶-須恵器	— (13.4) —	フク土	口唇部の外反する須恵器と思われる。やや軟質である。	①灰白色②還元③口縁-体部片④密
52H-5	陶-須恵器	5.1(13.2) (6.2)	フク土	3に似た須恵器である。3は褐色を呈しているが、これは、灰褐色である。	①灰褐色②酸化③口縁-高台片④密
52H-6	陶-須恵器	5.7 13.2 6.4	フク土	底部糸切痕、体部口クロ整形痕、体部から高台端部までやや直線的な胴。	①灰白色②還元③ほぼ完形④異質の須恵器である。
52H-7	杯-須恵器	5.1(13.4) (5.8)	フク土	底部磨耗により切り離し方法不明。口クロ整形痕ほとんど認められず。	①灰褐色②酸化③口縁-底部片④礫石を多く含む。

第4章 検出された遺構と遺物

52号住居址出土遺物観察表(2)

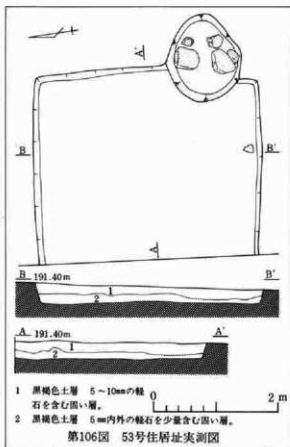
住居及び 番号	器 形	寸 法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
52H-8	杯-須恵器 イブシ	4.5(12.8) 5.6	フク土	7にはば共通しているが、全面イブシにより黒色を呈している。	①黒色②酸化③口縁-底部④礫石を多く含む。
52H-9	陶-須恵器	— (6.4)	フク土	底部回転糸切痕、付高台、残存部は少ないが、比較的ていどいに高台を付けているように思える。	①灰白色②還元③底部④密
52H-10	陶-灰輪	4.9(15.4) 7	床 面	高台部内側回転ナデ、高台部は断面三ヶ月形を呈し、ゆがんだ円形をしている。漬け掛けによる施釉。	①断面灰白、稀透明②還元③口縁-高台④密
52H-11	小型甕	—(12.2) —	フク土	「コ」の字状口縁を意識させる小型甕、器内が比較的厚くなっている。	①褐色②酸化③口縁④2-3mmの砂粒含む。
52H-12	羽 釜	—(19.6) —	フク土	直立気味の胴部が、鈎の貼付点より大きく内彎する。口唇部厚い。鈎は細長い。	①灰白色②還元③口縁部④2-4mmの砂粒含む。
52H-13	甕	—(17.4) —	フク土	器内の厚い「コ」の字状口縁の甕である。胴上部積方向へ削り、口唇部外側に凹帯が一周している。	①褐色②還元③口縁-胴部④2-5mmの砂粒含む。
52H-14	羽 釜	— (20) —	フク土	還元に近いが、やや褐色を帯びている。他の4ヶ体とちがひ、口縁部の内彎が少ない。口唇部が厚くなっている。鈎は短く、断面三角形を呈している。	①灰褐色②酸化③口縁④2-4mmの砂粒含む。
52H-15	羽 釜	—(20.4) —	フク土	12同様に直立気味の胴部が、鈎の付着点より厚くなり、大きく内彎する。口唇部はさらに厚くなり、平で内彎している。鈎は短く、上面にややそっている。	①灰褐色②酸化③口縁④2-4mmの砂粒含む。
52H-16	羽 釜	—(18.4) —	床 面	ほとんど同上、胴部がやや丸味を帯びている。鈎は断面三角形を呈している。	①褐色②酸化③口縁④2-4mmの砂粒含む。
52H-17	羽 釜	—(18.8) —	床 面	本遺跡中、最も口縁部の内彎している羽釜であり、器形変化からみて、最古の羽釜の1つであろう。口縁部は短く、強く内彎している。口唇部は他と異なり厚くなっていない。	①灰白色②還元③口縁-胴下半部④残存④2-5mmの砂粒含む。

53号住居址

位置及び 52号住居址南側に位置し、概略 耕113号、76—38グリットに属する。住居西側は発掘区域外にあるために西壁は確認出来なかった。覆土、地山の土層差が少なかったため遺構面の検出は困難であった。住居南寄りに石が床面に埋もれた状態で検出されている。

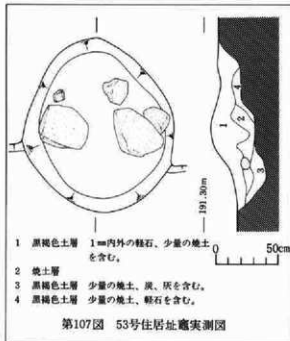
規模 東西は西側が未完掘のため不明、現状で3.07m。南北3.75m、壁高34cm。

遺物 覆土中から灰釉陶器皿・碗、酸化焰焼成羽釜、土釜、須恵器大型壁の波状口縁部破片、軟質須恵器坏底部等出土。

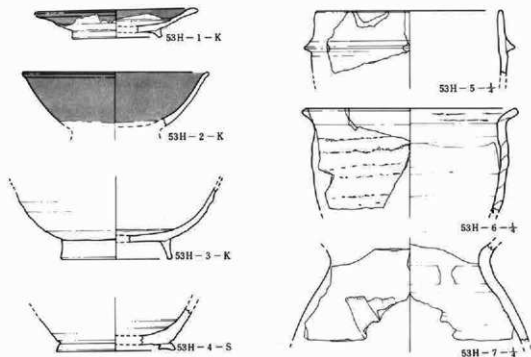


53号住居址竈

位置及び 住居東側南寄りを切り込んで構築されている。竈両袖部分に使用したと思われる付をなす石の他にも3個の石が検出された。いずれも竈構築の際に利用されたものと思われる。断面図の3層の所は竈下層となる。火を受けて焼土を少し含む。規模 掘り方で煙道方向1.38m、両袖方向1.23m、深さ34cm。遺物 出土なし。



第4章 検出された遺構と遺物



第108図 53号住居址遺物実測図

53号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
53H-1	段皿一灰釉	2.2 (13.2) (7.2)	フク土	高台部内側糸切痕はていねいに消している。漬け掛けによる施釉。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台片④密
53H-2	碗一灰釉	— (15.0) —	フク土	碗、口唇部が弱く外反する。漬け掛けによる施釉と思われる。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～体部片④密
53H-3	碗一灰釉	— — (9.0)	フク土	碗、内面に降灰による自然釉。外面残存部無釉。内面重焼痕あり。	①断面灰白、釉透明②還元③高台～体部片④密
53H-4	壺一須恵器	— — (9.4)	フク土	高台部内側糸切痕残る。台形状の高台を貼付している。	①灰白色②還元③底部片④密
53H-5	羽蓋	— (20.0) —	フク土	胴部から口縁部にかけて直立する。口縁部が長い、胴は断面三角形を呈す。	①褐色②酸化③口縁片④酸化鉄を含む。
53H-6	土蓋	— (28.0) —	フク土	胴部に深い輪轆痕残る。口縁部横十字、口唇部丸く整形。	①褐色②酸化③口縁～胴部片④酸化鉄を含む。
53H-7	甕	— — —	フク土	褐色を呈しており、胎土もよく締まっている。	①褐色②酸化③胴部付近片④密

54号住居址

位置及び 53号住居址南側、55号
概略 住居址北側に位置す
る。耕113号、76・77
—39、76—40グリット
に属する住居である。
床面には大小の石が、
数個づつまとまって数
箇所に散布していた。
床面はほぼ平らをな
す。壁は西壁が東壁よ
りわずかに短かい台形
を呈している。全面発
掘できた数少ない住居
である。

規模 東西3.40m、南北3.84
m、壁高24cm。

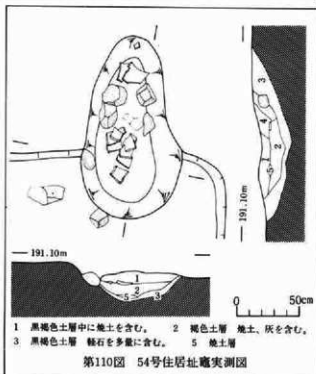
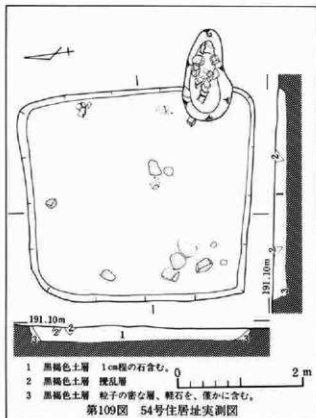
遺物 東壁近くの北寄りにま
とまって出土。覆土中
から土師質土器環、羽
釜、「コ」字口縁長甕、
灰釉陶器段皿、須恵器
杯等出土。

54号住居址竈

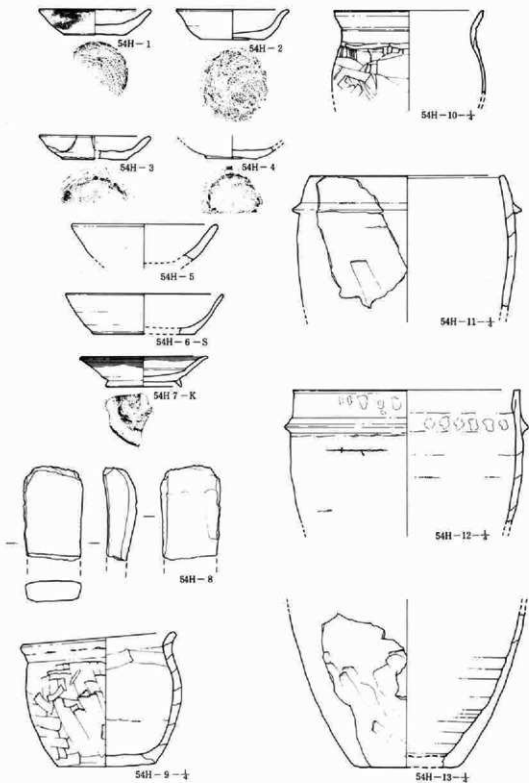
位置及び 東壁南寄りの壁を切り
概略 込んで構築されてい
る。竈内から、袖石と
して使用されたとと思
われる石4個、天井部を
覆ったと思われる丸瓦
2個を検出した。

規模 煙道方向1.46m、両袖
方向0.80m、深さ24cm。

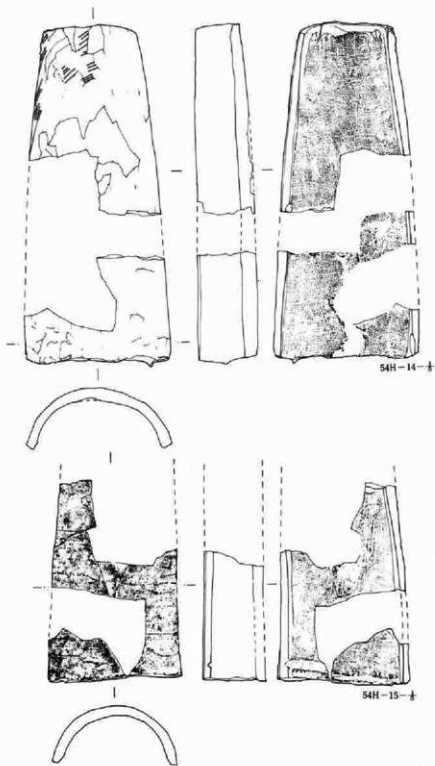
遺物 土師質土器環、羽釜等。



第4章 検出された遺構と遺物



第111図 54号住居址遺物実測図(1)

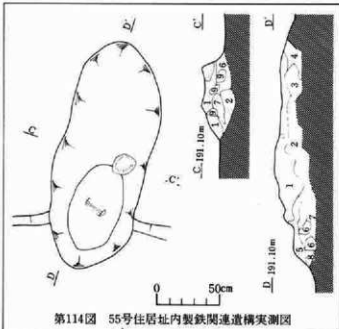
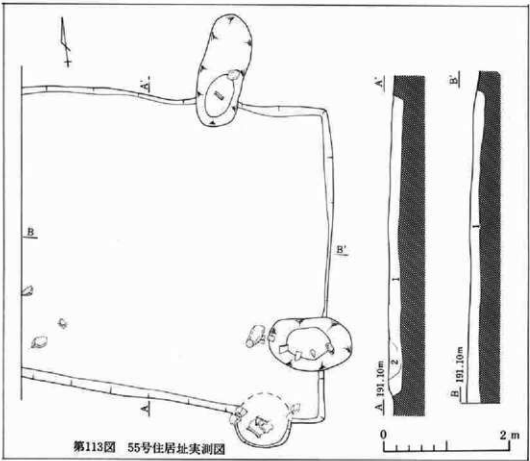


第112圖 54号住居址遺物実測圖(2)

第4章 検出された遺構と遺物

54号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地或③残存④胎土⑤備考
54H-1	皿-土師質 灯明皿	2 (9) (5)	カマド内	底部回転糸切痕、器高の低い油 環と思われる。口縁部に油煙の 付着が残る。	①灰褐色②酸化③口縁~底部④ 密
54H-2	皿-土師質	2.4 9 5	カマド内	底部右回転糸切痕残る。口縁部 がやや外反する。	①褐色②酸化③口縁~底部④酸 化鉄含む。
54H-3	皿-土師質	1.9 (9) (5)	フク土	1に似た器形、1に比較して底 部がやや薄い。	①灰褐色②酸化③口縁~底部④ 酸化鉄含む。
54H-4	皿-土師質	— — (4)	カマド内	2に似た器形、底部右回転糸切 痕残る。	①褐色②酸化③底部④酸化鉄含 む。
54H-5	杯-土師質	— (11.8) —	フク土	内外面横ナデ、器高の低い筒。	①褐色②酸化③口縁④密
54H-6	杯-須恵器	3.2(12.6) (8.2)	フク土	器高の低い、地締のある須恵器 杯、9世紀代のもので、混入品 と思われる。	①灰白色②還元③口縁~底部④ 2~3mmの砂粒含む。
54H-7	段皿-灰釉	2.4(10.2) (6.2)	フク土	高台部内側右回転糸切痕残る。 段部の削込み少ない。漬け掛け による施釉。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁 ~高台④密
54H-8	砥石	— — —	フク土	壁面近くより出土、規格的な ない形を呈している。	①灰白色④密
54H-9	小型甕	13.8(16.1) (10.6)	フク土	板状の底部の上に粘土を積み上 げている。外面へラ削り、口縁 横ナデ。	①褐色②酸化③口縁~体部④欠損 ③~5mmの砂粒含む。
54H-10	甕	— (16) —	フク土	「コ」の字状口縁甕、混入品と 思われる。	①褐色②酸化③口縁④密
54H-11	羽蓋	— (20.8) —	フク土	口縁部が長く、口唇部丸い整形、 跨は小さく、軸で簡単につけて いる。	①褐色②酸化③口縁~体部④3 ~5mmの砂粒含む。
54H-12	羽蓋	— (24.2) —	カマド内	口縁部直立している。口唇部水 平になる。跨は小さく、断面三 角形を呈する。	①褐色②酸化③口縁~体部④ 長石と2mmほどの砂粒を含む。
54H-13	甕	— — —	フク土	外面へラ削り、内面横ナデ、胎 土、器形が異質である。	①褐色②酸化③胴中央~底部④
54H-14	丸瓦	— — —	カマド内	丸瓦で表面素文、へラ削りによ り整形している。内面布目、布 の重ね痕残る。	①灰褐色②酸化③④3~4mmの 砂粒含む。
54H-15	丸瓦	— — —	カマド内	丸瓦で表面素文、横方向のナデ、 内面 目痕。	①灰白色②還元③④3~5mmの 砂粒含む。



住居址内、土層説明

- 1 茶褐色土層 粒子密な層。
- 2 茶褐色土層 粘土密で粘質。

製鉄関連遺構、土層説明。

- 1 黒褐色土層 焼土、鉄滓を含む。
- 2 黄褐色土層 溶床が絶えている。
- 3 灰層
- 4 炭層
- 5 黒褐色土層 1cm内外の軽石、鉄滓を含む。
- 6 地土層
- 7 地土と鉄滓の層
- 8 黒褐色土層
- 9 鉄滓

第4章 検出された遺構と遺物

55号住居址

位置及び概略 54号住居址南側、56号住居址北側に位置し、耕113号、76-41・42、77-41・42グリットに属する。東壁を切り込んで竈が構築されており、北壁中央から東寄りに製鉄関連遺構検出される。貯蔵穴らしき土壇が南壁東寄りに構築されている。遺構の規模・面積は当遺跡中最大になる特殊な住居址である。遺構の西側は発掘区域外で西壁は確認されていない。床面はほぼ平らをなし、西南端には石が数個、竈手前にはやや大きな石が検出されている。製鉄関連遺構と竈を持つ住居が同時期に使用されていたとは考えにくい。このことにより当遺構は、廃棄された住居を使用した製鉄関連遺構である可能性が高い。

規模 東西は現状で4.9m、南北は5m、壁高約18cm。

遺物 覆土中から内黒陶、灰釉陶器片等出土。

製鉄関連遺構

位置及び概略 55号住居北壁中央部を北へ深く切り込んで構築されている。鉄滓が住居床面北側に多量に散乱していた。断面図に示したごとく、先端の北側に炭層、次に灰層となり本体の置かれていたと思われる多量に焼けて焼土の多い部分へと続く。この部分は住居内部に向い下

方へ傾斜、その先端に多くの鉄滓を含む層へと続く。竈の羽口が、焼土を多量に含む層の南側、鉄滓を多く含む層の上方に出土した。又、その位置は本遺構の掘り方底部分、楕円形状土壇のほぼ中心にあたる。

規模 長軸方向1.53m、短軸方向0.75m、cm。

遺物 竈の羽口、多量の鉄滓、炉体等。

55号住居址竈

位置及び概略 東壁中央からやや南寄りを切り込んで構築されている。竈内から石が3個検出された。住居内に竈の大部分が構築されていた。

規模 煙道方向1.36m、両袖方向0.87m、壁高18cm、深さ28cm。

遺物 灰釉陶器段皿出土。

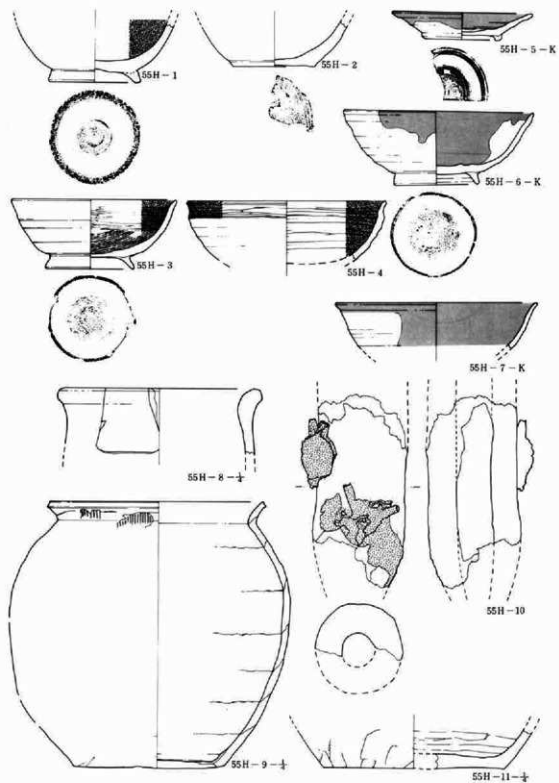
55号住居址土壇

位置及び概略 住居南壁東寄りの壁を半円形に切り込んで土壇が掘られている。土壇の底部分と住居址床面とは同じレベルであり、また覆土その他においても両者の境を検出することは出来なかった。特異ではあるが住居に伴う貯蔵穴としての可能性が考えられる。

規模 東西90cm、南北88cm、深さ7cm。

遺物 土壇内部に、口縁部から底部にかけて残存する土釜、及びその底部出土。

第1節 住居址



第115图 55号住居址遺物実測図

第4章 検出された遺構と遺物

55号住居址出土遺物観察表

住居及び番号	器形	寸法(m) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
55H-1	甕-土師質 内黒	— — 7.4	フク土	高台部は断面四角形を呈し、ていねいに貼付られている。内面は全面でいねいに磨かれており、内黒となっている。	①灰褐色②酸化③高台～底部残存④1～2mmの砂粒含む。
55H-2	杯-土師質	— — (6.6)	フク土	底部回転糸切痕残る。内外面横ナデ。	①褐色②酸化③底部～体部写④酸化鉄含む。
55H-3	甕-土師質 内黒	5.5(13.8) 7	フク土	高台部は細長い、高台部内側にわずかに回転糸切痕を残す。内面はへら磨きにより内黒処理されている。	①灰褐色②酸化③口縁～体部写④欠損⑤書
55H-4	甕-土師質 内黒	— (16) —	フク土	底部はないが、高台付甕と思われる。内面横方向へら磨き後、内黒処理されている。口唇部がやや外反する。	①褐色②酸化③口縁写④密
55H-5	段皿-灰釉	2.2 (11.2) 6.4	カマド内	高台部内側はナデによる整形、幅のある高台を貼付、内側段部は弱い削り込みである。漬け掛けによる施釉。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台写④密
55H-6	甕-灰釉	5.9 15.6 6.8	フク土	高台部内側に右回転と思われる糸切痕残る。漬け掛けによる施釉であり内側に一部流れ落ちている。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台写④密
55H-7	甕-灰釉	—(16.2) —	フク土	高台付の甕。内面灰釉。外面は一部のみの施釉である。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁体部写④密
55H-8	小型甕	— 22 —	カマド内	口縁部が弱く外反し、太く、全体に丸味を持つ。	①褐色②酸化③写④寧ろ
55H-9	甕	28.4 23.2 16.6	土城内	円板状の底部上に輪積みにより胴部を作っていたと思われる。口唇部は平に切られて外反している。外面弱いナデ、口唇部横ナデ、口縁部内側表面割離。	①灰褐色②酸化③口縁～底部写④2～4mmの砂粒含む。
55H-10	羽口	— — —	窯体内	輪の羽口である。先端に近くにガラス質の溶体が多く付着している。その部分はやや細くなっており、羽口自体も一部溶けている。	①灰褐色②やや酸化④1～2mmの砂粒、ヌサを含む。
55H-11	甕	— — (19.2)	土城内	底部に石英、長石、雲母等の砂を付着。外側下半部にも同様に付着。内面ナデ。	①灰褐色②酸化③底部写④3～5mmの砂粒含む。

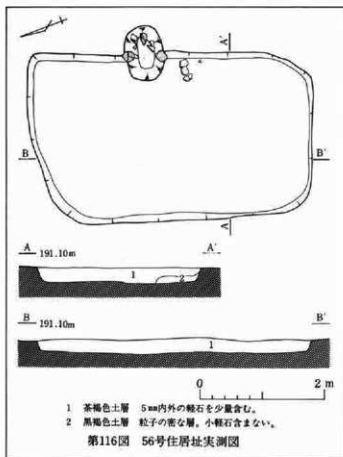
56号住居址

位置 55号住居址南側、2・及び 3号土塚の北側に位置

概略 する。耕113号、76—42・43、77—42・43グリットに属する。細長い方形を呈する特異な形の住居である。長方形の長辺東壁中央部に竈を持っている。

規模 東西2.76m、南北4.56m。壁高24cmを計る。

遺物 覆土中から、羽釜、土師質土器碗。灰釉陶器碗、その他、墨書の土師質土器等出土。



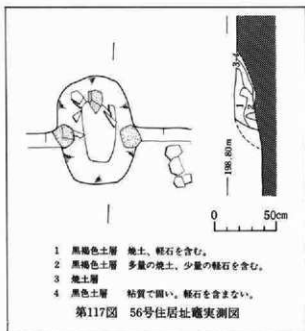
56号住居址竈

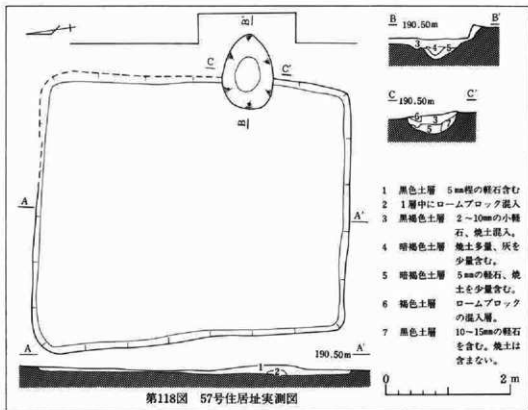
位置 住居東壁中央部を切り及び 込んで構築されている。

概略 焚口の両隅に袖石が検出された。石は使用時の位置に各1個ずつ直立して組み込まれていた。熱焼部に焼土層が良好な状態で残っていた。

規模 煙道方向90cm、両袖方向63cm、深さ18cm。

遺物 竈内部から羽釜の口縁や胴部の破片等出土。また住居址床面の遺物と接合関係が認められた。





57号住居址

位置及び 2号土壇・3号土壇南側、13号溝概略 北側に位置する。耕113号、77-46・47、78-46・47グリットに属する。遺構確認面と床面との差が少なく遺存が悪かったため不明な点が多い。住居は南北が長く、比較的大きめの方形を呈する。東側に竈を検出したが、竈周辺以外の東壁遺存状態は特に不良であった。

規模 東西4.07m、南北5.10m。壁高7cm。当遺跡内では、規模が大きい。

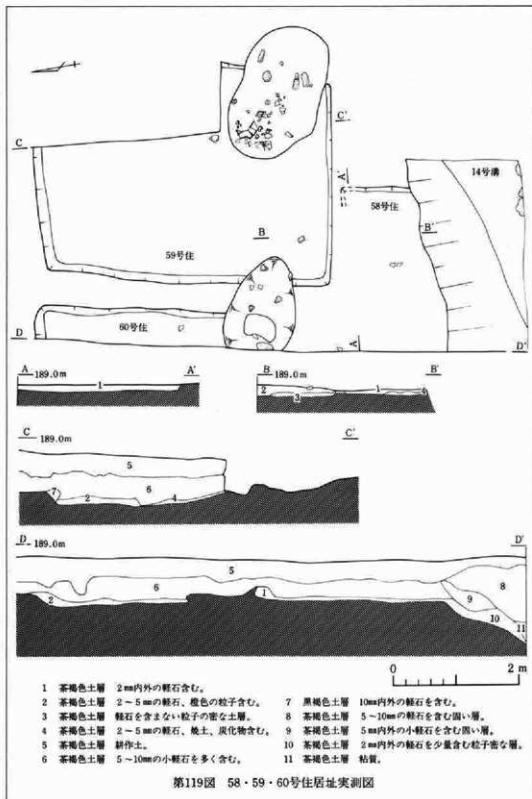
遺物 覆土中から須恵器環壺が出土している。

57号住居址竈

位置及び 住居東壁南寄りを切り込んで構架概略 されている。竈煙道先端の一部が発掘区域外にあたるため、東側を部分的に拡張して発掘した。表土面から竈確認面まで20cm程で浅いため遺存状態は悪い。竈内に焼土や炭等が認められた。煙道部の遺存も良くない。

規模 煙道方向で1.21m、両袖方向で0.83m深さ32cm。

遺物 竈内には全く認められない。



第4章 検出された遺構と遺物

58号住居址

位置及び 59・60号住居址の南側に位置し、概略 竪113号、76-55・56、77-55・56グリットに属している。住居南側は大部分を14号溝に切られており、北側は59・60号住居址と接している。さらに西側は発掘区域外であったため住居の一部しか検出できなかった。

規模 東西、南北共に不明である。

遺物 覆土から器厚の薄い斐胴部破片、土師質土器の施、灰釉陶器の碗破片等出土。

59号住居址

位置及び 58号住居址の北側、60号住居址の概略 東側に位置し、竪113号、77-54・55グリットに属する。遺構の東側半分が発掘区域外であったが竈部分は特に拡張して調査した。竈は住居東壁南寄りを切り込んで構築されており、遺存状態は比較的良好である。竈手前から、床面北側にかけて「コ」の字状口縁を持つ甕がつぶれたように重なって出土した。竈と比較すると、住居址の床面や壁面の状態は悪く、特に床面は凸凹が残り、良い状態での検出はできなかった。

60号住居址

位置及び 59号住居址西側に位置する。住居概略 は東壁及び竈をのぞいて、西壁・南北壁を含む大半が発掘区域外となるため全容は不明である。遺存している竈は、59号住居址同様に比較的大型であり良好な状態である。煙道部分は59号住居址の床面と壁面を切り込んで構築されている。

規模 住居址西側部分は発掘区域外のため未完掘である。東西は不明、現状で0.57m。南北は推定4m。壁高は20cm。

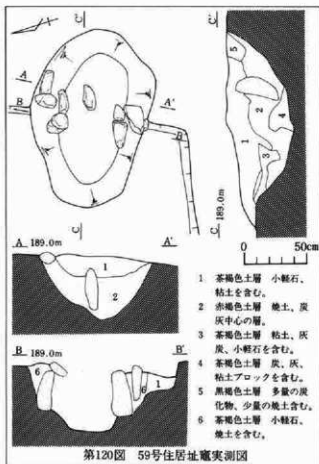
遺物 覆土中から、内黒施、須恵器杯、灰釉陶器碗等を出土している。

59号住居址竈

位置及び 住居東壁の南端部分を概略 壁に直交するように、卵形に掘り込む。両袖、天井部などを含む竈壁は、粘土によって本体を構築している。焚口の内側には河原石を左右に2個づつ並べて竈の補強とし、中央には細長い石を立て支脚とする。焚口部は壁よりも少し外側になる。

規模 掘り込みは煙道方向が1.50m、両袖方向1.00m、深さ床面下27cm。

遺物 竈内から、「コ」字状口縁を呈する甕口縁部破片が出土。

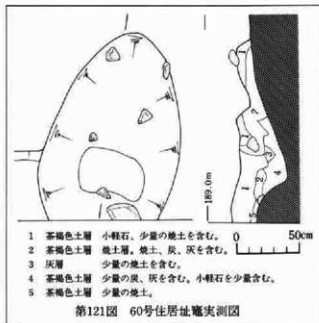


60号住居址竈

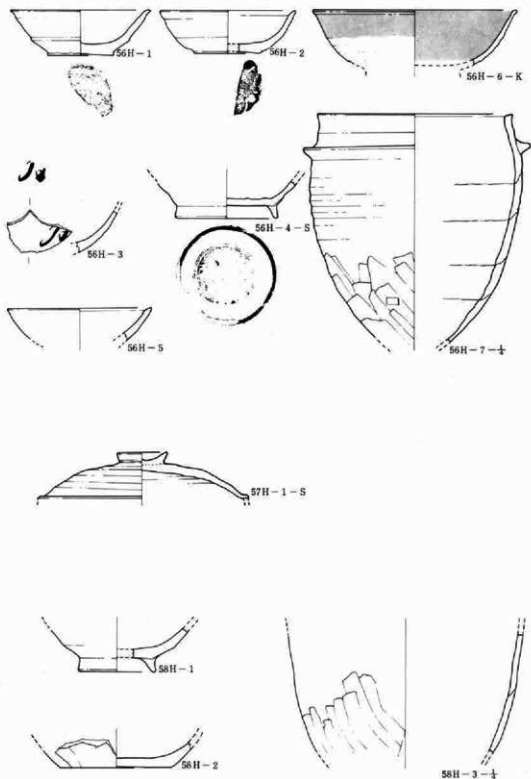
位置及び 住居東南端部を卵形に概略 掘り込んで構築されている。粘土を用いて竈を築いたと思われるが遺存状態が不良のため、構造は明らかでない。

規模 煙道方向は現状1.26m、両袖方向1.10m、深さ22cm。

遺物 竈内部から、土師質土器碗、羽釜等出土。



第4章 検出された遺構と遺物

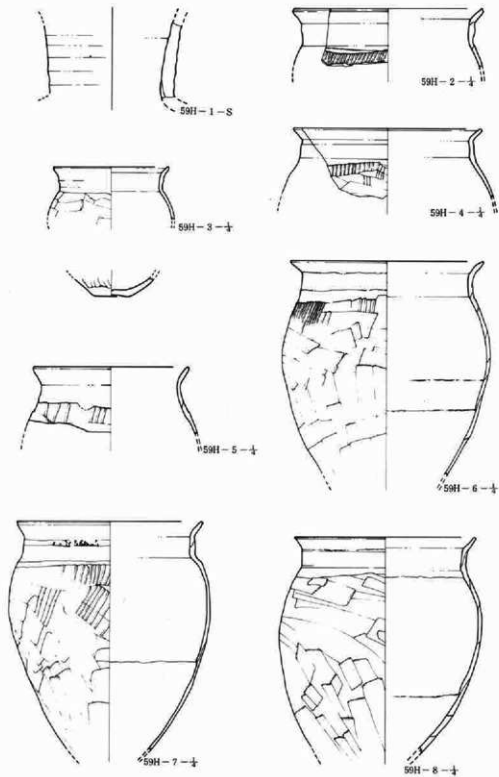


第122図 56・57・58号住居址遺物実測図

56・57・58号住居址出土遺物観察表

住居及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
56H-1	杯-土師質	3.6(11.2) (5.4)	カマド内	底部回転糸切痕、体部ロクロ目、 底部の厚い糸切が行なわれている。 そのため体部下端と底部との間に段を持つ。	①灰白色②還元③口縁～底部ㄥ④密
56H-2	杯-土師質	3.4(10.8) (5.6)	フク土	底部右回転糸切痕、底部の厚い 糸切が行なわれている。そのため 体部下端と底部との間に段を持つ。	①灰白色②還元③口縁～底部ㄥ④密
56H-3	杯-土師質 墨書	— — —	フク土	墨書のある土師質土器である。 1、2に似た杯と思われる。	①灰白色②還元③体部の一部のみ 残存④密⑤文字の解説は出来ない。
56H-4	甗-須恵器	— — 8.2		高台部内側右回転糸切痕残る。 高台はていねいに貼付、他からの 混入品と思われる。	①灰白色②還元③底部高台ㄥ残存 ④密
56H-5	杯-土師質	—(11.6) —	フク土	1・2に似た土師質土器杯と思 われる。内外面横ナデ	①灰褐色②酸化③口縁ㄥ④密
56H-6	甗-灰釉	—(16.4) —	フク土	高台付甗と思われる。施釉は内 側全面外側口縁部全面になされて いる。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁 ㄥ④密
56H-7	羽蓋	—(20.8) —	カマド内	本遺跡中、最も残りの良い羽蓋。 胴部から直立気味に口縁部に至 る。口縁部も長くなっている。 円断面は三角形。	①褐色②酸化③口縁ㄥ底部欠損④ 1～3mmの砂粒を含む。
57H-1	蓋-須恵器	つまみ 4.0 口径(17)	床 面	須恵器坏蓋である。つまみ貼付 面に糸切痕残る。その面より下 はへら削り、内面に重焼痕が認 められる。	①灰青色②還元③全体ㄥ残存④密
58H-1	甗-土師質	— — 6.2	フク土	高台がていねいに貼付られてい る。内面に少々炭素の吸着があ るが、内黒ではない。	①灰褐色②酸化③底部～体部ㄥ④密
58H-2	甗	— —(11.8)	フク土	粘土、表面の色等よりみて、平 安時代中期の土質群と異なると 思える。混入品。	①赤褐色②酸化③底部ㄥ④密
58H-3	羽蓋	— — —	フク土	胴部横ナデ、胴下半部へら削り、 内面全面横ナデ。	①灰褐色②酸化③胴部ㄥ④2～4 mmの砂粒含む。

第4章 検出された遺構と遺物

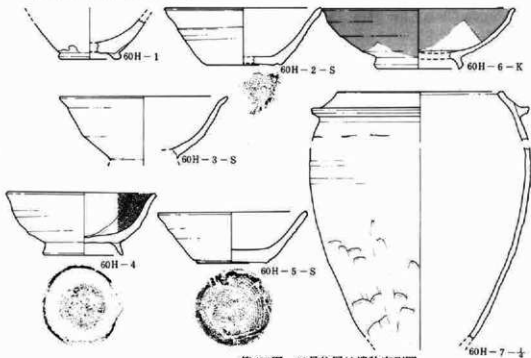


第123図 59号住居址遺物実測図

59号住居址出土遺物観察表

住居及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
59H-1	壺・須恵器	— — —	フク土 98-15グ リット	壺の頸部と思われる。小さな破片のためくわしい内容は不明、内外面横ナデ、胴部との付け根の接合痕が残る。	①灰白色②還元③頸部欠④密
59H-2	壺	—(20.2) —	カマド内	「コ」の字状口縁壺、口唇部直立気味に立ち上がる。肩部横方向へラ削り、内面ナデ。	①褐色②酸化③口縁欠④密
59H-3	小型壺	—(12.4) 3.8	カマド内	「コ」の字状口縁小型壺、肩部左方向へラ削り、口唇部丸くやや直立気味になる。	①褐色②酸化③口縁欠底部残存④密
59H-4	壺	—(20.2) —	カマド内	「コ」の字状口縁壺、2にはほとんど共通、口唇部内側に弱い凸帯が走る。	①褐色②酸化③口縁欠④密
59H-5	壺	—(16.6) —	カマド内	「コ」の字状口縁壺、肩部左方向へラ削り、「コ」の字状の区画のやや弱い口縁を呈している。口唇部が他と比較すると厚くなっている。	①褐色②酸化③口縁欠④密
59H-6	壺	—(19.4) —	カマド内	「コ」の字状口縁壺、肩部左方向へラ削り器内は約2mmと薄い。口唇部外側に凹帯が一層している。内面全面横ナデ。	①褐色②酸化③口縁～胴下分部分欠④密
59H-7	壺	—(19.8) —	カマド内	「コ」の字状口縁壺、肩部左方向へラ削り、胴中央部左上方向へラ削り、胴下半部下方向へのへラ削りがなされて、2mmの器内の薄さで仕上げている。	①褐色②酸化③口縁～胴下半部分欠④密
59H-8	壺	—(20.6) —	カマド内	「コ」の字状口縁壺であるが、「コ」の字状の区画が5と同様弱い、肩部左方向へのへラ削りも認められない。他の5個体とは少し異なる整形が認められる。	①褐色②酸化③口縁～胴下半部分欠④密

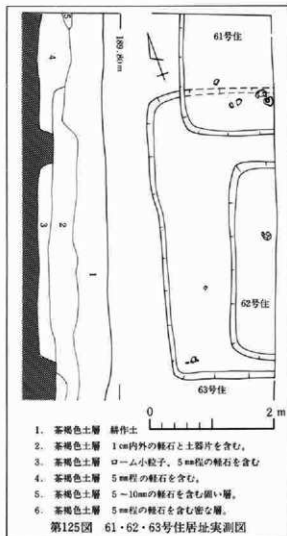
第4章 検出された遺構と遺物



60号住居址出土遺物観察表

第124図 60号住居址遺物実測図

住居及び 番号	器形	寸法 (cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
60H-1	甕一土師質	— — (7.0)	カマド内	底径が小さな甕である。胎土、色調からみて、混入品の可能性大。	①褐色②酸化③底部④密
60H-2	杯一須恵器	4.5 (12.6) (6.2)	カマド内 フク土	褐色を呈しているが、器形上須恵器杯として扱う。内外面滑ナデ。	①褐色②酸化③口縁～底部④密
60H-3	甕一須恵器	— (12.0) —	フク土	小さな破片である。やや焼締がある。口唇部大きく外反する。	①灰白色②還元③口縁～底部④2～3mmの砂粒含む。
60H-4	甕一土師質 内黒	(5.0) (12.1) (6.4)	フク土	高台部内側ナデにより整形。丁寧に高台付ける。内側滑滑仕上げ内黒。	①灰褐色②酸化③口縁④欠損⑤密
60H-5	杯一須恵器	(4.1) (12.0) (5.9)	フク土	2に似た器形。底部右側転糸切痕残す。軟質で一部分イブシがかっている。	①灰白色②還元③④③～4mmの砂粒を含む。
60H-6	甕一灰釉	4.8 (15.4) (7.0)	フク土	高台部断面三ヶ月形を呈す。施釉は濃げ掛けによると思われる。	①断面灰白、無透明②還元③口縁～高台④密
60H-7	羽蓋	— (16.4) —	カマド内 フク土	口縁部短く、大きく内湾しており、古い様相を示す。肩はやや下方へのびる。	①灰褐色②酸化③口縁～胴下半部④3mmの砂粒を含む。



61号住居址

- 位置及び** 43号住居址北側に位置し、耕 113号、77-56グリットに属す。3軒の重複住居址の1軒で、南側部分が63号住居址に切られている。
- 規模** 北東部が発掘区域外、現状で南北2.0m、東西1.5m。壁高22cm。
- 遺物** 覆土中から、鉄製品の海老錠、土師質土器碗、須恵器環等出土。

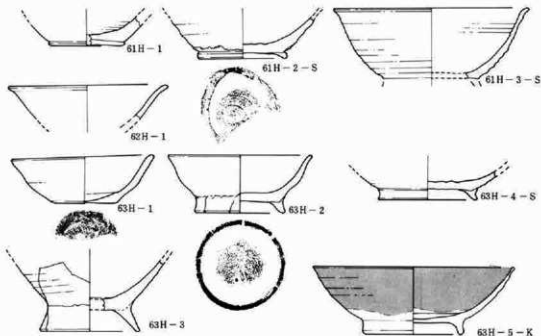
62号住居址

- 位置及び** 61号住居址南側に近接している。
- 概略** 耕113号、77-57グリットに属する。63号住居址の直下にあたり、住居址上面はすべて63号住居址に削りとられていた。小さな住居址である。
- 規模** 東側未完掘、東西は現状で0.70m、南北3.10m、壁高20cm。
- 遺物** 覆土中から、土師質土器碗出土。

63号住居址

- 位置及び** 61号住居址南側に位置し、
- 概略** 62号住居址の上部に構築されている。耕113号、77-57・58グリットに属する。61・62号住居址と比較すると大型の住居で、重複関係から2軒の住居より新しい。住居址東側の半分以上が、発掘区域外にあたるために遺物の検出できなかった。西壁の北側部分には僅かではあるが張り出しが認められた。
- 規模** 住居址東側部分未完掘。東西は現状で1.85m、張り出し部の東西は2.08m、南北は4.07m、壁高は18cmを計る。
- 遺物** 覆土中から土師質土器碗、灰釉陶器碗等出土。

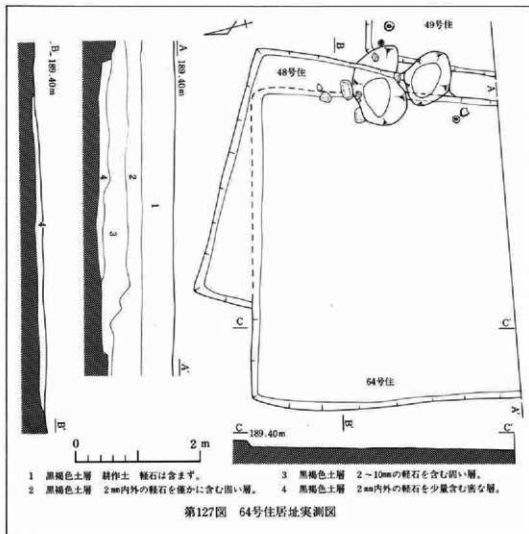
第4章 検出された遺構と遺物



61・62・63号住居址出土遺物観察表

第126図 61・62・63号住居址遺物実測図

住居及び番	器形	寸法(m) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
61H-1	陶-土師質	— — (6.2)	フク土	底部回転糸切痕残。底部の厚い所。	①褐色②酸化③底部欠④密
61H-2	陶-須恵器	— — (7.2)	フク土	高台部内側ナデ整形。高台は雑につけてある。	①灰白色②還元③底部欠④密
61H-3	陶-須恵器	— (15.6) —	フク土	器高の高い碗。口唇部弱く外反する。	①灰白色②還元③口縁-体部欠
62H-1	陶-土師質	— (12.6) —	フク土	口唇部が弱く外反する碗である。	①褐色②酸化③口辺部欠④密
63H-1	陶-土師質	3.7(11.2) (5.2)	床 面	底部周辺が炭素吸着により黒色を呈す。	①灰白色②還元③口縁-底部欠
63H-2	陶-土師質	4.6(11.6) 7.2	床 面	典型的な土師質土器碗。42号住の12によく似ている。高台部内側ナデ。	①褐色②酸化③口縁-高台欠④密
63H-3	陶-土師質	— — (8)	フク土	42号住出土の22に似る。	①灰褐色②酸化③底部欠④密
63H-4	陶-須恵器	— — (7.8)	フク土	底径の大きな地輪のある碗。混入品。	①青灰色②還元③底部欠④密
63H-5	陶-灰釉	5.4(16.2) 7.6	床 面	高台部内側ナデ。高台部は丸く仕上げている。底部内外面以外地輪されている。	①断面灰白。輪透明②還元③口縁-体部欠欠損④密



64号住居址

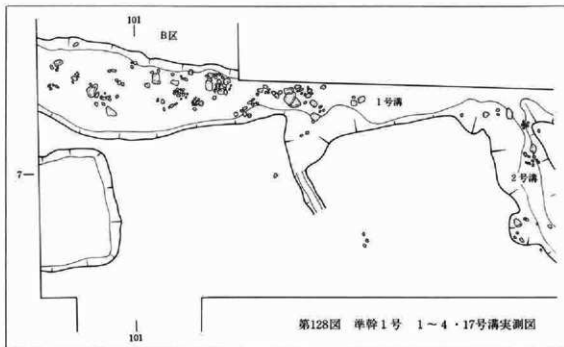
位置及び概略 48号住居址、49号住居址、64号住居址の3軒重複住居で、綽113号、97-33・34グリットに属す。当住居は49号住居址床面の一部を切って竈を構築し、48号住居址にはその竈の一部から切られている。48号住居址の床面は、当住居の床面をほとんど利用している。49号→64号→48号の順に構築されたこ

とが示される。遺構の遺存状態は悪く、竈の基部と煙道部、住居址西壁が僅かに形態をとどめた。竈内に多量の焼土が残り、抽石と思われる石が2個、その他に石が4個竈手前に検出されている。

規模 東西4.82m。南北は南側未完掘のため不明、現状で4.36m。壁高8cm。

遺物 須恵器甕と羽釜の破片出土。

第2節 溝・古墳



1号溝

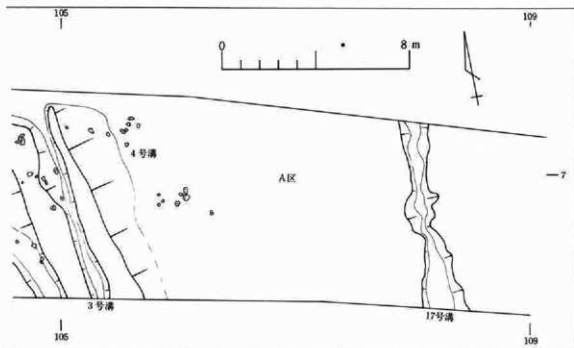
位置及び概略 単幹1号に位置する。東西に走る幅が広く浅い溝である。溝から南側の地域は竪穴住居址が多く検出されているが北側からは確認されていない。この溝によって、生活区域の区割がなされていることを示している。溝の覆土は、酸化鉄を帯びた川砂で褐色土層を呈す。覆土からは川砂に混じって多量の遺物が出土した。遺物の中には、川砂に含まれる酸化鉄を付着している土器破片が検出された。溝北側壁面の中央から東寄りには未発掘である。100-5・6・7、101-6・7、102-7・8、103-7・8、104-7、105-7グリットの広範囲に属している。

規模 溝の長さは、最終地点が未発掘で不明である。幅は発掘範囲内で3.06m。深さ60cm。

遺物 遺物集中度の高い地点では、覆土の半分が土器であった。その多くは、小さな破片で総数は数万個の破片になるであろう。土師質土器の環と碗が特に多い。更に当遺跡の特徴である灰釉陶器や緑釉の破片が多量に出土している。

2号溝

位置及び概略 1号溝から南北に走る浅い溝である。103-7、104-7・8グリットに属す。覆土中には酸化鉄を帯びた川砂や鉄分が付着した遺物が認められた。



規模 幅は東西1～2m。深さ20～30cm。概略 8グリットに属す。傾斜面に南北に走る小さな溝で、傾斜の最も下の部分を含めた範囲である。

遺物 土師質土器の坏・甕等出土。

3号溝

位置及び 2号溝と4号溝の間、104-7・8、105

概略 一8グリットに属す。自然地形の傾斜が2号溝付近から東へ向って落ちている。溝は数回にわたり流路を変えているらしく、川砂の在り方、溝の上幅等に違いが認められる。溝の覆土には酸化鉄を帯びた川砂が認められ、多量の石や遺物が検出された。

規模 東西1.2～1.8m。深さ20～30cm。

遺物 土師質土器の坏・甕等出土。

4号溝

位置及び 3号溝東側に位置し、104-7、105-7・

規模 東側が傾面の底部で、長さ・幅不明。

遺物 土師質土器が1号溝近くに多く出土。

17号溝

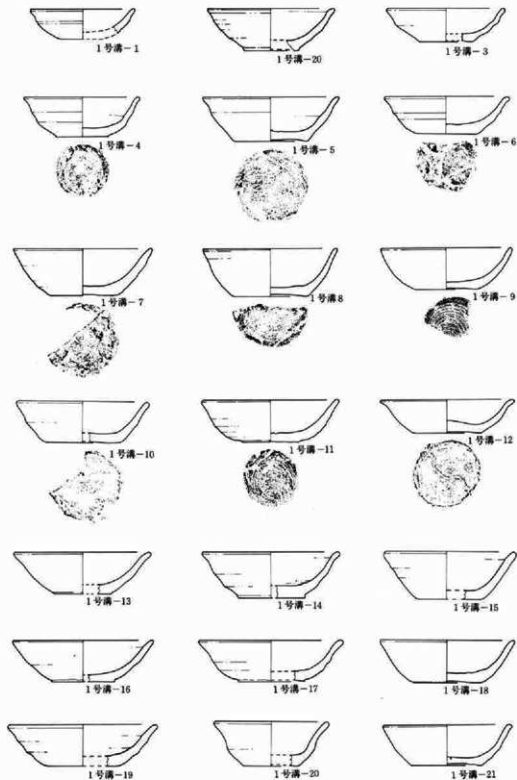
位置及び 1～4号溝の東側、自然地形で一段

概略 低い地域にあたり、107-7・8、108-7・8グリットに属す。1～4号溝と一連の溝であり覆土に酸化鉄を帯びた川砂を多量に含む。単幹1号の遺物はこの溝の境に、東側にはほとんど出土しなくなる。

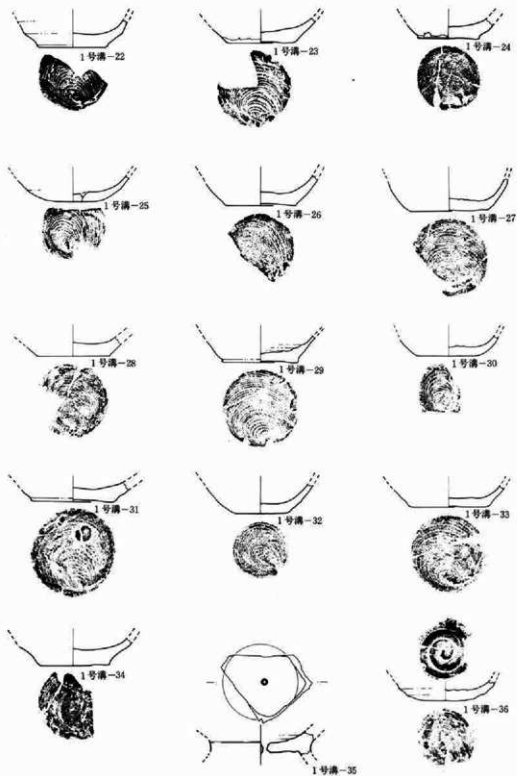
規模 幅0.9～1.2m。深さ20cm。

遺物 土師質土器の甕、灰粘陶器甕・耳皿。

第4章 検出された遺構と遺物

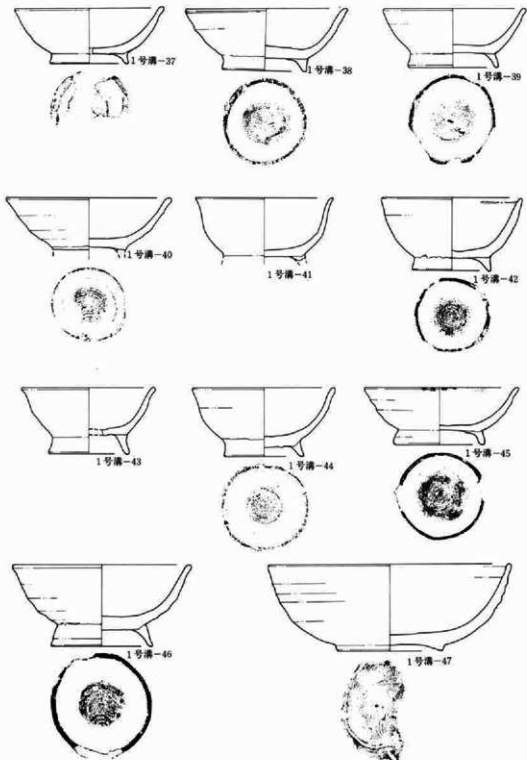


第129図 準幹1号・1号溝遺物実測図(1)

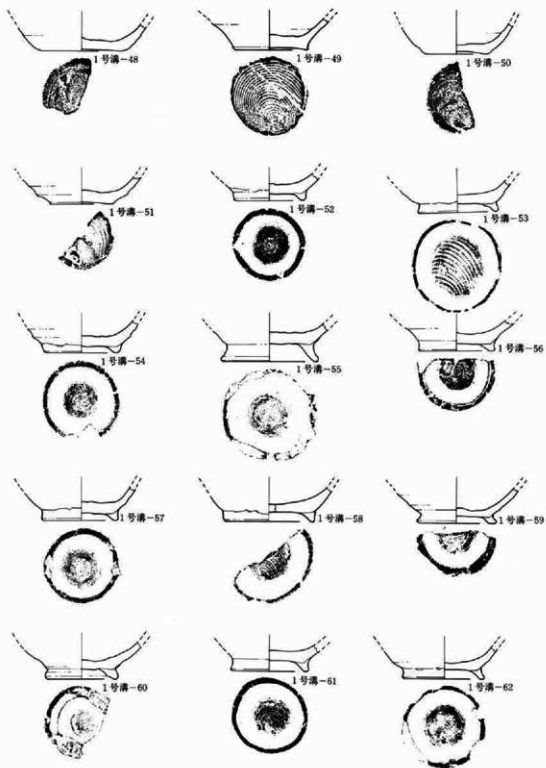


第130図 準幹1号・1号溝遺物実測図 (2)

第4章 検出された遺構と遺物

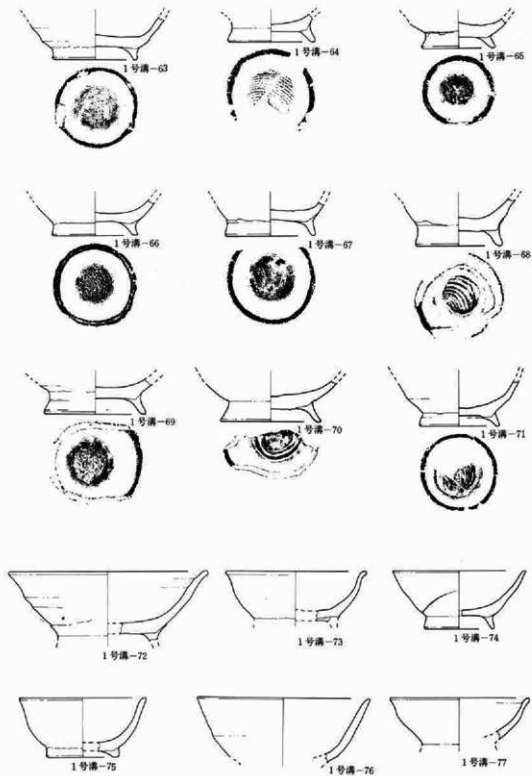


第131図 単幹1号・1号溝遺物実測図(3)

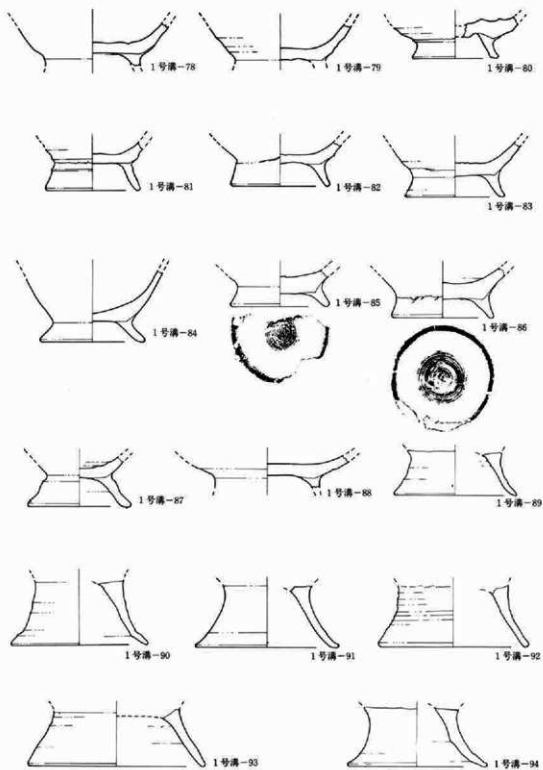


第132図 単幹1号・1号溝遺物実測図(4)

第4章 検出された遺構と遺物

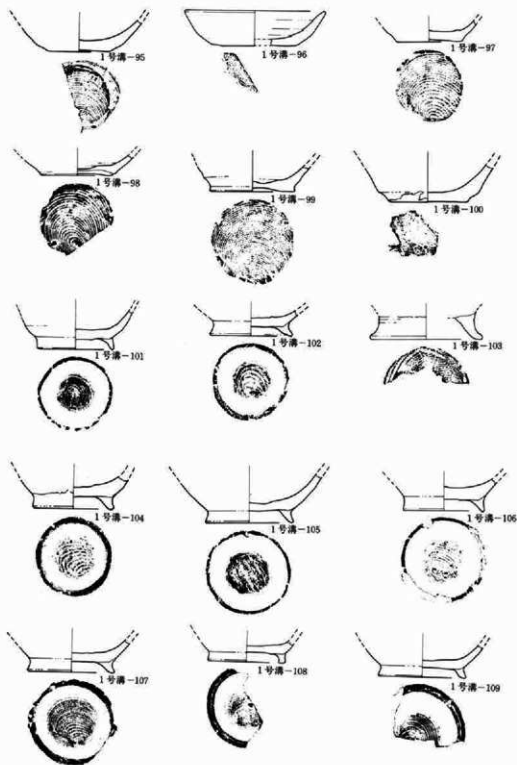


第133図 単幹1号・1号溝遺物実測図(5)

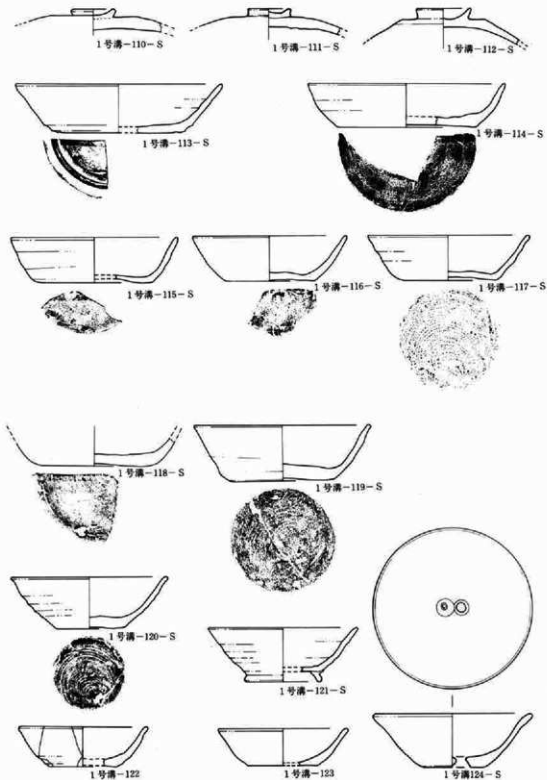


第134圖 単幹1号・1号溝遺物実測図 (6)

第4章 検出された遺構と遺物

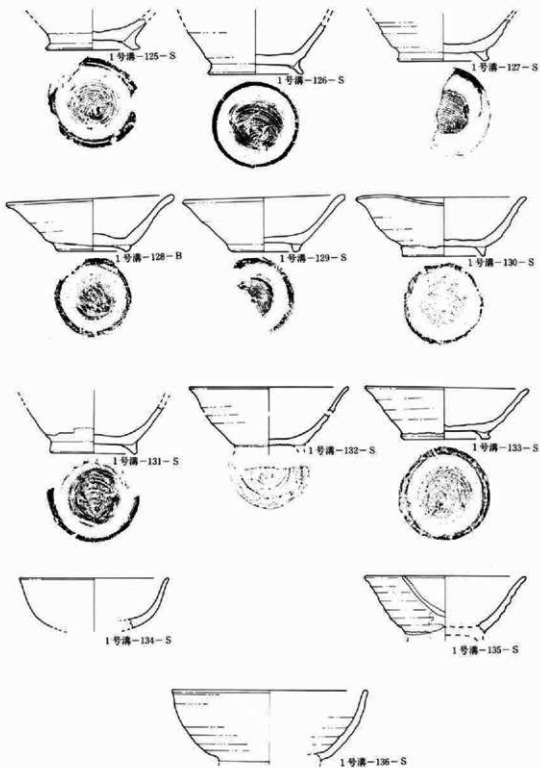


第135図 準幹1号・1号溝遺物実測図 (7)

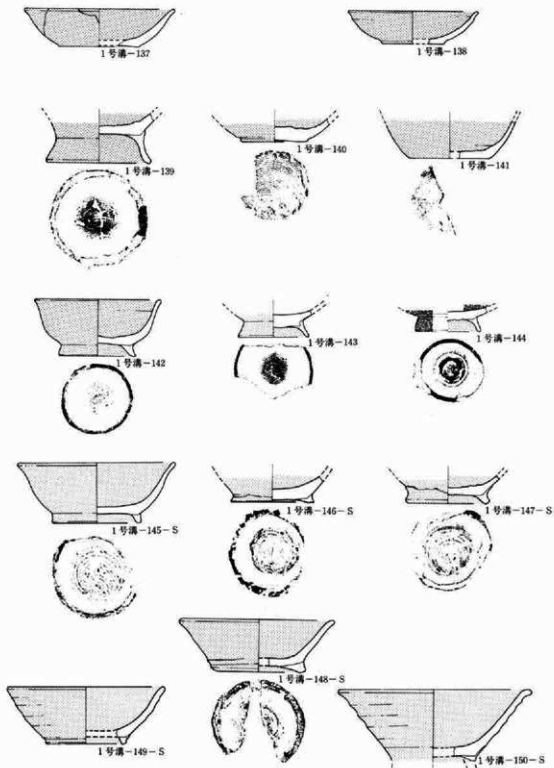


第136図 準幹1号・1号溝遺物実測図(8)

第4章 検出された遺構と遺物

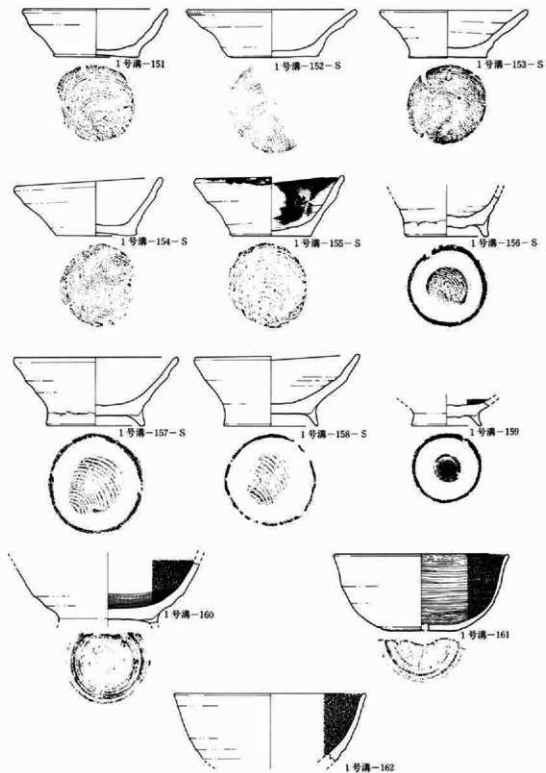


第137図 準幹1号・1号溝遺物実測図 (9)

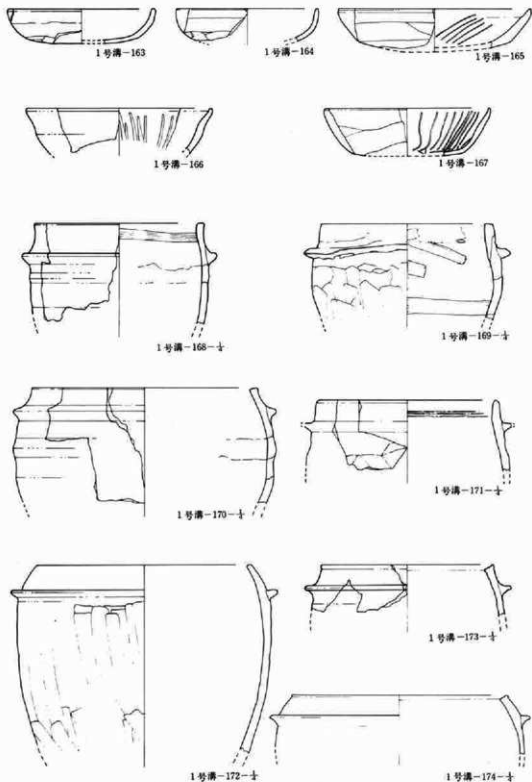


第138図 準幹1号・1号溝遺物実測図(10)

第4章 検出された遺構と遺物

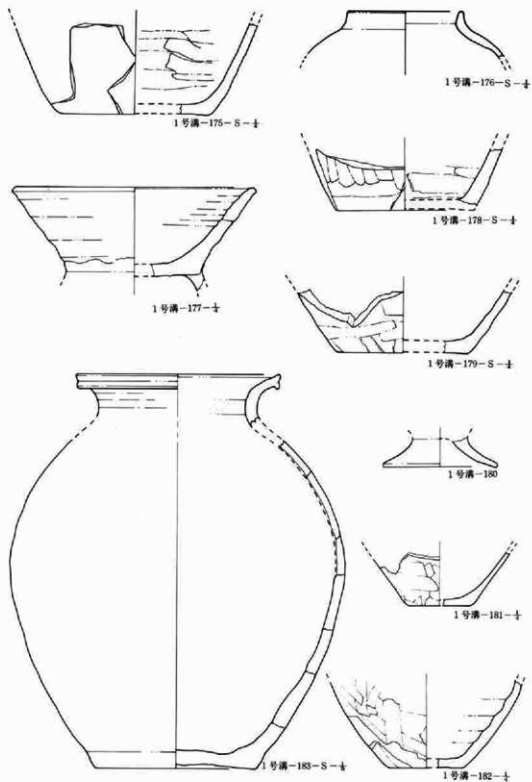


第139図 単幹1号・1号溝遺物実測図 (1)

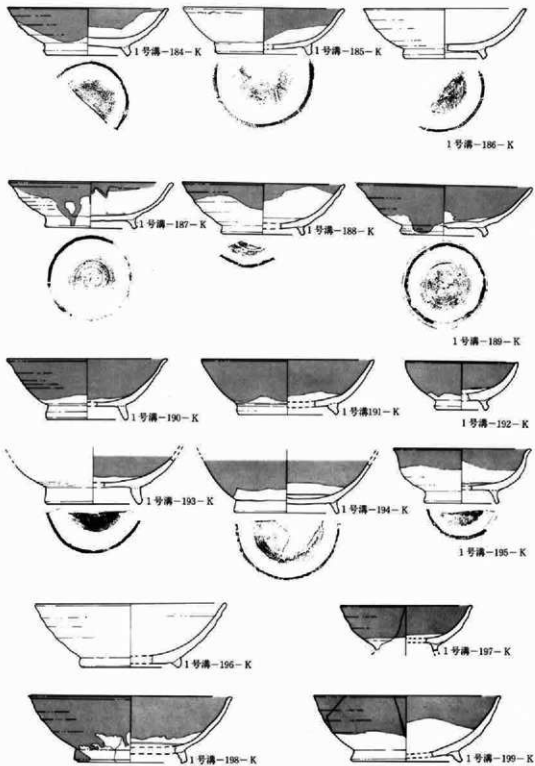


第140図 埴輪1号・1号溝遺物実測図 (12)

第4章 検出された遺構と遺物

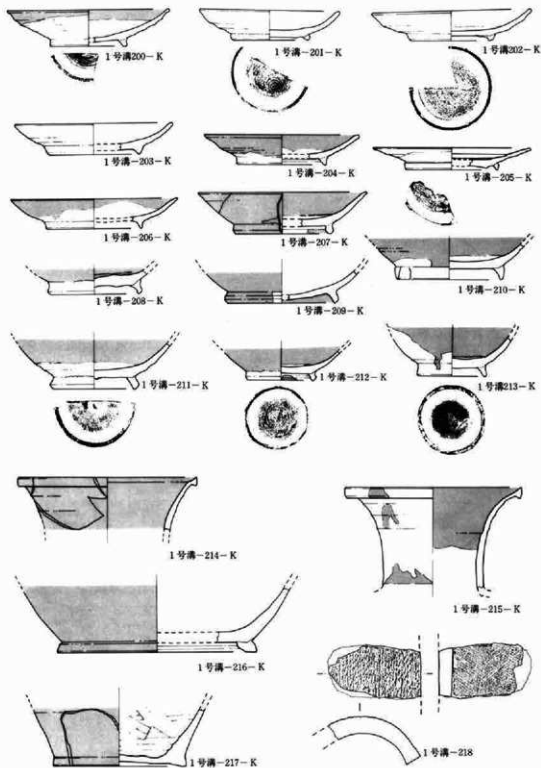


第141図 準幹1号・1号溝遺物実測図 (四)



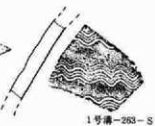
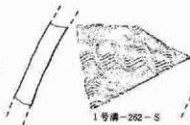
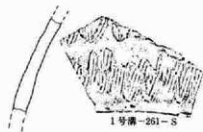
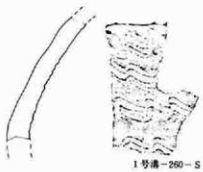
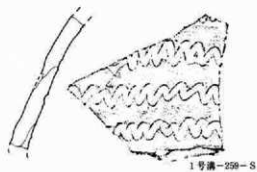
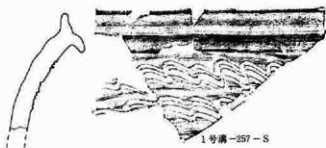
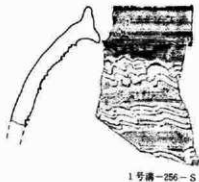
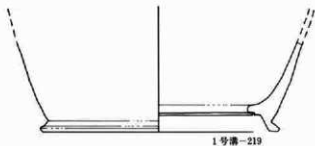
第142図 準幹1号・1号溝遺物実測図04

第4章 検出された遺構と遺物



第143図 単幹1号・1号溝遺物実測図(9)

第2節 溝・古墳



第144图 单幹1号・1号溝遺物実測図 (09)

第4章 検出された遺構と遺物

1号溝出土遺物観察表(1)

遺構及び 番号	器形	寸法 (cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1溝-1	杯-土師質	(2.4)(8.4)(3.4)	フク土	器高・口径・底径とも小さな杯である。口辺部と底部の境に段を持つ。	①褐色②酸化③口縁④密
1溝-2	杯-土師質	3.4(10.2)(4.4)	フク土	底部回転糸切痕残る。底部を厚く残して切り離している。	①灰褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-3	杯-土師質	2.7(9.4)(4.4)	フク土	底部回転糸切痕残る。胎土は赤色を帯びており、他の一群とは異質である。	①赤褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-4	杯-土師質	3.2 9.3 4.2	フク土	底部右回転糸切痕残る。口辺部に平行な隆線が走る。底径の小さな杯である。	①褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-5	杯-土師質	3.5 (11) 6	フク土	底部右回転糸切痕残る。底部外面全面に炭素を吸着して黒色を呈す。	①灰褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-6	杯-土師質	3(10.2) 5	フク土	粉状を呈する胎土である。底部右回転糸切痕残る。	①褐色②酸化③口縁-底部④密 酸化鉄を含む。
1溝-7	杯-土師質	3.7(11.2)(5.4)	フク土	底部右回転糸切痕、内外面横十字、隆線ほとんど認められない。	①灰褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-8	杯-土師質	3.8(10.8) (6)	フク土	底部磨耗している。器内の薄い杯、全体に砂質である。	①赤褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-9	杯-土師質	3.3(10.6) (5)	フク土	底部右回転と思われる糸切痕残る。他と異なり口唇部下の凹溝は認められない。	①灰褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-10	杯-土師質	3.4(10.8)(5.4)	フク土	底部右回転糸切痕残る。9に共通した器形。	①灰褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-11	杯-土師質	3.3 (11) 4.6	フク土	体部に少シロクロ底残る。狭くした底部を糸切により切り離している。	①灰褐色②酸化③口縁-底部④密、酸化鉄含む。
1溝-12	杯-土師質	2.7(10.8) 5.4	フク土	底部右回転糸切痕、器内が薄く、口唇部が強ク外反する。内側底部盛り上る。	①褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-13	杯-土師質	3.3 (11) (4.6)	フク土	11にほとんど共通	①灰褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-14	杯-土師質	3.7 (11) (5.4)	フク土	底部回転糸切痕、器内の厚い層、底部を厚く残して糸切を行なっている。	①灰白色②還元③口縁-底部④密

1号溝出土遺物観察表(2)

遺構及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1溝-15	杯-土師質	3.8(11.2) (5.5)	フタ土	9・10に共通した器形・整形	①褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-16	杯-土師質	3.3(11.3) (5)	フタ土	底部右回転糸切痕残る。	①灰白色②還元③口縁-底部④密
1溝-17	杯-土師質	3.3(11.6) (5.4)	フタ土	11に共通した器形・整形	①灰褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-18	杯-土師質	3.3(10.6) (5.8)	フタ土	5と同様に底部、底部外側に炭素を吸着して、黒色を呈している。	①灰褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-19	杯-土師質	3.3 (12) (5.6)	フタ土	器内が厚い、口辺部に酸線が残る。	①灰褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-20	杯-土師質	3.6 (92) (4.4)	フタ土	底部が厚い。口縁部がなだらかに大きく外反している。	①灰褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-21	杯-土師質	3.2(10.4) (5.8)	フタ土	8に似て、全体に砂質な胎土を持つ、底部右回転糸切痕。	①褐色②酸化③口縁-底部④砂質である。
1溝-22	杯-土師質	— — (5.2)	フタ土	底部右回転糸切痕、底部が厚い、体部が外へ大きく広がる。	①灰褐色②酸化③底部④密
1溝-23	杯-土師質	— — 5.2	フタ土	底部右回転糸切痕、22に共通した器形	①褐色②酸化③底部残存④密
1溝-24	杯-土師質	— — 5	フタ土	22に共通した器形・整形。	①灰褐色②酸化③底部残存④密
1溝-25	杯-土師質	— — (4.5)	フタ土	22-24と異なり、底部と体部との境に段を持たない。底部右回転糸切痕残る。	①褐色②酸化③底部④密
1溝-26	杯-土師質	— — (5.6)	フタ土	5・18と同様に底部外側に炭素を吸着して、黒色を呈している。	①灰褐色②酸化③底部④密
1溝-27	杯-土師質	— — 6	フタ土	底部右回転糸切痕、比較的底径の大きな杯である。	①褐色②酸化③底部④密
1溝-28	杯-土師質	— — 5.8	フタ土	底部右回転糸切痕、底部の厚い杯である。	①灰褐色②酸化③底部残存④密
1溝-29	杯-土師質	— — 6	フタ土	底部右回転糸切痕、底部が厚く、体部との境に段を持つ。	①灰褐色②酸化③底部残存④密
1溝-30	杯-土師質	— — (4.8)	フタ土	27に似た器形・整形である。	①灰褐色②酸化③底部④密
1溝-31	杯-土師質	— — 6.8	フタ土	底部右回転糸切痕、底部が大きく厚い体部との境に段を持つ。	①灰褐色②酸化③底部のみ④密

第4章 検出された遺構と遺物

1号溝出土遺物観察表(3)

遺構及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1溝-32	杯-土師質	— — 4.2	フク土	底部右回転糸切痕、小さな底部から底部が外側へ大きく内彎しながら開く。	①褐色②酸化③底部-体部下半残存④密
1溝-33	杯-土師質	— — 6.3	フク土	底部右回転糸切痕、底径が大きい。胎土が砂質である。	①褐色②酸化③底部残存④砂質
1溝-34	杯-土師質	— — (5.8)	フク土	底部右回転糸切痕、底部が非常に厚い器形は22に近い。	①灰褐色②酸化③底部片残存④密
1溝-35	碗-土師質	— — (7.4)	フク土	底部中央が穿孔されている碗の破片である。	①灰白色②還元③底部片④密
1溝-36	杯-土師質	— — 4.2	フク土	25に似て、全体に丸味を帯びている。底部右回転糸切痕。	①褐色②酸化③底部完・体部下半残存④密
1溝-37	碗-土師質	4.4 (12) (6.3)	フク土	高台付碗、高台部内側回転ナデ、胎土は砂質である。口唇部はやや外反する。	①褐色②酸化③口縁-高台片④砂質である。
1溝-38	碗-土師質	4.9 13 6.8	フク土	高台付碗、高台部内側回転ナデ、内側底部が少し高くなっている。	①灰白色②還元③完形④3~5mmの砂粒を含む。
1溝-39	碗-土師質	4.7 11.8 7.2	フク土	高台付碗、高台部内側回転ナデ、S3に似た器形である。	①灰褐色②酸化③口縁-高台片④密
1溝-40	碗-土師質	— (13.2) —	フク土	高台部内側右回転糸切痕、高台部内側は炭素吸着により黒色を帯びている。	①褐色②酸化③口縁-底部片④密
1溝-41	碗-土師質	— (11) —	フク土	S3同様還元焰焼成で焼かれている。高台部がそっくりはずれている。	①灰白色②還元③口縁-底部片④密
1溝-42	碗-土師質	5.8(11.2) 6.3	フク土	高台付碗、高台部内側回転ナデ調整、器高の高い碗である。	①灰褐色②酸化③口縁-底部片④密
1溝-43	碗-土師質	5.3 10.8 (6.5)	フク土	高い高台付の碗である。少々還元気味の焼成である。	①灰褐色②酸化③口縁-高台片④黒色雲母を多く含む。
1溝-44	碗-土師質	5.5(11.4) 6.4	フク土	高台部内側回転ナデ、高台部の薄い碗である。	①褐色②酸化③口縁-高台片④
1溝-45	碗-土師質	4.6 12.6 7.6	フク土	高台部内側回転ナデ。	①褐色②酸化③口縁-高台片④密 ⑤口唇部に油煙の付着。
1溝-46	碗-土師質	6.5(14.4) 8.2	フク土	高台部内側回転糸切痕、高台部は高く外へ張り出している。	①褐色②酸化③口縁-高台片④密

1号溝出土遺物観察表(4)

遺構及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1溝-47	鉢	6.9(19.6) 8.4	フク土	底部右回転糸切痕、底部内側が少し高くなる。	①灰褐色②酸化③口縁～底部ㄥ④密
1溝-48	环-土師質	— — (6.4)	フク土	底部右回転糸切痕、内面底部ロクロ目残る。	①灰褐色②酸化③底部ㄥ④密
1溝-49	环-土師質	— — 6.1	フク土	底部右回転糸切痕、糸の目は荒いと思われる。底部の厚い环である。	①灰褐色②酸化③底部残存④密
1溝-50	环-土師質	— — (5)	フク土	底部右回転糸切痕、胎土が砂質である。底部内側が少し上がる。	①灰白色②還元③底部ㄥ④砂質であり2-3mmの砂を含む。
1溝-51	环-土師質	— — (5.2)	フク土	底部右回転糸切痕、底部の径が小さく厚い环である。	①灰白色②還元③底部ㄥ残存④密
1溝-52	甕-土師質	— — 5.8	フク土	高台付甕、高台部内側回転ナデ、内側底部中央に凸状の高まりがある。	①褐色②酸化③底部のみ④密
1溝-53	甕-土師質	— — 6.2	フク土	高台付甕、高台部内側右回転糸切痕、目の荒い糸を使用している。	①褐色②酸化③底部のみ④密
1溝-54	甕-土師質	— — 5.8	フク土	高台付甕、高台部内側回転ナデ調整、内面ロクロ目残る。	①灰褐色②酸化③底部残存④密
1溝-55	甕-土師質	— 8 —	フク土	高台付甕、高台部内側回転ナデ調整、高い高台が付く。	①褐色②酸化③高台ㄥ底部残存④密
1溝-56	甕-土師質	— — (6.1)	フク土	高台付甕、高台部内側回転ナデ調整。	①灰褐色②酸化③底部ㄥ残存④密
1溝-57	甕-土師質	— — 6	フク土	45に共通した器形、調整。	①灰褐色②酸化③底部残存④密
1溝-58	甕-土師質	— — (7.2)	フク土	高台付甕、高台部内側回転糸切痕残る。内面炭素の吸着あり。	①灰白色②還元③底部ㄥ④密
1溝-59	甕-土師質	— — (6.4)	フク土	高台付甕、高台部内側回転糸切痕残る。高台端が少し外側へ延びている。	①褐色②酸化③底部ㄥ④密
1溝-60	甕-土師質	— — —	フク土	高台付甕、高台部内側回転糸切痕残る。高台をていねいに貼付している。	①灰白色②還元③底部ㄥ④密
1溝-61	甕-土師質	— — 6.2	フク土	49に共通した器形、整形	①灰褐色②酸化③底部のみ④密

第4章 検出された遺構と遺物

1号溝出土遺物観察表(5)

遺構及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
1溝-62	丸一土師質	— — 6.5	フク土	49に似た器形を呈するが高台は細長い。	①灰褐色②酸化③底部残存④密
1溝-63	丸一土師質	— — 6.8	フク土	高台部内側回転糸切痕、底径の大きな甕である。	①灰褐色②酸化③底部残存④密
1溝-64	丸一土師質	— — 7	フク土	高台部内側回転糸切痕、目の荒い糸を使用している。	①灰褐色②酸化③底部残存④密
1溝-65	丸一土師質	— — 5.8	フク土	高台部内側回転ナデ、底径の小さな、底の厚い甕である。	①褐色②酸化③底部残存④密
1溝-66	丸一土師質	— — 5.8	フク土	高台部内側糸切痕残る。高台部端が鋭い。内側底部が少し高くなっている。	①灰褐色②酸化③底部残存④密
1溝-67	丸一土師質	— — 7.2	フク土	高台部内側回転ナデ	①灰褐色②酸化③底部残存④密 ⑤高台付着点にヒビ割れが一箇。
1溝-68	丸一土師質	— — (7)	フク土	高台部内側回転糸切痕残る。高台の貼付は雑である。	①灰白色②還元③高台片底部残存④密
1溝-69	丸一土師質	— — (8)	フク土	高台部内側回転ナデ、高台部は直立から端部は外側へ少し開く。	①灰褐色②酸化③高台片底部残存④密
1溝-70	丸一土師質	— — (8)	フク土	高台部内側回転ナデ、高い高台が付く口径の大きな甕と思われる。	①灰白色②還元③底部片残存④密
1溝-71	丸一土師質	— — 6.4	フク土	高台部内側回転ナデ、高台は細く外側へ開く。	①褐色②酸化③底部片残存④密
1溝-72	丸一土師質	— (16) —	フク土	口径の大きな甕、高台部内側回転ナデ。	①褐色②酸化③口縁-底部片④密
1溝-73	丸一土師質	—(11.2) —	フク土	56に共通した器形・整形。	①灰褐色②酸化③口縁-底部片④密
1溝-74	丸一土師質	4.6(10.6) (5.6)	フク土	高台部内側回転ナデ、高台は細く長い。	①灰褐色②酸化③口縁-高台片④密
1溝-75	丸一土師質	4.7(10.2) (5.8)	フク土	太く短い高台の付く甕である。	①灰褐色②酸化③口縁-高台片④密
1溝-76	丸一土師質	—(13.8) —	フク土	口径の大きな甕である。体部外側中央に弱い隈をもつ。	①灰白色②還元③口縁-体部片④密
1溝-77	丸一土師質	—(11.2) —	フク土	高台付甕と思われる。内外側回転ナデ。	①灰褐色②酸化③口縁-体部片④密

1号溝出土遺物観察表(6)

遺構及び 番号	器 形	寸 法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
1溝-78	甕-土師質	— — —	フク土	高台部内側回転ナズ、高台部接合面は幅広くくなっている。	①灰褐色②酸化③底部片残存④密
1溝-79	甕-土師質	— — —	フク土	高台部内側より高台部のはずれている端部が高い。高台接合時の削りによる。	①灰褐色②酸化③底部片④密
1溝-80	甕-土師質	— — (6.8)	フク土	高台部内側回転ナズ、高台部下端は外側へ開く。内面強いログロ目残る。	①褐色②酸化③底部片④密
1溝-81	甕-土師質	— — (7.6)	フク土	高台部内側回転ナズ、底径の小さな美接合面は幅広くていねいに接合。	①灰褐色②酸化③底部片④密
1溝-82	甕-土師質	— — 8	フク土	高台部内側回転ナズ、接合面は幅広く回転ナズにより接合。	①褐色②酸化③底部残存④密
1溝-83	甕-土師質	— — 8	フク土	高台部内側回転ナズ、接合面は幅広く回転ナズによりていねいに整形。	①灰褐色②酸化③底部残存④密
1溝-84	甕-土師質	— — (8.4)	フク土	83に共通した器形・整形。	①灰褐色②酸化③底部-体部片④
1溝-85	甕-土師質	— — (7.8)	フク土	高台部内側回転ナズ、接合面は幅広く回転ナズによりていねいに接合。	①褐色②酸化③底部片④密
1溝-86	甕-土師質	— — 8.2	フク土	高台部内側回転ナズ、高い高台をていねいな回転ナズにより接合している。	①灰褐色②酸化③高台片底部残存④密
1溝-87	甕-土師質	— — (8.2)	フク土	高い高台の付く甕の高台部と美身の底部、89~94の甕と違い底部と高台残存。	①褐色②酸化③底部片④密
1溝-88	甕-土師質	— — —	フク土	高い高台の付く甕の高台部と美身の底部と思われる。	①灰褐色②酸化③底面残存④酸化鉄含む。
1溝-89	甕-土師質	— — (9.8)	フク土	高い高台の付く甕の高台部、美との接合面に回転系切痕が残る。	①灰褐色②酸化③高台片④密
1溝-90	甕-土師質	— — (9.2)	フク土	高い高台の付く甕の高台部、美との接合面に回転系切痕が残る。	①灰褐色②酸化③高台片④密
1溝-91	甕-土師質	— — (11.4)	フク土	高い高台の付く甕の高台部、美との接合面が幅広くくなっている。	①灰褐色②酸化③高台片④密

第4章 検出された遺構と遺物

1号溝出土遺物観察表(7)

遺構及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1溝-92	甕-土師質	— — (12)	フク土	高い高台の付く甕の高台部、甕との接合面が幅広くなっている。	①褐色②酸化③高台片④密
1溝-93	甕-土師質	— — (14.2)	フク土	高い高台の付く甕の高台部、甕との接合面が幅広くなっている。	①灰褐色②酸化③高台片④密
1溝-94	甕-土師質	— — (11.2)	フク土	高い高台付甕の高台部、甕との接合面に糸切痕が残るため高台もロクロ成形後手で切り離す。	①灰褐色②酸化③高台片④密
1溝-95	杯-土師質	— — (5)	フク土	底部右回転糸切痕、底径、器高の小さい杯である。	①灰白色②還元③底部片④密
1溝-96	杯-土師質	2.8 (11.2) (5)	フク土	95にはば共通するが、底部端が丸くなり、体部との境が不明瞭である。	①灰白色②還元③口縁~底部片④密
1溝-97	杯-土師質	— — 5.2	フク土	底部右回転糸切痕、目の荒い糸を使用している。	①灰白色②還元③底部残存④密
1溝-98	杯-土師質	— — 5.4	フク土	底部右回転糸切痕、底部と体部下端の間に段を持つ。	①灰白色②還元③底部片④密
1溝-99	杯-土師質	— — 6.8	フク土	98にはば共通、内側底部にクロロ目残る。	①灰白色②還元③底部残存④密
1溝-100	杯-土師質	— — (5.9)	フク土	底部回転糸切痕、底部及び器肉の厚い杯である。	①灰白色②還元③底部片④密
1溝-101	甕-土師質	— — 6.2	フク土	高台部内側回転ナデ、高台部内側と甕内側灰素吸着により黒色を呈す。	①灰白色②還元③底部残存④密
1溝-102	甕-土師質	— — 5.6	フク土	高台部内側右回転糸切痕、高台部下端が外側へ張り出している。	①灰白色②還元③底部残存④密
1溝-103	甕-土師質	— — 9	フク土	高台付甕の高台部、底部との接合面に回転糸切痕を残す。	①灰白色②還元③高台のみ片④密
1溝-104	甕-土師質	— — 6.6	フク土	高台部内側回転糸切痕、底部、器肉の厚い甕である。	①灰白色②還元③底部残存④密
1溝-105	甕-土師質	— — 7	フク土	高台部内側回転ナデ、細い高台を貼付している。	①灰白色②還元③底部完体部片④密
1溝-106	甕-土師質	— — 5.4	フク土	高台部内側右回転糸切痕、底部、器肉の厚い甕である。	①灰白色②還元③底部残存④密

1号溝出土遺物観察表(8)

遺構及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
1溝-107	甕-土師質	— — 7	フク土	高台部内側右回転糸切痕、外へ向かって高台端部が開く。	①灰白色②還元③底部のみ④密
1溝-108	甕-土師質	— — (6.2)	フク土	高台部内側右回転糸切痕、高台端部の内側に向いている。	①灰白色②還元③底部④密
1溝-109	甕-土師質	— — (7)	フク土	高台部内側右回転糸切痕、高台端部が外側に向かって開く。	①灰白色②還元③底部④密
1溝-110	蓋-須恵器	— — —	フク土	須恵器環蓋である。内側回転ナデ、外側回転へう削り、平らなつまみがつく。	①灰白色②還元③全体④密
1溝-111	蓋-須恵器	— — —	フク土	須恵器環蓋、内外面回転ナデ、つまみは平たく凹状をなし、中心凸状をなす。	①灰白色②還元③全体④密
1溝-112	蓋-須恵器	— — —	フク土	須恵器環蓋、内面回転ナデ、外面のつまみ付着点へう削り、凹状つまみ付く。	①灰白色②還元③全体④密
1溝-113	杯-須恵器	3.9(16.6) (10.6)	フク土	小さく低い高台を削り出している。高台より高台内側底部が外に張り出している。	①灰白色②還元③口縁-底部④密
1溝-114	杯-須恵器	3.5(15.8) (11)	フク土	底径の特に大きな杯であり盤状を呈す。底部へう調整、重ね焼き痕あり。	①青灰色②還元③口縁-底部④密⑤内面自然輪がかかる。
1溝-115	杯-須恵器	3.6(13.4) (9.4)	フク土	底径の大きな杯である。底部回転へう調整、底部中央が盛り上がり薄くなる。	①青灰色②還元③口縁-底部④密⑤内面自然輪がかかる。
1溝-116	杯-須恵器	3.6(12.4) (7.2)	フク土	底部回転へう切り後無調整、底径の大きな杯である。やや軟質である。	①灰白色②還元③口縁-底部④密
1溝-117	杯-須恵器	3.6 (13) 7.6	フク土	底部右回転糸切痕、無調整、灰白色を呈し、軟質である。	①灰白色②還元③底部④口縁-底部④密
1溝-118	杯-須恵器	— — (9.8)	フク土	底部回転へう調整、体部下端までいよいよへう調整。底径の大きな杯。	①灰白色②還元③底部④密
1溝-119	杯-須恵器	4.5(14.2) 8	フク土	底部回転へう調整、体部下端までいよいよへう削り、外面炭素吸着で黒色。	①灰白色②還元③底部④口縁-体部④密

第4章 検出された遺構と遺物

1号溝出土遺物観察表(9)

遺構及び号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1溝-120	坏一須恵器	4.1(12.6) 5.5	フク土	底部右回転糸切痕残る。体部ロクロ目、底径の小さく、器高、口径の大きな甕。	①灰白色②還元③底部完口縁～体部写④密
1溝-121	陶一須恵器	4.3 (12) (6.2)	フク土	焼結のある須恵器高台付甕。	①灰白色②還元③口縁～高台写④密
1溝-122	坏一須恵器	3.2(10.4) (5.6)	フク土	底部回転糸切痕、器高の低い坏である。	①灰白色②還元③口縁～底部写④密
1溝-123	坏一須恵器	3(10.4) (5.5)	フク土	底部回転糸切痕残る。器高の低い坏である。	①灰白色②還元③口縁～底部写④密
1溝-124	坏一須恵器	4.3(12.8) 5	フク土	底部内側から2ヶ所、外側から2ヶ所穴を削り、1ヶ所のみ開通している。	①灰白色②還元③底部完口縁～体部写④密
1溝-125	陶一須恵器	— — 7.6	フク土	高台部内側右回転糸切痕、高台は大きく外側へ開く。	①灰白色②還元③底部④密
1溝-126	陶一須恵器	— — 7	フク土	高台部内側右回転糸切痕、高台は外側へ少し開く。	①灰白色②還元③底部完体部写④密
1溝-127	陶一須恵器	— — (7.4)	フク土	高台部内側右回転糸切痕、体部にロクロ目残る。	①灰白色②還元③底部写④密
1溝-128	陶一須恵器	4.2 13.5 6	フク土	高台部内側回転ナデ、底径が小さく、口縁部が大きく外反する甕である。	①灰白色②還元③口縁～体部写④密
1溝-129	陶一須恵器	4.3 13 5.8	フク土	高台部内側を回転糸切痕、底径が小さく口縁部が外反する。口縁部がゆがむ。	①灰白色②還元③口縁～高台写④密
1溝-130	陶一須恵器	4.7 13.6 6.6	フク土	高台部内側右回転糸切痕、高台は粘土縷を指で押えつけただけで甕である。	①灰白色②還元③口縁写欠損④密
1溝-131	陶一須恵器	— — 7.6	フク土	高台部内側回転ナデ、高台は短く、細い。外へ向かって開く。器内が滑い。	①灰白色②還元③高台写底部残存④密
1溝-132	陶一須恵器	—(12.8) —	フク土	高台部内側右回転糸切痕、高台はそっくりはずれている。	①灰白色②還元③底部写④密
1溝-133	陶一須恵器	4.2 13.5 7.1	フク土	高台部内側回転ナデ、高台は縷に付着している。弱い焼結のある甕である。	①灰白色②酸化③完形④2～5mmの砂粒を含む。

1号溝出土遺物観察表00

遺構及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
1溝-134	丸一須恵器	— (12) —	フク土	体部内外面回転ナズ、高台付焼と思われる。	①灰白色②還元③体部片残存④密
1溝-135	丸一須恵器	— (13) —	フク土	雑な高台の付く焼と思われる。体部にロクロ目残る。口縁部弱く外反する。	①灰白色②還元③口縁一体部片④密
1溝-136	丸一須恵器	— (18) —	フク土	口径の大きな焼である。鉢に近い形と思われる。	①灰白色②還元③口縁一体部片④密
1溝-137	坏一土師質イブシ	3 (12) (6.4)	フク土	底部回転未切痕、表面全面イブシにより黒色を呈す。	①黒色②酸化③口縁一体部片④2~4mmの砂粒含む。
1溝-138	坏一土師質イブシ	2.6(10.4) (5)	フク土	底部右回転未切痕、底部と体部との境に段を持つ。	①黒色②酸化③口縁一底部片④密
1溝-139	丸一土師質イブシ	— — (8.4)	フク土	高い高台付焼、高台部内側回転ナズ、高台をていねいに貼付している。	①黒色②酸化③高台片底部残存④密
1溝-140	坏一土師質イブシ	— — 5.4	フク土	底部右回転未切痕、底部と体部との境に段を持つ。	①黒色②酸化③底部片④密
1溝-141	坏一土師質イブシ	— — (6.3)	フク土	底部右回転未切痕、底径の大きな坏である。	①黒色②酸化③底部片④密
1溝-142	丸一土師質イブシ	5.5 (10) 6.2	フク土	高台部内側右回転未切痕、高台は下端が鋭い。口縁部は薄くやや外反する。	①黒色②酸化③底部定口縁一体部片④密
1溝-143	丸一土師質内黒イブシ	— — 5.6	フク土	高台部内側回転ナズ、薄い器壁に厚い高台部を貼付している。内面磨き。	①黒色②酸化③高台片底面残存④密
1溝-144	丸一土師質内黒イブシ	— — 5.2	フク土	143同様、底径の小さな焼、内外面磨かれている。	①黒色②酸化③高台片底面残存④密
1溝-145	丸一須恵器イブシ	4.8(12.6) 7	フク土	高台部内側右回転未切痕、帯状の高台を雑に貼付している。	①黒色②酸化③口縁一高台片④密
1溝-146	丸一須恵器イブシ	— — 6.6	フク土	高台部内側右回転未切痕、145よりさらに雑に高台を貼付している。	①黒色②酸化③底面高台片残存④密
1溝-147	丸一須恵器イブシ	— — 6.6	フク土	146にはば共通した器形、整形。	①黒色②酸化③高台片底面残存④密
1溝-148	丸一須恵器イブシ	4.2 (12) (7.6)	フク土	雑な高台を付着している。直線的に体部が外へ開き、口唇部が外反する。	①黒色②酸化③口縁一高台片④密

第4章 検出された遺構と遺物

1号溝出土遺物観察表(D)

遺構及び号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1溝-149	丸一須恵器 イブシ	4.5(12.6) (6.4)	フク土	小さな高台が踵に付着している。体部は内骨気味に立ち上がる。	①黒色②酸化③口縁～体部迄④密
1溝-150	丸一須恵器 イブシ	— 15.6 —	フク土	口径、器高の大きな甕である。体部ロクロ痕残る、口唇部強く外反する。	①黒色②酸化③口縁～床面迄④密
1溝-151	杯一須恵器	3.9 11.8 7	フク土	底部右回転糸切痕、底部中央以外器内の厚い杯である。雑な作りである。	①褐色②酸化③定形④密
1溝-152	杯一須恵器	3.8(13.6) (7.4)	フク土	底部右回転糸切痕、体部は外骨しつつ口唇部に至る。	①灰白色②還元③迄④密⑤口縁に油層付着
1溝-153	杯一須恵器	3.8(12.8) 6.2	フク土	底部右回転糸切痕、平底の端が外に張り出している。体部は直線的に外反。	①褐色②酸化③迄④密
1溝-154	杯一須恵器	4.3 11.9 6.4	フク土	底部右回転糸切痕、ゆがみの大きな土器である。器高の差違も大きい。	①褐色②酸化③迄④密
1溝-155	杯一須恵器	— — —	フク土	底部右回転糸切痕、目の荒い糸による切り離しが行なわれている。	①褐色②酸化③定形④密⑤口縁部に大量の油層付着
1溝-156	丸一須恵器	— — 6.8	フク土	太く丸味を帯びた高台を持つ、高台部内側回転糸切痕。156、157、158と同類。	①黒色②酸化③底部残存④密
1溝-157	丸一須恵器	5.5 13.2 7.9	フク土	高台部内側回転糸切痕、底部、高台部の厚い異質な土器である。	①灰褐色②酸化③光形④密
1溝-158	丸一須恵器	5.6 13.2 7.6	フク土	高台部内側回転糸切痕、底部、器内とも厚い、細い高台が付く。	①黒色②酸化③定形④密
1溝-159	丸一土師質 内黒	— — 5.6	フク土	高台部内側回転ナデ、小さな高台が、ていねいに貼付している。内面研磨。	①灰褐色②酸化③底部残存④密
1溝-160	丸一土師質 内黒	— — —	フク土	内面研磨、底部は横一定方向にへら磨きをしている。内側黒色処理。	①灰褐色②酸化③底面～体部迄④密
1溝-161	丸一土師質 内黒	6.1 14 5.2	フク土	体部内面横方向へら磨き、底部へら磨き、内側全面黒色処理。	①灰褐色②酸化③口縁～底部迄④密⑤口縁部外側の器表一部剥離

1号溝出土遺物観察表②

遺構及び 器	器 形	寸 法 (cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1溝-162	罎-土師質 内黒	—(15.4)—	フク土	体部内面横方向へラ磨き、口縁部外側及び内面全面黒色処理	①灰褐色②酸化③口縁-体部④密
1溝-163	杯-土師器	—(11.8)—	フク土	底部手持へラ削り、平底に近い底部、口縁部横ナデ、内面全面ナデ。	①褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-164	杯-土師器	—(11.6)—	フク土	底部手持へラ削り、丸底の杯、口縁部ヨコナデ、内面全面ナデ。	①褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-165	杯-土師器	—(15.4)—	フク土	口径・底径が大きく、平底を呈する杯、口縁部横ナデ、内面に暗文少し走る。	①褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-166	杯-土師器	—(15)—	フク土	口縁部と体部との間に隙を持つ、外面塗彩されている。内面縦方向へラ磨き。	①褐色②酸化③口縁-体部④密
1溝-167	杯-土師器	—(13.2)—	フク土	底部手持へラ削り、口縁部横ナデ、内面全面ナデの後に縦方向へラ磨き。	①褐色②酸化③口縁-底部④密
1溝-168	羽 蓋	—(18)—	フク土	胴部～口唇部にかけて直立気味に立ち上がる。口縁部長い、罎は太く上向き。	①褐色②酸化③口縁④密
1溝-169	羽 蓋	—(18)—	フク土	内側粘土帯の接合痕明顯に残る。内面刷毛整形、外側へラ削り、雑な鈎付着。	①灰褐色②酸化③口縁④密
1溝-170	羽 蓋	—(24)—	フク土	器壁の薄い胴部が、弧状に内彎しつつ口唇部に至る。口唇部は厚く整形。	①灰褐色②酸化③口縁④密
1溝-171	羽 蓋	—(19)—	フク土	口唇部が丸い特異な羽蓋、口縁部内外面刷毛目、胴部へラ削り。	①灰褐色②酸化③口縁④2～4mmの砂粒を含む。
1溝-172	羽 蓋	—(22.8)—	フク土	171同様口唇部が丸い特異な羽蓋、口縁部が大きく内彎する。細長い鈎貼付。	①褐色②酸化③口縁-体部④2～4mmの砂粒含む。
1溝-173	羽 蓋	—(18.2)—	フク土	内彎する口縁部に、幅広い口唇部が付く。罎は細長く、ていねいに粘付。	①灰白色②還元③口縁④密
1溝-174	羽 蓋	—(22.6)—	フク土	大きく口縁部が内彎する。罎は小さく断面三角形を呈す。口唇部厚くなる。	①灰褐色②酸化③口縁④密

第4章 検出された遺構と遺物

1号溝出土遺物観察表(3)

遺構及び号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1溝-175	壺一須恵器	— — (15.4)	フク土	須恵器製の破片と思われる。外面ナデ、内面刷毛目、外側表面剥離あり。	①灰白色②還元③底部④⑤密
1溝-176	壺一須恵器	— (12.2) —	フク土	須恵器壺の口縁～肩部と思われる。短く直立する口縁部を持つ、内外面ナデ。	①灰白色②還元③口縁④3～6mmの白色砂粒を含む。
1溝-177	鉢一土師質	— 25.8 —	フク土	高台部内側回転ナデ、厚い高台部貼付、内外面ナデ、内面底部磨耗痕なし。	①灰褐色②酸化③口縁～底部④⑤密
1溝-178	壺一須恵器	— — (14.8)	フク土	須恵器壺又は壺の底部～胴下半部と思われる。外面胴下半端へラ削り。	①灰白色②還元③底部④2～4mmの砂粒を含む。
1溝-179	壺一須恵器	— — (13.6)	フク土	須恵器壺又は壺の底部～胴下半部と思われる。外面胴下端へラ削り。	①灰白色②還元③底部④2～4mmの砂粒を含む。
1溝-180	壺一土師器	— — (9.2)	フク土	高台付壺の高台部と思われる。高台部が「ハ」の字状に大きく開く。	①褐色②酸化③高台のみ④⑤密
1溝-181	壺一土師器	— — (6.6)	フク土	壺又は壺の底部～体部、底部に多量の砂粒が付着している。	①灰褐色②酸化③底部④2～5mmの砂粒を含む。
1溝-182	壺一土師器	— — (8)	フク土	壺又は壺の底部～体部下半、内面ナデ外面へラ削り。	①褐色②酸化③底部④2～4mmの砂粒を含む。
1溝-183	壺一須恵器	— — 21.6	フク土	底面に板目残る。胴内外面ともナデ整形、叩目痕なし、内側表面一部剥離。	①灰白色②還元③④⑤2～4mmの砂粒含む。
1溝-184	筒一灰輪	3.8 (13) (6.6)	フク土	高台部内側右回転糸切痕、端部の丸い高台が貼付、漬け掛けによる地輪。	①断面灰白、釉透明②還元③底部④⑤口辺⑥密
1溝-185	筒一灰輪	3.7(12.8) 7.4	フク土	高台部内側回転ナデ、端部の丸い高台が貼付、漬け掛けによる地輪。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台④⑤密
1溝-186	筒一灰輪	4 (13) (6.4)	フク土	高台部内側回転糸切痕、端部の丸い高台が貼付、釉の風化がはげしい。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台④⑤密
1溝-187	筒一灰輪	3.7(13.2) (7.4)	フク土	高台部内側回転ナデ、細い高台が貼付、漬け掛けによる地輪。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台④⑤密

1号溝出土遺物観察表00

遺構及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1溝-188	甕-灰釉	4.1 (13) (6.4)	フク土	素地が褐色を呈しており、他と異質、漬け掛けによる施釉。	①断面褐色、釉透明②還元③口縁～高台片④密
1溝-189	甕-灰釉	4 (14) 7	フク土	188と同様に素地の一部が褐色を呈している。高台部内側回転ナデ。	①断面褐色、釉透明②還元③口縁～高台片④密
1溝-190	甕-灰釉	4.9(12.9) (6.6)	フク土	高台部内側回転ナデ、高い高台が貼付。漬け掛けによる施釉である。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台片④密
1溝-191	甕-灰釉	4.5(13.8) (7.8)	フク土	高台部内側回転ナデ、口唇部に外反のない腕。漬け掛けによる施釉である。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台片④密
1溝-192	甕-灰釉	3.9 (9) (4)	フク土	小型の高である。口唇部の外反はない。漬け掛けによる施釉である。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台片④密
1溝-193	甕-灰釉	— — (7.8)	フク土	高台部内側は高台を貼付後、回転へつ削り、筒底部を削り込んでいる。	①断面灰白、釉透明②還元③底部片④密
1溝-194	甕-灰釉	— — (8.4)	フク土	高台部内側回転ナデ、細い高台が貼付。素地が灰黒色を呈し、他と異なる。	①断面褐色、釉透明②還元③底部片④密
1溝-195	甕-灰釉	4.4 (11) (6)	フク土	高台部内側は高台を貼付後、回転へつ削り、筒底部を削り込んでいる。	①断面灰黒色、釉透明②還元③口縁～高台片④密
1溝-196	甕-灰釉	5.1(15.4) (7.8)	フク土	高台部内側回転糸切痕、無釉の甕である。底部が厚くなっている。	①断面灰白、無釉②還元③口縁～高台片④密
1溝-197	甕-灰釉	— (10.6) —	フク土	小型の甕である。漬け掛けによる施釉の残りが良好である。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～底部片④密
1溝-198	甕-灰釉	5.3(16.2) (9)	フク土	刷毛塗りによると思われる施釉、底部以外全面に施釉されている。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台片④密
1溝-199	甕-灰釉	5.3 (15) (9)	フク土	高台部内側回転糸切痕、漬け掛けによる施釉。	①断面灰白、釉透明③口縁～高台片④密
1溝-200	甕-灰釉	2.9 (13) (6.2)	フク土	高台部内側回転ナデ、口唇部が外側にやや外反、漬け掛けによる施釉。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台片④密

第4章 検出された遺構と遺物

1号溝出土遺物観察表(5)

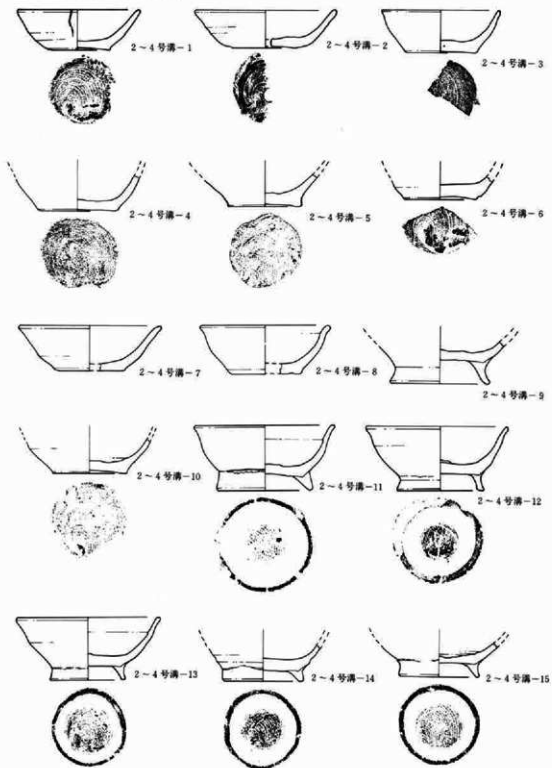
遺構及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
1溝-201	皿-灰釉	2.4 11.2 6.3	フク土	高台部内側右回転糸切痕、低い高台が貼付、漬け掛けによる施釉。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台写④密
1溝-202	皿-灰釉	2.4 12.8 6.2	フク土	高台部内側右回転糸切痕、低く端部が内側に向く高台が貼付、漬け掛け施釉。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台写④密
1溝-203	皿-灰釉	2.4(12.7) (7.2)	フク土	無釉と思われる、降灰による灰釉が点在する。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台写④密
1溝-204	皿-灰釉	2.4(12.4) (7.2)	フク土	断面三角形を呈する高台が貼付、漬け掛けによる施釉。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台写④密
1溝-205	皿-灰釉	1.8(12.6) (7.4)	フク土	高台部内側回転糸切痕、高台貼付後高台内側を少し削り込んでいる。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台写④密
1溝-206	皿-灰釉	2.4(13.4) (7.6)	フク土	断面三角形を呈する高台が貼付、漬け掛けにより施釉されているが薄い。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台写④密
1溝-207	皿-灰釉	3.3(13.6) (8)	フク土	高台部内側回転ナズ、丸い高台が貼付、重ね焼き痕が明確に残る。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁～高台写④密
1溝-208	皿-灰釉	— — 7	フク土	高台部内側右回転糸切痕が残る。裏地の粒子が密でなく、色も白色を帯びる。	①断面灰白、釉透明②還元③底部のみ④白色粒子、石英等を混入
1溝-209	皿-灰釉	— — (8.4)	フク土	高台部内側回転ナズ、高台部内側を含め外側全面に施釉されている。	①断面灰白、釉透明②還元③底部写④密
1溝-210	皿-灰釉	— — (8.4)	フク土	高台部内側回転ナズ、中心部回転へう削り、内側する高い高台を持つ。	①断面灰白、釉透明②還元③底部写④密
1溝-211	皿-灰釉	— — (6.6)	フク土	高台部内側回転ナズ、外側に開く高い高台を持つ。	①断面灰白色釉透明②還元③底部写④密
1溝-212	皿-灰釉	— — 5.4	フク土	刷毛塗りによる施釉の可能性が高い。	①断面灰白色釉透明②還元③写④密
1溝-213	皿-灰釉	— — 5.4	フク土	高台部内側回転ナズ、高い高台貼付。	①断面灰白色釉透明②還元③写④密
1溝-214	皿-灰釉	—(8.9) —	フク土	口唇部両端は鋭い角度を持つ、内外面刷毛によりていねいに施釉されている。	①断面灰白色釉透明②還元③口縁写④密

1号溝出土遺物観察表09

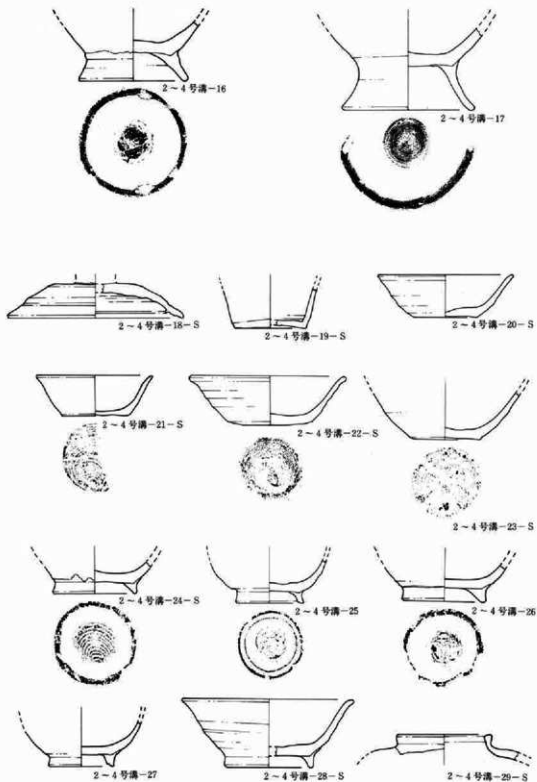
遺構及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地紋③残存④胎土⑤備考
1溝-215	瓶-灰釉	— (18.6) —	フタ土	口唇部上下両端は鋭い角度を持つ、内側のみ刷毛により施釉されている。	①断面灰白色釉透明②還元③口縁④密
1溝-216	瓶-灰釉	— — (16)	フタ土	太く幅広い高台の付く瓶の底部～胴下半部である。刷毛塗りによる施釉。	①断面灰白色釉透明②還元③底部④密
1溝-217	瓶-灰釉	— — (14.2)	フタ土	底部回転ナデ、内面ナデ調整、底部周辺が特に厚くなっている。	①断面灰白色釉透明②還元③底部④密
1溝-218	瓦	— — —	フタ土	丸瓦編甲、内面衣目、端部はていねいに削っている。	①灰白色②還元③2～8mmの砂粒を含む。
1溝-219	水瓶 —青銅製	— — —	フタ土	青銅製水瓶の胴下半部～高台部と思われる。高台部内側、底面接合地点に底面接合用の溝が一周している。	①赤味を帯びた黒褐色②胴下半部～高台部
1溝-256	甕-須恵器	— — —	フタ土	波状口縁を持つ大甕の口縁部	①青灰色②還元④砂粒を含む。
1溝-257	甕-須恵器	— — —	フタ土	256同様右回転で波状文をつけている。	同上
1溝-258	甕-須恵器	— — —	フタ土	256に同様、密な波状文である。	同上
1溝-259	甕-須恵器	— — —	フタ土	1本のへうによる波状文を持つ口縁部。	同上⑤左回転波状文
1溝-260	甕-須恵器	— — —	フタ土	256に同様、右回転4本筋の波状文	①青灰色②還元④砂粒を含む。
1溝-261	甕-須恵器	— — —	フタ土	258に似て縦方向密な波状文である。	①断面褐色、表面青灰色②還元
1溝-262	甕-須恵器	— — —	フタ土	他と異なり細く密な波状文である。	同上
1溝-263	甕-須恵器	— — —	フタ土	262に共通した器形・整形	同上

遺構名及び番号	遺物名	図版番号
1溝-220-235	灯明皿	第206図、第207図
1溝-236-237	鉄器	第214図
1溝-238-240	黒書土器	第211図
1溝-241	石鏡	第199図
1溝-242-255	緑釉陶器	第210図

第4章 検出された遺構と遺物

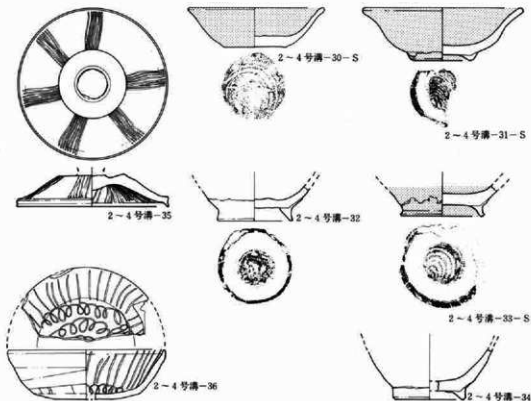


第145図 単幹1号・2～4号溝遺物実測図 (1)



第146图 準幹1号・2-4号溝遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構と遺物



第147図 単幹1号・2～4号溝遺物実測図(3)

2～4号溝出土遺物観察表(1)

住居及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④粘土⑤備考
2～4号 溝-1	环-土師質	3.2 9.8 5	フク土	底部右回転糸切痕、底径の小さな环、口縁部ゆがんでいる。	①褐色②酸化③完形④2～4mmの砂粒を含む。
2～4号 溝-2	环-土師質	3(11.4) (5)	フク土	底部右回転糸切痕、底部中央に1cmほどの穴が空いている。	①褐色②酸化③口縁～底部④密
2～4号 溝-3	环-土師質	3.4 (9.4) (5.6)	フク土	底部回転糸切痕、底部が厚い、底部と体部下端の境に段を持つ。	①灰褐色②酸化③口縁～底部④酸化鉄含む。
2～4号 溝-4	环-土師質	— — 6	フク土	底部右回転糸切痕、糸切痕に段差あり、内側底部中央に凸状の粘土残る。	①灰褐色②酸化③底部④酸化鉄含む。
2～4号 溝-5	环-土師質	— — 5.8	フク土	底部右回転糸切痕、底部が厚い、底部と体部下端の境に段を持つ。	①褐色②酸化③底部④密
2～4号 溝-6	环-土師質	— — 6.6	フク土	底部右回転糸切痕、埴な糸切痕である、底部が厚い。	①灰褐色②酸化③底部④密

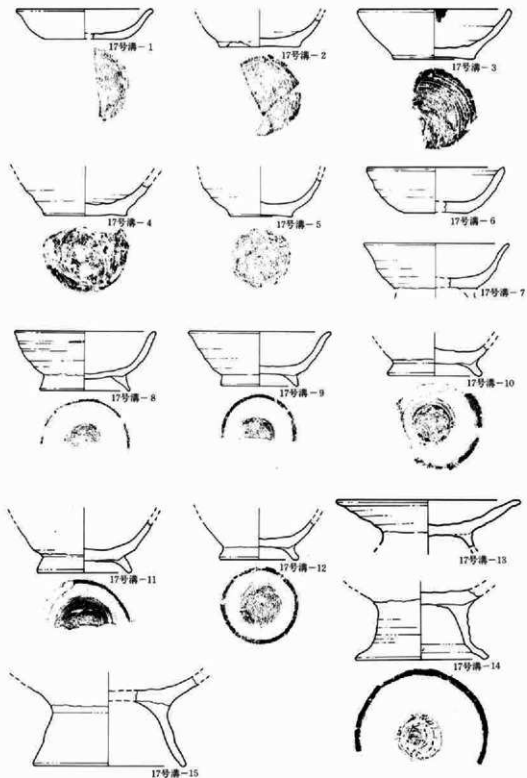
2～4号溝出土遺物観察表(2)

遺構及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
2～4号 溝-7	杯-土師質	3.6(11.4) (5.6)	フク土	底部回転糸切痕、口径の大きな 杯である。底部から口縁までな だらかに開く。	①褐色②酸化③口縁-底部写④密
2～4号 溝-8	杯-土師質	3.9(10.4) (5.4)	フク土	底部右回転糸切痕、体部が一部 直立気味に立ち、口縁部が大き く外反する。	①褐色②酸化③口縁-底部写④密
2～4号 溝-9	甕-土師質	— — (8)	フク土	高い高台の付く甕の高台部と底 部である。高台部内側回転ナデ。	①灰褐色②酸化③高台わずか底面 残存④密
2～4号 溝-10	杯-土師質	— — 6	フク土	底部右回転糸切痕、底部は厚く 体部は薄い。内側に少し炭素の 吸着あり。	①灰褐色②酸化③底部はは残存④ 密
2～4号 溝-11	甕-土師質	5.2(11.2) 7.6	フク土	高台部内側右回転糸切痕、太く 高い高台が貼付、口縁部が外反 する。	①灰褐色②酸化③口縁-体部写底 面残存④密
2～4号 溝-12	甕-土師質	5.1 11.4 7	フク土	高台部内側回転ナデ、高台外側 下端は鋭角になっている。内外 面横ナデ。	①褐色②酸化③高台写欠損④密
2～4号 溝-13	甕-土師質	5 11.6 6	フク土	高台部内側右回転糸切痕。細長 い高台を持つ。底部が厚く体部 は薄い。	①褐色②酸化③完形④密
2～4号 溝-14	甕-土師質	— — 6.4	フク土	高台部内側右回転糸切痕、太く 短い高台が貼付、底部が厚く体 部は薄い。	①灰褐色②酸化③底部残存④ 1 ～3mmの砂粒を含む。
2～4号 溝-15	甕-土師質	— — 6.4	フク土	高台部内側右回転糸切痕、他と 異なり底部が薄い。赤色を帯び てやや異質。	①褐色②酸化③底部残存④密
2～4号 溝-16	甕-土師質	— — 8.8	フク土	高台部内側回転ナデ、外側へ開 く太く長い高台を持つ。体部の 整形は雑。	①褐色②酸化③底部残存④酸化鉄 を少量含む。
2～4号 溝-17	甕-土師質	— — (10.6)	フク土	高さ3.5cmの大きな高台を持つ。 高台はなだらかに外側へ開く。	①灰褐色②酸化③高台写底部残存 ④密
2～4号 溝-18	蓋-須恵器	— — —	フク土	須恵器環蓋。内側にかえりを持 つ、天井部は回転ヘラ削り。	①灰白色②還元③全体写④密
2～4号 溝-19	小形蓋 -須恵器	— — (5.6)	フク土	底部ヘラ整形。体部横ナデ。	①灰白色②還元③底部写④密
2～4号 溝-20	甕-須恵器	3.4(10.8) (5)	フク土	底部回転糸切痕、体部外側ロク ロ目残る。口唇部弱く外反する。	①灰白色②還元③口縁-底部写④ 密

第4章 検出された遺構と遺物

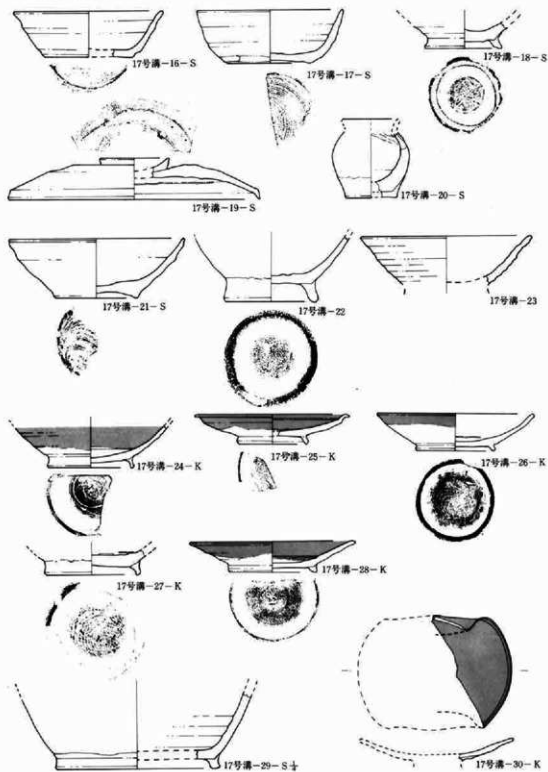
2～4号溝出土遺物観察表(3)

遺構及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
2～4号溝-21	杯-須恵器	3.2 9.2 5.3	フク土	底部右回転糸切痕、底径・口径とも小さい杯、口縁部がゆがむ。	①灰白色②還元③口縁～底部迄④密
2～4号溝-22	杯-須恵器	3.9 12.6 5.2	フク土	底部右回転糸切痕、底部に板目が残る、口唇部大きく外反する。	①灰白色②還元③口縁迄欠損④密
2～4号溝-23	杯-須恵器	— — 5.6	フク土	底部右回転糸切痕、器高の高い杯。	①灰白色②還元③底部のみ④2～5mmの砂粒を含む。
2～4号溝-24	碗-須恵器	— — 6.8	フク土	底部右回転糸切痕、厚く雑な高台が貼付、内側底部中央に凸状の粘土が残る。	①灰白色②還元③底部④2～3mmの砂粒を含む。
2～4号溝-25	碗-土師質	— — 5.4	フク土	高台部内側回転糸切痕、底部が厚く器内が薄い碗、鋭い端部の高台が貼付。	①灰白色②還元③底部残存④密
2～4号溝-26	碗-土師質	— — (6.8)	フク土	高台部内側回転糸切痕、高台部内側～内側底部にかけて炭素吸着による黒色。	①灰白色②還元③高台迄底部残存④1～3mmの砂粒を含む。
2～4号溝-27	碗-土師質	— — 5.2	フク土	2～4号溝-27に似た器形、両者とも還元焼成である。	①灰白色②還元③底部残存④密
2～4号溝-28	碗-須恵器	5.4 13.8 7.2	フク土	高台部内側左回転糸切痕、左回転のロクロ使用による異質な碗。	①灰白色②還元③口縁～高台迄④2～5mmの砂粒を含む。
2～4号溝-29	壺-須恵器	— (10.2) —	2～4号	口縁が短く直立する。頸部に自然軸	①灰色②還元③口縁迄④密
2～4号溝-30	杯-須恵器 イブシ	3.2 (11) 5	2～4号	底部右回転糸切痕、底部が厚い。	①灰白色②還元③口縁～底部迄④密
2～4号溝-31	碗-須恵器 イブシ	4.2(12.8) (5)	2～4号	太く短い高台が貼付、口縁部外反する。	①灰白色②還元③口縁～底部迄④密
2～4号溝-32	碗-土師質	— — 6	2～4号	高台部内側回転ナデ、外面黒色を呈す。	①灰白色②還元③底部④密
2～4号溝-33	碗-須恵器 イブシ	— — 6.7	2～4号	高台部内側右回転糸切痕。	①黒色②酸化③高台迄底部④密
2～4号溝-34	碗-土師質	— — (5.8)	2～4号	底径の小さく、器高の大きな碗。	①灰白色②還元③底部迄④密
2～4号溝-35	蓋	— 12 —	フク土	天井部へラ削り、天井部以外横ナデ、外側6ヶ所、内側ほぼ全面へラ磨き。	①褐色②酸化③つまみ欠損④密
2～4号溝-36	杯-土師器	3.9(12.6) —	フク土	底部へラ調整、内面横ナデ後、体部縦方向、内面螺旋状の珣文を掻く。	①褐色②酸化③口縁～底部迄④密



第148図 準幹1号・17号溝遺物実測図 (1)

第4章 検出された遺構と遺物



第149図 単幹1号・17号溝遺物実測図(2)

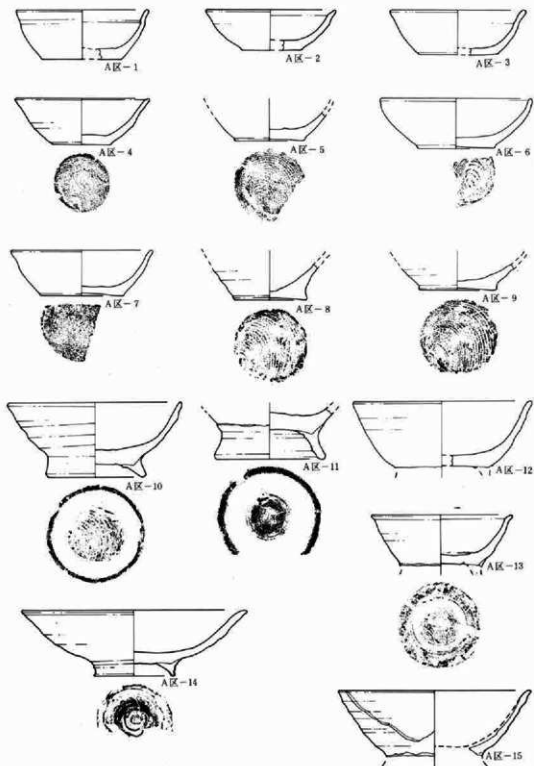
17号溝出土遺物観察表(1)

遺構及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
17号溝 -1	坏-土師質	2.4 11 (5.8)	フク土	底部回転糸切痕、器高が低く、口径、底径の大きな坏である。	①褐色②酸化③口縁-底部④密
17号溝 -2	坏-土師質	— — 6.4	フク土	底部右回転糸切痕、体部下端と底部との間に段を持つ。	①灰褐色②酸化③底部④密
17号溝 -3	坏-土師質 灯明	4(12.2) 6.4	フク土	底部右回転糸切痕、底部が厚い、口縁部に油層付着。灯明として利用される。	①灰白色②還元③口縁-底部④2-4mmの砂粒を含む。
17号溝 -4	坏-土師質	— — 6.6	フク土	底部に熱り目の認められない右回転糸切痕、特異な技法である。	①灰褐色②酸化③底部④3-5mmの砂粒。
17号溝 -5	坏-土師質	— — 5	フク土	底部右回転糸切痕、底部が厚い、体部は内彎しつつ、直立気味に立ち上がる。	①灰褐色②酸化③体部④密
17号溝 -6	坏-土師質	3.6 (11) (5)	フク土	底部右回転糸切痕、全般に器内の厚い坏、内外面横ナデ。	①褐色②酸化③口縁-底部④密
17号溝 -7	甗-土師質	—(11.6) —	フク土	高台部貼付後、きれいにはずれている。体部ロクロ目残る。口縁部弱く外反。	①灰褐色②酸化③口縁-底面④密
17号溝 -8	甗-土師質	4.7(11.4) 7.2	フク土	高台部内側回転ナデ、断面三角形の高台を貼付、口縁部は外反しない。	①灰褐色②酸化③口縁-高台④密
17号溝 -9	甗-土師質	4.4(11.4) 6.2	フク土	高台部内側回転ナデ、体部ロクロ目残る。口縁部弱く外反する。	①灰白色②還元③口縁-高台④密
17号溝 -10	甗-土師質	— — (7.6)	フク土	高台部内側右回転糸切痕、踵に高台を貼付している。	①灰褐色②酸化③高台④底面⑤酸化鉄を少量含む。
17号溝 -11	甗-土師質	— — (7.6)	フク土	高台部内側回転ナデ、底部の厚い甗である。	①灰褐色②酸化③底部④密
17号-12	甗-土師質	— — 6.4	フク土	高台部内側右回転糸切痕。	①褐色②酸化③底部④密
17号溝 -13	甗-土師質	—(14.8) —	フク土	内外面横ナデ、口唇部は横に開く、高台部の先端を欠く、ていねいな造り。	①灰褐色②酸化③口縁-底面④密
17号-14	甗-土師質	— — 10.6	フク土	高台付高の高台部、内外面横ナデ。	①灰褐色②酸化③高台④密
17号-15	甗-土師質	— — 12.4	フク土	14に共通した器形・整形。	①褐色②酸化③高台のみ④密

第4章 検出された遺構と遺物

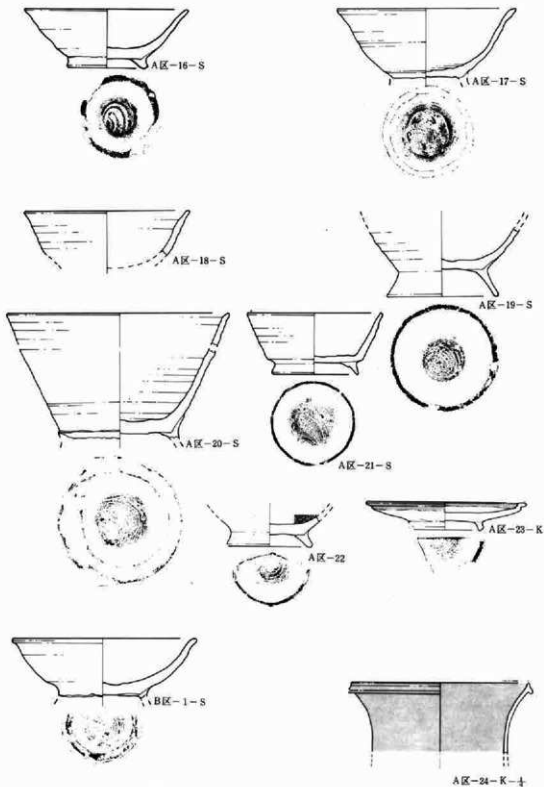
17号溝出土遺物観察表(2)

遺構及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④粘土⑤備考
17号溝-16	坏一須恵器	3.7 12 (6.8)	フク土	底部回転へう調整、体部下端に凹状の溝が一周している。	①灰白色②還元③口縁~底部④2~4mmの砂粒を含む。
17号溝-17	坏一須恵器	4.2 11.7 6.8	フク土	底部回転糸切痕、体部に弱い口クロ目が認められる。底部の大きな坯。	①灰白色②還元③口縁~底部④密
17号-18	陶一須恵器	— — 6	フク土	高台部内側に「×」の刻印がある。	①灰白色②還元③底部④密
17号溝-19	蓋一須恵器	— — (21.5)	フク土	つまみ貼付点周辺回転糸切痕、内面重ね焼き痕あり、その外側に自然釉貼付。	①灰白色②還元③全体④黒色粒子が全面に認められる。
17号溝-20	小型壺一須恵器	— — 4	フク土	底部へう調整、胴下半から底部にかけて特に厚くなる。内外面横ナデ。	①灰白色②還元③胴部④2~3mmの砂粒を含む。
17号溝-21	坏一須恵器	4.7 7.1 (6.6)	フク土	底部右回転糸切痕、その部分が大きく内側に彎曲している。	①灰白色②還元③口縁~底部④2~3mmの砂粒含む。
17号-22	陶一土師質	— — 7.5	フク土	高台部内側回転糸切痕、イブシ焼成。	①黒色②酸化③底部~体部④密
17号-23	陶一土師質	— (13.8) —	フク土	体部外側口クロ目、イブシ焼成。	①黒色②酸化③口縁~体部④密
17号溝-24	陶一灰釉	— — (7)	フク土	高台部内側回転ナデ、細い高台が貼付、刷毛塗りによる施釉。	①断面灰白、釉緑色②還元③底部体部④密
17号溝-25	皿一灰釉	2.4(12.4) (5.4)	フク土	高台部内側右回転糸切痕、口唇部は直立後、大きく横方向へ外反する。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁~底部④密
17号溝-26	皿一灰釉	3(12.6) 6.2	フク土	高台部内側右回転糸切痕残る。漬け掛けによる施釉。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁~体部④底面残存⑤密
17号溝-27	陶一灰釉	— — (7.8)	フク土	高台部内側右回転糸切痕、底部が厚く粘土の多い塊である。	①断面灰白、釉透明②還元③高台④底部⑤重い粒子
17号溝-28	段皿一灰釉	2.5(13.2) 7.2	フク土	高台部内側回転ナデ、内側底部に弱い段を持つ、漬け掛けによる施釉。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁~底部④密
17号溝-29	壺一須恵器	— — (7.6)	フク土	断面四角形の高台を装着、内外面横ナデ。	①灰白色②還元③底部④1~2mmの砂粒含む。
17号溝-30	耳皿一灰釉	— — —	フク土	内面全面に灰釉が塗られている。	①断面灰白、釉透明②還元④密



第150図 準幹1号・A区遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第151図 単幹1号A・B区遺物実測図(2)

単幹1号A区出土遺物観察表(1)

調査区 及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
単幹1号 A区-1	坏-土師質	4(10.5) (6.4)	フク土	底部右回転糸切痕、底部が厚い、 口縁部内側に弱い隆を持つ。	①灰褐色②酸化③口縁～底部④密
単幹1号 A区-2	坏-土師質	3.2(10.4) (4.6)	フク土	底部右回転糸切痕、底部が厚い、 口唇部は薄くなりやや外反する。	①灰褐色②酸化③口縁～底部④密
単幹1号 A区-3	坏-土師質	3.6(10.8) (6.4)	フク土	底部回転糸切痕、内外面横ナデ、 口唇部弱く外反する。	①灰褐色②酸化③口縁～底部④密
単幹1号 A区-4	坏-土師質	3.7 10.8 4.6	フク土	底部右回転糸切痕、底径の小さな 坏である。	①灰褐色②酸化③口縁～底部④欠 損⑤輝石を含む。
単幹1号 A区-5	坏-土師質	— — 5.4	フク土	底部右回転糸切痕、体部内外面 横ナデ。	①灰褐色②酸化③底部④欠損⑤密
単幹1号 A区-6	坏-土師質	4(12.2) 6	フク土	底部右回転糸切痕、2種類の糸 を使用して糸切を行なっている。	①褐色②酸化③口縁～底部④密
単幹1号 A区-7	坏-土師質	— — (6.5)	フク土	底部糸切痕が残るが、磨滅して いる。粒子が荒く砂質の土器で ある。	①灰褐色②酸化③底部④砂質
単幹1号 A区-8	坏-土師質	— — 6	フク土	底部に目の荒い右回転糸切痕、 底部周辺は厚いが中央部は薄く なっている。	①灰褐色②酸化③底部④密
単幹1号 A区-9	坏-土師質	— — 6.2	フク土	底部右回転糸切痕、内面クロロ 目。	①灰白色②還元③底部④酸化鉄を 少量含む。
単幹1号 A区-10	陶-土師質	6 13.8 8	フク土	底部右回転糸切痕、目の荒い糸 を使用、雑な高台を貼付。	①灰白色②還元③口縁④欠損⑤1 ～2mmの砂粒含む。
単幹1号 A区-11	陶-土師質	— — 8.8	フク土	高台付陶の高台部、高台部内側 回転ナデ、ていねいに高台を装 着している。	①褐色②酸化③高台④底面残存⑤ 酸化鉄を少量含む。
単幹1号 A区-12	陶-土師質	5.2(14.3) 4	フク土	底部回転糸切痕、器高、底径と も大きな陶である。	①灰白色②還元③④密
単幹1号 A区-13	陶-土師質	—(11.4) —	フク土	高台部内側回転糸切痕、高台は すべてはずれている。内側底部 に重ね痕の残るめずらしい陶で ある。	①灰白色②還元③高台④欠損底部⑤ 密

第4章 検出された遺構と遺物

準幹1号A区、B区出土遺物観察表(2)

調査区 及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地紋③残存④胎土⑤備考
準幹1号 A区-14	甕-土師質	5.2(18.2) (6.4)	フク土	高台部内側回転ナデ、断面三角形の高台を装着。体部、口縁部が大きく開く。	①褐色②酸化③口縁-高台部④1~2mmの砂粒含む。
準幹1号 A区-15	甕-土師質	—(15.4) —	フク土	高台付甕と思われる。外面にロクロ目残る。	①灰褐色②酸化③口縁-体部④⑤内面器表の大部分に剥落
準幹1号 A区-16	甕-須恵器	4.7 (13) 6.6	フク土	高台部内側右回転糸切痕、目の広い糸を使用。埴に高台を装着している。	①灰白色②還元③口縁-高台④1~2mmの砂粒含む。
準幹1号 A区-17	甕-須恵器	— (15) —	フク土	高台部内側中央部回転糸切痕、内外面横ナデ、口唇部弱く外反する。	①灰白色②還元③高台欠損口縁-底面④⑤密
準幹1号 A区-18	甕-須恵器	—(13.2) —	フク土	体部内外面ロクロ目残る。口唇部弱く外反する。	①灰白色②還元③口縁④1~2mmの砂粒含む。
準幹1号 A区-19	甕-須恵器	— — 9	フク土	高台部内側右回転糸切痕、細長い高台を装着している。	①灰白色②還元③底面④密
準幹1号 A区-20	鉢-須恵器	—(17.4) —	フク土	高台部内側回転糸切痕、胴部回転横ナデ。	①灰白色②還元③高台欠損口縁④底面⑤1~2mmの砂粒含む。
準幹1号 A区-21	甕-須恵器	4.9 10.8 7	フク土	高台部内側右回転糸切痕、ていねいに高台を装着。体部は直線的に外側へ開く、口唇部の外反を認められない。	①灰白色②還元③高台-口縁④⑤密
準幹1号 A区-22	甕-土師質 内黒	— — (6.8)	フク土	高台部内側回転ナデ、内面は磨かれている。灰黒吸着により黒色を呈す。	①灰褐色②酸化③底面④⑤密
準幹1号 A区-23	皿-灰釉	2.2 (13) (6.2)	フク土	高台部内側回転ナデ、口縁部は直立後横へ大きく外反する。施物は濃げ擦げ。	①断面灰白、輪縁緑色②還元③口縁-底面④⑤密
準幹1号 A区-24	瓶-灰釉	—(18.6) —	フク土	口径の大きな瓶の口縁部、口唇部内側に段は認められない。内外面刷毛塗りに厚く、ていねいな施釉である。	①断面灰白、輪縁緑色②還元③口縁④⑤密
準幹1号 B区-1	甕-須恵器	—(14.4) —	フク土	高台部内側右回転糸切痕、高台は全体が割れて欠けている。口唇部の外反はほとんどない。	①灰白色②還元③高台欠損口縁-底面④1~3mmの砂粒含む。

5号溝

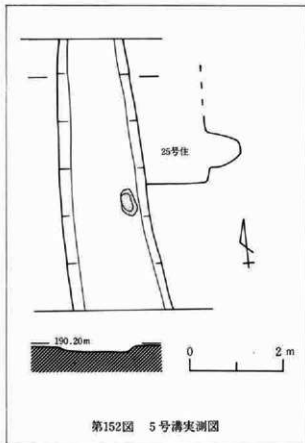
位置及び概略 耕114-2号、96-15・16号住居址の東側、25号住居址の西側に位置している。溝は25号住居址を切って掘られ、南北に走っている。覆土は準幹1号内の1~4号溝同様、酸化鉄を帯びた川砂であり、大小の石を多量に含んでいた。覆土の川砂に混じり遺物も多く出土したが、その器面は鉄分の錆色がこびりついているものも見られた。溝の在り方が1~4号溝を共通していることから、5号溝と1号溝は直角をなして交わる可能性がある。

規模 東西幅2m、深さ15cm。
遺物 土師質土器碗破片多数、甕等出土。

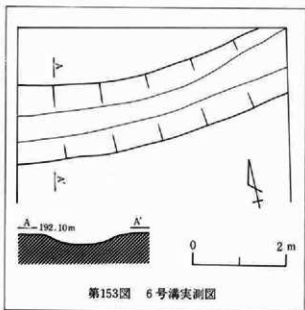
6号溝

位置及び概略 1号土塚北側に位置、耕113号最北端、80-10、81-10グリットに属す。1~5号溝と違い、覆土に酸化鉄含有の川砂含まず。

規模 南北幅1.45m、深さ20cm。
遺物 全く出土していない。

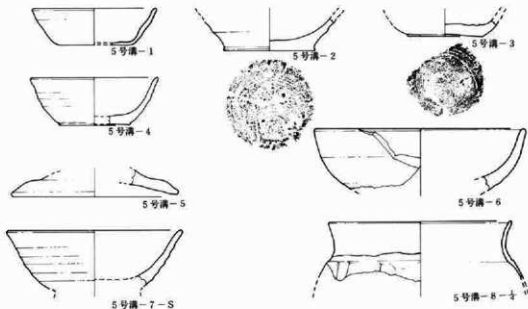


第152図 5号溝実測図



第153図 6号溝実測図

第4章 検出された遺構と遺物



第154図 5号溝遺物実測図

5号溝出土遺物観察表

遺構及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
5号溝 -1	杯-土師器	2.9 (10) —	フク土	平底の杯、体部外側指調整、内側横ナデ、器内の薄い底部である。	①褐色②酸化③口縁~底部写④密
5号溝 -2	杯-土師質	— — 7.4	フク土	底部右回転糸切痕、底部端が少し張り出す。底部の厚い杯である。	①褐色②酸化③底部④密
5号溝 -3	杯-土師質	— — 6	フク土	底部右回転糸切痕、底部の厚い杯である。	①灰白色②還元③底部写④密
5号溝 -4	杯-土師質	3.8(10.4) (5.8)	フク土	底部の整形方法不明、全体が砂質である。全面に黒色を呈している。	①黒色②酸化③口縁~底部写④白色粒子を多く含む。
5号溝 -5	蓋-土師質	— — (13.4)	フク土	蓋の口縁部破片と思われる。内外面横ナデ。	①灰白色②還元③高台写④密
5号溝 -6	碗-土師質	— (16.9) —	フク土	器内の厚い皿状の碗、内外面横ナデ。	①灰褐色②酸化③口縁~体部写④密
5号溝 -7	碗-須恵器	— (14.2) —	フク土	体部外面口縁目残る。高台付碗と思われる。	①灰白色②還元③口縁~体部写④密
5号溝 -8	壺-土師器	— (19.6) —	フク土	「コ」の字状口縁を意識させる壺、器内が薄い。肩部横方向へラ削り。	①褐色②酸化③口縁部写④密

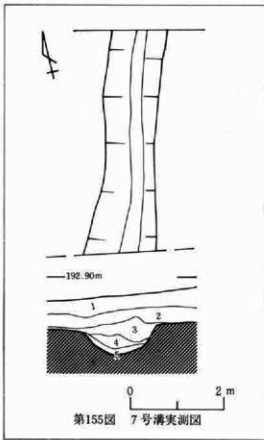
7号溝

位置及び 墓域の2m東側にあたり耕113号
概 略 に位置する。79-15・16グリット
に属し、8号溝に近接して、
ほぼ平行で南北に走る。覆土を
観察すると、8号溝覆土の延長
上の土層が7号溝の掘り込み面
より高い面にあるため、7号溝
は8号溝より古いことが理解出
来る。

規 模 東西幅1.1m、深さ60cm。

遺 物 全く出土していない。

- 1 黒褐色土層 耕作土
- 2 黒褐色土層 5mm程の軽石を含む土層
- 3 暗褐色土層 軽石を少量含む土層
- 4 暗褐色土層 ロームブロック・軽石含む土層
- 5 茶褐色土層 ロームを多く含む土層



第155図 7号溝実測図

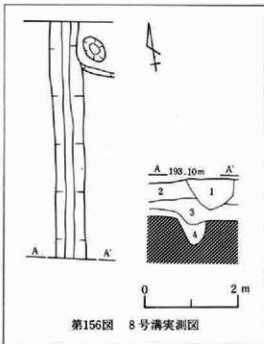
8号溝

位置及び 7号溝西側、耕113号に位置し、
概 略 78-15・16グリットに属す8号
溝は18号住居址を切って掘られ
ている。南北方向へ直線的に走
る。幅の狭い、深さのあるV字
状を呈する溝である。

規 模 東西幅64cm、深さ51cm。

遺 物 全く出土していない。

- 1 褐色土層 ロームブロックを多く含む土層
- 2 黒褐色土層 耕作土
- 3 黒褐色土層 1cm程の軽石含む土層
- 4 黄褐色土層 ローム小粒子多く含む土層



第156図 8号溝実測図

第4章 検出された遺構と遺物

9号溝

位置及び概略 耕114-1号を東西に走る長い溝である。63-16-76-17グリットまで、66mの長い区間を直線的に走る。63-16グリットで溝は直角に近く南へ曲がり、66-16グリットからも枝分かれして南に溝が延びる。自然地形に関係なく掘っている様子から、人為的であることが理解出来る。溝は西側が高く東側が低い地形でありその高低差は底面で97cmである。覆土は川砂や砂利をほとんど含まず、水が大量に流れた痕跡は見られない。溝の北側区域に住居址が多く検出されている。

規模 南北の幅1.0-1.3m、深さ25-30cm、東西の長さは東側が未完掘のため不明である。現状で66m。溝の西側底部の標高は193.45m、東側底部は192.48mである。

遺物 全く出土していない。

10号溝

位置及び概略 耕113号、12号住居址北側に位置し、75-21・22、76-21・22グリットに属す。東西に走る溝である。覆土に川砂はほとんど含まれていないため、水は多く流れていない。溝中層より下から、石がたくさん検出された。

規模 南北の幅1.9m、深さ80-90cm、東西の長さは不明。

遺物 全く出土していない。

11号溝

位置及び概略 耕116-2号、78-34・35、79-34・35グリットに属す。南北に走る溝で、12号溝の西側にはほぼ平行している。11・12号溝は、7・8号溝の南延長上にある。掘り方は、上から数段階に分かれており、段面から見ると三段前後を残して次第に幅の狭い溝の底部分へと移行している。従って上部の幅は広いが、下部の幅が狭い小さな溝となっている。調査によって、溝は最近まで使用されていたことを示し、切り込み面からは溝が平安時代に近い頃に掘られたことを示している。

規模 東西の幅3m、深さ80cm。

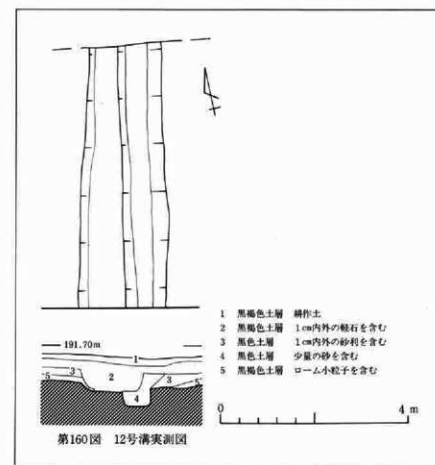
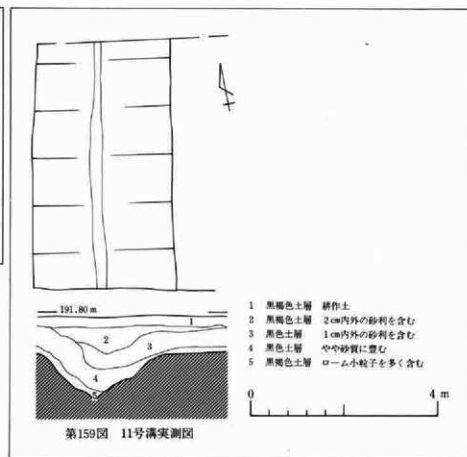
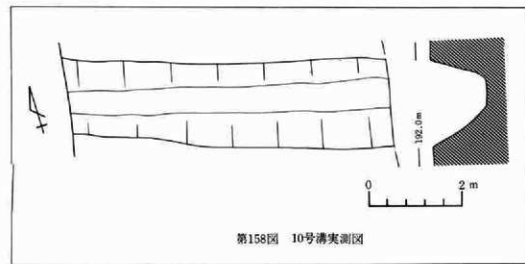
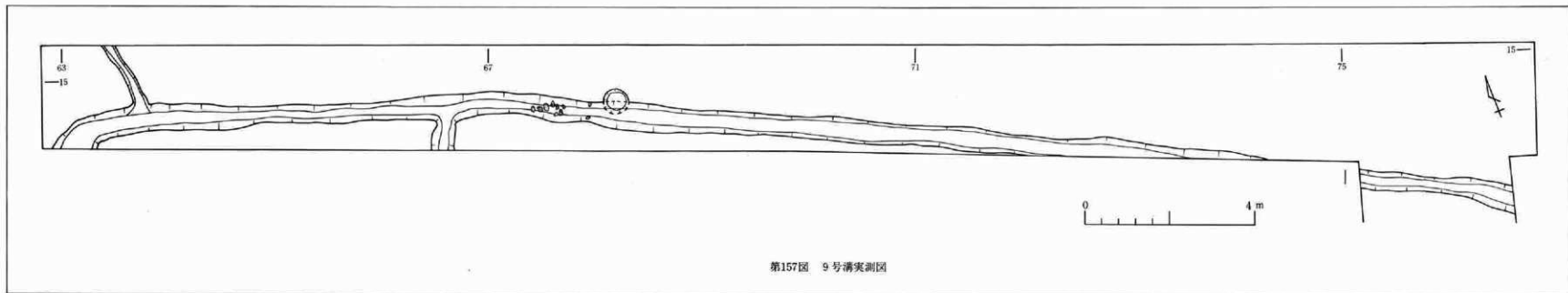
遺物 全く出土していない。

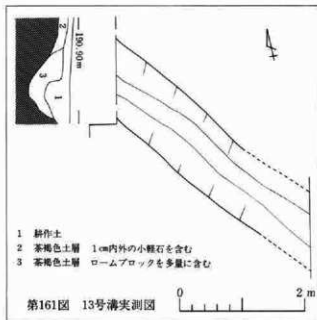
12号溝

位置及び概略 11号溝の東6m地点に位置し80-34・35、81-34・35グリットに属す。2本が重複して掘られている溝で、下の溝の西側を切って上の溝を掘っている。2本の溝とも12号溝とした。土層を断面から見ると、12号溝の覆土は11号溝の覆土中の中間層に該当する。12号溝より11号溝が古い。

規模 上溝幅1.4m、深さ40cm。下溝の幅60cm、深さ40cm。

遺物 全く出土していない。



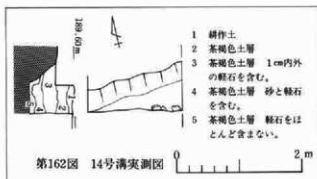


13号溝

位置 57号住居址南側に位置し、及び 耕113号、77-47・48、78-1概略 48グリットに属す。当遺跡内で1-4・17号溝や9号溝に次いで広く遺存している。耕114-2号や、耕116-2号の11・12号溝等とは溝の走る方向や掘り方が異なる。

規模 南北の幅2m、深1m。

遺物 全く出土していない。

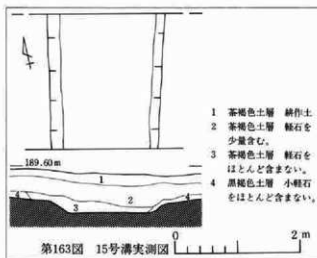


14号溝

位置 耕113号、76・77-56グリット及び トに属する。58号住居址を概略 切り込んでいる。調査区域の溝中央に電柱があり一部しか調査出来なかった。

規模 幅や長さ不明。深さ80cm。

遺物 全く出土していない。

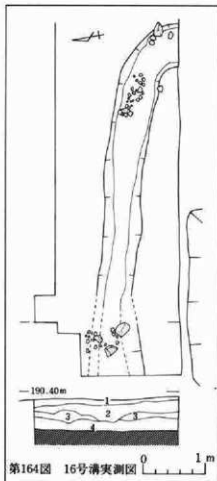


15号溝

位置 耕118号の東端近くに位置及び しており75-64・65グリット概略 トに属す。幅は他の溝よりもやや広い。深さはあまりなく底部分は平らである。底部分はローム層である。覆土に川砂は含まれていない。

規模 上幅3.3m、下幅2.7m、深さ30cm。

遺物 全く出土していない。



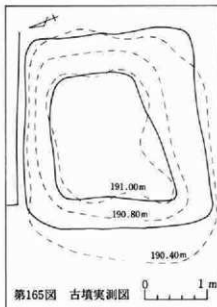
16号溝

位置及び 古墳の北側、耕118号最西端に位置する。
概略 65-65、66-64、67-65、68-65グリットに属す。古墳の周溝を検出する目的のために、古墳寄りから調査を行ったが、周溝は確認出来なかった。16号溝は古墳の墳丘を避けるように、東西部分はまっすぐ走り、やがて古墳の東側、5m程の部分で溝は南に折れる。この状態から16号溝は古墳の周辺に掘られているが、周溝とは別だと思われる。溝の西端にあたる65-65グリットと東端の67-65と68-65グリットの一部に、大小の石がまぎれまぎれに検出しているが、その中間地域からは認められなかった。

規模 溝の幅南北1.1m、深さ6~10cm。

遺物 全く出土していない。

- 1 茶褐色土層 耕作土
- 2 茶褐色土層 1~10mmの軽石を含む。
- 3 茶褐色土層 軽石粒、礫を含む。
- 4 茶褐色土層 ローム粒子、軽石を含む。



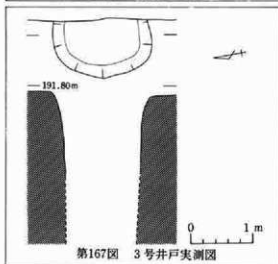
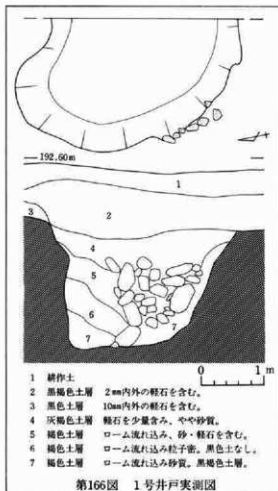
古墳

位置及び 発掘調査区域最西南端、耕118号・16号溝の南側に位置する。65-65、65-66、66-65、66-66グリットに属す。古墳の位置は開発区域でなかったため破壊は免れた。古墳の北側に接して道路が作られるため、墳丘測量を行なった。墳丘上には天井石と思われる巨大な石が存在した。現在では周辺が削られて、方墳に近い形を呈している。

規模 東西3.10m、南北2.95m、墳丘の高さは地表面から90cm。

遺物 墳丘及び周辺から出土していない。

第3節 井戸・小鍛冶



1号井戸

位置及び概略 1号土壇南側に位置し、耕113号、81-13・14グリットに属す。井戸の東側は発掘区域外のため、西側約半分のみでの調査である。現状からは、平面形が正円をなさず、北側部分が内側にせり出している。南側上端に石が並べてあった。井戸周辺で、柱穴等の検出を試みたが確認出来なかった。底部分の中央には多量の石が投げ込まれていた。覆土断面では北側に7つに分かれる層が確認されているが、南側は土砂・石の落ち込みによって不明瞭となる。

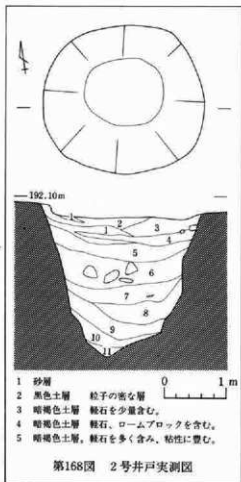
規模 東西は未完掘のため不明。南北2.92m、深さ2.46m

遺物 播鉢と天目茶碗の破片を出土

3号井戸

位置及び概略 13号住居址・14号住居址東側、耕113号、77-32グリットに属す。東側が発掘区域外のため未完掘である。表土面の径は小さいが深い掘り込みの井戸である。2m程掘った所で、井戸周辺の土層基盤が弱く不安定な為、掘り下げを中止した。更に深い井戸と思われる。

規模 径は1.5m。深さ2m以上。
遺物 全く出土していない。



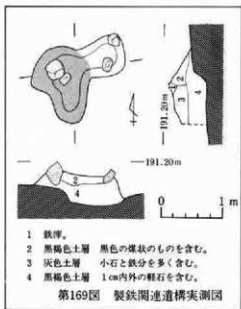
2号井戸

位置及び 11号住居址南側に位置し、耕113号、

概略 75-28・29、76-28・29グリットに属す。1号井戸に近似した断面形を呈するが、平面は1号井戸とは異なり正円形を呈する。また、井戸の埋没状態は、自然に徐々に行なわれていったことを土層図が示している。

規模 東西2.51m、南北2.40mである。深さは2.40mを計る。

遺物 底部の近くから緑釉瓦の破片、中世播鉢、焼締の陶器破片、軟質陶器の底部等が出土。



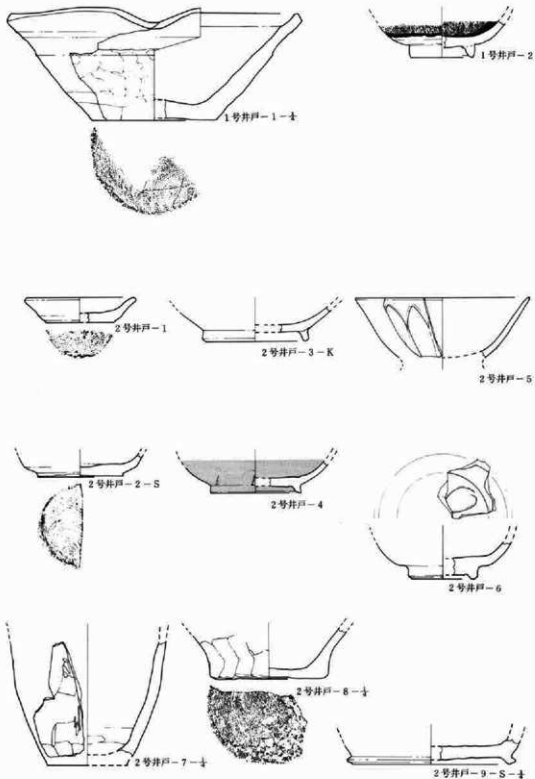
製鉄関連遺構

位置及び 38号住居址北側に位置し、耕116-2

概略 号、83-34グリットに属す。遺構の検出状況は悪い。北東部分に直立したように石が2個検出され、西側部分から1個検出された。その間中央付近に、炭・灰・鉄滓が認められた。うち鉄滓は南側部分から、また炭・灰の出土は北側部分に多く認められた。(点描は焼土範囲を示す。)

規模 遺構は一部だけの確認であるため、全体の規模、範囲は不明。

遺物 鉄滓、炭、灰等



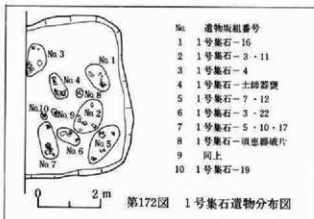
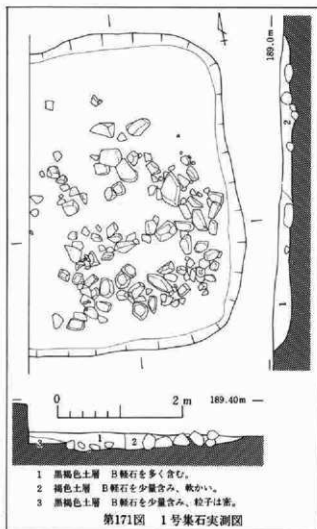
第170图 1・2号井戸遺物実測図

第4章 検出された遺構と遺物

1・2号井戸出土遺物観察表

遺構及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地紋③残存④胎土⑤備考
1号井 戸-1	鉢 (軟質陶器)	11.9 — —	フク土	外面体部中に指頭圧痕があり、体部下半、上半に横ナデ整形がある。内面上方には横ナデがあり、下半に摩りおろしによる擦痕あり。片口部を持つ。	①灰白②軟質③片残存④小礫を多く含む⑤推定在地製品
1号井 戸-2	甕 (天目輪)	— — 5	フク土	外面体部より、内面に天目地輪あり。外面体部下半へラ削り、高台は貼付高台。	①灰色②硬質、焼締③片残存④緻密⑤個人製品、近世遺物
2号井 戸-1	皿 (中世土師 質土器)	2 (8.7) (5.4)	フク土	外面体部ロクロ目あり。底面に糸切痕あり。内外体部はロクロによる横ナデあり。	①淡褐色②軟③片残存④粗砂を含む⑤中世遺物
2号井 戸-2	杯 (須恵器)	— — 6.8	フク土	底面ロクロ右回転糸切痕。体部内外面ロクロ目あり。	①灰色②硬質焼締③片残存④緻密⑤平安時代遺物
2号井 戸-3	甕 (灰輪陶器)	— — 8.4	フク土	内外面に地輪なし。高台は貼付高台。	①淡灰色②硬質焼締③小片④緻密⑤平安時代遺物
2号井 戸-4	甕 (緑輪陶器)	— — 7.3	フク土	底面を除く内外面に地輪あり。内面へラ研磨あり。外面ロクロによる横ナデあり。高台は貼付高台。	①深緑色(輪) 緑化(部分的な輪表面) 灰褐色(胎土) ②硬③底部のみ④緻密⑤平安時代遺物
2号井 戸-5	甕 (青磁)	— (14) —	フク土	蓮弁割花文を外面に施す。内、外面厚く地輪される。	①深いオリーブ色(輪) 白色(胎土) ②焼締③小片④緻密⑤中国製品
2号井 戸-6	甕 (青磁)	— — (5.6)	フク土	底面、高台端部地輪なし。内面割花文あり。	①深いオリーブ色②焼締③小片④緻密⑤中国製品
2号井 戸-7	壺 (陶器)	— — —	フク土	体部外面に自然輪及ぶ。内面紐作痕。指頭圧痕後横ナデ。体部下端部へラ削りあり。	①灰色②焼締③小片④緻密⑤胎土が砂質なため麗美か。中世遺物
2号井 戸-8	壺 (陶器)	— — 12.6	フク土	体部外面端にへラ削りあり。内面に紐作痕、指頭圧痕あり。	①灰色②焼締③小片④緻密⑤胎土が砂質なため麗美か。中世遺物
2号井 戸-9	瓶 (須恵器)	— — 12	フク土	内、外面にロクロ痕あり。高台は貼付高台。	①灰色②硬③底部のみ④緻密⑤平安時代遺物

第4節 1号集石



1号集石

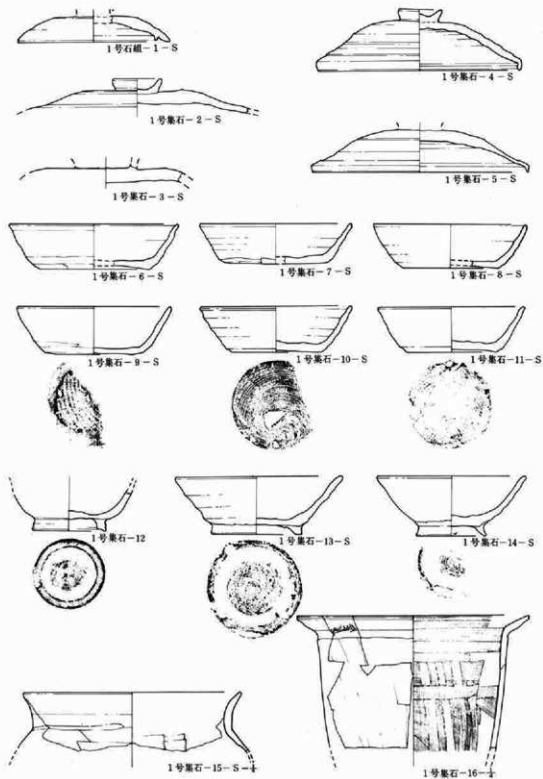
位置 1号溝南、準幹1号南西端及び

概略 に位置し、100-7・8グリットに属する。浅い掘り込みで、床面が平らな土壇状を呈する。遺構内には大小様々な石が不規則に並び、高さも一定でなく不揃いで検出された。中央部分は、幾分石が少ないが南側には多く重なって出土した。その出土状況は、第172図が示す通りである。遺物の出土状態から見ると、割れた土器片を捨てる状態ではなく、完形の土器をその地点に据えたような在り方を呈している。従って土器の多くは、多数の破片を接合することによって完形に近い形まで復元出来た。土器はほとんどが石の上であったが、少量の土器片は石の下にも認められた。北側に1号溝があり、鉄分を帯びた川砂を1号溝の遺物を含んでいるが、ここには認められない。遺構の機能は不明。

規模 東西は西側未完掘のため不明、現状で3.5m、南北5m。

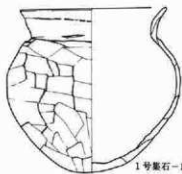
遺物 図及び観察表を参照の事。

第4章 検出された遺構と遺物

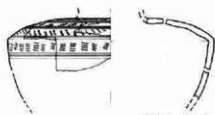


第173図 1号集石遺物実測図 (1)

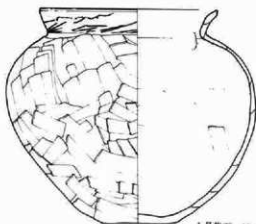
第4節 1号集石



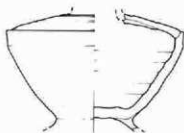
1号集石-17-土



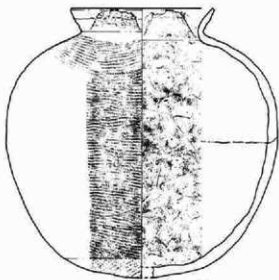
1号集石-20-S-土



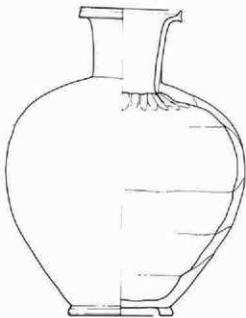
1号集石-18-土



1号集石-21-S-土



1号集石-19-S-土



1号集石-22-S-土

第174图 1号集石遺物実測图 (2)

第4章 検出された遺構と遺物

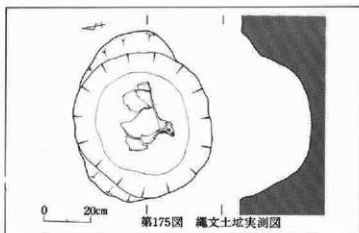
1号集石出土遺物観察表(1)

遺構及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1号集石 -1	蓋一須恵器	2 12.2 —	フク土	天井部回転ヘラ削り、内外面横ナデ、内側に「かえり」が明確に残存、全体的に弧状を呈す坏面である。	①青灰色②還元③つまみ他均残存④密
1号集石 -2	蓋一須恵器	— — —	フク土	天井部回転ヘラ削り、内面回転ナデ、中央部のへこむ凹状のつまみが付く、天井部周辺に重ね焼痕あり。	①青灰色②還元③口縁一周欠損④密
1号集石 -3	蓋一須恵器	— — —	フク土	天井部回転ヘラ削り、内面回転ナデ、天井部全面に自然釉が付着している。	①灰白色②還元③つまみ欠損、中心5cm四方残存④密
1号集石 -4	蓋一須恵器	4.9 16.4 —	フク土	天井部中央回転糸切痕の上に中央部のへこむ凹状のつまみが付く、口唇部は直に下に折れる。	①灰青色②還元③口縁欠損④1~2mmの砂粒含む。
1号集石 -5	蓋一須恵器	— 17.4 —	フク土	天井部回転ヘラ削り、その他内外面回転ナデ、つまみは離脱	①青灰色②還元③つまみ口縁欠損④密
1号集石 -6	坏一須恵器	3.6 13.4 9	フク土	底部右回転糸切痕、糸切後体部下半~底部周辺ヘラ調整、底部中央が少し盛り上がる。底部の大きな坏である。	①青灰色②還元③均④密
1号集石 -7	坏一須恵器	3.2 12.2 (8.4)	フク土	底部手持ヘラ削り、底部周辺手持ヘラ削り、底径の大きな坏である。内側全面に自然釉が付着している。	①青灰色②還元③均④密
1号集石 -8	坏一須恵器	3.5 12.4 (7.8)	フク土	底部ヘラ調整、内外面横ナデ、底径の大きな坏である。	①青灰色②還元③均④黒色鉱物を多く含む。
1号集石 -9	坏一須恵器	3.8(12.4) (8)	フク土	底部回転糸切痕、糸切後体部下端ヘラ調整、内外面横ナデ。	①灰白色②還元③均④密
1号集石 -10	坏一須恵器	3.6(11.8) 7.2	フク土	底部右回転糸切痕、糸切後無調整、糸切前に体部下端に凹状の削りを一周させている。	①灰白色②還元③均④密
1号集石 -11	坏一須恵器	3.6 12.2 7	フク土	底部右回転糸切痕、糸切後無調整、底径の大きな坏である。	①灰白色②還元③ほぼ完形④密
1号集石 -12	塊一土師質	— — — 6	フク土	高台部内側回転ナデ、端部の鋭い高台が付いている。	①灰白色②還元③底部④1mmの砂粒を含む。

1号集石出土遺物観察表(2)

遺構及び 番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②施成③現存④粘土⑤備考
1号集石 -13	陶一須恵器	4.6 13.5 7.2	フク土	高台部内側回転ナデ、厚く塗を 高台が貼付、一部炭素吸着により 黒色を呈す。	①灰白色②還元③口縁欠損④2 ~3mm砂粒を含む。
1号集石 -14	陶一須恵器	4.8 12 5.6	フク土	高台部内側回転ナデ、口唇部の 外反は認められない。	①灰白色②還元③口縁~高台反④ 1~2mmの砂粒含む。
1号集石 -15	甕一土師器	— (23) —	フク土	「コ」の字状口縁の甕、肩部に 横方向のへう削りが認められ る。	①褐色②酸化③口縁反④密
1号集石 -16	甕一土師器	— (25) —	フク土	最大径を口縁部に持つ、体部、 口縁部は直線に作られている。 胴部外側縦方向へう削り、内側 刷毛調整。	①褐色②酸化③口縁~体部反④1 mmの砂粒を含む。
1号集石 -17	甕一土師器	17.5 15.6 —	フク土	丸底、「く」の字状口縁の甕、 体部外側横方向のへう削り、口 縁部横ナデ、粘土帯接合面が残 る。	①褐色②酸化③劣④1~2mmの砂 粒を含む。
1号集石 -18	甕一土師器	22.8 19 7	フク土	底部へう調整、胴部外側へう削 り、肩部は口縁方向、胴下半部 は底部に向かうへう削り、「く」 の字状口縁の甕	①褐色②酸化③ほぼ完全④1~2 mmの砂粒含む。
1号集石 -19	甕一須恵器	28.3 15.2 —	フク土	丸底、円胴、「く」の字状口縁 の甕、外側全面平行叩目、内側 凸凹の当て目、口縁部横ナデ、 胴中央部に粘土帯接合痕残る。	①青灰色②還元③劣④1~2mmの 砂粒含む。
1号集石 -20	甕一須恵器	— — —	フク土	肩部に2条の横書き列点文が、 方向を「く」の字状にちがえて 描かれている。胴上部には1条 の横書き列点文が描かれてい る。その間を沈線が区画してい る。	①青灰色②還元③肩部の一部のみ ④表
1号集石 -21	甕一須恵器	— — —	フク土	高台部内側回転ナデ、ロクロ左 回転によるロクロ痕が体部内側 に認められる。体部と肩部の境 に沈線が認められる。	①青灰色②還元③口縁部以外劣④ 黒色粒子を多く含む。
1号集石 -22	甕一須恵器	32.5 10.2 11.1	フク土	高台部内側回転ナデ、断面四角 形のていねいな高台を装着、胴 部内外面ていねいな回転横ナ デ、肩部内側指頭痕、頸部は二 段構成により装着している。	①灰白色②還元③ほぼ完形④1 ~2mmの砂粒含む。

第5節 縄文土坑・土坑・墓坑



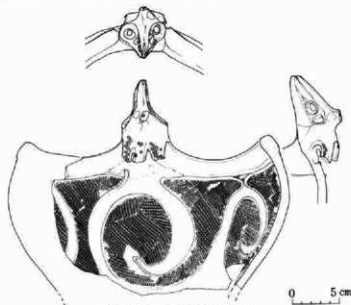
縄文土坑

位置 23号住居址東側に位
及び 置し、耕114-2号、

概略 95-15グリットに属
する。縄文時代に属
する遺構で確認でき
た唯一のもの。

規模 東西62cm、南北58cm
深さ75cmを呈する。

遺物 土坑内から深鉢形を
呈する縄文式土器が
出土している。鳥頭
を模した大型の形象
把手を持つ特異な器
形である。把手・頸
部の部分がまどまっ
ている。周辺及び他
区域からの同一破片
の検出に注意した
が、認められなかつ
た。土坑内からは縄
文式土器以外の出土
遺物はない。

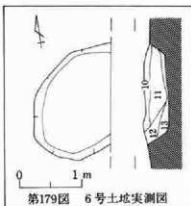
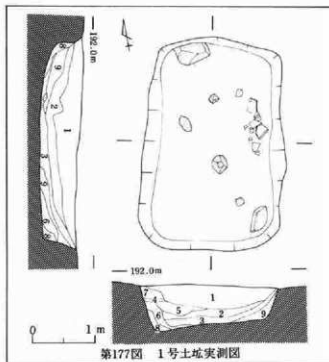


第176図 縄文遺物実測図

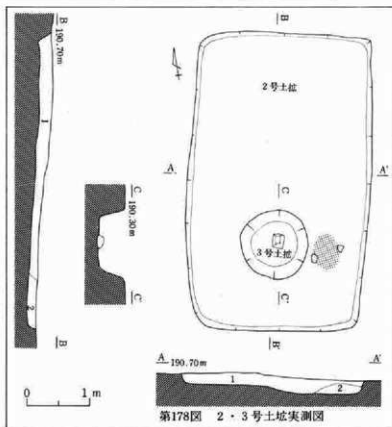
土器説明

器形は、口縁部が緩やかに内彎し、頸部が括
れて胴部が若干張り出す、深鉢形を呈すると
思われる。口縁は4単位の小波状で、各波状
頂部には、つまみ上げたような突起が付く。
内1つには、図のような大型の形象把手が付
けられている。把手は、鳥頭を模したよう
な形をしており、目の部分は孔状に突きぬけ
ている。頂頭部には突起が付けられ、刺突が

施されている。又、頸部は橋状を呈し、3つ
に分かれて口縁部無文帯下の微隆起線に連結
している。文様はこの微隆起線直下に、沈線
区画によるJ字状文が横位に連結されおそ
く8単位の構成されているものと思われる。
J字状文は、それぞれが単独に描かれており、
LRの縄文が充填されている。加曾利E4式
土器である。



- 1号・6号土坑土層説明
- 1 暗褐色土層 2mm程の軽石を多量に含む
 - 2 暗褐色土層 2mmの軽石を少量含む。
 - 3 暗褐色土層 ローム粒子を少量含む軟質
 - 4 黄褐色土層 ローム粒子を多量に含む。
 - 5 黒色土層 大粒の軽石を含み多い。
 - 6 黒褐色土層 ローム粒子を多量に含む
多い。
 - 7 暗褐色土層 非常に固い。
 - 8 黄色土層 ロームを中心とする。
 - 9 暗褐色土層 スコリアを含み、やや固い。
 - 10 暗褐色土層 軽石を少量含む、軟らかい。
 - 11 黒褐色土層 軽石を多量に含む。
 - 12 暗褐色土層 軽石を少量含む、固い。
 - 13 黒褐色土層 軽石を少量含む、粘質。



- 2・3号土壇土層説明
- 1 黒色土層 2~10mmの軽石を多量に含む。
 - 2 黄褐色土層 軽石を含まず粒子の密な層。

第4章 検出された遺構と遺物

1号土坑

位置及び 6号溝南側、1号井戸北側に位置
概 略 し、耕113号、80-12、81-12グリットに属す。土坑覆土上方に、14×12×10cm程の石が2個、小さな石が数個、床面からは地山の石と思われる大きな石が顔を出している。遺物が覆土上層より出土しているため土坑に直接伴うかかは疑問を残すが、中世遺物を出土している数少ない遺構である。

規 模 南北3.42m、東西2.18m、壁高54cm。床面はロームを切り込んでいる。

遺 物 床面より、40~50cm程浮いた状態で口縁部~底部まで残存する内耳鍋1個体。他に破片2個体分を出土している。

2号土坑

位置及び 56号住居址南側、57号住居址北側に位置し、耕113号、77-44・45グリットに属す。土坑内、中央南寄りに3号土坑が掘り込まれていた。覆土を観察すると、2号土坑埋没以前に3号土坑が存在していたことが理解出来る。3号土坑東側に、竈跡と思われる遺構が50cm前後の距離に検出された。遺構の東西には、袖石として使用されたと思われる石が、2個残っていた。両袖を軸につなぐ楕円形の範囲からは、焼土が検出された。従って、

土坑以前に住居址が存在したと考えられる。覆土から平安時代に属する遺物が多く出土した。

規 模 南北4.78m、東西2.97m、壁高18cm。

遺 物 覆土から、土師質土器碗、軟質須恵器碗、土師器杯、甕、灰釉陶器碗・皿等の破片出土。

3号土坑

位置及び 2号土坑内に位置している。2号概 略 土坑調査中に検出された。土坑底部分の中央に大きな石が1個検出された。

規 模 東西1.08m、南北1.12m、壁高40cm。

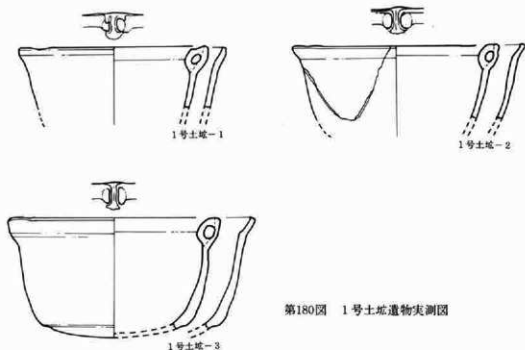
遺 物 全く出土していない。

6号土坑

位置及び 33号住居址北側、34号住居址東側に位置し、耕114-2号、101-12概 略 グリットに属す。土坑の東側は、発掘区域外で確認出来なかった。現状では楕円形を呈する。覆土は、床直上が黒褐色の粘質で、上層部は軽石を少し含む暗褐色の軟かい層をなす。

規 模 土坑が不定形を呈し、完掘していないので寸法は不明。現状で東西1.22m、南北1.24m、壁高30cm。

遺 物 全く出土していない。



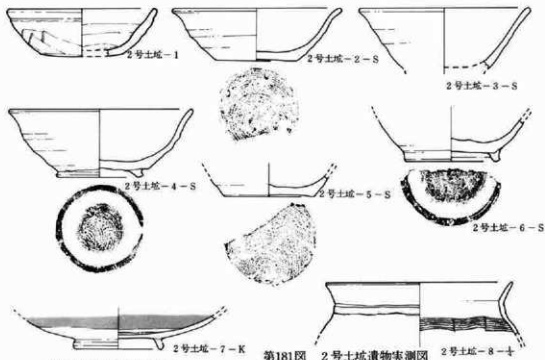
第180図 1号土壇遺物実測図

1号土壇出土遺物観察表

遺構及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
1号土壇-1	内耳 軟質陶器	— 26.1 — (耳含まず)	フク土	胴部外面指調整後簡単な横ナデ、内側横ナデ、口縁部は土壇内の2より長い。	①灰黒色②酸化③口縁～胴部片④密
1号土壇-2	内耳 軟質陶器	— 33.2 — (耳含まず)	フク土	胴部外面指調整後簡単な横ナデ、内側横ナデ、口縁部が短い。	①灰黒色②酸化③口縁～胴部片④密
1号土壇-3	内耳 軟質陶器	— 32.4 — (耳含まず)	フク土	ほぼ同上、外側胴下端部～底部には胴部と異なりススが付着していない。	①灰黒色②酸化③口縁～胴部片④密

1号土壇覆土上面より出土した3ヶ体の内耳についてここでまとめてみる。3ヶ体とも口縁部の短い内耳である。底部まで残存したのは3のみであり、3も一部のみしか底部は残っていないなかった。底部と胴下端との接合面の外側には凹状の溝が一周しており、丸味を帯びた底部が他の2ヶ体とともにつくと思われる。底部及び内湾する胴下端部はへら削り、口縁部下～胴下端の外側は指調整後簡単なナデ、口縁部横ナデ、内側全面ていねいな横ナデ、内湾する胴下端から底部にかけては黒色を帯びてはいるが、褐色を呈して、スス付着は認められない。その部分以外の外側胴部には厚いススが付着している。耳はいずれも小さく細い、耳の上端は口縁部より高い位置に付く、3には対称位置に2ヶの耳が付着している。

第4章 検出された遺構と遺物



2号土壇出土遺物観察表

第181図 2号土壇遺物実測図

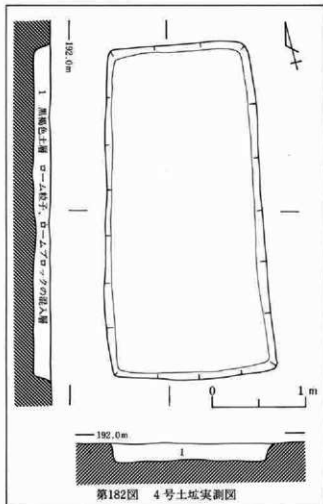
遺構及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
2号土壇-1	環-土師器	3.6 12 6.6	フク土	体部外側右下方方向へ削り、内側へ削り、口縁部横ナデ、体部上側指頭状。	①褐色②酸化③灰④密
2号土壇-2	環-須恵器	4.2 13.5 6.4	フク土	底部右回転糸切痕、体部外側口クロ目残る、口唇部狭く外反する。	①灰白色②還元③灰④1~3mmの砂粒含む。
2号土壇-3	腕-須恵器	—(13.7) —	フク土	体部回転横ナデ、口唇部の外反少ない。	①褐色②酸化③灰④砂粒を含む。
2号土壇-4	腕-須恵器	5.4 14.8 7.3	フク土	高台部内側右回転糸切痕、厚く短い高台が貼付、口縁部がゆがんでいる。	①灰白色②還元③灰④1~2mmの砂粒含む。
2号土壇-5	環-須恵器	— — 7.2	フク土	底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③底部のみ④粒
2号土壇-6	腕-須恵器	— — 7.8	フク土	高台部内側回転ナデ、太い高台貼付。	①灰白色②還元③灰④砂粒含む。
2号土壇-7	腕-灰胎	— — 7.2	フク土	高台部内側回転ナデ、厚く高い高台が貼付、内側に重ね焼き痕がある。	①灰白色②還元③底部半分、体部④密
2号土壇-8	環-土師器	— 20 —	フク土	「コ」の字状口縁を意識させるが明確ではない。肩部横方向へ削り。	①褐色②酸化③口縁部④密

4号土壇

位置及び 12号住居址竈部分の南
概 略 側に近接して、耕113
号、76-23、76-24グ
リットに属す、浅く細
長い土壇である。覆土
は、ローム粒子とローム
ブロックを多量に含
む黒褐色土層である。
自然堆積ではないと思
われる。底部分は、凹
凸がわずかに見られる
が、ほぼ平らで深さは
一定に近い。

規 模 東西1.66m、南北3.57
m、壁高20cm。

遺 物 覆土中も含め、全く出
土していない。

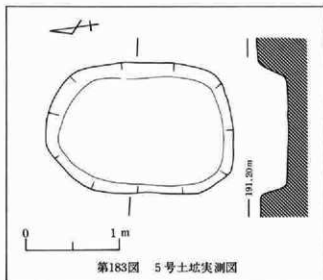


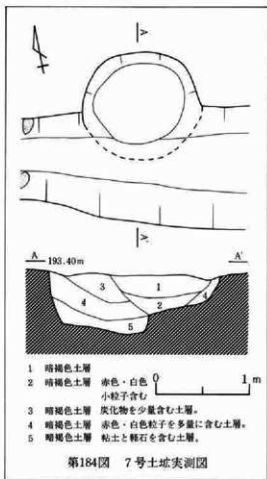
5号土壇

位置及び 19号住居址西側、3m
概 略 に位置、耕114-2号、
86-16グリットに属す
る。南北に長い楕円形
を呈し、底が平らで浅
い土壇である。覆土は、
1cm内外のロームブ
ロックを含む黒褐色土
層である。

規 模 東西1.38m、南北1.98
m、壁高26cm。

遺 物 全く出土していない。





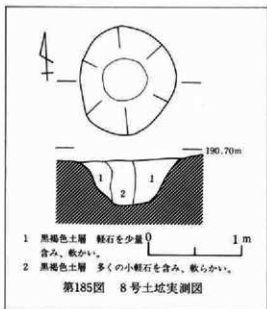
7号土坑

位置及び 5号住居址東側、6号住居址の

概略 西側にあたり、土坑は耕114-1号を東西に走る9号溝の覆土を切り込んで掘られている。重複関係は図に示す通りである。耕114-1号、68-15に属し、楕円形状の土坑を呈す。遺構面が明確でない土坑が、付近に10数基確認されているが、人為的に掘られたものではないと思われる。

規模 東西1.26m、南北1.16m、壁高36cm。

遺物 全く出土していない。



8号土坑

位置及び 39号住居址東側、40号住居址東

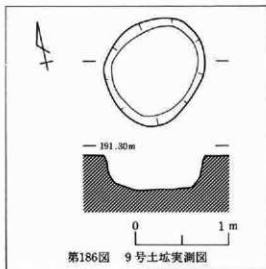
概略 西側に位置、耕116-2号、85-34グリットに属する。土坑内には軽石を多く含む軟かい層が中央に埋まって、その両側に軽石を少量含む層が埋もれていた。底径に比べ、口径の大きな土坑である。

規模 東西1.03m、南北1.18m、壁高47cm。

遺物 全く出土していない。

9号土壇

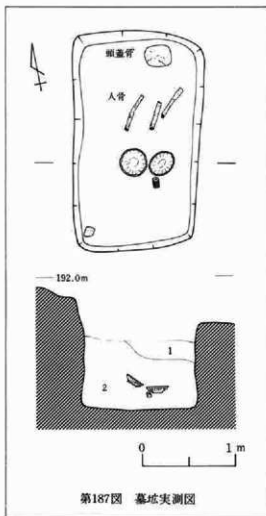
- 位置及び 10号溝の北側、9号溝の南側で
- 概略 2本の平行して走る溝にはさまれた範囲に位置、75—20グリットに属する。南側がわずかに張り出した楕円形を呈し、底部は比較的平らな土壇である。
- 規模 東西1.08m、南北1.14m、壁高45cm。
- 遺物 全く出土していない。



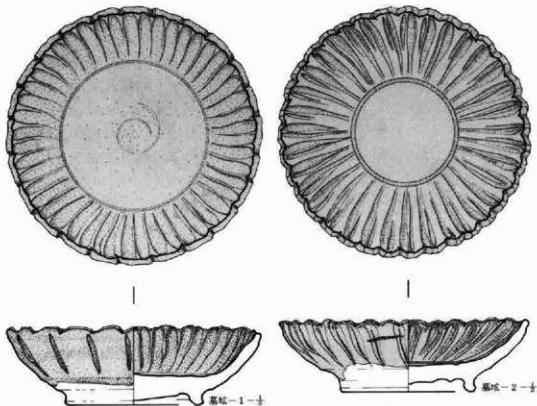
第186図 9号土壇実測図

墓壇

- 位置及び 18号住居址東側、7号溝の西側
- 概略 にあたり両方の遺構とは1m弱と近い範囲である。耕113号、79—15・16グリットに属する。墓壇の中央からやや南寄り、底部分から15~20cm浮いた位置に菊皿2個体、麻布に包まれた寛永通宝12枚が出土した。土層断面図に、その遺物を投影して表わした。北側半分を掘り下げると、遺存良好な人間の頭蓋骨及び大腿骨が検出された。骨の他の小さい部分は骨粉化していた。覆土は地山のロームブロックを斑点状に含む土であり、一度に埋められている。
- 規模 東西1.34m、南北2.32m、壁高1.12m。長方体を呈する規格性のある墓壇である。
- 遺物 墓壇内より美濃焼と思われる菊皿2枚、寛永通宝12枚出土。



第187図 墓壇実測図

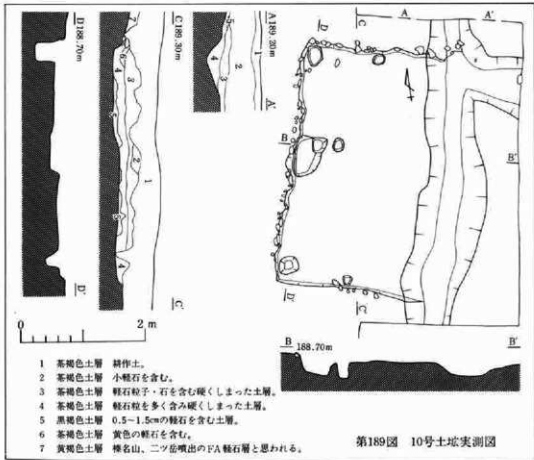


第188図 墓坑遺物実測図

墓坑出土遺物観察表

遺構及び 墓 号	器 形	寸 法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
墓坑-1	菊皿	4.2 13.7 7.4	フク土	付高台と思われる。高台部内側 回転ナデ、口唇部へラ削りによ り花卉状呈す。	①素地-淡い黄色 釉-灰白色② 酸化③完形④密⑤花卉24枚
墓坑-2	菊皿	3.9 13.4 7.3	フク土	同 上	①素地-淡い黄色 釉-淡い緑色 ②酸化③完形④密⑤花卉35枚

両者とも付け高台の菊皿である。高台部内側は回転ナデにより、ていねいに整形されている。1の外側素地の部分は褐色を呈している。両者とも口唇部はへらにより鋭く花卉状に整形されている。2は内面底部に円状の溝が1周している。素地はいずれも白色を帯びた淡い黄色を呈している。美濃焼のもぐさ土と呼ばれているものであろう。1の釉は淡い緑を帯びた灰白色を基調として、一部に濃赤色の釉が装飾として使われている。2の釉は淡い緑色を基調とし、釉の厚い部分は濃い緑色を呈している。内面に「とちん」の使用底が残る。両者は墓坑内により12枚の貨幣とともに出土した。貨幣12枚中最も新しいものは8枚でそれは寛文8年、江戸亀戸で鑄造された寛永通宝である。いずれも流通による磨滅があまり認められないため、寛文8年(1668年)から遠くない時期の埋没が考えられ、菊皿にもそれに近い年代が与えられている。(巻頭図版1参照)



10号土坑

位置及び概略 61～63号住居地の南側約20mに位置する。耕113号、77-62・63、78-62・63グリットに属す。東側を溝状の遺構により切られている。竪穴状の四角い土坑と思われる。西側の壁上端には小石が1列に並べられている。また小石は壁の周辺部、及び覆土中からも多く検出され、その付近より貨幣を検出した。この遺構は床面がある程度埋もれ、小石が埋もれつつある状況下で貨幣も同時に埋もれたことを示している。柱穴は、西壁側に3

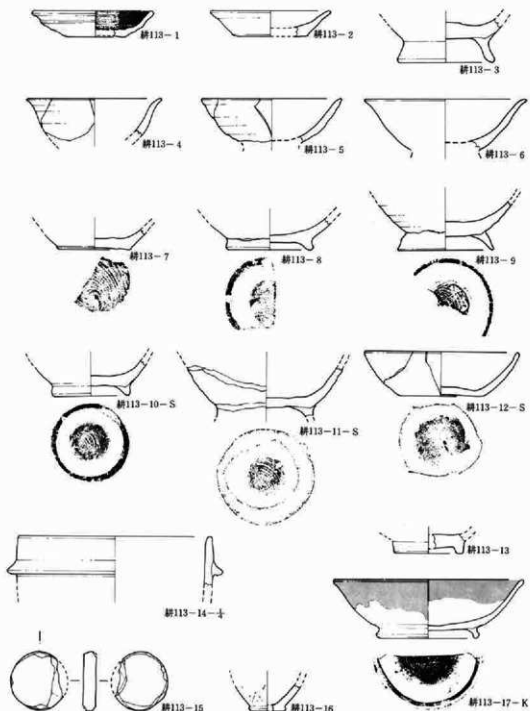
本、南壁及び北壁の中央付近から各1本を確認した。柱穴の規模は、西壁の3本の上幅が、25～30cm、南・北壁の各1本が16cm。深さは、10～30cmを呈している。

規模 遺構の東側は溝によって破壊されているため不明。現状で東西は2m、南北は3.8m、壁高は20cmを計る。

遺物 覆土中に40枚の貨幣が出土している。北側半分に特に多い。出土した貨幣は第5章第2節5でまとめて扱った。

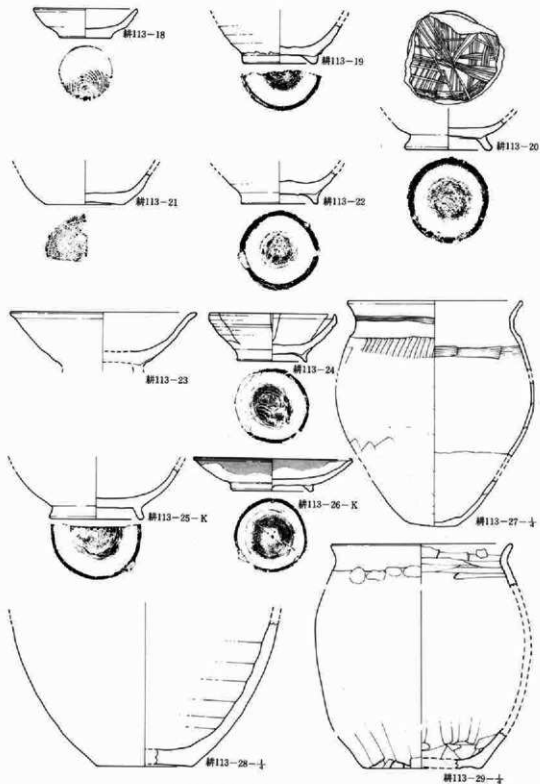
第6節 その他の遺物

(1) 耕113号



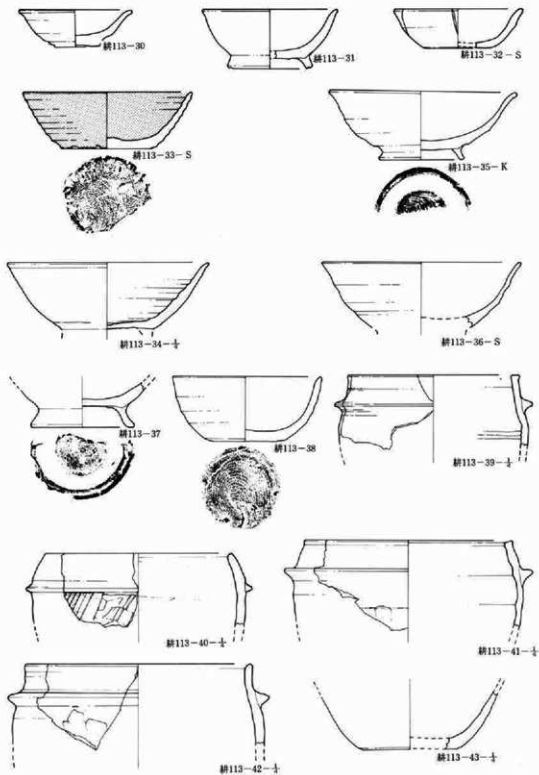
第190図 耕113号出土遺物実測図(1)

第6節 その他の遺物



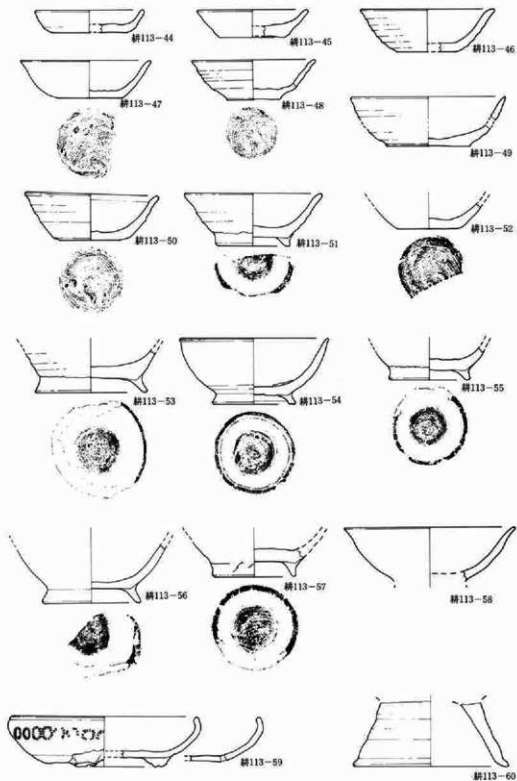
第191図 耕113号出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構と遺物

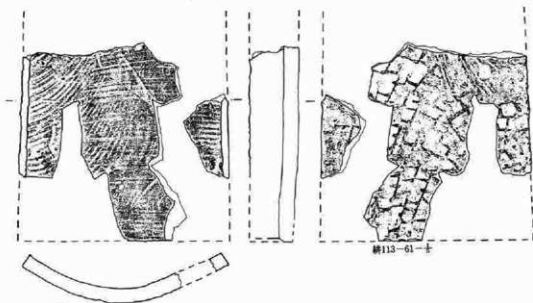


第192図 113号 出土遺物実測図 (3)

第6節 その他の遺物



第193図 耕113号 出土遺物実測図(4)



第194図 耕113号 出土遺物実測図 (5)

耕113号出土遺物観察表(1)

調査区 及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②胎成③残存④胎土⑤備考
耕113-1	杯-土師質 内黒	2.1 (9.4) (4.6)	76-29 グリット	内面全面へう磨き、その後炭素 吸着により黒色処理、黒光りし ている。	①黒色②酸化③口縁-底部片④密
耕113-2	杯-土師質	2.1 (9.6) (6)	76-28 グリット	内外面横ナデ、器高の低い、底 径の大きな杯である。	①灰褐色②酸化③口縁-底部片④ 密
耕113-3	甕-土師質	— (7.8)	76-29 グリット	高台部内側回転ナデ、ていねい に高台を貼付している。	①灰褐色②酸化③高台片底面片④ 密
耕113-4	甕-土師質	— (10.8) —	76-29 グリット	口唇部が外反する。口縁-体部 横ナデ。	①灰白色②還元③口縁-体部片④ 密
耕113-5	甕-土師質	— (11.2) —	76-29 グリット	口縁部-体部内外面横ナデ。	①灰褐色②酸化③口縁-体部片④ 密
耕113-6	甕-土師質	— (13) —	76-29 グリット	口縁が大きく開く甕である。口 唇部がゆるやかに大きく外反す る。	①灰褐色②酸化③口縁-体部片④ 密
耕113-7	杯-土師質	— (5.6)	76-29 グリット	底部右回転糸切痕。	①灰褐色②酸化③底部片④密
耕113-8	甕-土師質	— 7	76-29 グリット	高台部内側右回転糸切痕。	①灰褐色②酸化③底部片④密

耕113号出土遺物観察表(2)

調査区 及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
耕113-9	甕-土師甕	— — (7.6)	76-29 グリット	高台部内側回転糸切痕、断面三角形を呈する細長い高台を貼付。	①灰褐色②酸化③底部④⑤密
耕113-10	甕-須恵器	— — 6.2	76-29 グリット	高台部内側右回転糸切痕、太く短い高台をていねいに貼付している。	①褐色②酸化③底部④2-3mmの砂粒を含む。
耕113-11	甕-須恵器	— — — イブシ	76-29 グリット	高台部内側右回転糸切痕、内面回転ナデの後に炭素を吸着している。	①黒色②酸化③高台欠損表面④1-2mmの砂粒を含む。
耕113-12	杯-須恵器	3.5(12.4) (6.8)	76-29 グリット	底部右回転ヘラ切り痕、ヘラ切り後無調整、口唇部は直立気味に立ち上がる。	①灰白色②還元③底部④口唇部⑤⑥密
耕113-13	甕-須恵器	— — (5.6)	76-29 グリット	高台部内側右回転糸切痕。	①灰白色②還元③底部④⑤1-2mmの砂粒含む。
耕113-14	羽蓋	— (20.6) —	76-29 グリット	胴-口唇部まで直立する、口唇部が長い、口唇部が丸い、円は下向きに付く。	①黒色②酸化③口唇④⑤1-2mmの砂粒含む。
耕113-15	円形粘土板	径 4.7 厚さ10	78-16 グリット	平面形は円形を呈す、端部は面取り状に粘土を削り取っている。器面はなめらかである。	①褐色②酸化③ほぼ完全④金雲母と1-2mmの砂粒含む。
耕113-16	小型壺	— — (3)	76-16 グリット	底径が小さく、体部下端との境に段を持つ、手づくね土器である。	①灰褐色②酸化③④⑤密
耕113-17	甕-灰釉	4.7(15.2) (8.2)	77-16 グリット	高台部内側回転ナデ、高台端部は全体的に丸く整形、漬け付けによる施釉。	①断面灰白、釉透明②還元③口唇-底部④⑤密
耕113-18	杯-土師甕	2.4 (8.4) (4.2)	76-18 グリット	底部右回転糸切痕、底部が厚い、底面と体部下端の間に段を持つ。	①褐色②酸化③口唇-底部④⑤酸化鉄含む。
耕113-19	甕-土師甕	— — (6)	76-26 グリット	高台部内側回転ナデ、太く短い高台を貼付。	①褐色②酸化③底部④⑤密
耕113-20	甕-土師甕	— — 7	76-22 グリット	高台部内側中央に右回転糸切痕残る。内面ヘラによる調整、光沢はない。	①褐色②酸化③底部④2-3mmの砂粒含む。
耕113-21	杯-土師甕	— — (6.2)	75-26 グリット	底面右回転糸切痕。	①灰褐色②酸化③底部④⑤酸化鉄含む。

第4章 検出された遺構と遺物

竊113号出土遺物観察表(3)

調査区 及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
竊113-22	甕一土師質	— — 6.2	76-22 グリット	高台部内側回転ナデ、厚い底部に比して、高台は細く短い。	①褐色②酸化③底部④密
竊113-23	甕一土師質	— (15) —	75-26 グリット	体部-口縁部回転横ナデ、口唇部が外反する。	①褐色②酸化③口縁-体部④密
竊113-24	甕	3.8(10.2) (5.6)	76-20 グリット	内面に墨の凝着したものがこびりついている。灰釉が一部かかっている。	①褐色②酸化③底部④口縁-体部⑤密
竊113-25	甕一灰釉	— — (7.6)	76-26 グリット	高台部内側回転ナデ、細長い高台が付く、内面重ね焼きあり。	①断面灰白色釉淡緑色②還元③底部④密
竊113-26	皿一灰釉	2.6(12.8) 6.6	76-20 グリット	高台部内側回転ナデ、高台の付け根にヒビが入る、表面に淡い褐色を帯びる。	①断面灰白色釉白色②還元③口縁底部④密
竊113-27	甕	(24) (18.6) 4.9	75-26 グリット	「コ」の字状口縁を意識させるが明瞭でない、肩部横方向へラ開り。	①褐色②酸化③口縁④密
竊113-28	甕一土師質	— — (10)	75-32 グリット	内側割部指による横ナデ、外側割部下半は下方向へラ開り。	①褐色②酸化③底部④3-5mmの砂を多く含む。
竊113-29	甕	(24) (19.4) (12.6)	76-19 グリット	底部に多量の砂が付着、外側割部上方向へラ開り、口縁部内外面横ナデ。	①褐色②酸化③底部④2-5mmの砂粒含む。
竊113-30	杯一土師質	2.9 9.2 3.7	76-16 グリット	底部右側転糸切痕、底部が厚い、体部下端と底部との間に段を持つ。	①褐色②酸化③口縁④欠損⑤密
竊113-31	甕一土師質	4.7(10.8) (6.8)	81-10 グリット	高台部内側回転ナデ、ていねいに高台を貼付している。	①褐色②酸化③口縁-高台④密
竊113-32	杯一填土器	3.1(10.4) (5.4)	76-20 グリット	底部回転糸切痕、底径が大きく、焼締のある杯。	①灰白色②還元③口縁-底部④密
竊113-33	杯一填土器 イブシ	4.5(13.6) 7.2	77-37 グリット	底部右側転糸切痕、体部外側口クロが残る。口唇部の外反はなし。	①黒色②酸化③口縁-底部④密
竊113-34	鉢	— (21.6) —	77-48 グリット	高台のはずれた部分のみ回転糸切痕が残る。外側器面全面が剥離している。高台付の鉢である。	①灰白色②還元③高台欠損④密

耕113号出土遺物観察表(4)

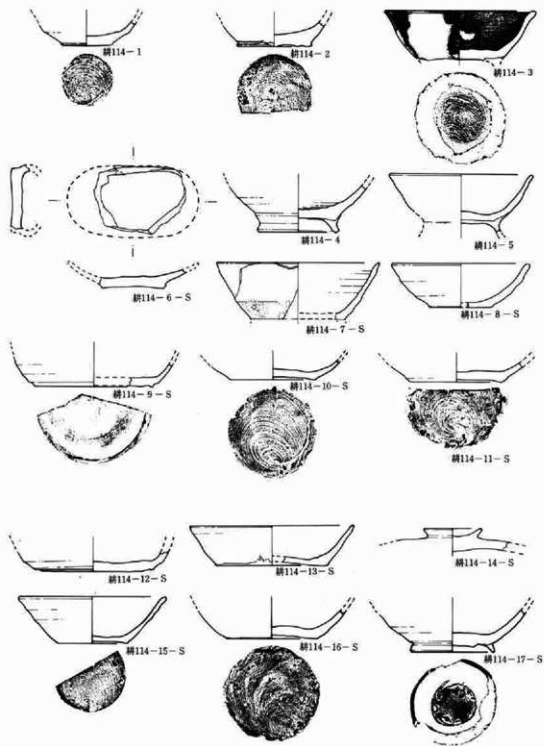
調査区 及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
耕113-35	陶-灰輪	5.4 15.2 7	76-19 グリット	高台部内側回転ナデ、高台下端 が外側へ張り出している。施釉 は刷毛塗り。	①断面灰白色釉透明②還元③灰④ 密
耕113-36	陶-須恵器	— (16) —	フク土	内面回転横ナデ、外側は平行に 走る隆を持つ。須恵器に所属す ると思われる。	①灰白色②還元③口縁~体部④ 密
耕113-37	陶-土師質	— — (8.4)	フク土	高台部内側回転ナデ、外側へ大 きく張り出す高台を持つ。	①灰白色②還元③底部④2-3 mmの砂粒を含む。
耕113-38	灰-土師質	5.2(12.2) 5.2	フク土	底部右回転糸切痕、体部が直立 気味に立ち上がるめずらしい器 形である。	①灰白色②還元③口縁~底部④ 密
耕113-39	羽蓋	—(18.2) —	フク土	断面三角形の筋を持つ、口唇部 は水平で、やや厚くなる。	①褐色②酸化③口縁④2-3 mmの砂粒を含む。
耕113-40	羽蓋	— (20) —	フク土	細く筋が弱々しく一周してい る。口縁部は内彎するが長い。 口唇部は狭い。	①褐色②酸化③口縁④2-3 mmの砂粒含む。
耕113-41	羽蓋	—(22.2) —	フク土	断面三角形の筋を持つ、口縁部、 口唇部は胴部より厚くなる。	①灰褐色②酸化③口縁④密
耕113-42	羽蓋	—(24.2) —	フク土	断面三角形の太い筋を持つ、口 縁部は直立する。口唇部は丸く なる。	①褐色②酸化③口縁④1-2 mmの砂粒含む。
耕113-43	灰-土師質	— — (7.6)	フク土	体部内外面回転横ナデ。	①褐色②酸化③体部④1-2 mmの砂粒を含む。
耕113-44	灰-土師質	1.8 (8.8) (6.3)	フク土	底部ナデ調整、体部~口縁に指 ナデによる調整、底径の大きな 灰である。	①褐色②酸化③④密
耕113-45	灰-土師質	2.2 (8.8) (5.2)	フク土	底部右回転糸切痕、底部が厚い、 底径の大きな灰である。	①灰褐色②酸化③口縁~底部④ 密
耕113-46	灰-土師質	3.4(10.8) (4.8)	フク土	底部右回転糸切痕、体部外側口 クロ目が残る。	①褐色②酸化③口縁~底部④密
耕113-47	灰-土師質	3 9.8 5.4	フク土	底部右回転糸切痕、体部回転横 ナデ。	①褐色②酸化③口縁~底部④密
耕113-48	灰-土師質	3.2 10 4.2	フク土	底部右回転糸切痕、体部回転横 ナデ、底部が厚く小さい灰であ る。	①褐色②酸化③口縁~底部④密

第4章 検出された遺構と遺物

耕113号出土遺物観察表(5)

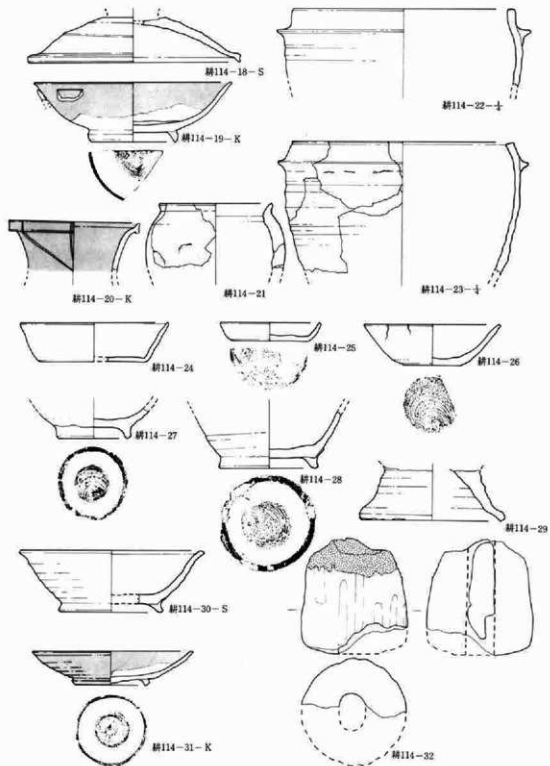
調査区 及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
耕113-49	杯一土師質	4(12.4) (6.6)	フク土	底部右回転糸切痕、体部外側口 クロ目内側回転ナデ。	①褐色②酸化③底部付近④密
耕113-50	杯一土師質	3.7 10.8 4.6	フク土	底部右回転糸切痕、内側体部、 底部に厚く墨の着色したものが 付着。	①褐色②酸化③口縁欠損④密
耕113-51	甕一土師質	4.2 (11) (6)	フク土	高台部内側回転ナデ、太く短い 高台が貼付、体部回転横ナデ。	①褐色②酸化③口縁～高台④密
耕113-52	杯一土師質	— — (4.6)	フク土	底部右回転糸切痕、体部回転横 ナデ。	①灰白色②還元③底部④密
耕113-53	甕一土師質	— — (9)	フク土	高台部内側回転ナデ、底部が厚 い、細長い高台を持つ。	①灰褐色②酸化③高台④欠損底面 ⑤密
耕113-54	甕一土師質	5.3 (12) 6.6	フク土	高台部内側回転ナデ、高台は情 形円形を呈す、体部内外面回転 ナデ。	①褐色②酸化③口縁～体部④底部 ⑤密
耕113-55	甕一土師質	— — 6.4	フク土	高台部内側回転ナデ、ていおい に高台を貼付している。	①褐色②酸化③底部④密
耕113-56	甕一土師質	— — (9)	フク土	高台部内側回転ナデ、体部回転 横ナデ。	①褐色②酸化③底部④体部⑤密
耕113-57	甕一土師質	— — 6.6	フク土	高台部内側回転ナデ、厚い底部 に薄い体部がつく。	①褐色②酸化③高台④欠損底面⑤ 密
耕113-58	甕一土師質	— (13.8) —	フク土	体部～口唇部回転横ナデ、口縁 が大きく開く。	①褐色②酸化③口縁～体部④密
耕113-59	香炉	4(14.8) (10.6)	フク土	脚部のつく香炉と思われる、外 側体部に菊の花を模倣した印花 がスタンプ状に連続施文されて いる。	①灰褐色②酸化③口縁～底部④密
耕113-60	甕一土師質	— — (12.4)	フク土	高さ5cmの高台を持つ甕であ る。高台部内外面横ナデ。	①褐色②酸化③高台④酸化鉄含 む。
耕113-61	平瓦	— — 12.6	フク土	平瓦で内面布目、外面格子条印 目、1枚作りである。	①褐色②酸化③高台部④②～4 mmの砂粒を含む。

(2) 耕114-1・2号



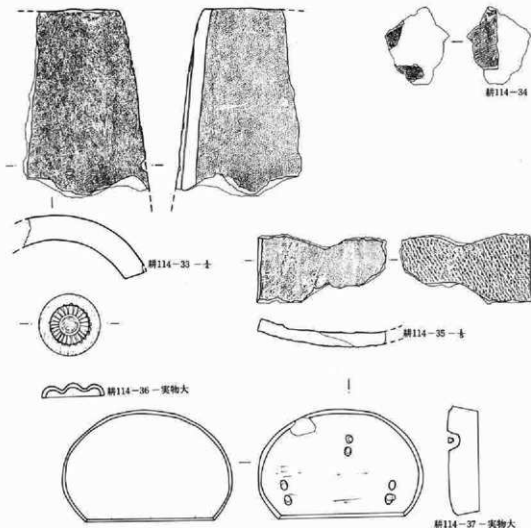
第195図 耕114号 グリット出土遺物実測図 (1)

第4章 検出された遺構と遺物



第196図 114号グリット出土遺物実測図(2)

第6節 その他の遺物



第197図 絹114号出土遺物実測図

絹114-1・2号出土遺物観察表(1)

調査区 及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
絹114-1	杯-土師質	— — 4.2	95-15 グリット	底部右回転糸切痕。底部が厚く小さい杯である。体部回転横ナシ。	①褐色②酸化③底部④密
絹114-2	杯-土師質	— — (6)	93-16 グリット	底部回転糸切痕。体部下端と底部との間に段を持つ。外側体部褐色を呈す。	①灰褐色②酸化③底部④密
絹114-3	碗-土師質	— 12.1 —	92-16 グリット	底部右回転糸切痕。内面全面に墨が凝着している。一部は体部外側にも付着。	①灰黒色②酸化③高台部以外完形④密

第4章 検出された遺構と遺物

竊114号-1・2号出土遺物観察表(2)

調査区 及び番号	器形	寸法(m) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
竊114-4	丸一土師質	— — (6.6)	89-15 グリット	高台部内側回転ナデ、細長い高台がていねいに貼付られている。	①灰褐色②焼成③底部④密
竊114-5	丸一土師質	—(11.4) —	100-13 グリット	高台部内側回転ナデ、その部分のみ炭素吸着により黒色を呈す。	①灰褐色②焼成③口縁-底面④高台欠損⑤密
竊114-6	耳皿一 須恵器	— — — 5	94-15 グリット	底部右回転糸切痕、体部の一部のみの残存であるが、体部両側を内側に折り曲げた耳皿と思われる。	①灰白色②還元③底部全面、体部下端は一部のみ残存
竊114-7	丸一須恵器	—(13.2) —	90-16 グリット	高台部がはずれている、体部外側は全面に表面が剥離している、113-34の鉢に似た現象であり、粘土も似ている。	①灰白色②還元③口縁-体部④密
竊114-8	杯一須恵器	3.5 (11) (4.8)	101-15 グリット	底部右回転糸切痕、体部内外面右回転ナデ、竊114-7に似ているが表面剥離なし。	①灰白色②還元③口縁-底部④密
竊114-9	杯一須恵器	— — (9.2)	98-15 グリット	底部回転へら削り、底部周辺に削り出しにより低い高台を作り出している、しかし一定の幅にはなっていない。	①灰白色②還元③底部④密
竊114-10	杯一須恵器	— — — 6.8	94-16 グリット	底部右回転糸切痕、糸切後無調整、底部中央が内側へやへこんでいる。	①灰白色②還元③底部④密
竊114-11	杯一須恵器	— — (7.4)	97-15 グリット	底部右回転糸切痕、体部回転ナデ、灰白色を呈し、上の10・11より軟質。	①灰白色②還元③底部④密
竊114-12	杯一須恵器	— — (9.4)	97-15 グリット	底部回転へら削り、底部周辺に削り出しによる高台を造り出している。	①灰白色②還元③底部④密
竊114-13	杯一須恵器	3.2(13.2) (9)	100-23 グリット	底部手持ちへら削り、底部周辺にへら削り時の粘土がはみ出している。	①灰白色②還元③底部④密
竊114-14	蓋一須恵器	— — —	97-15 グリット	須恵器弁蓋である。天井部に中央部のへこみ凹状のつまみがつく。	①灰白色②還元③つまみ付底④密
竊114-15	杯一須恵器	3.7 (12) (5.6)	97-15 グリット	底部右回転糸切痕、底径は小さいが、焼練のある杯である。	①灰白色②還元③口縁-底部④密
竊114-16	杯一須恵器	— — — 7.2	93-15 グリット	底部右回転糸切痕、底部中央がやや内側にへこんでいる。	①灰白色②還元③底部④密

耕114号-1・2号出土遺物観察表(3)

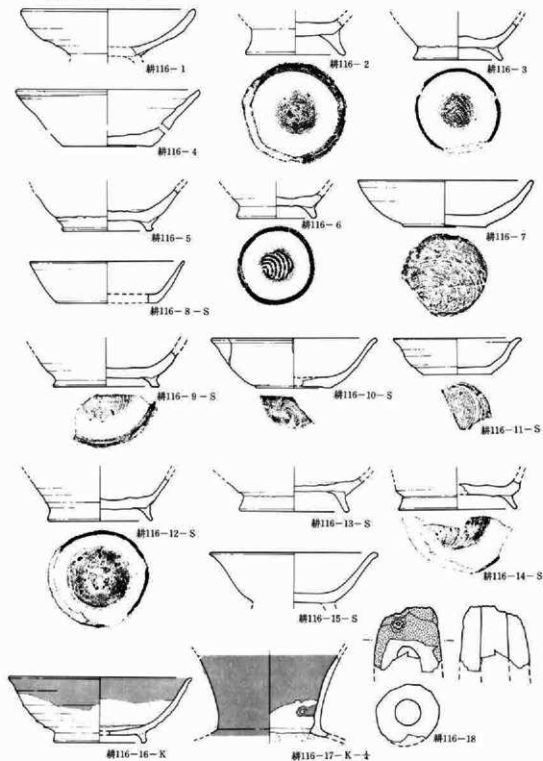
調査区 及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地文③残存④胎土⑤備考
耕114-17	甕-須恵器	— — (6.6)	96-16 グリット	高台部内側右回転糸切痕。断面内側は褐色を呈し、全体が還元されていない。	①灰白色②還元③高台片底面④密
耕114-18	甕-須恵器	— — —	100-11 グリット	天井部をつまみかはずれている。重ね焼き痕あり。外側回転ヘラ痕り。	①灰白色②還元③つまみ除く他④密
耕114-19	甕-灰釉	4.8(15.8) (6.8)	101-13 グリット	高台部内側回転ナデ。漬け掛け技法による施物である。口唇部の一部が割れて下の口縁部に付着している。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁~高台片④密
耕114-20	甕-灰釉	— (14) —	100-10 グリット	口唇部は指つまみにより鋭くつくられている。口唇部内側に別段を持つ。全面刷毛塗りによっていいな施物。	①断面灰白、釉淡緑②還元③口縁片④密
耕114-21	小型甕	— (9) —	100-10 グリット	胴部が時に厚くなっている。薄い「く」の字状の口縁部がつく。内外面積ナデ。	①灰褐色②酸化③口縁片④1~2mmの砂粒含む。
耕114-22	羽蓋	— (23.6) —	100-13 グリット	短い口縁部が直立する。口唇部は水平でなく、やや丸味を帯びている。羽は薄く水平に横に延びる。	①灰白色②還元③口縁片④密
耕114-23	羽蓋	— (23.6) —	100-13 グリット	短い口縁部が内彎する。口唇部は、平に切られ、やや内彎する。羽は断面三角形を呈し、短い。	①褐色②酸化③口縁片④密
耕114-24	環-土師器	3.1(11.8) (8.2)	97-12 グリット	底部手持ちヘラ削り、体外外側ナデ、口縁部積ナデ、内面全面積ナデ、底部が平で、器内の薄い土師器の環である。	①褐色②酸化③口縁~底部片④密
耕114-25	皿-土師質	1.5 (8) (5.8)	92-15 グリット	底部右回転糸切痕。底面は器高より3倍以上大きい。口縁部積ナデ。	①褐色②酸化③口縁~底部片④密
耕114-26	環-土師質	3.3 10.9 4.6	101-11 グリット	底部右回転糸切痕。底径が小さく、口縁部は大きく開く。口縁部はゆがんでいる。	①褐色②酸化③口縁~底部片④1~2mmの砂粒を含む。
耕114-27	甕-土師質	— — 6	フタ土	高台部内側右回転糸切痕。ていねいに高台が貼付られている。	①褐色②酸化③底部④密

第4章 検出された遺構と遺物

耕114-1・2号出土遺物観察表(4)

調査区 及び番号	容 形	寸 法 (cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
耕114-28	甕-土師質	— — 7.9	フク土	高台部内側右回転糸切痕、底径の大きな甕である。ていねいに高台を貼付している。	①灰白色②還元③底部④2~4mmの砂粒を多く含む。
耕114-29	甕-土師質	— — 11.6	フク土	高い高台の付く高台付甕の高台部、ロクロ目整形痕が体部外側に残る、高台付貼付点は厚くなっている。	①灰褐色②酸化③高台のみ④酸化鉄を含む。
耕114-30	甕-須恵器	4.9(14.8) (8.4)	フク土	高台部内側回転ナデ、体部は内側しつつ大きく開く、口唇部は外反する。	①灰白色②還元③口縁-底部④1~2mmの砂粒を含む。
耕114-31	甕-灰釉	2.7 12.7 6.2	フク土	高台部内側回転ナデ、断面三ヶ月状の高台をていねいに貼付、漬け掛け技法による施釉である。	①素地灰白色釉緑色②還元③④⑤
耕114-32	羽 口	全長-9.4 外径-8.6	フク土	根元-先端まで一部残る、先端は熱により気包化しているが、ガラス質の鉄滓は付着せず。	①灰白色②還元③根元-先端④スサを含む。
耕114-33	瓦	— — —	フク土	平瓦、内側布目、外側素文、1枚作り、上面が狭く薄く、下面は広く厚くなる。	①褐色②酸化④2~4mmの砂粒を含む。
耕114-34	瓦	— — —	フク土	平瓦の破片である。表面素文、内面布目、内面に横骨痕あり、横骨作りである。	①褐色②酸化④2~5mmの砂粒を含む。
耕114-35	瓦	— — —	フク土	平瓦の破片である。表面素文、内面布目、内面に横骨痕あり、内面に粘土の重ね横骨痕あり、多種粘土の混合あり。	①灰褐色②酸化④数種類の異なった粘土を混ぜ合わせている。2~5mmの砂粒を含む。
耕114-36	金銅製目貫	0.1 1.6 —	フク土	刀の目釘の両端にとりつける目貫と思われる。菊花を模しており、表面は金メッキされている。裏面中央には目釘に嵌合したときの金属片が残存。	①表面に金メッキ、裏面は塩基性炭酸銅(緑青)が一部発生している。
耕114-37	石製丸刷	8 4.5 2.8	フク土	8mmのはば一定の厚さを持つ。表面はていねいに磨かれている。裏面の3ヶ所に、不規則であるが、かがり穴を持つ。	①黒色②はば完形

(3) 耕116-2号



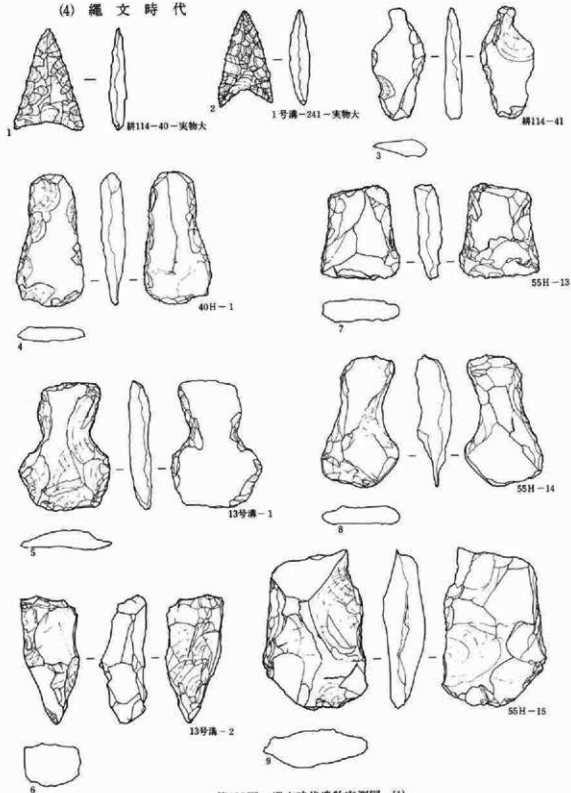
第198図 耕116号出土遺物実測図

第4章 検出された遺構と遺物

耕116-2号出土遺物観察表

調査区 及び番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
耕116-1	甕-土師質	— (13) —	フク土	体部は内脣しつつか大きく開く、 体部中央が厚くなる。異質な器 形である。	①灰白色②還元③口縁-体部写④密
耕116-2	甕-土師質	— — 8	フク土	高台部内側回転ナデ。	①褐色②酸化③底部④密
耕116-3	甕-土師質	— — 7	フク土	内側底部に凸状の張り出しを持 つ。	①灰褐色②酸化③底部④密
耕116-4	杯-土師質	(4.5)(14.8)(7.2)	フク土	底部回転糸切痕、体部回転痕ナ デ。	①褐色②酸化③口縁-底部写④密
耕116-5	甕-土師質	— — (7.3)	フク土	高台部内側右回転糸切痕、体部 が開く。	①灰白色②還元③底部写④密
耕116-6	甕-土師質	— — 6.4	フク土	高台部内側右回転糸切痕。	①灰白色②還元③底部④密
耕116-7	杯-土師質	3.7 (14) 6.4	フク土	底部左回転糸切痕、内脣しつつか 口縁が大きく開く、器面が粉状 に密。	①灰褐色②酸化③口縁-底部写④ 粉状の胎土。
耕116-8	杯-須恵器	3.3(12.4) (8)	フク土	底部右回転糸切痕、糸切後無調 整。	①灰白色②還元③口縁-体部写
耕116-9	甕-須恵器	— — (8.6)	フク土	高台部内側右回転糸切痕。	①灰白色②還元③底部④密
耕116-10	杯-須恵器	4(13.4) (6)	フク土	底部右回転糸切痕、口唇部が弱 く外反。	①灰白色②還元③口縁-底部写
耕116-11	杯-須恵器	2.9(10.2) 5.4	フク土	底部右回転糸切痕、口唇部が外 反する。	①灰白色②還元③口縁-底部写
耕116-12	甕-須恵器	— — 8.4	フク土	端部の鋭い直線的な高台を持つ	①灰白色②還元③底部④密
耕116-13	甕-須恵器	— — (8.8)	フク土	高台部内側回転ヘラ削り。	①灰白色②還元③底部写④礫石含
耕116-14	甕-須恵器	— — (9.4)	フク土	底部右回転糸切痕、直線的な高 台が貼付、断面は褐色を呈して いる。	①灰青色②還元③底部写④密
耕116-15	甕-須恵器	— (13.4) —	フク土	底部右回転糸切痕、口唇部は外 反する。	①灰白色②還元③口縁-底部写
耕116-16	甕-灰釉	5.2(14.6) (7.4)	フク土	底部回転ナデ、断面長方形の高 台を持つ、漬け掛けによる施釉。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁 -底部写④密
耕116-17	瓶-灰釉	— — —	フク土	瓶の頸部と思われる、内外面に 薄く刷毛により施釉されている	①断面灰白、釉透明②還元③頸部 写④密
耕116-18	羽口	外径 5.5 内径 2.2	フク土	先端部は溶解してガラス質を呈 す、穴の内面は褐色を呈す。	①灰白色②還元③先端部のみ完形 ④スサを含む。

(4) 縄文時代



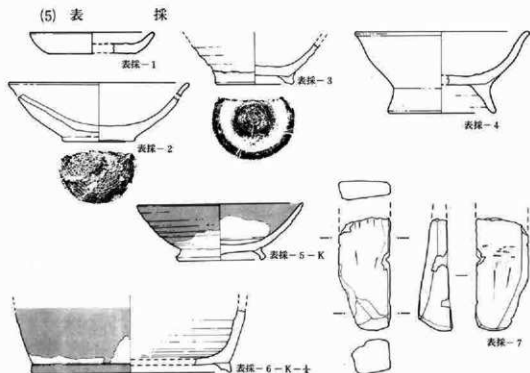
第199図 縄文時代遺物実測図 (1)

第4章 検出された遺構と遺物



第200図 縄文時代遺物実測図 (2)

No	遺構及番号	器形	出土位置	説	明
1	縄114-40	石 鏃	フタ土	いわゆる無茎であり、調整がゆきとどき、平面形、断面形共に良く整っている。基部の挟りは弱い。石質はチャート。	
2	単幹1号 1号溝-241	石 鏃	105-6-7-8 グリット	1 同様に無茎で、調整がゆきとどいているが、1に比べて若干細身で、挟りが深い。石質は黒曜石。	
3	縄114-41	粗大石鏃	100-11 グリット	上端につまみ状の突起があり、両側に調整が認められるが、粗雑である。未製品であろうか。	
4	40H-1	打製石斧	フタ土	いわゆる楕形を呈し、刃部は凹みをもっている。比較的小型で、調整がゆきとどき、形も整っている。自然面は、基部上端に1部認められる。	
5	13号溝-1	打製石斧	77-48 グリット	刃部が分銅形、基部が楕形の定形化した形態を呈する。裏面は、第1次剥離面がそのまま利用されており、自然面は認められない。	
6	13号溝-2	石 槌	77-48 グリット	図ではわかりにくい。裏面が自然面の舟形状を呈する。剥離は、自然面から、ほぼ一定方向に入っている。	
7	55H-13	打製石斧	フタ土	基部欠損。4同様楕形を呈するが、刃部が直線的である。	
8	55H-14	打製石斧	フタ土	基本的には5と同様の形態を呈する。かなりのローリングを受けており、摩耗がはげしい。	
9	55H-15	打製石斧	フタ土	基部欠損。若干短広がりの大形品で、他のものの約2倍の大きさがある。刃部調整がほとんどなされてなく、粗である。	
10	縄113-64	深 鉢	フタ土	口縁部無文帯下に一条の沈線をめぐらし、それに連結させて、ア一字状に沈線を描き、その中をLRの縄文で充填している。加曾利E4式土器。	
11	縄113-65	深 鉢	75-23 グリット	口縁上端を肥厚させて段を作り、その下に巾広の爪形状刺突を2列めぐらし、口唇部にも刺突を入れている。粘土に金雲母混入。阿玉白目式土器。	



第201図 表採遺物実測図

表採遺物番号	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
表採-1	皿-土師質	1.7 (10) (7)	遺跡内 耕作面	底部へつ調整、体部横ナデ、ロクロ未使用の可能性ある。	①褐色②酸化③口縁-底部写④密
表採-2	杯-土師質	(4.7) (14.6) (6)	遺跡内 耕作面	底部回転糸切痕、底部と体部下端との間に段を持つ、口縁の大きな杯である。	①褐色②酸化③口縁-底部写④密
表採-3	碗-土師質	— — (6.2)	遺跡内 耕作面	高台部内側回転ナデ、42号住9の土器によく似ている。	①褐色②酸化③底部写④密
表採-4	碗-土師質	6.5 (14) 8.6	遺跡内 耕作面	高台部内側回転ナデ、太く長い高台がつく、内側底部にロクロ目残る。	①褐色②酸化③口縁-高台写④密
表採-5	碗-灰釉	4.5(13.2) 7.1	遺跡内 耕作面	高台部内側回転ナデ、細長く端部の丸い高台が付く、漬け掛けによる施釉。	①断面灰白、釉透明②還元③口縁体部写④底部写⑤密
表採-6	碗-灰釉	— — (21.4)	遺跡内 耕作面	平な底部に、幅広く大きな高台を貼付外面上半刷毛塗り、下端以下自然釉。	①断面灰白、釉透明②還元③底部写④密
表採-7	砥石	— — —	遺跡内 耕作面	不定形な砥石、四面使用されている。	①灰白色。

第5章 調査成果の整理と考察

第1節 遺構について

発掘の結果64軒の竪穴住居址、16本の溝、3基の井戸、2基の集石遺構、縄文土壇、10基の土壇、墓塚等が検出された。それらについては各遺構ごとに遺物を含めて説明しており、またそれらをまとめて以下に一覧表を示した。ここではその中で多くの遺物が出土し、時期区分の可能な平安時代の竪穴住居址について、配置や、時期別推移の方法、規模及び住居態等について、また大量に遺物を出土した1～4号溝について検討を加える。

(1) 住居址のとらえ方について

当遺跡の発掘は圃場整備事業に伴う道水路部分のみの調査であった。発掘範囲は東西約270m南北約330mに及んでいるが、耕113号の北側、6号溝より北60mの地点では道路工事に伴ないカマドの断面が確認されており、その地点まで遺跡は確実に延びている。西側は1号住居よりさらに西にも住居が連なっている可能性が極めて強い。このように今回発掘調査した範囲は遺跡のごく一部分にすぎず、さらに発掘した住居址も道水路にかかった部分に限られた調査で完掘が少ない。このような状況での発掘のため、遺跡全体の中で発掘された住居がどのような位置を占めているのかまた各住居の在り方がどのような位置関係にあるのかについて知ることは非常に困難である。

次に64軒の竪穴住居址が確認されていても、同時に存在した住居が何軒、どのような位置関係に存在していたのか、同時に存在した住居は単独で一軒一組であるのか、数軒を生活単位として存在しているのか、又数軒が生活単位なら同時に存在した各生活単位ごとの住居の相互の関係はどのようなであったのか、又木造家屋であり耐久年数を経過した住居はいかなる経過を経て、どのような方法でもって住居を新築してゆくのか、その時の生活単位である数軒単位の竪穴住居間の関係はどのようなであったのか、又生活単位をなす住居における人間は何人居住し、また1軒の住居址には何人、どのような単位で住んでいたのであろうか。このような問題について追求すれば、発掘された住居址群の理解が可能となろう。しかし現状においてそこまで理解し得ることは非常に困難である。そのような状況の中でこれを理解する手助けとなり得るものは、住居址内に残された数少ない遺物を詳しく分析し、土器編年を確立し、各住居に年代観を与え、同時存在の住居を把握することが最良の方法であると考えられる。当遺跡では遺跡及び遺構の一部しか発掘していないという大きな制約の上で、土器編年の限界を知りつつも、この問題の一部にあえて取り組んでみた。

(2) 住居の在り方について

土器編年は第5章第4節(1)平安時代を中心とした土器群について詳しく述べてある。平安時代9世紀前半～11世紀中頃までの250年以上を第1期～第6期まで編年区分し、1期を約40～50年として取り扱った。竪穴住居の耐用年数について松村恵司氏は「山田水呑遺跡」昭和52年の中で「現在の木造住居の耐用年数は一般に30～60年と言われているが、地盤に近い湿気の多い個所にある家屋土台用材の耐用年限は、ヒバで20年、ヒノキやカラマツ、スギで15年と言われている。また伊勢神宮の掘立柱建物が20年毎に建て替えられることなどを考慮すると、一応竪穴住居の耐用年数を15～20年とみることができるだろう。」と指摘している。この考えをここでは継承していきたい。すると当遺跡における土器編年上の1時期には約2～3軒の竪穴住居の建て直しがあったことが考えられる。また土器編年にもとずき時期推定住居址を各時期ごとに色分けして区分した全体図から判断すると、同時期の住居が近接して2～4軒存在していることに気付く、その中で同時期の住居で2軒を1組として近接しているものもある。しかしその住居もカマドが2軒の間または隣の住居にいちじるしく近接しているために、同時存在していないことを示している。さらに同時期での住居址間の切り合いは認められないこともわかってきた。これらについてでき得る限り大きな限界のもとではあるが土器編年の期区分に基づき追求してゆきたい。

第1期 この時期の住居址は6軒発掘された。2軒以上まとまって検出された住居は49・50・51号住であり、1つの生活単位を示していると思われる。50・51号住は近接しており、2軒の間は約2mである。2軒のうちに新旧関係があるのかについては51号住が新しいことも考えられるが不明である。出土遺物からみると、50H-2に見られるようにヘラ切り痕の残る杯及び底径の大きな杯等の出土からみて、第1期でも最も古い要素を持つ住居であるが、51号住出土遺物との比較では決定できなかった。

第2期 この時期の住居址は4軒散在的に検出されているが、発掘範囲ではまとまりとして確認できなかった。

第3期 この時期の住居址は10軒検出された。この中で住居址の近接しているのは31・35号住の2軒と41・44・46・47号住の4軒の2ヶ所に認められる。特に後者の在り方は当遺跡で最もまとまっている。この4軒は第3期という同じ編年期間内に属しているが、41号住北に接して44号住があり、44号住のカマドが41号住に接しているのである。両住居が同時に存在したなら、44号住のカマドにより41号住は焼失してしまうことが考えられる。両住居は土器編年上同一時期であっても、同時には存在していないのである。当遺跡でのカマドは大部分が住居の東壁に築かれている。これは風の方向その他の風土的影響で最も効率の良い位置が東壁であったためと思われる。両住居が同時に存在したことを仮定すると、41号住のカマドは44号住に関係なく使用することはできるが、44号住のカマドは41号住が存在する限り使用できないのである。41号住居が老朽し、新しく建て直すとき、41号住を使用しつつ北接して44号住を作り、41号住のカマドは新居の

44号住が完成するまでは依然として使用され、44号住が完成したのちに41号住へ移動して41号住をこわして44号住のカマドを使用したことが推定できる。両住居出土土器を比較すると編年図に示したごとく、編年上同一期ではあるが、41号住の遺物より44号住の遺物に新しい要素が多く認められ、出土遺物からも41→44号住の新旧関係は言えるのである。この関係は46、47号住にもそのままあてはめることができる。46号住が老朽化した時にやはり北側に接して47号住が新築され、完成したのちに46号住をとりこわして47号住がカマドとともに使用されていくのである。遺物は両住居とも少量しか出土していないが、両住居に出土している須恵器を比較するなら47号住の甕は浅く、口縁部に外反が認められ、46号住の甕は深く、直線的な体部を持ち口縁部に外反は認められない。よって47号住により新しい要素が認められるのである。土器編年上の一型式を40～50年とみて、一軒の竪穴住居の耐用年数を約20年とみるなら、この4軒は第3期に属し41・46号住は第3期前年に位置し、44、47号住が後半になり、41・46号住及び44・47号住はそれぞれ同時に存在した可能性が出てきたのである。両住居とも南東にあった住居が隣の北西方向へ移動しているのである。これは新しく竪穴住居を作るにあたり、カマドの使用を含め、従来からの生活を継続しつつ新築していくという裏に合理的な方法でもって行なわれたことを示しているのではないだろうか。またこの4軒のうち同時存在したと考えられる41・46号住は近接し、同方向へはほぼ時を同じくして移行していることより、同一家族が同一占有地内で移動していった可能性を示している。

第3期においては他にも31・35号住居址に1つのまとまりが認められるが、31号住はカマドのみの発掘であり、31号住はカマドと住居の1部のみの発掘である。また、2軒の間の距離が比較的事実によりその相互の関係はつかめなかった。

第4期 この時期の住居址は15軒検出され、時期の判明している住居の中で最も多い時期である。この中で2軒以上のまとまりをもつものに30・33・34・36・37号住の5軒、9・11号住址の2軒、42・43・45号住居址の3軒、60・63号住居址の2軒の4個所が認められる。33・34・36・37号住では第3期の41・44・46・47号住にみられたように、東側の住居33・37号住が34・36号住へ移行していくことが考えられる。位置関係から見ると33→34、37→36号住へ移行した可能性がある。遺物で比較すると両住居間に大きな差はないが、33号住と34号住を比較するなら土師質土器甕において34号住に新しい要素が認められ、36号住と37号住を比較するなら同様に土師質土器甕において36号住に新しい要素が認められる。9・11号住においては南側に位置する11号住から9号住へ移行することが考えられ、遺物で比較するなら11号住には11H-1・2の須恵器環がほぼ完形で出土しており、この環は須恵器の環として最終段階のものであり、11H-2は灰褐色を帯びた酸化焰焼成で焼かれている。そのため第4期では最も古い要素を持っている。この須恵器環が9号住の段階では出土しなくなっている点、土師質土器を比較するなら9H-12において甕の高台部が長くなっており、11H-4より新しい要素を持っている。以上の点より遺物から見ても11号住より9号住のほうが新しいと考えられる。42・43・45号住は第3期の41・44・46・

47号住の4軒1組に接しており、2軒1組とする生活単位と考えられる44・47号住の住民達のその後の住居である可能性がある。42号住と43号住では北側に位置する42号住が新しく、遺物からみても43号住にはほぼ完形の須恵器環が残存しているのに対し、42号住には認められないこと、土師質土器碗が42号住においては完成された形であるのに対し、43号住ではその前段階であること等から42号住が新しいことが言える。2軒の住居は前段階第3期の41→44号住に続き、43→42号住又は43号住→□号住→42号住へと移行していったことが推定できる。

第5期においては6・7号住、28・29号住、55・56号住が近接して存在する。6・7号住では西側に接する6号住が新しいと思われる。遺物においては6号住出土のものとして環1点と刀子のみであり、これだけでは時期の接している7号住との新旧関係はつかめない。28・29号住においては西側に位置する28号住が新しいと考えられる。遺物においては29H-4より28H-1により新しい要素が認められる。55・56号住においては両住居の平面形があまりにも異なるため他と同一に考えることは無理かと思われ、遺物で見ても同一器形がないため新旧は不明であった。

遺跡の1部しか発掘していないこと、住居の一部しか掘っていないものが多いこと等の多くの制約の中であえて住居のあり方を以上のように考えてきた。それらまとめると次のことが言えそうである。

- ① 生活の単位は2軒の隣接住居を主な単位とし、数軒で1つのまとまりをもっている。
- ② 土器編年上の1時期（40～50年）には2～3回の建て直しが行なわれている。
- ③ 建て直すときは原則として新しい住居をカマドの作られている東側南寄り、つまり南東方向とは逆の北西方向又は北・西に近接して作っている。
- ④ 新しく移り変わる住居と古い住居との時間差は短く、土器に反映される特色は少ない、編年図にのせるなら直続又は直前にくる関係にある。
- ⑤ 原則として同一時期内においては重複住居は存在しない。重複住居は原則として住居耐用年数約15～20年の期間を経たのちに行なわれている。しかし火災その他の原因による場合はこの限りではない。

(3) 1～4号溝について

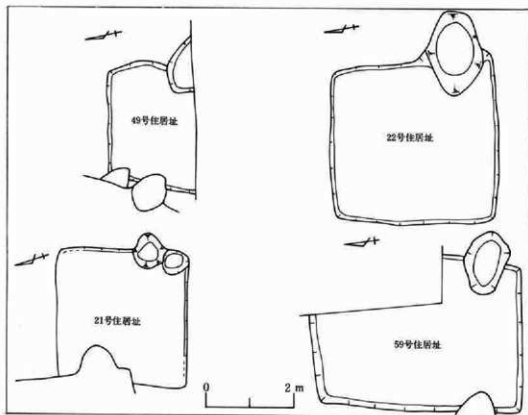
単幹1号に位置する1～4号溝及び耕114-2号東側に位置する5号溝から大量の遺物が出土している。特に1～4号溝からは土器片総数25000個を超える出土があり、当遺跡出土総数34218個体の7%以上を占めている。大部分は破片であるが完形品も多く、実測図で291個体をのせてある。この数は掲載土器総数1028点中で約7%を占めている。発掘した1号溝は約3×27mであり、2～4号溝は約8×10mの範囲である。溝の総面積にしてもわずかに約160㎡にすぎない。出土土器を細かく見ていくと土師器が1275個、須恵器が約4706個、土師質土器17773個、灰釉陶器1355個、緑釉陶器137個を出土している。それらの在り方を詳しく分析することにより溝の使用された年代及び溝の性格について検討してゆきたい。

土師器の出土数は全体の約5%にすぎない。さらにその中で約90%を占めるのは甕であり、土師器環は非常に少ない。これらはこの溝が土師器を大量に使用していた第1期、第2期の9世紀代にはほとんど使用されていないことが考えられる。須恵器の出土数は全体の約19%を占めている。その中で環と甕が多くを占めており、環の中ではイブシ焼成のものが半数以上を占めている。これは須恵器環のイブシ焼成が大量に使用された第3期の須恵器環の多いことを示している。土師質土器は17773個出土し、総出土数の約73%を占めている。これはこの溝の主体が第4期、第5期に属し、高台を持つ碗が平底の環よりも多いためこの溝は第4期が中心であることが考えられる。以上のことより準幹1号1～4号溝は第3期～第5期の長期におよぶ約150年間を中心に使用、埋没され、その前後の遺物を少し含んでいる溝であることを示す。さらにこの時期の住居出土土器と比較するなら煮沸機能を持つ羽釜の出土の少ないのに気付く、土師器甕を省けば煮沸機能を持つものとしての羽釜は全出土量の約4%以下である。これは生活用具が破損したため、まとめて溝にすてられたものではなく、ある一定の目的、什器である土師質土器のみを又は大部分土師質土器を使用する何らかの目的のために使用されたものを、一定の規制のもとで一括してすてられたことを示している。特殊な遺物である緑釉陶器137片もこの溝から出土しており、これらの状況をあえて考えるならば、この溝が単なる生活用具破損によるゴミ捨て場的な存在でなく、大量に盛器が使用された施設の1隅に所属していた溝である可能性がある。

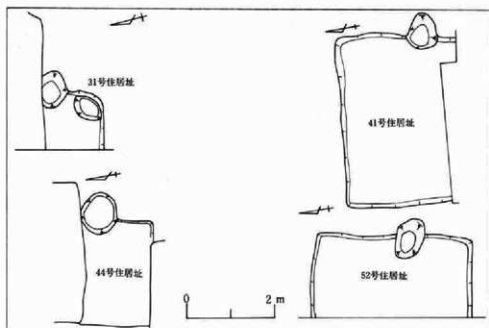
(4) 第1期～第6期の住居形態について

出土土器をくわしく分類、検討を加えて平安時代土器群を第1期～第6期まで編年区分した。さらに住居間のまとまり、在り方、建て替え方法等についても考えてきた。ここでは各時期において住居形態が段階的に変化するかについて検討してみた。第1期～第6期までの住居の平面形で良好なものを以下の第202図～第205図に示した。図でわかるように1軒の住居の完備例が少なく、しかも同一時期内での大きさ、平面形のばらつきが目立つ、このような状況では大きさや平面形、カマドの在り方等のちがいが同一時期でのちがいのなか、時期差を反映したものなのかを知ることはできない。この問題については今回の調査ではつかむことができなかった。今後新たな遺跡で追求していきたい。

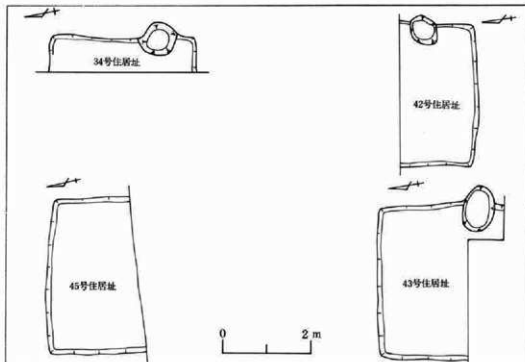
(中沢)



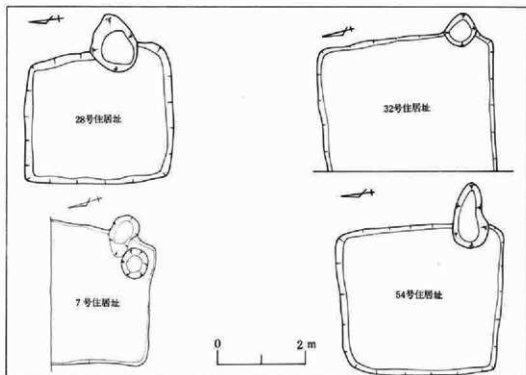
第202図 第1・2期 竪穴住居址例



第203図 第3期 竪穴住居址例



第204図 第4期竪穴住居址例



第205図 第5・6期竪穴住居址例

第2節 遺物について

(1) 遺物の取り扱いについて

住居址や溝から土器片総数34000個を超える遺物を出土している。それらの中にはほぼ完形品の碗を含む168片の緑釉陶器、1703片の灰釉陶器、金銅製丸瓶、石製丸瓶、墨書・刻書土器、海老錠等の鉄製品等に見られるように注目されるものを多く含んでいる。各遺構出土の遺物については遺構ごとに簡単に概略を述べ、実測図と遺物観察表を載せ、その中で緑釉陶器、灯明皿、鉄製品、瓦、出土貨幣等については1括してこの後にまとめて取り扱い簡単な説明を行なった。

当遺跡では住居床面をとらえることが非常に困難であったので、住居出土遺物についてそれが床面に近接しているのか否かについての区別が充分でなかった住居も多くあった。それらを含めて基本的には床面、カマド内、フク土と区別して遺物を取り上げた。住居の中には床面、カマド内の遺物よりフク土出土の遺物が多いものが数多く認められた。しかしフク土より出土したとして取り扱った遺物の多くはその住居に伴なうものとして扱ったものが多い。住居床面を明確にとらえることのできない状況下にあってはあながち無謀なこととも言いきれないであろう。

(2) 遺構別遺物出土状況一覧表及び住居址等の遺構放棄後に持たられた遺物の問題について

この一覧表は遺跡内出土遺物の中で報告書中に実測図を載せなかったものすべてについて出土遺構、出土器種や器形等について細かく分類して作成したものである。この中にはその遺構を使用した時代の遺物のほかに、遺構が放棄されてからの遺物も当然多く含まれている。それらを一切の選択なしにすべて載せてある。この一覧表を詳しく検討していくと従来見落されてきた住居址等の遺構放棄後に持たられた遺物の問題について、おぼろげながら一定の在り方を示した。

住居内出土遺物を一覧表から見てゆくと、時代毎に器種・器形の組み合わせに特色を持ち、住居に伴なう遺物群と、時代的にみて一型式又は竪穴住居の耐用年数15～20年の期間以上離れた段階の遺物群を含んでいることに気付く、49、50号住においては、第1期のほぼ完形の土師器甕をカマド内やフク土中より出土しており、その住居より第4～5期に相当すると思われる土師質土器及び羽釜の破片が数片混入している。33・34・37・42・43・45・53号住居址においては、第4期のほぼ完形の土師質土器や大きな破片の羽釜に加えて、第1期～第2期（多くは第2期を中心とすると思われる。）の土師器の破片を多く混入しているのである。28・29・32号住では第5期の土師質土器のほぼ完形な遺物群に加えて第1期～第2期と思われる土師器坏・甕を大量口出土している。このような状況は第2期の59号住、第3期の52号住においても同様に認められた。このように住居に伴わずに、住居放棄後に持たられたと考えられる遺物は、その住居の時期からほぼ1型式以上はなれた段階のものが多く混入しているように思えるのである。（中沢）

遺構別遺物出土状況一覽表(3) その他の()は仮組遺物、
時期の()内は時期不確定を示す。

遺構名	遺物												版組数	総数	時 期		
	土師器			須 須			志 器			灰 陶 器						其 他	
	口部	底部	縁部	口部	底部	縁部	口部	底部	縁部	口部	底部	縁部					
53号住	2	1	4											7	84	4	
54号住	3	2	12											17	128	6	
55号住	3													15	79	5	
56号住			2											7	14	5	
57号住														1	2	(I)	
58号住	9	28	1	4	1									3	76		
59号住	4	40	6	8	4	5								9	152	2	
60号住	2	2	21	2	1									8	57	4	
61号住	3			2	1									4	21	3	
62号住	1	2	10	2	1									1	121		
63号住														5	7	4	
64号住														3	3		
単幹1号	16	94	1,000	36	600	100	200	919	10	38	85	1,600	13	64	187	637	42
1号薬石	7	14	41	1	3									2	15		
2号薬石														2	15		
耕,113号	100	34	102	10	17	4	16	2	9	1	12	113	4	4	1		
耕,114号	30	74	120	28	138	53	23	5	10	12	3	115	3	18	33	141	
耕,116号	36	68	2	52	11	5	7	1	69	2	15	40	106	10	89	23	
その他の瓶	3	3	18	96	76	2	25	6	19	5	27	9	45	7	108	23	
合 計	56	2,992		2,863		225	2,524	16	2,112		20,024	1,234	73	228	168	7	
																	1,000
																	34,218

(3) 古代の遺物

1 土師質土器について

① 概要について

平安時代（10世紀後半頃）羽釜出現以降に灰褐色を帯びた坏・碗・内黒碗が現われてくる。ロクロと窯体を使用し、酸化焰焼成ではあるが、灰褐色を帯びている一群の土器である。この名称については県内では一般に土師器と称しており、⁽¹⁾ 県外においてもこの時期における高台付碗の多くを、ロクロ土師器又は土師器と称している。この名称は適当と言えるであろうか。土師器とは延喜式などによる土師であり、⁽²⁾ ロクロと窯体を使用しない酸化焰焼成を基本とする専業工人が製作したものと考えている。その概念で当遺跡出土の灰褐色を帯びロクロ使用による坏・碗・内黒碗をみると、ロクロと窯体を使用している点からみて明らかに土師器の範疇には入らなくなる。土師器という名が不適当なら須恵器と呼べるであろうか。須恵器とはロクロを用い窯体使用の還元焰焼成を基本とする専業集団によるものとされよう。灰褐色を帯びロクロ使用による坏・碗・内黒碗とは、ロクロと窯体を使用している点で共通し、焼成が還元か、還元に近いが酸化焰焼成であるかの点及び、器形の系譜が異なる。この違いは焼成後の色調が前者では青灰色を呈しているのに、後者では灰褐色を帯びていることでも明白である。窯体は両者とも使用しているが、焼締のある須恵器の窯体は県内に10群前後の窯業生産地域の中で確認されているのに対し、灰褐色を帯びロクロ使用による坏・碗・内黒碗を焼成した窯跡の発見例は現状においては県内にない。これは窯体構造、立地、焼成方法、工人集団の在り方の違いを示しており、両者が同一でないことを物語っている。しかし須恵器製作技法に近く、広い意味での須恵器の範疇にはいるのである。ではこのロクロを使用し、簡単な窯体構造で酸化焰焼成で焼いた坏・碗・内黒碗を何と呼んだら最も適当であろうか。私はこれを土師質土器と呼びたい。土師質土器とは従来カワラケと称されている皿類を指して使われることが多い。それは古墳時代の土師器との概念差を認めての名称であった。これらの土器群はその多くがロクロを使い窯体を用いた灰褐色の皿である。この概念は皿型土器という器種の限定を除けばそのまま灰褐色の坏・碗・内黒碗その他に適用できると思う。

以上のことを表に示すと右表のようになる。

注(1) 井上唯雄「荒砥五反田遺跡」群馬県教育委員会1978の中でも土師器として称されている。

(2) 天井部を有する窯体を想定している。

(以上は中沢悟「土師質土器について」埋文月報No10(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1981の文章の一部を加除筆したものである。)

土師質土器表面上特色の一部について上記のように整理段階で考えてきた。さらに整理を進め

	ロクロ	窯体	焼成	色調
土師器	×	×	酸化焰	褐色
土師質土器	○	○	↓	↓
須恵器	○	○	還元焰	青灰色

ていくなかで、土師質土器の系譜と出現の社会的背景について気付いた点があるので、以下に述べてゆく。

② 平安時代土器製作集団の動向

遺物を詳細にわたり分類検討し、それらの整理を通じ編年図を作成し、それをくわしく検討していくと多くのことを示唆してくれる。それらについてのくわしい内容は第5章(1)清里・陣場遺跡における平安時代の土器群についての中で総括的に述べてある。ここでは概要について簡単に触れてゆく。土師質土器出現時における須恵器工人達の状況は大きく変質しつつあった。その原因の1つとして灰釉陶器があげられる。集落内で什器としての機能を荷負っていた坏・碗類は、集落内に搬入されてきた灰釉陶器・碗により、その役割がしだいに弱まり、旧来の還元焰焼成による焼締から還元焰焼成による軟質な焼に、さらに酸化焰焼成へと転化してゆき、やがて消えていくのである。一方において煮沸機能を持つ羽釜は、集落内に大量に持ち込まれ活用されていた。須恵器工人達の製品の中で社会に受け入れられる器種は羽釜と少量の壺、甕のみとなっていた。新しい器種等により活路をみい出さないかぎり、什器としての役割はしだいに失われてしまう状況下であり、そのような状況下で出現したのが土師質土器坏、碗A、碗B、碗Cであった。土師質土器は初期段階からこの4種類の完成された姿を持って登場してくることが考えられる。

③ 土師質土器の特色

土師質土器は焼成方法や色調が多少異なるが、須恵器の範疇の一器種である。しかし10世紀頃の須恵器坏・碗類は器形や焼成において大きく変質しつつあったため両者に区別しにくい一群も存在するか次の点に両者の相異が指摘できる。

	器形	焼成	高台のつけ方	胎土	その他
須恵器	体部~口辺部分 外側に大きく外反する	基本的に還元	雑	砂粒が多く表面の胎土はほとんどとれない	
土師質土器	体部~口辺部分内側に内彎し、丸味を持つ	基本的に酸化	ていねい	砂粒が少なく表面から胎土が粉状に落ちるものが多い	内黒を含む

土師質土器は酸化焰焼成が多いが還元焰焼成もあり、焼成後の色のちがいが両者の中心的なちがいでない。又両者ともロクロ、窯体を使用し製作されているためその意味では同一である。両者のちがいについては上の表にあげたことが言えるが、最も典型的と考える土師質土器と須恵器とのちがいは器形にある。体部から口縁部にかけては基本的に外反し、直線を基調とする須恵器の器形の延長上にあるものは須恵器であり、もちろん褐色を呈していても須恵器である。それに似ていても基本的に体部~口辺部が内彎し、曲線を基調とするものが土師質土器であり、還元焰焼成であっても土師質土器である。このような特徴を比較して土師質土器であるのか、須恵器であるのかを決める必要がある。では須恵器工人の一端の人々がなぜ土師質土器を作ったのであ

ろうか。その契機に大きな影響を与えたものに木器の存在を考えている。

④ 平安時代の木製品及び木製碗

平安時代の木製品の実態はどのようであったろうか。木製品は有機質のため腐敗し、破損または使用されなくなった段階では燃料として活用できる。そのため今日まで残っているものは少なく遺物としてとらえることはほとんどできない。群馬県内においての出土例はほとんどない。埼玉県においては「武蔵新久奈」(立正大学)昭和46年の中でA地点第1号跡の灰原出土として黒漆塗りの碗が出土している。また最近埼玉県立博物館「特別展木と漆の原始工芸」1982のパンフレットの中で寿能泥炭層遺跡出土の平安時代に属する碗が3個体、櫛とともに紹介されている。ともに貴重な遺物である。一方文献から追ってみると平安時代の木器は膨大な量と器種を持っている。延喜式巻十七内匠寮の中に大量に記されており、又巻三十五大炊寮の頃に朱漆碗、葉碗、陶器、

土碗等名前が見られる。

木器については黒川真頼「工芸志料」(明治11、12、明治21)の中の木器材及び漆器の項にくわしい。その中で漆器の頃から10世紀代の一部を取り出してみると以下のようである。

これはあくまでも延喜5年の1時期の実態であり、漆器自体はそれ以前に多く製作使用されていた。これを見るかぎり木製品、特に黒漆器、朱漆器の製品が生活用具として種々な器種にわたり大量に製作されていることを示している。これはあくまでも中央における実態であり、東国上野の実態にそのままでは符合しないことは明らかであるが、品質や器種は異なっ

増訂工芸志料 巻七

○延喜五年(一千五百五十五)醍醐天皇制して、内匠寮に於いて年料の漆器を製造せしむ。其の器数多あり、黒漆器には手湯戸(湯を盛る器なり)、水槽(水を蓄うる器なり)、手洗槽(手を洗う器なり)、椀(手を洗う器なり)、大櫛(大なる櫛なり)、中櫛(中なる櫛なり)、盤(平皿の類なり)、深杯(盃風の類なり)、杓(水を汲む器なり)、掃帚(盃の台あるなり)、案(高き足ある器なり)、櫛(案の類の器なり)、屏風(屏風の縁なり)、斗帳(覆る白なり)、几帳(帷を懸る器なり)、大小の行障(歩行するに頸上に戴く案なり)、大櫛簞(指羽(さしば)を納める筥なり)、大笠(傘柄、輓柱、幕柱、棹柱、革篋、櫛篋、香篋、床(足ある床机なり)、薬袋(薬を納める器なり)、辛櫃(足ある櫃なり)、厨子(諸物を置く棚なり)、櫛木(案の類にて彫刻せる器なり)、櫛(大櫛器なり)、虎子(小便器なり)、壇台(壇蓋を載する台なり)等なり。

朱漆器には櫛(食物を載する器なり)、櫃(諸物を納るる器なり)、櫃台(酒樽の類にて大なる者なり)、花盤(花卉を盛る盤なり)、飯椀(食椀なり)、羹椀(汁椀なり)、鞆子(御膳を載せる盤なり)、盞(平皿の小なる者なり)、白盤(食物を載する白なり)、下食盤(方なる盤なり)、机(足ある器なり)、外居(食物を納れて運ぶ器なり)等なり。

(一) 椀は器と組ませた人を入れる器のこと。(二) 行障は傘の類である。(三) 花盤は華蓋の類ともし考えられるが、花影の盤と解され、何れか不明。校注者は後者を採りたい。(四) 土器や櫛等を載せる白皿の類で、尻居と同じと解したい。

でも木器が集落内に導入される傾向はしだいに地方へより強く波及していったことが考えられる。この文献は出土遺物の少ない現状においては大いに参考になるものである。この大量の漆器の中で什器の機能を持つものとして大椀、中椀、飯椀、羹椀、蓋などが認められる。

⑤ 土師質土器の系譜と出現の社会的背景及び消滅の意味

以上のように土師質土器は、従来の須恵器環、碗が果たしてきた什器としての役割の一部を灰釉陶器その他によりしだいにあって変わられていった段階に出現した。この段階には中央において大量の木製品が製作使用されており、埼玉県においても木製漆椀が出土している。土師質土器は成形、焼成等において須恵器の範疇にはいるものであり、須恵器工人達の流れの上で製作されたものである。しかし器系は従来の須恵器とは異なっており、その系譜は別に求める必要があると思われる。その系譜に木製椀からの影響が想定される。第4期に出現した土師質土器は初期段階から4種類のセットとして出現しており、このことはそれ以前に存在した木製椀から器形を写したためであり、内黒施とは漆の技法に似たものを土器で対応できる技術変革として採用した方法であるとも考えられる。この土師質土器はやがて第5期に至ると減少してゆく。それは須恵器工人達が新しい活路として採用した土師質土器も、木製椀の大量輸入及びその他の理由によりついに劣勢を挽回することが出来ず社会に受け入れられずにやがて皿型土器という形でしか残っていかなかったためである。

(中沢)

2 灯明皿について

土師質土器の中で、口縁部に油煙の付着したものが多く確認された。これは灯りとりの灯器として機能したことがまず考えられる。この油煙と見える黒色溶着物が生ずる可能性として、他には漆の付着が考えられるが、アルコール系の溶材に溶けるため、漆ではないことがわかる。従来灯明皿とは器高の浅い中世の「カワラケ」を称して用いられると一般的に理解されるため、平安時代の宛に残る油煙は奇異に思え、その用途、機能をいま一度考える必要性を感じた。ここで言う灯明皿とは灯明に使用され油煙の付着が認められるものをさして言う。器形は碗、環、皿等を含み、一器形の皿等に限定された器形を示すものではなく、あくまでも灯明として使用されたものを指している。

灯明皿の出現について

早い時期に出現するであろうとの指摘は古くからなされていた。樋口清之氏は「日本木炭史」(昭和52年)の中で、「……室内の暖房用としても、古く竪穴住居に住み、直接土面を掘って暖房を行ったときは、主として薪(木材のほかに枯草・わら・あし・木葉、竹など)のような発煙燃料が、煙は伴っても焰による照明の便があるので使用された。……それが高床住居の家(おそらく弥生式文化のころから生まれ、古墳時代で殿と呼ばれる住居になった)や、床張り家屋が増加するようになると(6・7世紀から板床の家がふえてきた)暖房と室内照明は分離して、同時にまだ残っていた庶民の竪穴住居でも炉は竈の形となって家屋の壁に近く造られ、地下から屋外に煙道が設けられるようになった。したがって、照明と暖房と炊事用を兼ねた炉は分離して、灯器(油

(延喜式卷三十八)
 胡麻油四斗、油瓶廿六口、燈蓋一千□百六十六口。二百五十三口加、輪。
 燈臺八十基。雲宮殿并
 中宮油八斗、油环八百口、盤百卅口、瓶十六口。

や松脂を使用した)と竈と暖房用の一種の火鉢(土製・木製のほかに、石片の中央を大きく凹ませたヒデバチも使われた)になって…」と述べて、炉から竈への変化、さらに竈穴住居から掘立柱建物への一部分離に伴って室内照明器としての灯器の発生を想定している。

さらにこのことについて、杉原莊介氏は「土師式土器集成Ⅳ」(昭和49年)で、千葉県須和田遺跡で国分期に触れ、「鬼高期から真間期を経て、本時期に至り、組成の上で占めることの必要な食器であったことも認めなければならないであろう。しかし、それらの中に、すでに油を入れての照明具が存在したかもしれないということは、そう無理な推定ではないであろう。そして、本型式土器の中には灯明皿といわれるものを含むようになり、その多様性はますます強くなる。いままではあまり具体的には考えられなかった。夜間の生活についても検討をしてみる。一つの機会であるかも知れない。」と、述べられている。文献上に見る灯器の実体についてみると、「延喜式」卷三十六に右の様な好例があり、他に油の種類として麻子油・呉桃子油・海柘榴油など具体的な油の名称がでてくる。

これらは、胡桃・胡麻・椿・麻等からとったものが多用されていたようで、それらを油瓶等に入れ保存・移動を行ない、油环(灯明皿と思われる)に注ぎ、灯柱(灯明皿の芯と思われる)に火をつけて灯りをとった。

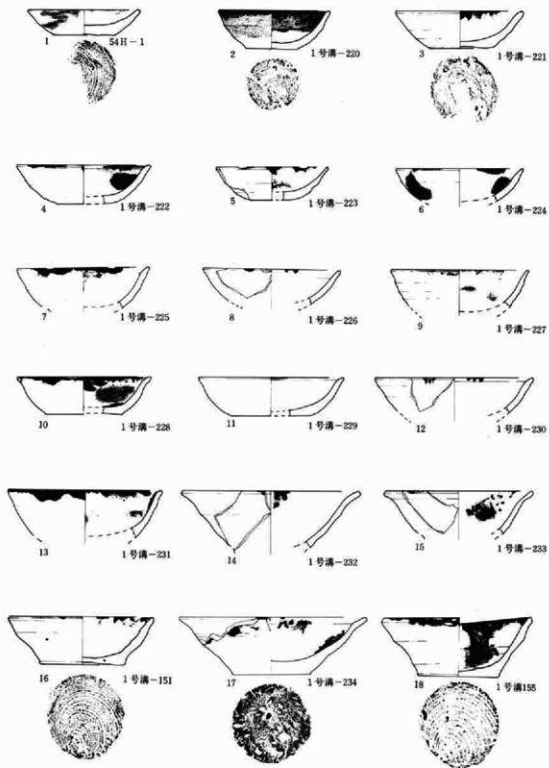
当時畿内においては床張家屋が高級宅屋と考えられるため、おそらく油环は灯台の上に乗せられているであろう。従ってすでに10世紀を中心とした畿内において用されていたと推測される。

県内において、油煙付着の灯明皿の出現は奈良時代に存在するといわれている。掘立柱の建物の多く存在する時代である以上その存在は当然であろう。しかしそれについての報告は未見である。仮に奈良時代に出現したとして、発掘例の多い現在に至ってもその報告類例が増加しないことにより、出現段階は一帯に拡散するほど多くないと考えられる。平安時代になるとその例は多くなると思われるが未報告が多い。平安時代、羽釜・土釜出現以降になると、油煙付着を持たないが、従来、カワラケ・灯明皿と称されている小型の皿に近い器形が出土し、その量は県内でも多数にのぼっている。しかし、この油煙付着の例はめずらしい類例となろう。

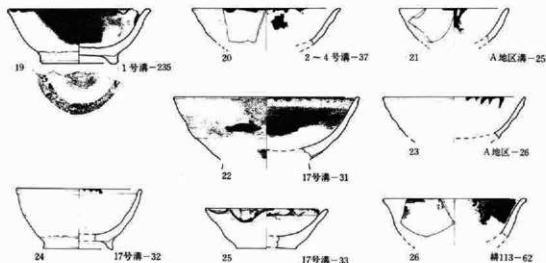
このことは、先の杉原氏の報告による須和田遺跡においても、多量の小皿を出土しているにもかかわらず、油煙付着の指摘がなされていないことから灯明皿の存在を認定しがたいのである。それに反し、当遺跡では小皿出現以前と考えられている段階の竈にすでに油煙の付着が認められるのである。それに加え高台を持たない小形化した環や小皿に多くの油煙付着が認められ、灯明としての灯明皿が実際に多く使用されていたのである。(中沢)

この文章は中沢悟「灯明皿について」『埋文月報No.13』(財・群馬県埋蔵文化財調査事業団)1981の文章を加筆したものである。

第5章 調査成果の整理と考察



第206図 灯明皿実測図 (1)



第207図 灯明皿実測図 (2)

灯明皿 観察表(1)

番号	遺物名	器形	寸法(cm) 器高・口径・底径	器形・成形・整形の特徴	①色調②酸化③口縁④底 ⑤備考
灯明皿-1	54日-1	皿-土師質	2 (9) (5)	底部回転糸切痕、口縁部に油煙が付着、外面に油煙が多い。	①灰褐色②酸化③口縁-底部④密
灯明皿-2	1号溝-220	杯-土師質	3.1 8.7 4	底部右回転糸切痕、内外面口縁部に一定幅の油煙が付着。	①灰褐色②酸化③ほぼ定形④密
灯明皿-3	1号溝-221	杯-土師質	3 10.3 4.6	底部右回転糸切痕、口唇部に濃い油煙が付着。	①褐色②酸化③口縁-底部④密
灯明皿-4	1号溝-222	杯-土師質	3.1(10.8) (4.6)	口唇部、口縁部内側に油煙が付着、油煙の一部は厚さを持つ。	①灰白色②還元③口縁-体部④密
灯明皿-5	1号溝-223	杯-土師質	2.6 (9) (3.5)	底部回転糸切痕、体部クロク目、口唇部に油煙付着。	①灰白色②還元③口縁-体部④密
灯明皿-6	1号溝-224	杯-土師質	—(10.2) —	口唇部、口縁部の一部に油煙付着。	①灰白色②還元③口縁-体部④密
灯明皿-7	1号溝-225	杯-土師質	—(10.6) —	口唇部内外面に油煙が付着、その一部は欠かれて、さらにその面を再度使用。	①灰褐色②酸化③口縁-体部④密
灯明皿-8	1号溝-226	杯-土師質	— (11) —	口唇部内外面に油煙が付着。	①灰褐色②酸化③口縁-体部④密
灯明皿-9	1号溝-227	杯-土師質	— (11) —	同上	①灰褐色②酸化③口縁-体部④密
灯明皿-10	1号溝-228	皿-土師質	3(10.8) (6.2)	同上	①灰褐色②酸化③④密

第5章 調査成果の整理と考察

灯明皿 観察表(2)

番 号	遺 蹟 名	器 形	寸 法 (cm) 器高・口径・底径	器形・成形・整形の特徴	①色調②地文③残存④粘土⑤備考
灯明皿-11	1号溝-229	皿-土師質	3.1(11.6) (6.3)	底部回転糸切痕、口唇部油煙付着。内外面横ナシ。	①灰白色②還元③口縁-底部④密
灯明皿-12	1号溝-230	杯-土師質	—(12.8) —	口唇部に油煙付着。	①灰白色②還元③口縁④密
灯明皿-13	1号溝-231	杯-土師質	—(12.4) —	口唇部内外面、口縁部内側に油煙付着。	①灰褐色②酸化③口縁-体部④密
灯明皿-14	1号溝-232	杯-須恵器	—(13) —	口唇部に油煙付着。口唇部が外反している。	①灰白色②還元③口縁-体部④密
灯明皿-15	1号溝-233	杯-土師質	—(11) —	口唇部、口縁部内側に多くの油煙が付着。	①灰褐色②酸化③口縁-体部④密
灯明皿-16	1号溝-151	杯-土師質	3.8 11.6 6.8	底部右回転糸切痕、口唇部、口縁部内側に厚い油煙が付着。	①灰褐色②酸化③完形④1～3mmの砂粒含む。
灯明皿-17	1号溝-234	杯-土師質	4.6(15.4) 6.3	底部右回転糸切痕、口唇部、口縁部に油煙付着。	①褐色②酸化③口縁-体部④密
灯明皿-18	1号溝-155	杯-須恵器	4.7 12 6.5	底部右回転糸切痕、口唇部、口縁部内側に油煙付着。	①灰褐色②酸化③完形④1～3mmの砂粒含む。
灯明皿-19	1号溝-235	碗-土師質	4.4(11.4) (6.3)	高台部内側回転ナシ、口縁部内外面に大量の油煙付着。	①褐色②酸化③④①1～2mmの砂粒を含む。
灯明皿-20	2～4号溝-37	杯-土師質	—(11.8) —	口唇部、口縁部内側に油煙付着。	①灰白色②還元③口縁④密
灯明皿-21	A地区-25	杯-土師質	—(88) —	口唇部、口縁部内側に油煙付着。	①灰褐色②酸化③口縁④密
灯明皿-22	17号溝-31	碗-土師質	—(14.8) —	口唇部、口縁部内外面に油煙付着。高台が付くと思われる。	①灰褐色②酸化③口縁-体部④密
灯明皿-23	A地区-26	杯-土師質	—(11.4) —	口唇部内側に油煙付着。	①灰褐色②酸化③口縁-体部④密
灯明皿-24	17号溝-32	碗-土師質	4.8 (10) (5.6)	口唇部内側に油煙付着。	①灰褐色②酸化③口縁-高台④密
灯明皿-25	17号溝-33	杯-土師質	3.2 (9.8) (4.8)	口唇部内外面に油煙付着。	①灰褐色②酸化③口縁-底部④密
灯明皿-26	経113-62	杯-土師質	—(11.6) —	口唇部内外面に油煙付着。内側には厚く油煙が付着。	①灰白色②還元③口縁④密

3 瓦 類

瓦類の観察

瓦類は軒丸瓦1、平瓦25、丸瓦36、不明1、総計63片を数えた。それらは、住居跡、溝跡など、平安時代遺構との関連出土が多かった。この瓦類は住居に伴う場合、2次的な利用と見られ建築物使用のあり方と機能的な差異のあるものであるが、周辺に瓦使用建築物の存在を示唆することは確かであろう。

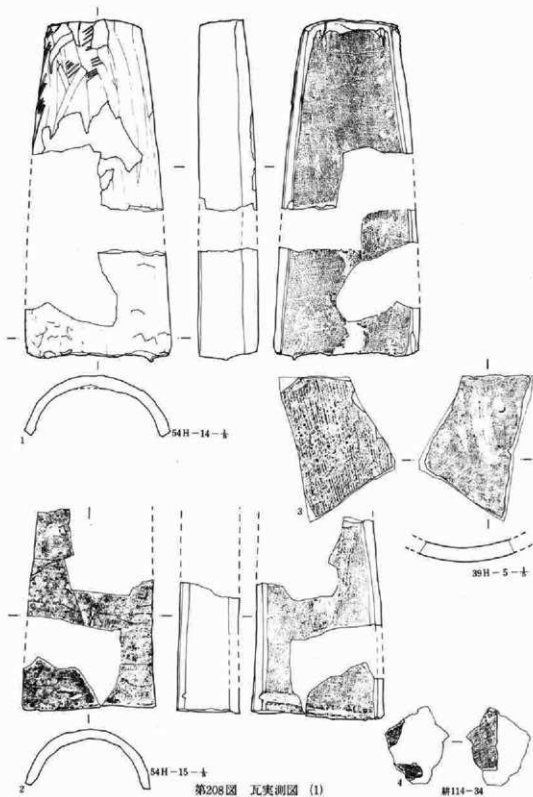
瓦類の分類は主に、瓦表面にある叩締と整形技法を基に観察して、表の作成を行った。この中で注意したのは基本的な作瓦技法となる桶巻作りと、一枚作り⁽¹⁾についてである。その分別の基準および留意点は次のとおりである。

- 1 桶巻作りの概念は、一般的にいう桶巻作りに基づき、桶の寄木状の凹凸単位があり、さらに粘土板の接合痕、布の合せ目痕をとどめる平瓦片を桶巻作りとした。
- 2 桶巻作りと考えられる例を除き平瓦一枚作りの可能性を考えた。この一枚作りを傍証する積極的な根拠はないが群馬県においては上野国分寺創建の前後の頃に桶巻作りと考えられる寄木状痕が見られなくなるため、平瓦一枚作りは上野国分寺創建の前後に一般化しはじめと考えられる。この分類表作成においても、その現象を見のがす訳にはゆかないので桶巻作りの寄木状痕の見られないものを平瓦一枚作りの可能性が高いものと見なした。
- 3 ただし、桶巻作りの細片にあっては、桶の寄木痕の単位が不明瞭となるため、一枚作りの中に類されたものもある可能性は強い。このため、桶巻作りと、一枚作りとの解釈は、総体傾向をつかもうとする場合には有効であり、単体の瓦を理解する場合には危険性を伴うことをこわっておきたい。

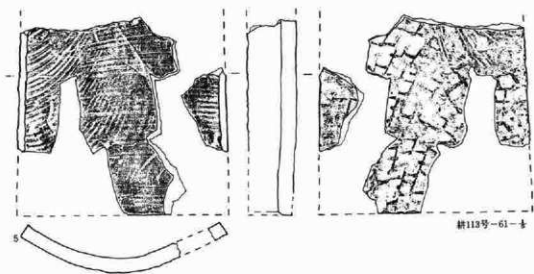
この観察の結果、瓦の趣盛は素文の平・丸瓦にあり、続いて縄叩となり、若干、格子の叩が認められた。平瓦は総数33片に対し、2片が桶巻と判断され、平瓦の6%弱となっている。これら瓦類の製作技法、整形技法は単一でなく、年代差か生産地域差を示すと考えられた。

瓦の復元は63片のすべてを検討に供した。大きさは平瓦の格子類では第209図5の場合、小口幅 $20.5+acm$ 、瓦長 $25.5+acm$ をはかり、丸瓦素文類の第208図1では小口広部幅 $18cm$ 、第208図2では $17.5cm$ の単位を測ることができた。復元された瓦類から判ったことは丸瓦は無段であり、有段丸瓦は認ることができなかった。

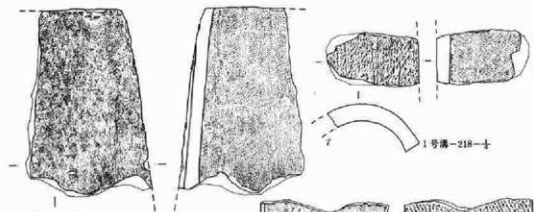
軒丸瓦は第209図9のとおり、細片であるが、瓦当面の外区には巾の広い素縁帯がめぐり、その表面がへう削りされている。内区には、単弁抽象文系弁の2弁が残り、中房部を欠いている。背面は布の圧痕をとどめ製作技法の一端が知れる。図示した丸瓦部が周縁帯の遺存部であるか、丸瓦部であるのかは、明瞭でない。割れ口には、范型にあった粘土材と、周縁帯か丸瓦部との製作状況を示す、く字状の粘土の曲り方向が見える。軒丸瓦の瓦当面の復元は、第209図9のとおりである。



第208図 瓦実測図 (1)



耕113号-61-土

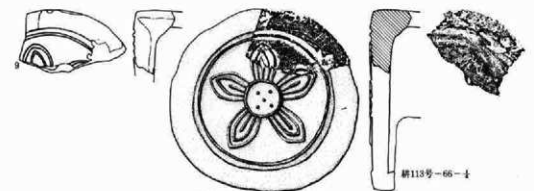


1号溝-218-土



耕114号-33-土

耕114号-35-土



耕113号-66-土

第209図 瓦実測図(2)

第5章 調査成果の整理と考察

瓦分類表

瓦種	印種	図番号	技法	出土位置	数量
平瓦	織印	39H-5 (208)	桶巻作	碁113号、1片布の合せ目あり	1
			一枚作	34Hカマド1片、39Hカマド2片接合(208-3)	3
			不明	1号溝2片	2
	素文	碁114号-33 碁114号-34 碁114号-35 (208)(209)	桶巻作	碁114-2号1片	1
			一枚作	碁113号10片、1号溝3片、碁114号1片	14
			不明	54H覆土1片、16号溝1片、碁113号2片	4
	格子	碁113号-61 (209)	桶巻作	なし	
			一枚作	8号住周辺7片で1個体、碁113号1片	8
丸瓦	織印	1号溝-218 (209)		1号溝2片	2
	素文	54H-14 54H-15 (208)		54号H15片が2個体となる。碁116号2片、22Hカマド1片、54Hカマド1片、1号溝2片、34H覆土1片、54H覆土2片、34Hカマド1片	25
不明				8号溝1片	1
軒丸					1
計					63

出土の軒丸瓦の特徴は次のとおりである。

- 1 周縁弧から推定直径約20cmとなる。
- 2 瓦当面に残る2単位から弁数を復元すると5弁となる。
- 3 弁は3重郭の単弁である。
- 4 背面に布の圧痕をとどめる。

このうち2～4の条件を満たすのは上野国分寺の統一意匠に限られる。このため上野国分寺の15種以上の同一型式、異范型のうちのいずれかに該当するであろう。この中で推定直径20cmは、既出の上野国分寺瓦の中では最も大きい級であり、その完存個体の拓影図をもって、欠失部分の補いをはかった。古代上野瓦は個性的な意匠を持っているため、他系瓦である可能性は極めて低いのである。

(大江)

注(1) 佐藤真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌 第58巻2号』1972

(2) 住谷輝はか「上野国分寺古瓦紋様集」1996 34図による。

4 緑釉陶器、墨書・刻書土器、鉄製品、丸柄について

遺跡内より多くの緑釉陶器、墨書・刻書土器・鉄製品・金銅製及び石製の丸柄が出土している。それらは以下に図及び観察表をのせた、ここでは概要について簡単に述べておく。

緑釉陶器

1～4号溝を中心に総数164片の緑釉陶器が出土した。当遺跡は集落遺跡と考えられているため、この種の遺跡では県内最大の出土量を持つものと思われる。しかしそのほとんどが破片であり、実測できたのは21個体のみであった。その種類は施・皿・段皿、香炉を含み施の口辺部が最も多く出土した。素地は還元焰焼成焼締で須恵器に非常に近いものや灰白色を帯びてやや軟質なものの、褐色を呈しているもの等々があり、釉の色調は緑色をすべて基調としているが、やや褐色を帯びるもの、黒ずんでいるもの、黒光りしているもの等々があり、産地が同一でないことを示している。産地については灰釉陶器と同時に愛知県陶磁資料館学芸員浅田員由氏、仲野泰裕氏に鑑定していただいた結果、一部に猿投の藤岡系を含んでいるが、総じて猿投系のものが少ないのが特色であるとのことである。

墨書・刻書土器

大量の灰釉陶器、緑釉陶器、金銅製や石製の丸柄等を出土しているにもかかわらず当遺跡では墨書・刻書土器の出土が少ない。墨書土器は1号溝で2個、56号住で1個、表探で1個出土しており、刻書土器は45号住、1号溝、耕116号からそれぞれ1個出土している。そこに書かれている文字で判読できたのは5個であり、その中の3個は不確実な面を残している。判読できた文字が少なく、文字の中で遺跡の性格をとらえられそうなものは認められないため、墨書・刻書土器から得られる情報は少なかった。

鉄製品

住居址や溝等から18個の鉄製品が出土した。その中で用途及び名称のわかるものは半数以下であり、それらも残りが悪い、1は6号住床面より出土した刀子の茎及び刀身の一部である。茎の長さが刃部より長く、茎も長いので刀子としてはかなり大きなもので長く使用されたため身幅が狭くなったように思われる。10は海老鉾の一部である。県内からの出土例はほとんどない。他の部分や鏝の発見に努めたが、検出できなかった。

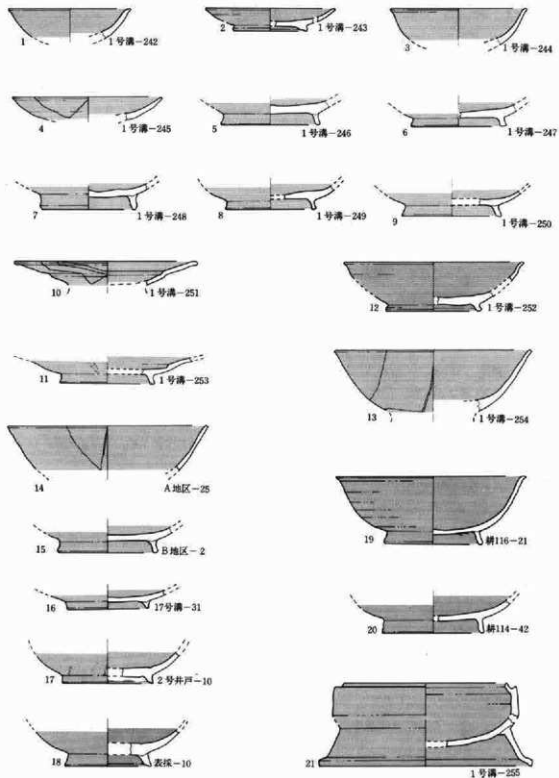
丸柄

金銅製丸柄が45号住から、石製丸柄が47号住と耕114号から出土している。いずれも出土した住居は共伴遺物により10世紀以降に属すると考えられている。金銅製丸柄を含む「鈿帯は革帯、腰帯に金属製の鈿を付したもので、その使用年代は707年から796年、そして807年から810年に限定される⁽¹⁾ことがわかる。」ため、少なくともこの年代に使用されたものではないことがわかる。

(1) 阿部義平「鈿帯と官位制について」『東北考古学の諸問題』1976

(中沢)

第5章 調査成果の整理と考察

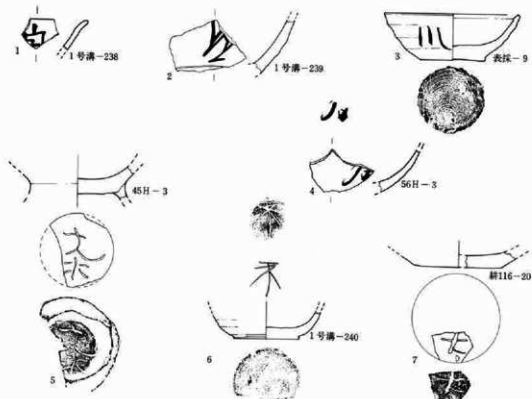


第210図 緑釉陶器実測図

緑釉陶器観察表

番号	出土地及び番号	器形	寸器高・口径・法直径	器高・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存
緑釉-1	1号溝-242	甕	— (9.8) —	浅く、口径の小さな甕	①素地灰黒色釉緑色②焼締③口縁片
緑釉-2	1号溝-243	皿	(1.8) (10.4) (6)	浅い皿、ていねいに高台を貼付	①素地灰黒色釉緑色②焼締③口縁片
緑釉-3	1号溝-244	甕	— (11) —	外側の釉は薄く、素地に近い。	①素地灰黒色釉緑色②焼締③口縁片
緑釉-4	1号溝-245	皿	— (12.2) —	口唇部の釉が厚くなっている。	①素地灰白色釉緑色②焼締③口縁片
緑釉-5	1号溝-246	甕	— — (8)	高台内側を含め全面緑釉	①素地灰白色釉緑色②焼締③底部片
緑釉-6	1号溝-247	甕	— — (7.7)	同上、高台端部が鋭い。	①素地灰黒色釉緑色②焼締③底部片
緑釉-7	1号溝-248	甕	— — (7.8)	内側底部トチン痕あり。	①素地灰白色釉緑色②軟質③底部片
緑釉-8	1号溝-249	甕	— — (7.3)	釉の一部が銀化している。	①素地灰黒色釉緑色②焼締③底部片
緑釉-9	1号溝-250	甕	— — (8)	釉の一部が黄色を帯びている。	①素地灰黒色釉緑色②焼締③底部片
緑釉-10	1号溝-251	段皿	— (14) —	明瞭でなく弱々しい段を持つ。	①素地灰白色釉緑色②軟質③口縁片
緑釉-11	1号溝-253	段皿	— — (7.6)	桜花文の段皿である。	①素地灰黒色釉緑色②焼締③底部片
緑釉-12	1号溝-252	甕	(3.9) (14.4) (7.7)	濃緑色の粒が斑点状に入る。	①素地灰白色釉緑色③底部片
緑釉-13	1号溝-254	甕	— (16) —	光沢の強い甕である。	①素地灰色釉緑色③口縁~体部片
緑釉-14	A地区-25	甕	— (16) —	濃緑色の粒が斑点状に入る。	①素地灰白色釉緑色②軟質③口縁片
緑釉-15	B地区-2	甕	— — (8)	内側底部にトチン痕あり。	①素地灰白色釉緑色②軟質③底部片
緑釉-16	17号溝-31	皿	— — (6.4)	15に同じ	①素地灰白色釉緑色②軟質③底部片
緑釉-17	2号井戸-10	甕	— — 7.3	底部が厚い、鋭い端部の高台付	①素地灰黒色②焼締③底部片
緑釉-18	表採-10	甕	— — (7)	桜花文を内側底部に持つ。	①素地灰白色釉緑色②焼締
緑釉-19	緑116-21 表34 グレット	甕	5.4 15.2 7.9	内側底部にトチン痕認められず	①素地灰黒色釉緑色②焼締③片
緑釉-20	緑114-42	甕	— — (8.2)	光沢の強い甕である。	①素地灰黒色釉緑色②焼締③片
緑釉-21	1号溝-255	香伊	(6.6) (12.8) (17)	高い高台を持つ合子	①素地灰白色釉緑色②軟質

第5章 調査成果の整理と考察

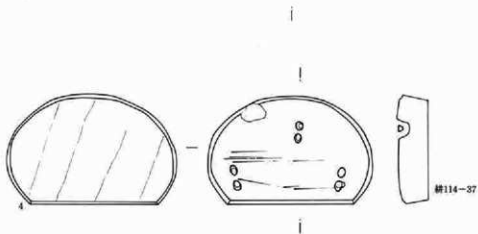
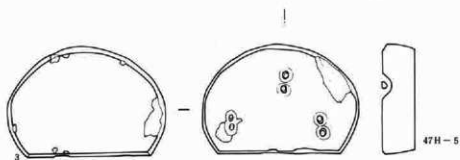
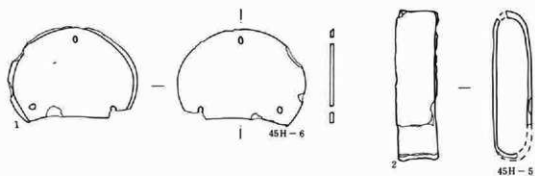


第211図 墨書・刻書実測図

墨書・刻書土器観察表

番号	遺構名	器形	文字	墨書・刻書位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
1	1号溝-238	須恵器	字?	口辺部外面墨書	口唇部が強く外反する。内外面ともロクロ目が残る。	①灰白色②還元③口辺部の一部④密
2	1号溝-239	鳳一土師質	不明	体部外面墨書	高台は欠けているが、接合痕が残る。体部にロクロ目残る。	①灰白色②還元③体部下半の一部④1~2mmの砂粒含む。
3	表採-9	鳳一土師器	川	体部外面墨書	底部右回転糸切痕、底部が厚く体部下端との間に段を持つ。	①灰褐色②酸化③完形④密
4	56H-3	土師質	不明	体部外面墨書	体部内外面ロクロ目、口縁へ向かい器内が薄くなっている。	①灰褐色②酸化③体部下半の一部④密
5	45H-3	鳳一土師質	亦?	底部外面刻書	底部に高台貼付後、高台部内側回転ナデ文字を刻入している。	①灰褐色②酸化③高台部④密
6	1号溝-240	鳳一土師質	禾	内面底部刻書	底部右回転糸切痕、底部が厚い。内面底部に文字を刻入している。	①灰褐色②酸化③底部④、体部下半④密
7	耕116-20	鳳一土師質	太?	底部外面刻書	厚い底部をていねいに整形した後に、文字を刻入している。	①灰褐色②酸化③底部の一部のみ④密

第2節 遺物について



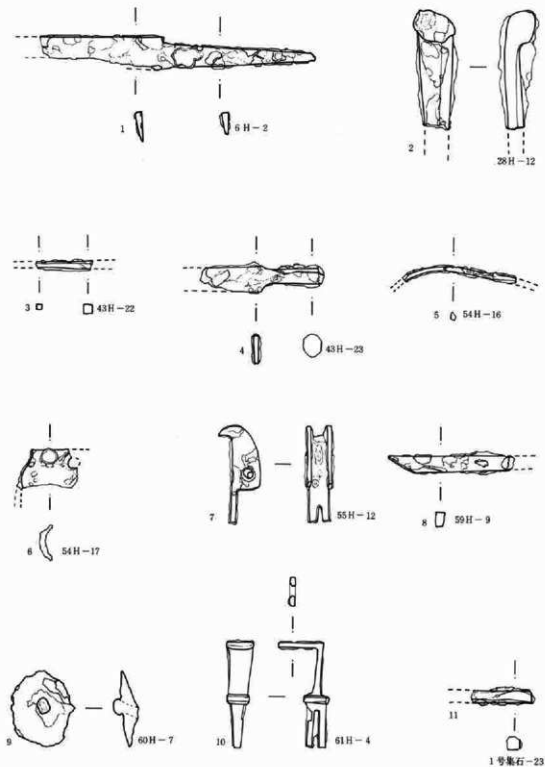
第212図 丸柄・その他実測図

第5章 調査成果の整理と考察

丸柄・その他観察表

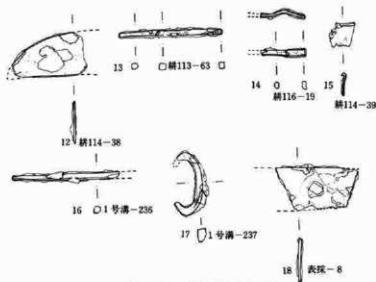
住居及び番号	遺構名	器形	寸法(cm) 厚さ・長さ・直径	器形・成形・整形の特徴	①色調②残存③備考
1	45H-6	金銅製丸柄	0.1 3.5 2.5	1mmのはば一定の厚さを持つ下辺は直縁に近いがまがっている。下辺以外は円形を呈している。その部分の端部は表面から斜に縁取りされている。	①表面から裏面の端部周辺まで金メッキ。裏面及び素地は銅の合金と思われる。②右下部の一部を欠くがほぼ完全に残存③3ヶ所に丸い穴があけられている。
2	46H-5	サヤ金具	0.1 (3.9) 1	金体が風化している。そのため本来は銅であったものが塩基性炭酸銅に変化してしまっている。弱くなり3ヶ体に割れている。横刀のサヤ金具と思われるが、くわしくは不明。	①素地は淡緑色、表面は黒色②ほぼ完全
3	47H-5	石製丸柄	9 4.2 2.9	9mmのはば一定の厚さを持つ。表面はいいいに磨かれており水平で強い光沢を持つ。側面も磨かれているが、磨き痕を残す裏面は光沢を持たない。底面より表面が約1mm幅大きい。裏面の3ヶ所に不規則であるがかがり穴を持つ。	①黒色②ほぼ完形
4	綱114-37	石製丸柄	8 4.5 2.8	8mmのはば一定の厚さを持つ。表面はいいいに磨かれているが、上の5ほどの光沢を持たない。石質の違いによるものと思われる。側面は上の5よりいいいに磨かれている。裏面は弱いが少し光沢を持つ。裏面の3ヶ所に不規則であるがかがり穴を持つ。	①黒色②ほぼ完形
5	綱114-36	金銅製目貫	0.1 1.6 —	刀の目釘の両端にとりつける目貫と思われる。菊花を模しており、実にていいいな作である。表面は金メッキがされている。裏面の中央は目釘に接合した時の金属片が残存している。	①表面に金メッキ、裏面は塩基性炭酸銅（緑青）が一部発生している②完形
6	1号溝-219	青銅製水肌	— — —	青銅製水肌の制下半部～高台部と思われる。他の青銅製品と異なり、素地がしっかりしており、赤味を帯びている。高台部内側、底面接合点に底面接合用の溝が一周している。外側から底面を溶着したのと思われる。	①赤味を帯びた黒褐色②制下半部～高台部

第2節 遺物について



第213図 鉄製品実測図

第5章 調査成果の整理と考察



第214図 鉄製品実測図 (2)

鉄製品観察表

No	遺構及番号	出土位置	製品名	現存計測数値(cm)			遺存状態	備考
				長さ	幅	厚さ		
1	6H-2		刀子	4.5	1.8	0.4	鉄製刀子の茎及び、刀身の一部である。全面に錆ているが、残存良好。	茎の長さが刀部より長く、多く使用されたらしい。
2	28H-12		和釘	0.4	2.0	1.5	和釘の頭部と思われる部分が残存している。錆は比較的少ない。	太く大きなものとなりそうである。
3	43H-22	フク土		3.0	0.6	0.5	鉄屑の一部と思われる。小さな破片であり、断面四角形を呈している。	厚さが両端では異なっている。
4	43H-23	フク土	鉄 鋸	6.6	1.7	0.5	有柄の尖根形鉄鋸である。鋸身が完全に残存している。	浜区から茎にかけてなくなっている。
5	54H-16	フク土		6.0	0.4	0.3	名称及び用途不明、青銅製品と思われる。錆のつきかたが鉄製品と異なる。	細長く、ゆるやかな曲線を描いている。
6	54H-17			3.1	2.0	0.3	名称及び用途不明	厚さはほぼ一定している。
7	55H-12	製鉄関連遺構		5.2	1.6	0.3	残存部の残りは非常に良好であり、錆はひどくない。用途や名称について調べてみたが確認できなかった。	海老鮎に関連したものと考えたが不明である。
8	59H-9			6.8	1.0	0.5	名称及び用途不明、錆がひどい。断面長方形を呈している。	太さが一定しているため刃物の可能性は薄い。
9	60H-7			4.0	3.4	1.3	名称及び用途不明、中央部に鋸が付き、その部分が最も厚くなっている。錆がひどくなっている。	鋸に穴は認められない。鋸の反対側に棒状ものが付着した痕跡はない。

第2節 遺物について

No.	遺構及番号	出土位置	製品名	現存計測数値(cm)			遺存状態	備考
				長さ	幅	厚さ		
10	61H-4		海老鉋	5.4	1.5	0.4	海老鉋の一部である。界内からの出土例はほとんどない。遺存状態は良好である。	他の部分や鍵の発見に努めたが、検出できなかった。
11	1号集石-23			3.4	0.9	0.8	名称及び用途不明、鉄屑の一部になる可能性もある。	断面四角形を呈している。
12	竊114-38	97-15 グリッド	鎌の先端	6.0	3.4	0.3	鎌の先端部分と思われる。刃部は直線で、穂部は曲線を持ち、刃部に至る。	遺存状態が比較的良好なため、片刃の状況が確認できる。
13	竊113-63	竊113号	鉄屑?	8.3	0.6	0.5	鉄屑の短棒部分の一部と思われる。全体が錆びているが、四角い本体部分は明確に確認できる。	大きさが一定していない。表面に木質の一部が付着している。
14	竊116-19	中央部		3.7	0.7	0.3	名称及び用途不明のため、これがどの部分に属するのかわからない。	中央部分が彎曲している。幅、厚さ一定していない。
15	竊114-39	9号溝		1.8	2.1	0.2	名称及び用途不明のため、これがどの部分に属するのかわからない。	端部が厚くなり折り曲げられている。
16	1号溝-236	準特1号 102-7 グリッド	鉄 旗	8.6	0.7	0.5	鉄屑の茎、穂、尾穂の部分と思われる。全体に錆がはげしく、残りが悪い。	穂の部分が高く、茎の部分が細く長い。尾穂の部分が断面四角形を呈する。
17	1号溝-237	準特1号 104-7 グリッド		5.2	2.8	0.7	楕円形を呈する環の一部と思われる。用途及び名称不明である。	用途及び名称不明
18	表探-8		鎌	6.8	3.6	0.3	残存部が少ないが、鎌刃部の一部と思われる。全面に錆が出ており、腐蝕のひどさを物語っている。	刃先が細く、穂の部分がかたくなっている。

5 出土貨幣について

当遺跡では総数71枚の貨幣が出土している、それらの多くは遺構に伴っており、貨幣出土の10号土壇、墓壇、9号溝についてはすでに説明済である。出土貨幣についてはここにすべて集めて説明、図示した。そして貨幣と遺構との関連について考えていきたい。

10号土壇

耕113号に位置する遺構で、すべて中国銭のみ40枚出土した。遺構は東側を溝により切られていたが、西側は比較的良好に遺存し、深さ約20cmを持ち、壁上に小石を多く配し、遺構内に柱穴と思われる掘り込みが3か所確認された。貨幣は遺構内の北側覆土中に多く出土し、すべて中国銭であり、初鑄年代が唐の開元通宝(621)から北宋の祥符通宝(1010)～南宋の嘉定通宝(1220)年に至っている。40枚中30枚が北宋銭であり、最も新しい時代に属する貨幣から時代を推定するなら、この遺構は13世紀頃の可能性がある。界内においてこの時期の発掘例はほとんどなく、界外において類例をさがしたが見当らなかった。遺構の性格、目的を知ることができないため、遺構種名をつけられずに、とりあえず10号土壇として取り扱った。今後の類例の増加、研究の進展によって性格を追求していきたい。

墓壇

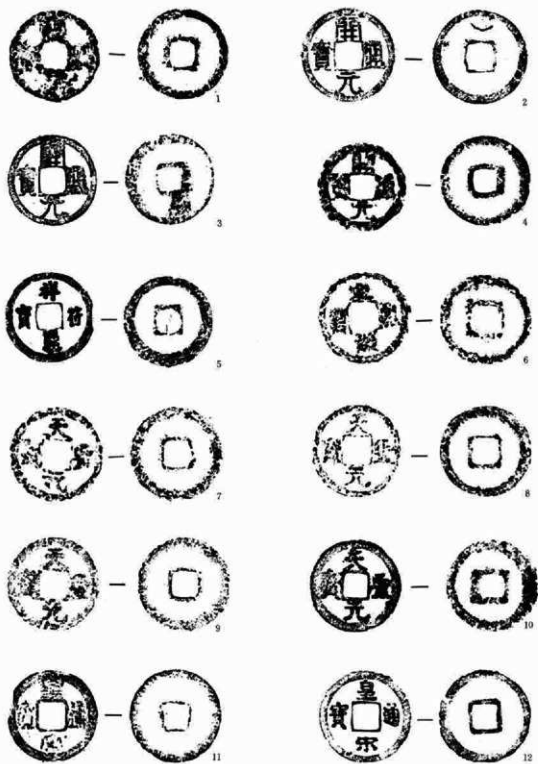
耕113号に位置する遺構で、すべて寛永通宝のみ12枚を出土した。遺構は南北2.32m、東西1.34m、深さ1.12mの長方形を呈しており、北側半分に頭蓋骨と太腿骨及び多くの骨粉が出土した。土壇中央部の底面から約20cmほど浮いた状態で2枚の菊皿とともに12枚の貨幣が麻布につつまれた状態で出土した。(図版83)貨幣研究家の梅沢信夫氏に検討していただいた結果、いずれの貨幣も使用による磨減があまり認められないこと、約700年間にわたって国内で流通していた中国銭が、この中に1枚も含まれていないことと、寛文10年(1670)に中国銭の通用が禁止されたこととの関連とが注目されること等の点が指摘された。あまり流通していない段階での埋没の考えられる12枚の貨幣中で最も新しい8枚の寛文8年(1668)に鑄造された寛永通宝から土壇の埋没年代をほぼ17世紀末という年代観が与えられ、同時に埋没していた菊皿にもこの年代観が与えられる。

9号溝

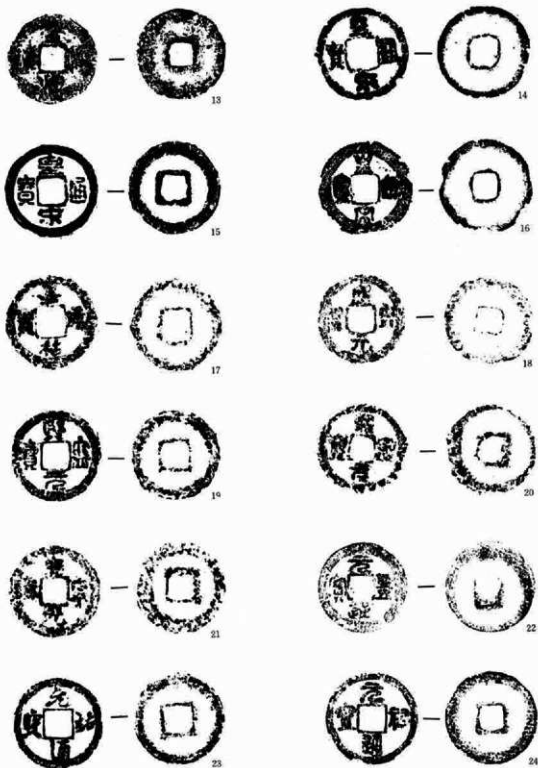
耕114-1号に位置する遺構で、北宋銭の元豊通宝、元祐通宝を2枚出土している。東西66m以上の長さを持つ溝であり、他に出土遺物がない。貨幣からみて平安時代には溝が存在していた可能性を示している。

他に耕113号より多くの貨幣が出土している。北宋銭、南宋銭、明銭、寛永通宝等である。その中で最も数の多いものは北宋銭であった。このように遺跡内からは多くの貨幣が出土し、確実に遺構に伴うものを選び出し、出土状況を検討していくことにより多くの成果を得ることができた。

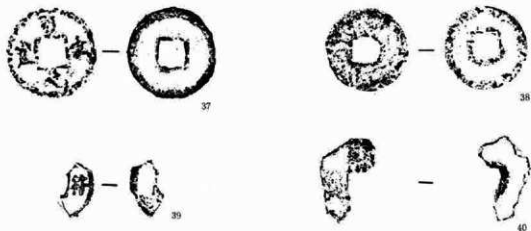
(中沢)



第215圖 10号土壇出土貨幣 (1)



第216図 10号土坑出土貨幣 (2)



第218図 10号土坑出土貨幣 (4)

番号	銭名	鑄造年号(西暦)	鑄造地名	備考
1	開元通宝	武徳4年(621)	唐	表面「爪」
2	"	"	"	
3	"	"	"	
4	"	"	"	
5	祥符通宝	大中祥符2年(1010)	北宋	
6	天聖元宝	天聖元年(1023)	"	
7	"	"	"	
8	"	"	"	
9	"	"	"	
10	"	"	"	
11	皇宋通宝	宝元2年(1039)	"	
12	"	"	"	
13	"	"	"	
14	"	"	"	
15	"	"	"	
16	"	"	"	
17	嘉祐通宝	嘉祐2年(1057)	"	
18	熙寧元宝	熙寧元年(1068)	"	
19	"	"	"	
20	"	"	"	
21	"	"	"	
22	元豊通宝	元豊元年(1078)	"	
23	元祐通宝	元祐8年(1093)	"	
24	"	"	"	
25	"	"	"	
26	"	"	"	

第1表 10号土坑出土貨幣観察表 (1)

番号	銭名	鑄造年号(西暦)	鑄造地名	備考
27	元祐通宝	元祐8年(1093)	北宋	
28	聖宋元宝	建中靖国元年(1101)	"	
29	"	"	"	
30	"	"	"	
31	"	"	"	
32	大觀通宝	大觀元年(1107)	"	
33	政和通宝	政和元年(1111)	"	
34	"	"	"	
35	嘉定通宝	嘉定12年(1219)	南宋	裏面「十二」
36	"	嘉定13年(1220)	"	裏面「十三」
37	不明		中国	
38	"		"	
39	"		中国	
40	"		"	

第2表 10号土坑出土貨幣観察表(2)

第1・2表

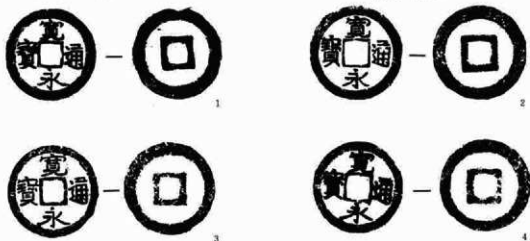
貨幣はすべて中国銭であり、中でも唐銭、北宋銭、南宋銭に限られている。海外銭輸入末期に大量、渡来した明銭が含まれていないことは、この土坑の時代を示しているのであろうか。

貨幣の状態は、腐食、破損の甚しいものが多い。

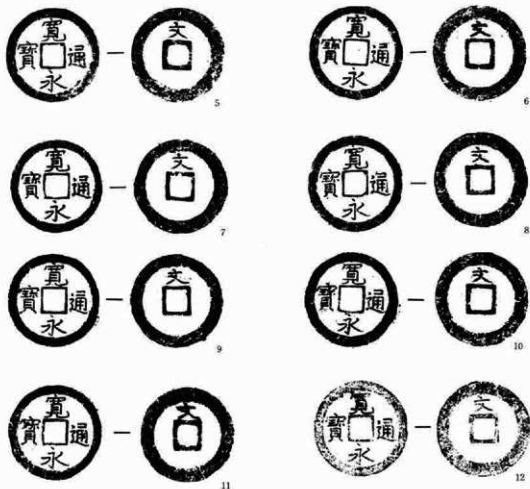
出土貨幣を時代により分類すれば次のとおりである。

- 唐 銭 4 枚
- 北宋銭 30枚
- 南宋銭 2枚
- 不 明 4枚

(梅沢 信夫)



第219図 墓坑出土貨幣(1)



第220図 墓址出土貨幣(2)

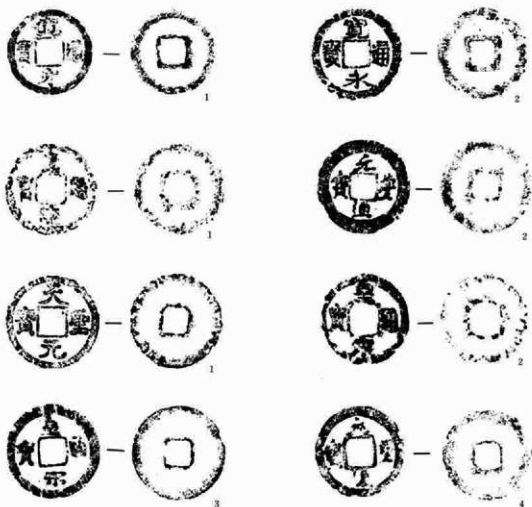
番号	銭名	鑄造年号(西暦)	鑄造地名	備考
1	寛永通宝	寛永16年(1639)	駿河 井之宮	表面「文」
2	〃	承応2年(1653)	京都 建仁寺	
3	〃	明暦2年(1656)	駿河 菅谷	
4	〃	〃	江戸 鳥越	
5	〃	寛文8年(1668)	江戸 亀戸	
6	〃	〃	〃	
7	〃	〃	〃	
8	〃	〃	〃	
9	〃	〃	〃	
10	〃	〃	〃	
11	〃	〃	〃	
12	〃	〃	〃	

第3表 墓址出土貨幣観察表

第3表

寛永通宝12枚が麻布に包まれた状態で重なって出土した。出土貨幣は、寛永16年（1639）から寛文8年（1668）までの29年間に造られたものであり、いずれも流通による磨滅があまり認められない。寛文10年（1670）に、従来、通貨として約700年間にわたって使用された中国銭を主とする海外渡来銭をはじめ、寛永通宝銭以外の一切の銭貨の通用が禁止されている。

(梅沢 信夫)

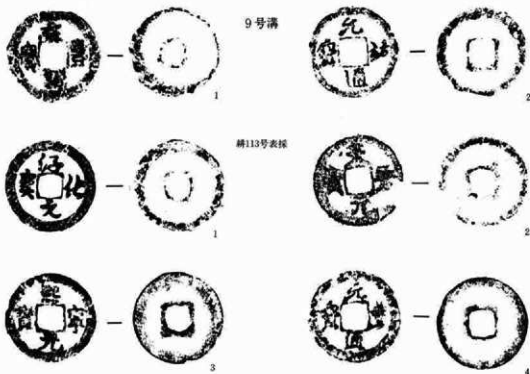


第221図 耕113号地区内出土貨幣(1)

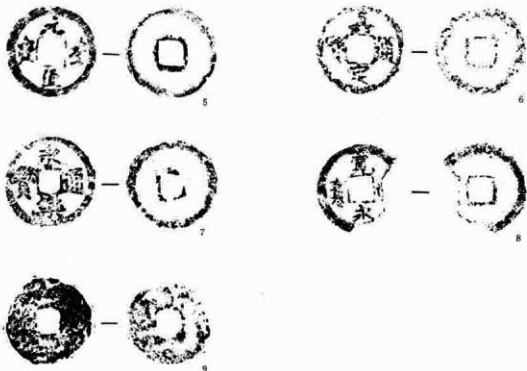
第5章 調査成果の整理と考察

番号	銭名	鑄造年号(西暦)	鑄造地名	備考
1 2	寛永通宝 "	元禄10年(1697) 承応2年(1653)	江戸 亀戸 京都 建仁寺	80-15グリット以北 "
1 2	皇宋通宝 元豊通宝	宝元2年(1039) 元豊元年(1078)	北宋 "	中央部 "
1 2 3 4	天聖元宝 皇宋通宝 " 元豊通宝	天聖元年(1023) 宝元2年(1039) " 元豊元年(1078)	" " " "	75-35グリット以南 " " " "

第4表 耕113号地区内出土貨幣観察表(2)



第222図 9号溝・耕113号出土貨幣(1)



第223図 耕113号出土貨幣

番号	銭名	鑄造年号(西暦)	鑄造地名	備考
1	元豊通宝	元豊元年(1078)	北宋	
2	元祐通宝	元祐8年(1093)	"	

第5表 9号溝出土貨幣

番号	銭名	鑄造年号(西暦)	鑄造地名	備考
1	淳化元宝	淳化元年(990)	北宋	
2	天聖元宝	天聖元年(1023)	"	
3	熙寧元宝	熙寧元年(1068)	"	
4	元豊通宝	元豊元年(1078)	"	
5	"	"	"	
6	嘉定通宝	嘉定元年(1208)	南宋	
7	永楽通宝	永楽6年(1408)	明	
8	寛永通宝	享保11年(1726)	江戸深川十万坪	
9	不			

第6表 耕113号出土貨幣観察表

6 製鉄関連遺構と遺物

本遺跡から鉄の生産遺構が2個所に検出され、散在的に炉体、羽口、鉄滓が出土している。遺構は、第55住居址内で検出された平安時代の遺構と、もう一つは耕116-2号調査区の83-34グリットから検出された遺構である。

出土遺物(第224図)

羽口、耕114号-32、耕114-2号調査区の91-93-14グリットから出土した。この羽口片は尻部から口部先端まで9.2cmの長さの単位を残している。羽口自体はスサを含んでいる。口部には高熱による羽口自体の溶解とガラス分の強い滓物の付着が生じている。外面の中ほどには1.8cmの還元気味の灰色をおびる部分がめぐり、尻部側約4.5cmは灰褐色で2次的な作用の少ない部分がある。

羽口自体にスサを入れることは耐火性を考慮した結果と考えられ、羽口自体に使用された粘土も嵩があり軽く、焼締りの程度は甘い。羽口外面の色調の変化で、還元部分はおそらく壁体に差し込まれた壁体部分を示すと考えられ、尻側の灰褐色の二次的な作用の少ないと考えられる部分は吹子の口に差し込まれた部分と推測される。(第224図1)

羽口、55H10、55号住居跡内製鉄関連遺構の上方から出土した羽口であり、遺構を伴っている。羽口は尻部を欠損しているが、遺存状態から欠損部はそれほど延びていなかったと考えられる。口部には前例と同じく滓物の付着があり、それに接する側部には還元気味の灰色をおびる部分が最大巾3cmで斜、三角形の斑文を呈して残り、また一方の側部にも斜に還元部分が尻側まで達している。その一部に鉄滓の付着がある。(第224図2)

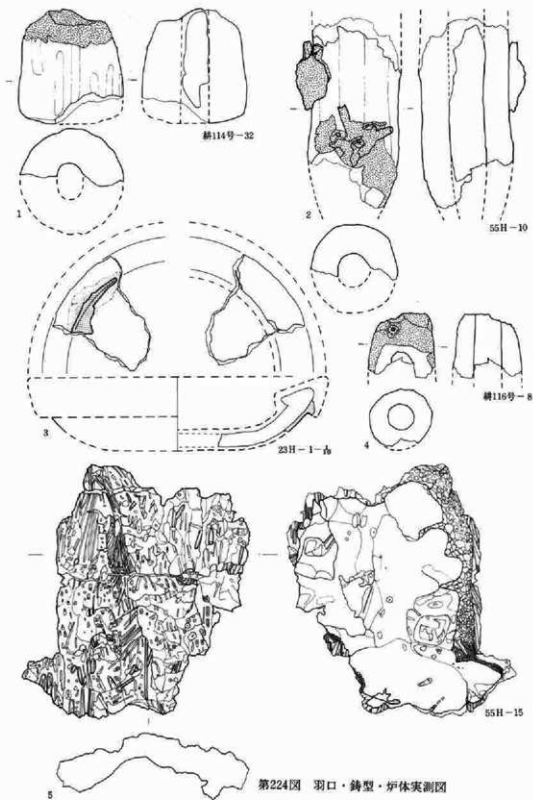
羽口自体はスサを混え、粘土は嵩があり軽く、焼締り程度は甘い。羽口側面の色調で還元気味の部分は壁体に接した部分と考えられ、斜三角形部分の斑文も、おそらく側壁体上方を斜に差し込まれた痕跡と考えられる。また一方の側部にある還元部分は、羽口を据えるためにあてがった粘土の痕跡と考えられる。さらに尻側には二次的な作用の少ない灰褐色の部分があり、吹子に接する部分と考えられる。このことを類推すると羽口は側壁上方に斜に設けられ吹子の取り付けにはほぼ平らな状態で結合されていたと考えられる。

羽口、耕116号-8、羽口の先端部の遺存である。羽口の口部の状況は前例とほぼ同様である。残存部分は灰色を呈し、還元気味となる。(第224図4)

羽口自体はスサを混え、粘土は嵩があり軽く、焼締りの程度は甘い。

トリベ・鑄型か、耕144-2号、23号住の覆土から出土した。23号住の覆土から出土した金属生産関連の遺物はこれのみである。円形をなすと考えられる器物の小片である。断面形は浅い盤状で口縁部が三角縁をなしている。素材は芯側でスサを多く含む粘土が使用され、外面の一部に細砂を含む良土被覆粘土(第224図トーン)がほどこされている。色調は良土被覆が還元気味の灰色を呈し、芯材は赤褐色に酸化している。なお滓物の付着はない。(第224図3)

その機能であるが、滓物の付着はなくとも、芯材にスサを混えたその状態は羽口と共通すること、高熱の作用により芯材が赤色化していることから、鉄生産に関連すると考え、さらに被覆



材に良土が貼られていることがその機能を考えるための素材となろう。まず被覆材の良土であるが、耐火用か鑄型用の化粧材とした場合には、雄型と考えられ、浅い鉢形の器種と考えられる。しかし雄型とした時には、砂型がより簡便であることと、その内面にも剥落があり、良土が貼れていたと推定されるため鑄型とするには若干疑問が生じるが、この形態をもとに他の機能を考えるならば、鑄鉄や溶解金属を扱うトリベ、あるいは金属溶解させるための坩堝などがあり一般に深鍋の形態が多いため、鑄型の可能性が高いであろう。

炉体、55H-15、55号住居址内の製鉄関連遺構第114図1層から出土している。炉体はこのほか整理用平箱に一箱分出土している。横断面形は丸みをおびており、スサ入壁体部分とガラス質の滓物からできている。スサは水平面に対し平行に入り、他の炉体も同様であった。このスサは粘土そのものに混入させたものではなく粘土を巻きながら、スサを合せ込んだものと考えられる。

遺 構

55号住居址内製鉄関連遺構（第114図）、55号住居址の立ち上り北辺に製鉄関連遺構がある。形態は長楕円形を呈し、掘り方の一部が深い隅丸長方形となる。縦断面では崩壊され火床がレンズ状地横（注記No.2）を呈し、その上面に焼土、鉄滓の多い注記No.1が堆積している。この中に第224図2に掲げた羽口と炉体が出土している。灰層および木炭層の注記No.3、4は北側平面に多く見られ、南側、および住居跡立ち上り以南に住居址床面より約10cm浮いて鉄滓が約2mの広がりをもって散在していた。

遺構の種を考えるうえの問題点は二点あり、一点目は住居跡床面よりもわずかながら浮いて鉄滓面が存在したことで、55号住居跡とこの遺構とがどの程度関連するかである。推考すれば、55号竈穴住居址は生活機能しうる形態にありながら高温を発する作業場が近接して、しかも、鉄滓面南端とカマドとは2mほどしか離れていないため、住居址とこの遺構とが同時に存在したとは考えがたいので、竈穴住居が廃棄され、完全埋没しない段階にその立ち上がりを生かし、この遺構が構築されたと考えられる。二点目は出土遺物中に第224図に示したとおり炉体の出土がある。炉体は約60cmの直径を示す弧を持ち、ほか5～6片の大形壁体片も同様の曲率を示す。このことは遺構の幅が約70cmあることと無関係でなく、炉体自体がこの遺構上で炉壁を形成していた可能性が高い。

このように類推すると、埋没過程にある55住居内の立ち上がりを利用し、高所に炉体があり、鉄滓の散布位置と木炭粒の存在から、鉄滓を処置する前庭の作業場が住居跡内に、背後に木炭等を供給した作業場が考えられる。要するに製鉄炉である。

この製鉄炉はタタラ製鉄であれば鋳が得られるはずであるが鉄の可能性も考えなければならず、現状では判断しがたい、ただ出土鉄滓の中にガラス質の強いものが含まれ、平安時代前期の製鉄遺構出土の鉄滓と異なるため炉内滓物の処理法か、鉄溶解法が平安時代前期のそれと若干異なることが考えられる。

83-34製鉄関連遺構（第169図）83-34グリット内に検出された鉄生産遺構である。この遺構

は、前例と同様に遺構そのものが良好でなく、崩壊後の状態で検出された。掘り方は南下りの土城状に掘られ、その上方に注記No.2の焼土面が存在する。焼土の焼締りは、前例に近く、さらに立地の状態を考えれば、前例のような製鉄炉であった可能性が若干もたれる。(大江)

(4) 中世の遺物

1 中世前半の土器群について

① 2号集石遺構出土遺物

2号集石は人頭大から挙大の川原石を陥円形状の土城内に約30cm×50cmの規模をもって集石された遺構である。集石内には多量の焼土と骨片、骨粉を混えていた。このことから本遺構は火葬墓ないしは火葬に関連する遺構と推測される。集石内下方には直立された石組があり、納骨区画存在の可能性も認められた。集石中の出土遺物には骨蔵器と考えられる陶器壺、中世土師質土器壺をはじめとし、中世土師質土器の高台皿、皿などが出土している。

この遺構規模は墓地とした場合、そう大規模ではないので、機能が中世全般に及ぶとは考えがたく、散在出土した遺物群に対し、ある程度の年代的なまとまりがあると考えられる。また遺物群から、年代観を逆推した場合もまとまりがあると考えられ、次にその年代的なまとまり、つまり一括性について検討し、合せて遺構年代の一助としたい。

まず225図は2号集石から出土し、実測可能な個体を図示したが第225図2号集石8の羽蓋片は器形から平安時代と考えられるため除外しておく。

中世土師質土器皿(第225図2号集石1~4)は4点ある。近年群馬県における土師質土器皿の変遷観が得られており、その中でA、B、C、Dからなる4系列の器種の存在が指摘されている。この4系列のうち、内湾する体部、口径に比べ小さい底径など特徴とするC系は、第225図2号集石1・4に認められ、体部の内湾傾向から14世紀代と考えられる。第225図2号集石3は短い体部、底・口径ともに大きいことからA系と考えられ、14世紀を前後する頃に置かれる。第225図2号集石2はA系の盛期種にはなりえないものの、内湾傾向の長い体部から14世紀代の製作と考えられる。

中世土師質土器碗(第225図2号集石5)は関東地方で鎌倉市光明寺裏遺跡、千葉県西屋敷遺跡など、小數例にとどまり、県内では類例が知られておらず、第225図2号集石5が初見となる。また貼付高台の断面形は三角形を呈し、東海地方の山茶碗のそれに相通するのであろうか。この例は、県内の中世後半遺構の調査例は多いにもかかわらず、類例を見ないことからすれば、中世前半に所産した可能性は高い。しかし本稿は一括性把握を意図しているので、この例は保留しておきたい。

中世土師質土器鉢(第225図2号集石6)は関東地方における中世遺構、遺物を多出した約50遺跡例を概観した時、鉢類の存在は皆無に等しく、かろうじて東京都多摩ニュータウンNo.52遺

跡の12～13世紀と推定された中国製白磁を伴う建物遺構からやや近似した鉢が出土している。特に関東地方の場合、中世後半の遺物例は豊富であり、土師質土器の器種揃もほぼ明らかとなっているが、前半代は依然として不明確さを残している。このため、第225図2号集石6は中世前半に存在した可能性は高いものの、ここでいう一括性には含めず保留しておきたい。

中世土師質土器壺(第225図2号集石7)は現在までに県内、隣接県にあっても類例がなく、壺類の多くが渥美、常滑焼など搬入の焼締陶器の壺類か、あるいは群馬、埼玉県下に存在したと考えられる地方窯の軟質陶器製の壺類に依存していた。形態はこの地方で焼造された軟質陶器製の壺類の体部上半形状、外面のへら研磨などが共通し、軟質陶器壺の先駆的な器形をなすか、その影響下に生産された壺と考えられる。軟質陶器の生産の主体は14世紀であるが、この土師質土器壺の体部上半から口縁部にかけての撫肩の形状は軟質陶器壺の古い段階に共通する。したがってこの壺の年代的な位置は13世紀後半から14世紀代であると推定される。

陶器壺、甕(第225図2号集石9～11)いずれも粘土の組成は鉱物の粒子が荒く、やや砂質をおび、焼締があっても軟らかな器表に見える質感から渥美焼と判断される。渥美焼の関東地方の搬入傾向は中世前半に集中するとの既説どおり、群馬県においても主体が中世前半にあり、大形甕類がかろうじて中世後半に出土する傾向にある。このことをふまえれば、本遺構出土の渥美焼の年代的な位置も中世前半の13～14世紀にあると考えられる。

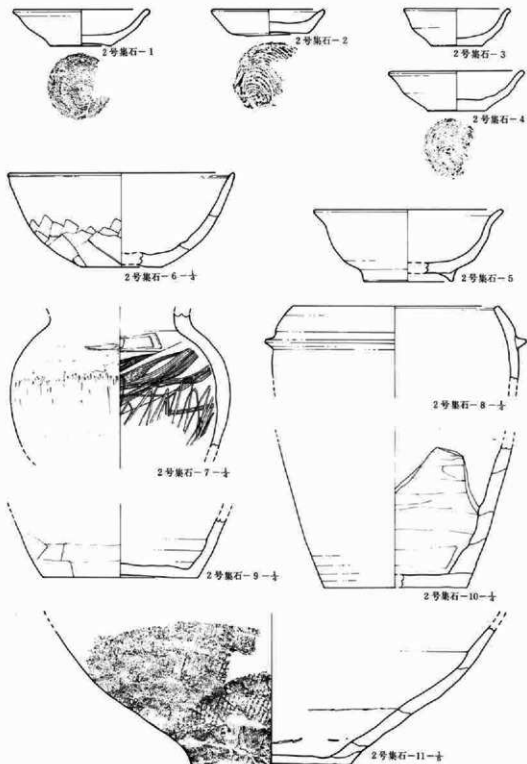
以上のとおり、2号集石中から出土した土器群に検討を加えた結果、第225図2号集石1～4、7、9～11について、ある程度のまとまりがあると見なされ、中世前半に置かれると考えられた。それに伴う、一括性も中世前半という広い巾の中に認められる一括性となろう。この一群が中世前半の様相をとどめているとすれば、この地域の中世前半に数少ない土器の様相をここに提示したことになろう。総括すれば中世前半に土師質土器は皿類に限定された生産ばかりでなく、壺、鉢、甕など小形器種の生産が示唆され、一方、搬入の陶器では渥美焼の出土があり、多用の反映として考えられた。

② 1号井戸址の出土遺物

1号井戸からは軟質陶器の鉢、緑釉陶器(第170図1・2)が覆土から出土しているが、ここでは緑釉陶器を除外し、鉢の製作年代を考え、遺構年代の推定に一助を加えたい。

軟質陶器製の鉢類は中世上野国における出土鉢類の主体を占め、本例が存在することも量的、供給圏の一端がおよんだものと解釈してよい。その生産の存続は現在のところ、13世紀後半から中世の終末まで系統的な変遷を捉えることが可能であるが13世紀前半の実態には不明確さを残している。この変遷観から第170図1の鉢の製作年代を考えたい。その骨子的な根拠となりえるものに「元応二年 庚申」(1320)と墨書された鉢が新田郡尾島町世良田、東照宮地内古墓群から出土しており、その鉢(第226図1)と第170図1とは、ほぼ同一量目値、酷似形態にあり、14世紀の前半頃の所産と考えることができる。

第2節 遺物について



第225図 2号集石遺構遺物実測図

第5章 調査成果の整理と考察

2号集石出土遺物観察表

遺構及び 墓 号	器 形	寸 法(cm) 器高・口径・底径	出土位置	器形・成形・整形の特徴	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
2号集 石-1	皿-土師質	2.9 10.9 4.8	フク土	外面回転横ナデ。内面回転横ナデ。底面 ロクロ左回転の糸切収あり。	①にふい粒②やや軟弱③片④砂を多量に含む⑤胎土は1・2・3・4とも共通する。
2号集 石-2	皿-土師質	2.1 (9.2) (5.5)	フク土	外面回転横ナデ。内面回転横ナデ。底面の糸切収不詳、調整痕あり。	①にふい粒②やや軟弱③片④砂を含む。
2号集 石-3	皿-土師質	2.9 (8.6) (4.0)	フク土	外面横ナデ。内面横ナデ。底面糸切収不詳。体部外面にロクロ目による後部あり。	①にふい粒②やや軟弱③片④砂を多量に含む。
2号集 石-4	皿-土師質	3.2(10.8) 4.6	フク土	外面横ナデ。内面横ナデ。底面糸切収不詳。	①にふい粒②やや軟弱③片④若干砂を含む。
2号集 石-5	碗-土師質	5.8(15.2) (7.2)	フク土	外面回転横ナデ。内面横ナデ。高台は貼付高台。	①にふい粒②やや軟弱③片④若干砂を含む。
2号集 石-6	鉢	9.8(24.4) (8.4)	フク土	外面体部上半はロクロによる横ナデ。下半へう削り。内面ロクロによる横ナデあり。底部欠損。	①明褐色②良③片④砂をわずかに含む。
2号集 石-7	壺	胴径-17.5	フク土	外面左右を先に上下を後にへラミガキ状の器面調整あり。紐作りか。	①橙②良③片④砂を含む。
2号集 石-8	羽釜	—(22.4) —	フク土	外面横ナデ。内面横ナデ。柄は貼付による。口縁部はわずかに丸みをもって作られる。	①明褐色②良③少片④砂を含む⑤平安遺物
2号集 石-9	壺	— —(11.5)	フク土	外面へう削りあり。内面紐作り後ロクロ整形されている。	①灰色②緻密③少片④精選されている。⑤胎土が砂質なため麗美地か。
2号集 石-10	壺	— — 10.1	フク土	外面ロクロ目あり。内面紐作り収。指頭圧痕あり。	①にふい褐色②緻密③底部片④良く精選されている。
2号集 石-11	壺	— — 21.2	フク土	外面指ナデの擦跡あり。内面紐作り痕と指頭圧痕あり。底面砂の付着あり。	①灰色②地硬あり。自然輪が及ぶ③底部片④良く精選されている⑤胎土が砂質なため麗美地か。

③ 2号井戸址の出土遺物

2号井戸址の覆土から出土した土器類の中で第170図2・4・9は平安時代の所産であり、第170図5・6は舶載磁器の項で触れるので、ここでは中世の第170図3・7・8の製作年代を考慮し遺構年代推定に一助を加えたい。

第170図3は中世土師質土器皿である。県内の変遷観からは14世紀代のA系列⁽¹¹⁾に属す。

第170図7・8は器表面の質感が砂質なため渥美焼と考えられる。第170図7は残存形態から筋壺と想定される。渥美焼の場合、生産の主体は中世前半にあり、しかも筋壺自体の生産の趨盛も中世前半にあるとされているため、第170図7は中世前半に製作された可能性が高く、また第170図8も渥美焼の量産段階を考慮すれば中世前半に所産したと考えられる。

以上の3点は、少なくとも中世前半の所産と考えられ、井戸址の廃棄の年代も、およそ、その頃のものとなろう。

2 中世後半の土器群について

1号土壇の覆土から3個体の内耳鍋が出土しているが、その様相、年代観については明瞭ではなく、ここで現況把握しておきたい。

内耳土器は東日本の広域に分布し、しかも北関東地方ではそれが日常什器として広範に使用されたとしてよいほど量的な出土があり、内耳土器の一部の器種に自生的な発展系列が捉えられ、土器文化上の重要な問題を提起しうる条件に置かれた地域である。

内耳土器の追求は近年、編年的な試験の提示や、現状の傾向を把握した成果があり、中世の土器文化上に特徴的な存在を占めるとして注視されるようになった。編年的な試験は中村倉司「内耳土器の編年とその問題」『土曜考古 創刊号』（土曜考古学研究会）1979が論じ、内耳土器にはほうろく型と土鍋形との二形態があり、その変遷過程に生じた形態差をⅠ～Ⅴ段階に区分し、基礎的な一案を掲げた。1981年に岩淵一夫「土師質土器及び内耳土器の変遷」『赤塚遺跡』（栃木県教育委員会）は土師質土器皿と内耳土器の組合せを検討し、Ⅰ～Ⅳ期までの変遷観を求めている。同年に安田龍太郎「中世土師器と内耳土器」『野州史学 第5号』（野州史学会）は各地から出土する土師質土器皿の時代的な法量変化に斉一性があるとし、その考え方を基に北関東地方の土師質土器皿の変遷観を求め、同時に内耳土器との組合せを論じ、啓発される視点を築いている。

これらの変遷観に群馬県例をあてはめた場合、共通性もあるが、矛盾点も指摘される。その矛盾点は地域差によるものか事実認識に差があるのか、判然としない。このため群馬県内の内耳土器の変遷をここで検討し、合せて障場遺跡出土の内耳土器の製作年代と出土遺構である1号土壇の年代を推定するための一助をなしたい。

内耳土器の変遷を知るための方法であるが内耳土器の出土例の多くが良好な一括性をかなえていない訳ではないので編年学的な序列構成は困難であり、相対年代が得られるための共伴関係も少ない。そこで現況では同次元に存在したと考えられ相対年代を得易い遺物を含む土器群を数遺跡

から抽出合成し、便宜的な各器種の組合せをもうけ序列を構成した。また、期区分は、土器の絶対量が少ないため、その様相を理解したうえの、意味ある期区分が困難である。それに替る方法として内耳土器の消長と確実視される器形変化を捉えた段階区分とした。

① 内耳土器出現の前段階

内耳土器の出現の前代は前橋市富田古墓(第226図7)、高崎市中尾町吹屋遺跡に盤形が出土し、その盤形は釣手を付けるためと考えられる孔(以降、釣手孔有とよぶ)のある点を除外すれば内耳土器のほうろく型(以降、内耳盤形とよぶ)に酷似する。釣手孔は富田例をあげれば近接して横に2孔があるが半穴のため、本来が4・3孔であったか明らかでない。この釣手孔有盤形は近接県の中世遺跡の51例⁽⁷⁾にほとんど類例はないが、ただ1例、神奈川県光明寺裏遺跡に共通例(第226図8)があるので北関東ばかりでなく広域に分布した可能性がある。この段階の組合せは富田遺跡例に骨蔵器としての壺(第226図7)が伴っており、その壺と同一器形の壺に擋鉢を伴う骨蔵器例(第226図3・5)が埼玉県大久保遺跡例にあり、釣手孔有盤形と、擋鉢、壺からなる3器種の組合せが合成される。この一群は内耳土器出現の前段階の合成組合せとして抽出したもので、鎌倉時代の組合せを意図したものではない。

② 内耳盤形の出現段階

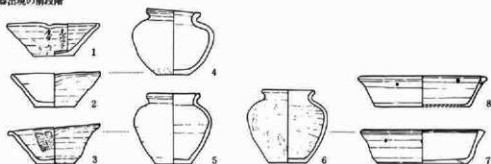
内耳土器には内耳鍋形(以降、内耳鍋とよぶ)と内耳盤形があり、それぞれ中世土鍋、中世ほうろくと称した区別と同意である。先に触れたとおり、内耳盤形の出現は釣手孔有盤形が移行したと形態上考えられ、富田遺跡例の釣手孔有盤形の体部にある2つの釣手孔と初源的な内耳土器の片側に2耳があるのと機能上、相通することから、釣手孔有盤形から内耳盤形へと移行が確実視される。この場合、内耳盤形の出現は移行が裏付られるため自生したことになろう。この段階の例に栃木県神明西遺跡の溝状I遺構に内耳盤形がある。溝状I遺構からは大量な土師質土器皿が出土しており、隣接の溝状II遺構からも同形の土師質土器皿が伴い合せて常滑焼の第III期に類される陶製甕が出土している。

③ 内耳鍋形の出現段階

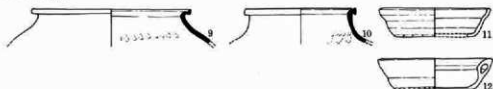
内耳鍋形の出現は内耳盤形より後出すると考えられる。それはかつて検討した土師質土器皿の変遷観において14世紀に内耳鍋形を伴う例はなく、15・16世紀代に豊富になるため内耳盤形が先行するものと考えた。15・16世紀代の鍋形器種の前代系列は内耳を付さない鍋形の器種がたどれず、それに相当するものとして新田郡長楽寺遺跡、神奈川県光明寺裏遺跡などから羽釜が若干、出土している。しかしその器種が羽釜であったとしても炊飯器種の絶対量を満すとは考え難く、やはり鉄鍋類の多用を考慮する必要がある。内耳鍋形の前代、器種が鉄鍋であったとすれば、内耳鍋形の出現は鋳物師組織の変革や崩壊など、製作者集団自からの内的要因か、社会的な要請による外的要因があり、その結果、急速な形で内耳鍋形の出現をもたらせたと推察される。

内耳鍋形の初源的な形態は口縁端部から口縁下の段までの間が未発達な小作りのため狭く、一見して抽出が可能である。この一群は藤岡市竹沼遺跡⁽⁸⁾、新田郡長楽寺遺跡、高崎市元島名遺跡⁽¹⁰⁾

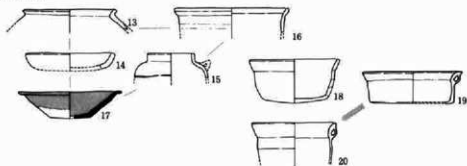
内耳土器出現の前段階



内平盤形の出現段階

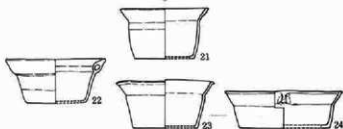


内耳鉢形の出現段階



内耳鉢形が平底化する段階

- 1・27 長楽寺 2～5 埼玉県
大久保山 6・7 富田 8・
25・26 神奈川県光明寺裏 9～
11 栃木県神明西 12 栃木県石
那田 13～16 竹沼 18 寺の
内 19～21 元島名 22 矢島
23・24 稲荷森



その他



第226図 内耳土器関係主要土器抽出図

第5章 調査成果の整理と考察

内耳土器出現の前段階



富田

内耳盤形の出現段階

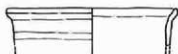


神明面



石部田

内耳鍋形の出現段階



竹道



陣場



長楽寺



元島名

内耳鍋形が平底化する段階



福初森



元島名

第227図 内耳土器変遷図

類例があり、特に竹沼遺跡1号溝からは内耳鍋形、盤、釜、甕、などの軟質陶器の器種と瀬戸焼の折り口三足盤が出土し、良好な一括性をかなえている。また長楽寺遺跡は1号井戸跡から約600点の出土遺物があり、15世紀末以前に井戸中に廃棄した一括遺物群である。

この段階の内耳盤状鉢は適例がないが、次に述べる高崎市元島名遺跡例に平底化した内耳鍋形に先だつ道路Ⅱ区4号溝の例が捉られており、その例をもって第227図に補填した。

④ 内耳鍋形が平底化する段階

内耳鍋形の平底化は前代が丸底であり、なぜ平底へと移行したのかは明らかでないが、高崎市元島名遺跡では遺構重複と遺物様相から道路Ⅱ区4号溝→5・15号溝→9号溝の順に新・古の関係が捉えられ、その間、伴出の土師質土器皿にさしたる変化がないのに対し、内耳鍋形の変化は丸底気味の形態から平底へと変化する過程が急速であったと察せられる。この急速と思える平底化を確実に捉えるためには量的な出土を待たなければならないので、ここでは元島名遺跡9号溝の例を第226図21に掲げた。この第226図23に酷似の内耳鍋形が高岡市稲荷森遺跡⁽¹¹⁾の2号溝から出土し、合せて内耳盤形が出土しているので組合せて図示した。

各段階の年代

以上のような傍証を得て第227図を構成した。各段階区分は内耳土器の画期をとらえたものであるが、画期時点の例証は得られない場合が多いため、画期時点より少し後出した段階の個体把握となってしまった。次に各段階の年代観を述べるが、年代観は各画期時点を意味するものではなく、第227図の中に示した各段階の組合せに対する年代観であることをこたわっておきたい。

内耳土器の出現の前段階（第226図1～7）3器種のうち鉢と酷似例が新田郡、東照宮地内古墓群から「元応二年 庚申仁」（1320）と墨書された播鉢があるため14世紀前半頃の組合せと考えられる。

内耳盤形の出現段階（第226図9～12）第226図9～12に組合わされた栃木県神明西遺跡出土のN字口縁の甕を常滑焼とするなら、その第Ⅲ期に類され、13世紀後半から14世紀前半となり、前代を14世紀前半頃の一群として捉えれば、14世紀中頃から14世紀後半の頃と考えられる。

内耳鍋形の出現段階（第226図13～20）竹沼遺跡の一括遺物の場合、瀬戸焼の折り口三足盤が出土しており、その器形からすれば15世紀前半頃と考えられる。また長楽寺遺跡1号井戸の同伴関係から竹沼遺跡とほぼ同じ内耳鍋は15世紀末より以前にあったことが一括遺物から裏付けられる。

内耳鍋形の平底化する段階（第226図21～24）第226図23・24 高岡市稲荷森遺跡2号溝の埋没土から、石製品、土師質土器、国産陶器、舶載陶磁などの大量な遺物群と共に5個体以上の内耳が出土し、そのうちの1点である良好な一括遺物である。さらにこの2号溝の埋没土の上層には美濃焼皿がまとめて出土し、美濃焼皿は大塚Ⅴ段階の16世紀末頃の鉄絵皿をまじえているため第226図24の内耳盤形はそれ以前に存在したことが確である。館跡の全面に近い発掘調査を実施した高崎市矢島遺跡⁽¹²⁾、寺の内遺跡⁽¹⁴⁾では館の存続が永禄9年（1566）に長野氏が武田勢に滅ぼされる以前にあったと考えられており、両遺跡から第226図23と酷似の内耳の出土を見ている。このこと

は第226図23 がそれ以前に存在したことを示唆するが、史料による年代推測は比較基準が異なるので、今後、一括遺物を用いての年代推定に置替える必要が生じる。

3 船載陶磁について

本遺跡から8片の中国青磁が出土している。出土位置は耕114-1号の1号住居址周辺から2片7・8号溝周辺から2片、82-15グリットから1片、2号井戸址の覆土から3片、計8点があり、発掘地域の北西部に分布している。本報告では2号井戸址出土の2片を図示(第170図)した。ここでは出土青磁の年代的な傾向を検討し、まだまだ不鮮明な船載陶磁史に一助を加えたい。このように耕114号の1号住居址周辺から2片が出土している。1片は、素文碗で尖の強い口縁部片であり、いま1片は蓮弁文碗片でいわゆる鎗手青磁である。色調はともに粘手に近い発色を呈する。後者は史跡大宰府では龍泉窯系I-5⁽¹³⁾b類に属しており、蓮弁文の鎗間がやや広目に劃文されていることから南宋から元代頃と考えられ、前者も安定感のある粘手の発色に近いので、元代頃の龍泉窯系の青磁と考えられる。

7・8号溝周辺の2片は、1片が蓮弁文碗片で鎗手青磁の口縁部片で、いま一片は外反傾向の強い高台は坏片の口縁部片か、小碗の口縁部片と見られるもので、ともに淡い青色を呈している。後者は鎗の劃文の削り出しがしっかりしており北宋から南宋代の蓮弁文碗と考えられ、前者は史跡大宰府でいう龍泉窯系小碗Ⅲ-3類か坏Ⅲ-2類と考えられるため同じく北宋から南宋代と考えられる。

82-15グリット内から出土した1片は粘手の発色を呈した蓮弁碗片である。鎗間の巾がやや広く劃文の彫の浅いところから元代頃の製品と考えられる。

2号井戸跡からは、3片の青磁が出土している。第170図2号井戸5は蓮弁文碗の体部から口縁部にかけての破片で、淡くやくすんだ青色を呈している蓮弁の主弁と間弁との表現が不明瞭であるため南宋～元代の龍泉窯系の青磁と考えられる。第170図2号井戸6は外面素文で内面の見込部分に劃文が施されている。発色は前者と同様であり、史跡大宰府では椀I類に相当する個体で北宋代と考えられる。このほか粘手の発色をおび形式化した蓮弁文小坏片の体部片が出土し、劃文弁の形および発色から元代の製品と考えられる。

以上8片を一瞥したが、このうち2号井戸跡出土例は14世紀代の共伴遺物があり、青磁2片が14世紀代の元代の製品と考えられるために船載磁器の年代観とほぼ同じ頃の年代が得られ、両者の年代観が補足された意義は多いとしなければならない、また出土の傾向は、北宋代の製品が含まれ12世紀後半代から14世紀代までが存在する。(大江)

注

- (1) 大江正行「群馬県と周辺地域の中世土師質土器Ⅲ」『群馬考古通信 第7号』1980
- (2) 齊木秀雄「光明寺裏遺跡」(鎌倉市教育委員会)1980
- (3) 谷町・野村希喜「千葉市西屋敷遺跡」(千葉県文化財センター)1979
- (4) 谷本鏡次「五間二面堂について」『多摩ニュータウン遺跡調査報告書』1966
- (5) 大江正行「軟質陶器について」『月報 鳥羽遺跡 No.14』(群馬県埋蔵文化財調査事業団 鳥羽遺跡)1980
- (6) 倉田芳郎「関東」『世界陶磁全集3』1978
- (7) ①作成のおり一瞥したことがある。
- (8) 大江正行・川原嘉久治「長楽寺遺跡」(尾島町教育委員会)1978
- (9) 原田恒弘・飯塚卓二「竹沼遺跡調査概報」(群馬県教育委員会)1975
- (10) 五十嵐信・白石修「元島名遺跡」(高崎市教育委員会)1979
- (11) 井上太「稲荷森遺跡発掘調査報告書」(富岡市教育委員会)1980
- (12) 橋本澄則「神明西遺跡」(栃木県教育委員会)1973
- (13) 関口修・田村孝「矢島・御風呂遺跡」(高崎市教育委員会)1979
- (14) 神部監語・関口修「寺の内遺跡」(高崎市教育委員会)1979
- (15) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について——型式分類と編年を中心として——」『九州歴史資料館研究論集4』1978

第3節 科学分析

土器の胎土分析について

(群馬県工業試験場) 花岡 絃一

(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 中沢 悟

はじめに

群馬県には、古窯跡が11群あり、そのうち太田市金山古窯跡群、安中市秋間古窯跡群、吾妻郡中之条古窯跡群⁽¹⁾の3群と推定常滑・澁美焼について分析し、一傾向を得た。また藤岡市温井遺跡出土須恵器類⁽²⁾、高崎市新保遺跡出土土器類についても分析を加えてきた。今回は、新たに陣場遺跡の土器群を中心に胎土分析を実施し、その傾向を検討した。

なお本稿の考古学的な所見の挿入を中沢が、化学的な記述を花岡が分担した。

1 分析依頼内容と意図

この分析に伴う依頼要点は次のとおりである。

- ① 陣場遺跡36号住居跡出土の3点の環・碗 (No.5～7) の胎土は粗で、砂粒を多く混える点に共通性があり、分析値で共通するか。さらに、成分は、県内窯跡群の須恵器と県内出土の土師器とを比較した場合、どちらの成分に近いかわかることを分析目的とする。成分が近似した場合は、生産地域から、3点が一元供給されている可能性があり、成分値が土師器の性質に近ければ、須恵器の製作技法を持った製作者集団が陶土の存在する窯跡群地域から分離したことが考えられ、左証が得られることを意図した。
- ② 陣場遺跡36号住居跡覆土 (No.8)、1号溝埋没土 (No.10) から出土した、環・碗の胎土は肉眼で観察した場合、安中市秋間古窯跡群の須恵器胎土に酷似し、分析した場合、前回分析の秋間古窯跡群の須恵器成分領域に一致するかを目的としている。秋間古窯跡群は陣場遺跡に最も近い位置にあり、その供給下に置かれていたか傍証されることを意図した。
- ③ 陣場遺跡2号石組 (火葬墓) から出土した陶器は、従来から言われているいわゆる澁美焼であり、前回実施した、推定澁美・常滑焼の分析傾向に一致するかを目的・意図している。
- ④ No.1～No.4は、平安時代後期から中世までの所産であるが、土器性質が明瞭でないため、土師器、須恵器のどちらの性質に近いかを、目的・意図している。

2 試験試料

試験試料の発掘場所、推定年代、焼物名称、胎土肉眼観察など所見要目を付表1に示した。

3 試験方法

試料 No	推定時代	種別	粘土の内眼観察	備 考
1	平安前期	須恵器	重さは軽い。白色鉱物粒をおよそ火焼する。素地は粗。	焼成は軟質。外面に焼あり。割れ口は灰色。
2	平安後期	土師器	重さは軽い。素地は均質で軽い。火焼鉱物少ない。	焼成は軟質。割れ口は灰灰色。
3	室町後期	軟質陶器	重さあり。素地は粗。大粒の砂粒。	焼成は一般的。割れ口は灰色。外面に煤の付着あり。
4	平安後期	土師器	重さは軽い。素地は粗。微細な砂粒を火焼す。	焼成は軟質。割れ口は灰色。外面に焼あり。
5	"	土師器	重さは軽い。素地は粗。砂を火焼する。	焼成は軟質。割れ口は淡灰色。
6	"	"	重さは軽い。素地は粗。砂を若干。酸化鉄鉱物粒含む。	焼成は一般的。割れ口は灰褐色。
7	"	"	重さは軽い。素地はNo 6に近似する。	"
8	平安前期	須恵器	重さはやや重い。火焼鉱物に黑色鉱物粒を特徴的に混え、秋間古窯群群製か。	焼成は硬質。割れ口は灰色。
9	中世前半	陶器	重さあり。素地ら密。推定瀬美焼。	焼成は硬質。割れ口は灰色。
10	平安前期	須恵器	重さあり。素地は密。秋間古窯群群製か。	坯片。焼成は軟質。割れ口灰色。

付表1 試料の考古学的な要目

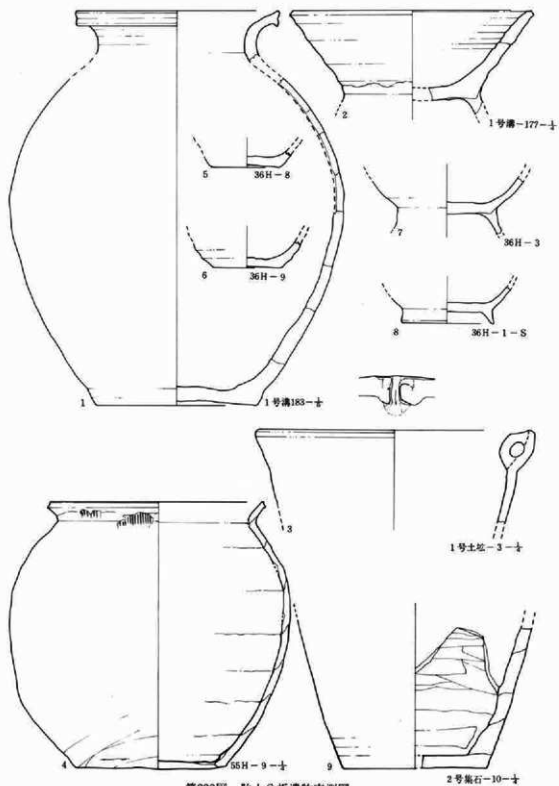
分析試料は各試料を $10\mu\text{m}$ 以下に粉碎し、5-10 μg を円板に成型し、蛍光X線分析試料およびX線回折試料とした。

元素分析装置(理学電機製 KG-4型)を使用した。管球は銀対陰極、計数法はチャート方式(4"/min)お使用した。詳細な条件は付表2に示した。なをケイ素(Si)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)は定時計数法によった。また、蛍光X線分析値は粘土標準試料(日本標準試料委員会認定、科技術社発売)R-601、R-602、R-603、および前回試料の地輪3点(No.A・B・C)の湿式化学分析試料を標準として求めた。

各試料の鉱物組成はX線回折装置(日本電子製 JDX 5P型)により求めた。管球は鉄管球を30KV-15mA で使用し、時定数で1"/minの速度で測定した。

分析元素	管電圧 電流	分結 光晶	検出器	流高 分析	時定 数
Fe Si Rb Mn Zr Zn Cu Ni Cr Ba	50KV- 20mA	LiF	S・C		1
Ca K Ti Si Al	40KV- 30mA	EDDT	P・C		1
Mg	40KV- 30mA	ADP	P・C		1

付表2 蛍光X線分析条件



第228図 胎土分析遺物実測図

4 試験結果および考察

各試料の化学組成の結果を付表に示した。酸化ナトリウムと強熱減量は分析装置の都合により測定しなかった。ここでCa/K, Sr/Rbはそれぞれの蛍光X線強度から計算した。また参考のために粘土標準試料の分析値も併記した。付表3のR601~R603である。

前報告によれば、胎土中のCa/KとSr/Rbの間に地域特性があり、産地分類ができるので、安中市秋間古窯跡群、推定瀬美、常滑焼の関係をそれぞれ付図1・2、に示した。

X線回折結果は付表4・付図1に示し、いくつかの傾向については次のとおりである。

- ① 試料No5~7の成分値が共通するか、また成分値は、土師器、須恵器の質に近いかにについては、過去に土師器類の分析結果が⁽¹⁾無いため、近い質と考えられる弥生土器の分析例から比較する。(付図3)

No5~7のCa/K, Sr/Rbの値は5:7.5以上に拡散する傾向があり、過去に分析した須恵器傾向よりも拡散し、弥生土器に近い傾向がある。試料3点の共通性はNo6、No7が近接しているが、No5とは差が生じる結果となった。

- ② No8・10と安中市秋間古窯跡群の須恵器との比較である。安中市秋間古窯跡群は過去の分析によって一傾向が認められた。それと比較すればNo8は、その領域内にあり、No10は外れる結果となった。(付図2)

- ③ No9が、過去に分析した推定瀬美、常滑焼との比較である。付図3に示したとおり瀬美、常滑焼の領域は小域にまとまる傾向があり、No9はその領域に一致する。

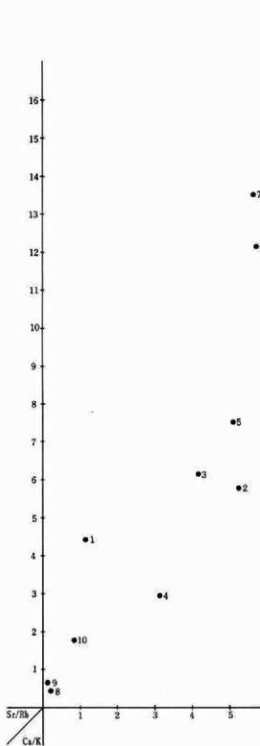
成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca K	Sr Rb
10	68.5	19.6	2.94	0.63	1.25	0.33	1.45	1.14	4.41
11	68.0	18.8	3.38	0.63	2.27	0.79	0.57	5.28	5.78
12	65.6	19.3	6.58	0.69	2.39	1.19	0.74	4.25	6.25
13	66.6	18.6	3.74	0.91	1.92	0.84	0.78	3.23	2.99
14	65.1	18.2	5.70	1.17	2.47	1.23	0.62	5.01	7.52
15	66.3	18.3	4.37	0.75	2.77	0.86	0.64	5.73	12.19
16	65.3	18.8	4.81	0.73	2.87	1.34	0.68	5.59	13.50
17	71.4	18.0	3.84	0.63	0.34	1.03	2.03	0.22	0.49
18	72.8	19.3	2.19	0.70	0.16	0.47	2.16	0.14	0.62
19	63.0	19.1	6.09	1.00	1.28	3.96	1.99	0.85	1.79
R-601	50.3	33.0	1.16	0.56	0.15	0.29	1.71	0.11	0.24
R-602	45.9	37.3	0.69	0.12	1.41	0.37	0.58	3.06	51.08
R-603	46.1	37.0	0.66	0.09	1.66	0.29	0.40	5.24	25.58
地輪A	66.7	18.6	6.00	0.94	1.09	1.29	1.39	1.08	2.29
地輪B	64.4	17.1	6.03	0.61	0.86	0.55	2.63	0.46	1.16
地輪C	68.0	17.6	1.65	0.49	0.94	0.58	2.77	0.48	1.21

付表3 各試料の化学組成

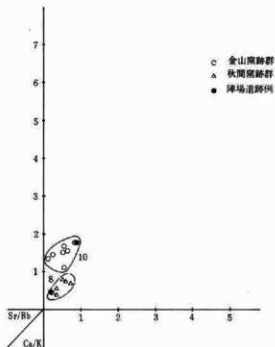
	石英 (3.35)	長石 (31.1~3.25) (4.0~4.2)	酸化鉄 (2.69)	角閃石 (8.45)	輝石 (2.99)	不明ピーク
10	444	124 (36)	6			2.83
11	204	112 (72)	6			
12	268	164 (56)				2.94
13	232	92 (88)		28		2.94 2.83
14	188	112 (80)			26	3.75 1.83
15	148	332 (112)	8			3.75 2.94 2.52 1.88
16	172	108 (88)	8			3.75 2.83 2.52 1.88
17	612	— (12)	20			5.34
18	636	8 (8)	20			5.34
19	340	32 (20)				

付表4 鉱物組成 (CPS)

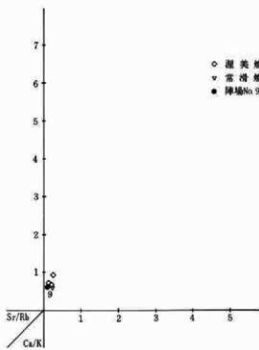
第5章 調査成果の整理と考察



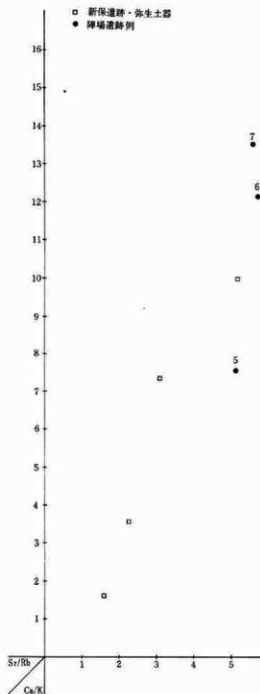
第229図 陣場遺跡土器の分析図



第230図 須恵器窯跡群との比較



第231図 推定常滑・瀧美焼との比較



第232図 弥生土器との比較

④ No.1～4は、過去の分析結果からすると、須恵器傾向よりも、新保遺跡の弥生土器例の傾向に近く、またNo.5～7との傾向の領域の間にあたる。

まとめ

今回の分析試料は窯場を中心としたものではなく、焼物性質に関する目的が中心となった。特に、土師器に関しては既知の試料がなく弥生土器との比較において検討を加えたが、弥生土器は須恵器に比較し、成分上ストロンチウム(Sr)、カルシウム(Ca)の占める割合が多く、今回分析の土師質のNo.2・3・5・6・7なども同様の傾向があり、焼物原料の生成に質差のあることが考えられた。

また、肉眼観察において秋間古窯跡群差と考えられたNo.5が、既分析の領域内に入らず、仮にそれが秋間古窯跡群製であれば、分析絶対量の充足が、他の試験方法を併せ行う必要性があらう。

- (1) 花岡純一「土師の粘土分析」『塚本古墳群』(群馬県教育委員会)1980
- (2) 花岡純一、大江正行「瓦の粘土分析」『天代瓦窯遺跡』1982
- (3) 花岡純一、真下高行「温井遺跡出土須恵器の粘土分析」『温井遺跡』1981

第4節 出土土器の分類と編年

(1) 平安時代を中心とした土器群について

——清里・陣場遺跡出土の土器群に対する編年作業を中心に——

はじめに

- 1 群馬県内における平安時代の土器の研究史
- 2 清里・陣場遺跡の土器群の編年基準について
- 3 第1期～第6期の土器の様相について
- 4 年代観について

おわりに

はじめに

清里・陣場遺跡では、第2章～第5章第2節で述べてきたように、平安時代を中心に遺構、遺物が確認された。平安時代の中でも9世紀前半～11世紀中頃までの250年以上の期間を、そこに想定できる。ここでは遺物について細かく検討を加え、300年近くに及ぶ期間を、約50年の幅まで細分し、それぞれの時期における土器に反映された生活状況を汲み取ってゆきたい。

従来、平安時代の土器について国分式土器と称されてきた。その内容および国分式土器研究の変遷については、星野達雄⁽¹⁾(1977)の中でくわしくのべられている。県内における国分式土器とは平安時代の土器という意味で使用されており、くわしい内容規定はされていない。当然ながら杉原莊介・中山淳子両氏が規定された国分式土器の概念とは大きく異なっており、名称のみが使用されているのが実情である。県内における国分式土器の内容規定がなされていない現状では、この名称を使うことはさけない。当遺跡では平安時代に属すると思われる土器群を国分式土器と称せずに、単に平安時代の土器群と呼ぶ。

1 群馬県内における平安時代の土器の研究史

県内において平安時代の土器群についての研究は、発掘例の増大にもかかわらず少ない。その中で井上唯雄氏の入野遺跡での研究⁽²⁾は土師器全般についてであるが、注目に値する。氏は昭和33、34年に行なわれた入野遺跡の成果をまとめるにあたり、県内の土師器出土の遺跡をこまかく分析、検討した。そして住居内出土の一括遺物を中心に、内容の類似するものをまとめ、それぞれを一つの生活様式の「型」として、第1型式から、第5型式まで設定した。そして各型式における土

器形態の特色、用途、機能までを指摘し、住居内に反映されている当時の土器文化の様相についても触れている。さらに各型式にあてた年代観は、榛名山の峰二ツ岳噴出の浮石層との関連、墨書土器、灰軸陶器との共存関係等から行なっている。主な年代根拠として2つある。第2型式は、「二ツ岳の噴火以前に認められ、しかも噴火直前までは確実に認められる生活様式である」とし、当時、二ツ岳の噴火時期とされていた7世紀初頭頃に設定した。当清里・陣場遺跡と関連する平安時代は第5型式にあたり、その時期は「その土器の中に墨書土器、及び施軸陶磁器、瓦器様の土師器様等を含んでいることからしてその時期が推定できる。即ち杉原莊介氏によればそれらは8世紀中頃に比定されている。」とした。

当時、本格的な発掘のほとんどなされていない状況下で土師器の研究にこれほどの成果を示されたことは高く評価されるべきであろう。入野遺跡では、第5型式の住居の発掘がなかったため、平安時代の土器に関してより多くの成果を、汲み上げることはできなかった。しかし氏の第5型式における須恵器と土師器からくる土器文化の在り方についての指摘は、今日でもその多くに妥当性が認められる。しかしながら、井上氏は、これだけの成果を、その後引き続き系統だて、発展させることを行なわなかったため、その後この型式区分はほとんど使用されないまま今日に至っている。

昭和46年に松島栄治氏は上野国分僧寺、尼寺との中間地域遺跡調査を総括して、住居内出土の土器をくわしく分析し、Ⅰ類～Ⅳ類までの分類をした⁽⁴⁾。その調査は国分二寺間の約60000㎡という広域に試掘坑をもって実施した部分的な調査であったが、遺跡の歴史的立地、住居の重複関係、瓦の共存関係をもとに土器の類型化をはかり、Ⅰ類～Ⅳ類までの序列をまとめた。その時期区分は、「Ⅰ類は国分寺建立の直前、奈良時代前期後半に、Ⅱ類は国分寺建立期、奈良時代後期の前半にⅢ類は国分寺の盛期、奈良時代後期の後半から平安時代におけるの時期、Ⅳ類は平安時代の前期のもと推定される」と実測図を掲示し、その器種の組合せ、器形の特色、年代観までも言及された。そこに示された各類型の組合せや、新旧関係は、清里・陣場遺跡とほぼ共通している。報告の成果は、まとめられた時点からすれば評価し得るものの、年代観の構成には疑問があり、当陣場遺跡における年代観の在り方と大きな違いが認められる。特に平安時代に関しては約100～150年間松島栄治氏は当遺跡より古く考えておられる。これは国分寺との関連で年代づけをしたことにより、必然的にそうなったのであろう。しかし限られた調査地域と、比較対象例の少なかった段階に、これだけの分析を行なっていることは、再評価すべきである。さらにこれほどの高い水準を示したにもかかわらず、現在まで県内において多く使用されずにきたことは非常に残念である。

そのような状況の中で、昭和40年代の後半にはいと、関越自動車道、上越新幹線、上武国道という大きな開発が始まり、それに伴うかのように、圃場整備事業、学校建設、団地造成等が行なわれ、県内における大規模発掘が進行する。それらの成果を一部取り入れた形で、井上唯雄氏は「群馬県内における奈良・平安時代の土器」(昭和53年)を発表された⁽⁵⁾。これが今日では最も

第5章 調査成果の整理と考察

注目され、利用されている論考となっている。氏は県内で調査された遺跡の一覧表や、各時期の代表的な遺跡と住居を紹介し、出土遺物にくわしい説明をされている。類型は奈良時代を2類、平安時代を4類に序列し、編年した。そして平安時代に属する第3類を8世紀終末～9世紀中葉とし、第4類Aを9世紀後半～10世紀前半、第4類Bを10世紀中頃～10世紀後半、第5類を10世紀後半～11世紀初頭、第6期類を11世紀前半とした。この年代の根拠は2つあり、第6類は浅間山噴出のB軽石層を「住居中央部で数層の間層をはさんで覆っていた」下刈名遺跡Ⅱ区91号住居址出土一括出土遺物に求め、B軽石を天仁元年(1108)とし、この住居を11世紀中頃まで下がる可能性を認めている。3類は、住居床面上より出土した「万年通宝」(860年初鑄)を持つ松井田愛宕山遺跡4号住居出土一括遺物に求め、この時期を「8世紀終末から、9世紀初頭に始まり、国分寺19号の9世紀中葉までに及ぶ時期の所産とみられる」としている。この論考は、単一遺跡でまとまった報告例の少ないため、県内という広い地域を対象にしている。このため地域性をとらえられなかったことや各期の組合せは重視されているものの、基軸の統一性に欠けた点はまぬがれない。各期にあたえた年代観は、古銭やB軽石を援用しており、現在においても、それは引き継がれている。この論考以降の研究は停滞し現在に至っており、井上氏の成果は県内土器編年の大きな拠り所となっている。その後県内各地において多くの平安時代の集落が調査され、概略が発表されてきているものの、報告書として丁裁を整えるものは少ない。編年図を伴ったものとして山下成信「天神風呂遺跡」(昭和56年⁽⁵⁾)があげられる。この中で平安時代を3期に区分し、編年上の問題を提起している。数少ない県内での研究の中で、その意味するところは大きい。

2 清里・陣場遺跡の土器群の編年基準について

当遺跡では、平安時代に属すると思われる土器群だけで、約250年間の間ほとんど中断することなく引き続いていてと考えている。この中で6時期の区分を試みる。編年基準は須恵器の範疇で行ない、羽釜、土師質土器はいずれも須恵器の中に入れて考えている。その区分の基準は次の通りである。

時期	指 標	相当する住居址
第1期類	須恵器杯の糸切りとその後の無調整	50号住、49号住、22号住
第2期類	須恵器杯の高台貼付以後	21号住、48号住、59号住
第3期類	羽釜の出現	41号住、44号住、52号住 31号住
第4期類	土師質土器の出現	60号住、43号住、42号住、36号住、34号住
第5期類	土師質土器碗A・Cの消滅	55号住、28号住、32号住
第6期類	土師質土器皿の出現	54号住

この期区分は、そのまま編年構成の新旧を示している。編年構成の方法は、形態変化をとらえた型的な配列を根本に、住居間の重複でその変遷を補い、基本変遷図を作成した。

住居間の重複は少なく、編年に利用できたのは以下の4例である。

旧	新
44号住居址	42号住居址
44号住居址	43号住居址
49号住居址	48号住居址
59号住居址	60号住居址

次にこの編年指標に基づいて各時期の土器群について述べてゆく。

3 第1期類～第6期類の土器の様相について

当遺跡では比較的良好な遺物をセットで出土した住居を中心に編年図を作成した。それを中心に土器の器種、器形の組合せの変化を総合的に判断し、そこに反映されているであろう平安時代の焼物集団の在り方と変化を読みとろうと試みた。以下の文章は編年図にそって器種・器形の特徴、それをもたらした焼物集団の在り方等について解釈を加えたものである。なお住居内には新旧の要素を持つ遺物が含まれており、編年図上形式的に前後が逆転しているものも数例含まれているがあくまでも同一住居内出土遺物を同一時期の位置において編年図を作成した。その個所は文章中で説明を加えた。

① 第1期類の土器の概要について






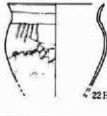



土器の器種は土師器、須恵器の2者であり、器形は土師器が環・甕・小型甕を中心として、須恵器が環を主体としている。破片であるが、須恵器壺が50号住から22片、甕5片、22号住に壺片、灰釉陶器が22号住に1片認められた。

第1期土師器全体の様相

前段階の奈良時代においては、須恵器が什器の一端として使用されるようになり、8世紀終末～9世紀前半になると、その数は増加し、環はしだいに土師器の環をしのぐ量となる。須恵器の量産に伴ない集落内における土師器の果たしてきた役割の一部は、しだいに須恵器がになうようになっていく。この傾向は地域により様相を異にしていることから、一概には言えないものの、全体としてその傾向にある。当遺跡では、環がこの第1期で終息し、什器中の盛器としての機能の主体は須恵器環が果たしてゆく。甕は煮沸機能を持ち、須恵器にはそれに相当するものがまだ認められないため、前段階からの機能の存続がある。台付甕（小型甕）も煮沸機能を持ったため、数は少ないが存続する。

土師器環 前段階から環は序々に丸底から平底の環へ、内湾気味の体部から直線的な体部へと変化してきた。それがこの段階ではほぼ平底となり、体部も直線的になってくる。体部に見られた指頭圧痕もやがて少なくなる。須恵器環の形態に近づいていくかのようである。

編年に用いた環は49号住1と50号住1がこれにあたる。49号住1は底部が完全なる平底であり、やや特異な形をなしており出土例は少ない。50号住1はやや丸底を呈するが平底に近く、底部は手持ち不定方向へう割りであり、体部に指頭圧痕は認められない。口縁

土 師 器		須 恵 器
坏	甕	坏
 50H-1	 49H-6	 50H-5
 49H-1		 49H-2
	 22H-6	 49H-3
		 22H-5
		 22H-4

第233図 第1期土器群

部は幅広く横ナデが認められる。

土師器甕 前段階から器内の薄い甕は最大径を胴上半部に置くようになり、整形も右から左へ向かう横方向へ削りが肩部を主に認められる。そして「コ」の字状口縁へと移行していくのである。編年図で見ると49号住6、22号住6がそれにあたる。

編年に用いた甕は49号住6で「コ」の字状口縁を意識させるようにくびれ部の上下に少く削りが認められている。肩部外側横方向へ削り、胴部は縦方向へ削り、22号住6はさらに強く「コ」の字状に口縁をもうけており、ほぼ完成期に近づいた「コ」の字状口縁甕である。

土師器小型甕（台付甕） 小型甕の破片が数個体出土している。全体量から見ると著しく少ない。これは平底と、台付甕の2種類が考えられる。おそらく2種類とも存在すると思われる。

編年に用いた小型甕（台付甕）は50号住6で口径、器高とも小さく、胴部が丸味を持ち口縁部はほぼ「コ」の字状を呈している。口縁部横ナデ、肩部横方向へ削りである。

第1期須恵器全体の様相

第1期の須恵器の器種は、坏を主体となし甕・壺を含んでいる。この段階での須恵器は集落で広汎に什器類として使用されており、明らかに量産物である。古墳時代の祭祀あるいは供献具として儀式的な意味を持って作られたものとは本質的に異なっている。この量産の画期の第1段階は、律令制の完備に伴う国分二寺造営を1つの契機とする造瓦組織の拡充であり、第2段階は国分二寺建立以降の造瓦組織の変質により、造瓦本位の体制から須恵器への生産転換がなされたであろうことによる量産段階であると推察することができる。このことは県内の窯跡群において須恵器窯の増加がみられるのは国分二寺の創建期の前と後の段階であることから明らかである。当

遺跡の第1期前後は須恵器量産の第2段階ということができ最大の生産量を持つ段階である。それに対応するかのようには回転糸切りが採用され、初期には丁寧に切離後の調整を行なったが、すぐに無調整量産体制に入ってゆく。後の実年代のところで述べる松井田町愛宕山遺跡の一群は、まさにその段階にあるものであり、8世紀終末～9世紀初頭に位置するものと思われる。

須恵器環 器高が低く、口径、底径とも大きい環である。体部の立ち上がりは直線的で約50度前後とやや開き気味である。灰白色を呈しており、かなり焼締りのある硬質の環である。49号住2の環には火燂状の痕跡が認められ、量産に対する配慮が伺える。

編年に用いた環は50号住5、49号住2・3、22号住4・5がそれぞれにあたる。この段階の環のすべての底部は回転糸切り後の無調整である。環はそれぞれ製作地域の差によるものか胎土に相違が多く認められる。

② 第2期類土器の概要について

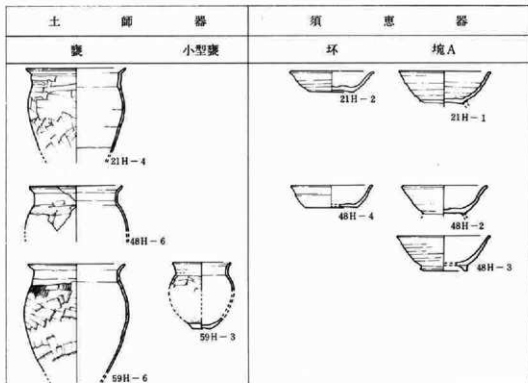
土器の器種は第1期類同様に土師器、須恵器の2者であり、器形は土師器が甕、小型甕（台付甕）であり、環はほとんど消滅している。須恵器は環と碗を主体にするが、多くの住居覆土中に甕の破片が認められる。灰釉陶器は21号住居より破片が3片出土している。

第2期土師器全体の様相

前段階において什器中の盛器として機能してきた環はその役割をすたいに須恵器が占めるようになり、この段階では出土しなくなる。煮沸器としての甕、小型甕（台付甕）のみ使用される。

土師器甕 「コ」の字状口縁を呈する甕である。前段階の22号住6で「コ」の字状口縁は完成期に近づき、この時期の21号住4と48号住6で完成期となる。59号住になると、同じ時期でありながら、衰退の傾向を示してくる。完成期の甕とはくびれ部外側の「コ」の字状の上下を強くなくて、区画を明瞭にさせ、強くなくてられた部分の内側が強く張り出しており、内側からもコ字状を意識させるほど明瞭となる段階の甕を指している。器肉の薄さはすでに前段階で限界に達しているため、この時期も同じ程度の薄さである。整形は肩部横方向へ削り、胴中央部から下半部にかけて下方向の縦へ削りであり、前段階とほぼ共通している。最大径を胴中央部に持つものが多くなる傾向にある。この甕を多く出土した住居に13号住がある。

土師器小型甕（台付甕） 第1期の小型甕によく似ており、「コ」の字状口縁を持つ小型甕である。この器形に平底を持つと思われる59号住3がある。しかしこの時期の他の多くの遺跡では平底の小型甕より台付甕が多く、48号住にその台部が出土していることより、当遺跡でも台付甕の存在が明らかである。この小型台付甕は前段階の8世紀代に出現した丸味をおびた体部の大きく外反する口縁部を特徴とするが、この期の口縁部は「コ」の字状口縁に似た変化や、肩部が張り胴部が直線的になってきている。小型台付甕は当遺跡の第3期に至り、羽釜を持つ住居と共存例があるものの、甕の消滅とともにその役割を終り、次期に終息するものと考えられる。59号住3は第1期の50号住6より残りが良好である。甕が「コ」の字状口縁の完成期の特徴を持つように、小形甕も「コ」の字状口縁の成立状態を示し、くびれ部の「コ」の字状の上下を強くなくて、区



第234図 第2期土器群

画を明瞭にさせ、強くなされた部分は、内側に強く張り出してくる。内側断面からも「コ」の字状を識別できるほど明瞭となる。器内はさらに薄くなっている。他の部分の整形は肩部に横方向の削りが見られる。59H-3の底部となり得る可能性のある底部周辺は縦方向へ削り、底部中央に砂が多く認められる砂付着の底である。類例の少ない小型平底の底部である。

第2期須恵器全体の様相

环に伴って同一住居から埴が出現してくる。埴は出現の時から器高が高く全体に深くなっている。体部はそれ以前の环が直線を基調としていたのに対し、曲線を帯びて丸味を持つ傾向を示す。これはそれまでの环の系列上からは考えにくい変化であり、そこに出現要因を他から考える必要がある。形態に酷似する例を見い出せば灰釉陶器埴があり、ここでは灰釉陶器からの影響によるものとして考えておきたい。

須恵器环 須恵器环は前段階からの系列上にあり、第1期との間に明瞭な区分をすることはできない。集落からの出土のため複数の生産地域からの供給が考えられ、器型的な画一性に欠ける面がある。そのため小さな差違で区分することが困難で、器形や整形技法、口径と底径の比率等を比較してもその差は明瞭にでない。

編年に用いた环は21号住2、48号住4である。21号住2の場合は底径の大きな环であり比重も高く、焼締のある环であり、この期の一般的な环類とも質感が異なり、第1期類の

要素を強く持ち、22号住4より古い器形が混在している。48号住4も底径が大きく古い要素を持つ。

須恵器碗 須恵器環が前段階とほとんど差がないのに対し高台を持つ碗の出現は大きな変化である。須恵器環だけでなく、第4期以降に出現してくる土師質土器でも同様であるが、環と碗の区別は困難な点が多い。ここで平安時代に関しては高台の付くもので、器高が極端に低く明らかに皿型であるものを除き、環と碗の区別は、高台の付くものと付かないものとに区別して、前者を碗、後者を環と呼んだ。碗はこの段階から出現し、序々に変化しながら第4期まで続いてゆく。碗は環と異なり焼き締めが弱く比重も軽い。色は白色の強い灰白色を帯びている。碗の出現に至り、焼成方法の転換も行なわれたことを示している。その転換とは焼成時間を短縮し、還元焼成から、還元軟質焼成への変化であり旧来の須恵器とは性質の多くを異にするものである。このことを換言すれば、省燃料、粗原料など低生産費に直結されるもので、新生産体制の萌芽をそこに認めることができるのではないだろうか。

編年に用いた碗は21号住1、48号住2・3である。21号住1は他の48号住2・3の口縁部がやや外反しているのに対し外反せずに胎土、焼成も異なるため少し異質である。以上の3個体をもって碗の出現期と考えた。21号住1は体部にロクロ目を強く持ち、口唇部が外反しているが全体的に体部に丸味を持つ。高台は貼付後欠けている。48号住2・3はやや丸味を体部に持つ碗であり、2は高台が欠けており、3には太く高い高台が貼付けてあった。いずれも口縁部が外反しており、器形上新しい要素を持っている。

灰釉陶器 この時期で実測可能な製品を住居内に認めることはできなかった。しかし猿投、美濃を中心とする地域では、灰釉陶器の生産がしだいに量産体制へ移行していった段階である。県内に灰釉陶器が大量に搬入されてくるのは美濃窯の大原2号窯式の段階の製品であり、当遺跡では第3期以降の住居内より多く出土するようになる。それ以前の光ヶ丘1号窯式や猿投窯の黒笹90号窯式のもの寺院址、官衙等を主に出土している。その遺跡としては折戸10号窯式、黒笹90号窯式を出土している十三宝塚遺跡、黒笹14号窯式を出土している山王廃寺があげられる。集落遺跡で黒笹90号窯式の緑釉を出土しているものとしては、近年の編年観である光ヶ丘1～大原2⁽⁷⁾号窯式の灰釉陶器を出土している歌舞伎遺跡があげられる。当遺跡でも黒笹90号窯式の緑釉陶器や光ヶ丘1～大原2号窯式相当の灰釉陶器を出土しており、集落内にも次第に灰釉陶器が普及されていくのが県内の出土傾向から伺える。序々に普及をたどる中で、主体器種は碗類にあり、その機能はしだいに日常什器の盛器としての機能をも一部で持つようになったと考えられる。

③ 第3期類土器の概要について

羽釜を伴う住居の出現をもって第3期とした。須恵器環・碗の形態変化を軸とした土器編年の中で、須恵器の一系列上の羽釜の出現をもって画期とすることは基本軸からはずれるかもしれない。しかし生産形態の多様化に伴う器種の多い平安時代においては、須恵器という同一器種中であれば、環・碗をすべての編年軸としなくても他器形の消長をもって編年区分の画期とするこ

とも、あながち間違いではあるまい。従来から群馬において平安時代の集落には、羽釜を持つものと「コ」の字状口縁の甕を持つものが出土の有無として認識されており、一つの画期とされていた。両者は一時期同一住居内に共存することも知られており煮沸機能を荷負う「コ」の字状口縁甕がしだいに羽釜にとって変わってゆく過程が理解されており、平安時代を大きく2分するならば、羽釜出現以前の前期と以降の後期に分けられてきた。当遺跡における土器編年では前期にあたるのが第1・2期であり、後期にあたるのが第3・4・5・6期である。また器種分類するにあたり、羽釜を土師器ではなく、須恵器として取り扱った。出現期の羽釜は還元焰焼成で焼かれており、明らかに窯体を使用しているのである。これは基本的な須恵器焼成技術の延長上であり、事実、県内の窯跡群内の窯跡関連の散布地から、還元焰焼成の須恵器環や甕とともに羽釜が採取されている例が夜夜町野真沢窯跡群⁽⁸⁾、乗付窯跡群⁽⁹⁾に認められ還元焰焼成による初期の羽釜が須恵器窯製品であることが裏付けられる。しかし後出の羽釜は環、甕と同様にしだいに酸化焰焼成へと変化し、焼成方法の変革を見せる。基本的な轆轤製作による技法や、酸化焰焼成といっても灰褐色を呈し、窯体製品と考えられるため、やはり須恵器工人らを中心として製作されたものと考えられる。

この時期は羽釜の他にも多くの変化を持つ時期である。器種の組合せとしては土師器、須恵器が従来通りであり、新たに多くの灰釉陶器の搬入が認められる。土師器の器形は甕・小型甕、須恵器は環・甕・壺・羽釜と多くなり、灰釉陶器は甕が認められる。他に破片として須恵器甕の破片が41号住より29点、31号住より21点出土しており、須恵器窯による大型製品の焼成が伺える。それらの甕の破片は外側に明瞭な印目が残り焼き締めてあり、環や甕、壺が軟質化していく傾向と異なる。器形が大きいためかなり整形に注意を払い、還元焰で焼き締めなければ使用に耐え得る製品を作ることができなかったことを示している。そこに須恵器存続の一端を考えさせられる。他に緑釉陶器1片が44号住より出土している。

第3期土師器全体の様相

土師器は出現以来煮沸形態の主要的な位置にあり、古墳、奈良、平安時代前半を通し約600年間その機能の継続があった。それがこの第3期を境にその機能を羽釜が果たしていくようになる。そのため甕はしだいに存在価値が薄れてやがて消えてゆく。第1期以来土師器環の盛器としての役割がしだいに須恵器環・甕に取って変わられてきた。それが、第3期にはついに煮沸機能としての役割までも須恵器に取って変わられていくのである。もはやこの段階に至ると日常什器の主要的な位置を占めていた土師器は存在価値が薄くなってきたのである。そのため多くの土師器は終息の方向をたどり、少量の規格や作行に統一性を持たない甕類や、須恵器環・甕・羽釜の大量搬入がなく、日常什器として依然として土師器を必要とした地域のみ土師器は残留していくのである。先に述べたようにこの相違が地域色を持つ要因と考えられる。しかし土師器を製作した工人達は頭初から専門的な集団を構成していたとは考えがたいため、壊滅的な崩壊もなく、これ以降も細々と焼物の必要に応じて、その時の社会の要求に対応しつつ製作していったものと思わ

れる。しかしそこには前代に展開したような広地域単位で共通した製作や同一歩調で変遷していくような現象は認められなくなると思われる。古墳時代以来続いてきて、社会に大きな役割を果たしてきた統一性のある土師器はこの段階、第3期をもってその役割をほぼ終了していくと思われる。

土師器壺 第2期59号住6の段階になり、衰退の現象が見られる「コ」の字状口縁の壺は第3期41号住6になると、衰退の勢いが急速に早まり、52号住13の器内の厚い甕の出現をもって「コ」の字状口縁の壺は消滅又はいちぢるしい減少の傾向へと向かってゆく。衰退期と完成期の壺と比較すると、衰退期の壺の器内の肉取りは厚くなり、「コ」の字状の口縁が「コ」の字状成形の明瞭さを失ない、頸部周辺の上下のナデも弱くなり、内側も「コ」の字状を識別できるほどの明瞭な張り出しが認められなくなる傾向がある。完成期の21号住4の壺と衰退期の末期である52号住13とを比較するなら、器内の厚さは52号住13では21号住4の2倍強であり、「コ」の字状の口縁は21号住4が明瞭であるのに対し、52号住13は退化し、鋭さを失っている。明らかに大きな違いをそこに認めることができる。この衰退の傾向は器内の肥厚化の始まる第2期の59号住6に始まり、第3段階の41号住6になると明らかに相違が生じており、器内はより厚い傾向になる。「コ」の字状口縁は丸味を帯びて明瞭さを一段と欠いてくる。次に41号住6の中間の段階を経て、器内が口縁部を中心に胴部まで厚くなり、「コ」の字状の口縁を持ちつつも形骸化した52号住13に続いてゆくのである。

土師器小型壺(台付壺) 第3期の壺が器内の肉取りに厚さを持ち「コ」の字状口縁の形骸化を生じると同様、小型壺も変化してゆく。台付壺は前に述べたように当遺跡ではほとんど出土していないため実態は明らかでない。しかし第3期まで他の遺跡では存在しており、一部羽釜と共存することが考えられる。

編年に用いた小型壺(台付壺)は41号住5・44号住4、52号住11の3点はいずれも口縁部だけの破片であり、底部を持たない。しかしこのうちの44H-4以外は下半部に脚部が付く台付壺になる可能性がある。

41号住5は住居内の壺6同様に「コ」の字状口縁を持つ壺である。しかし同様に器内が肥厚化し、前段階の59号住の3とは明瞭な違いを示している。「コ」の字状の頸部の幅は59号住3の約半分になり、器内の肥厚は2倍近くになっている。この傾向は次の52号住11に至るとさらに明瞭になる。「コ」の字状の口縁は退化し明瞭さを失う。器内の厚さは59号住3の2倍強になり、その相違はなお一層の増大を見る。壺と同様な変化をたどるようである。整形は41号住5が口縁部横ナデ、52号住11は「コ」の字状の部分が退化しており、「コ」の字状の成形の意図はなされていない。この段階にあって従来からの小型壺・台付壺の系譜は終息するとしてよく、44号住4は「コ」の字状口縁の形を整えていない。器内が厚く短い口縁が上方向外側に立ち上がっている。この小型壺はそれ以前の器形に連続する直列のものではなく、機能的にその延長上にあるものの、独自の性格を持って必要に応じて作

土 師 器		須 恵 器	
甕	小型甕	坏	埴

第235図 第3期土器群 (1)

られた新たな亜種として理解される。この甕は次期の第4期へと続いてゆく、この小型甕は第3期の中に第4期への新しい動きとして把握されるものである。なお、後出の31号住11は底部に糸切痕を持つもので、全く異質な小型甕と言える。口縁はくの字状を呈し胴部に紐作りと思われる痕跡を残しており、全体に回転を伴う横ナデがなされている。この器形はこれ以降も出土していないため、一時的に存在した特殊な在り方と思われる。

第3期須恵器全体の様相

第1期前後に日常什器を主として量産に入った須恵器生産は、第2期になるとその埴形土器に灰釉陶器の影響を受けると前述した。しかし趨成としてこの段階での須恵器の果たしてきた役割は依然として大きく、ほぼ同じ役割を持つ土師器坏が激減する傾向にある。貯蔵機能を持つ壺・甕類は須恵器類に依存し、集落内で多用されている。しかし第3期に至り灰釉陶器が什器の一端

として集落内に多量に搬入されてくると、同じ盛器としての機能を持つ環、甕類は大きな影響を受けてくると解釈される。両者を比較してみれば機能上の優劣は明らかであり、須恵器環、甕が集落内で果たしてきた役割の1部をやがて灰釉陶器甕、皿が果たしてゆくことが考えられる。その過渡期にあたるのが第3期である。この中で須恵器環、甕は序々に変化し、減少してゆく。

灰釉陶器は環、甕だけでなく大型の甕も伴っており、遺跡内から228片の破片が出土し、甕の1234片の破片の1.6割弱の割合で搬入されている。しかし須恵器甕、壺類は須恵器出土量全体の約1割を占めているのみであり、しかも第1期から第6期まで須恵器甕、壺類は依然として利用されており灰釉陶器甕等の搬入により受けた影響については環や甕ほど大きいものであったとは思われない。

須恵器は本来的に煮沸機能を持たないものとして発展してきた。その機能は土師器が果たしてきたのである。それがこの段階になると煮沸具の羽釜が急速とも思える普及状況を呈し出現してくる。その時期は10世紀前半であり、初頭段階にはすでに出現している可能性がある。現段階ではその系譜の淵源をたどるだけの資料を欠くので今後検討していくつもりである。しかしこの段階に羽釜が採用された意味については次のように推測したい。須恵器は前述のように灰釉陶器の大量搬入により従来果たしてきた役割の1部をしいだいに灰釉陶器が果たしてゆく。須恵器工人は土師器製作者と異なり、小さいながらもある程度の集団を有していたはずであり、この集団は専業的でなくても生活の主要部分は窯業で支えられていたと思われる。この集団の生産する製品がしいだいに社会的需要の減少に伴い、工人達は新たな活路を求める必要性があったのは確かであろう。灰釉陶器はその性質上火を直接受けるもの及び大型の製品には適していない。この背景の中で羽釜という新しい煮沸形態を量産する必要があったと推測される。

須恵器環 第2期までの環は底部が大きく、焼成も堅緻で焼き締められたものが多い。やや軟質なものには甕に多い傾向がある。それがこの第3期になるとほとんどすべてが軟質になり、底部は小さく、器高は高くなり、甕の形に近づいてくる。この時期前半に口唇部の外反傾向が認められ、後半になるにしたがって口縁部全体が外反してくるようになる。このように第2期と第3期とでは環において明瞭な区画をすることが可能である。その変化は環の衰退を意味していると考えられる。それは次期の第4期前半になると環は甕とともに酸化焰焼成へと変化し消滅してゆく、土師器の甕が衰退し消滅した過程は一段階おくれて須恵器環・甕もたどってゆくのである。しかしこの動きは当遺跡で見られる現象であり、県下すべての動向ではない。県内のいくつかの窯跡群、例えば高崎市乗付窯跡群等においては、焼締りのある旧来どおりの還元焰焼成の技法を用いた環・甕・羽釜・壺類を焼成している例もある。第3期の県内各地の須恵器工人達はその内部に新しい動きと旧来の動きが地域色をもちつつ共存していたことを示している。

編年に用いた環は52号住7・8、31号住3・5である。52号住7は底径の小さく、器高の深い甕であり、器内の肉取りは口縁部までほぼ一定している。前段階の48号住4同様に口唇部の外反傾向はほとんど認められず、第3期で最も古い要素を持つ環である。底部

は磨耗しており、糸切痕をほとんど残していない。52号住8は口縁部がやや外反する燻焼成のおよんだ坏である。

ところで平安時代の須恵器焼成には大きく分けて2種類ある。それは還元焰焼成と酸化焰焼成である。もちろん両者とも窯体を使用していると考えられるため、この区別は窯体を使用しているかないかではなく、還元焰焼成を目的として焼成しているかないかによる。技術的には須恵器焼成技術の延長上にあり、焼成者の意図により両者とも可能である。ここでいう燻焼成とは両者の間に位置し、還元焰焼成に近い焼成方法により燻がおよんだと考えられ、むしろ作意性によるものである、この時期より須恵器環・碗類の焼締はなされなくなる。焼締を行なうためには大量の燃料と耐火度のある陶土と窯体が必要である。しかし前述のごとく集落内に大量の灰釉陶器が搬入され、須恵器が果たしてきた役割の一部を灰釉陶器が果たすようになると、須恵器に対する需要が必然的に減少し、その体制を維持することが困難になるのである。その段階で須恵器工人達はより省燃料による安価な製品を生産できる方法へと転換していくと考えることが考えられる。その一段階として現われてきたのがこの燻焼成である。高温で長時間にわたる焼成によらず、ある程度製品として焼成できるほどの状態に窯体内が高温に達した時、大量の燃料を投じ、窯閉して窯内を不完全燃焼の状態にし、窯体内に充満した炭素分を環・碗類の表面に吸着させる焼成方法を燻焼成と考えている。この期の須恵器の断面は灰白色又は灰褐色であり、表面のみ黒色を呈している。須恵器の還元焰焼成の本来はあくまでも高温、長時間焼成による還元焰焼成であるため、その間には大きな違いがある。燻焼成とは窯体構造の節略化、燃料の節約を大幅に可能にし、同時に製品の器面をもち密にする焼成方法と思われる。

31号住3・5は同じ貯蔵穴内より重なって出土した坏であり、胎土・焼成・寸法とも酷似し同巧のものと思われる。3・5とも糸切り底を持ち、底径は口径の $\frac{1}{2}$ 以下である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は大きくゆるやかに外反する。それは均整のとれた形である。当遺跡ではこの時期をもって還元焰焼成の須恵器環・碗は消滅し、第4期に至り酸化焰焼成の環・碗へと変化していくのである。

須恵器碗 碗は前段階に現われ、全体に深く弱い丸味を帯びた形を主としていた。口唇部にやや外反が認められたが、口縁部にまでは及んでいなかった。それが第3段階に至ると、丸味を持った深い碗が口縁部に外反を持つようになる。同時期の坏は数少ない燻焼成と大部分の還元焰焼成であった。しかし碗は燻焼成の段階を経て酸化焰焼成へと転換しており、須恵器環・碗における最初の酸化焰焼成の出現が第3期の碗をもって始まるのである。坏の項で述べたごとくこの傾向は第4期になると坏にも現われ、須恵器環・碗はすべて酸化焰焼成へと変化し、その後にかけて消滅してゆくのである。第3段階の甕の項で述べたように甕・壺に関してはその器形からくる制約のためか、還元焰焼成は続いていく。

編年に用いた碗は41号住4、44号住1・2、52号住3・5、31号住8である。41号住4は小さな破片であり、表面は燻により黒色を呈し、断面まで燻は及んでいないが灰白色を

呈している。坏とともにこの時期から甕にも焼成がおよんでくる。44号住2も焼成の甕である。器型は前代からの延長上にあり、口唇部に外反は認められるが、口縁部の外反は認められない。焼は断面内側にも及んでいる。44号住1は褐色を呈し、器内が全体に厚く、口唇部、口縁部の外反は認められない。須恵器生産体制の中で酸化焰焼成を目的として焼いた最も初期のものかと思われる。52号住3は褐色を呈している甕であり、焼成の変化とともに器形にも変化が現われてきている。それ以前の甕には口唇部に外反が認められたが、口縁部の外反は認められなかった。それがこの段階から少しずつ認められてくる。52号住5も酸化焰焼成であり、やや灰白色を帯びているため焼成技法に古い要素を残している。31号住8は、高い高台を持つ甕と思われる。他に出土例がなく、口縁部の残存がないので全体像をつかむことはできないが、ロクロ整形や全体の器形からみて甕と思われる。高い高台部は別個に轆轤上で整形し、糸切後底部と接合していると思われる。この焼成および成形から整形の一連の技法は次の段階に出土する土師質土器に通ずる。

須恵器壺・甕 第1期～第6期に至るまで、住居内より壺・甕の破片は出土しているがその量は少ない。しかし2万点以上の破片を出土した1～4号溝中に須恵器は約4700個の破片を含んでおり、その中で壺・甕は約2000個であった。遺物総数の約1割、須恵器の中では約3割近くが壺・甕類で占められている。壺・甕が破損すると、坏・甕の破損と異なり、破片数が圧倒的に多くなるということはあるが、決して少ない数ではない。しかし住居内に実測可能なものはほとんど残っていなかった。壺はこの第3期には数点実測可能なものが出土している。それらの壺も須恵器生産体制全体の傾向、つまり還元焰焼成から酸化焰焼成への動きとは無関係ではないと考えられ、還元焰焼成であることにはちがいないが、焼締ではなくやや軟質な焼成傾向となっている。部分的には灰褐色を帯びており、焼成の簡略化の傾向をそこに認めることができる。そのため壺の中には器表面の剥離しているものも認められるようになる。この器表面の顕著な剥落は特に軟質な焼成によるため、器表面か、間際にある小礫、小鉱物粒が凍結により器表の剥落を起こす凍ハゼという現象から起こったものと思われる。(ハゼにはこのほか2次焼成、風化作用でも生じる)この傾向は第4期でも同様である。

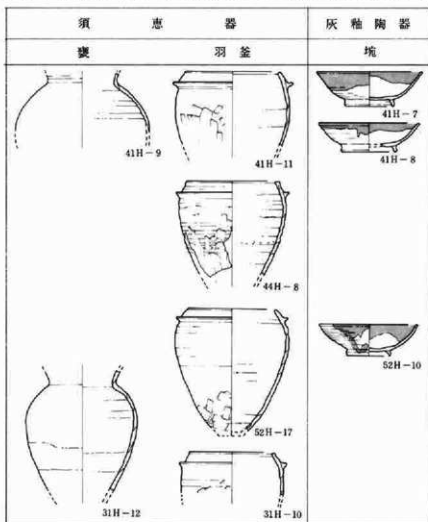
編年に用いた壺は41号住9と31号住12がそれにあたる。41号住9は壺の頸部～胴上半部の破片であり、器表面はほとんど剥離している。剥離されていない部分を見ると、叩目は認められず横ナデにより調整されている。須恵器表面の剥離は焼締られた製品にはほとんど認められない現象である。31号住12は口径の大きい壺であり、その器面の一部が還元焰焼成による灰白色を呈しているが、大部分褐色を呈している。器外面の大部分、内側の一部が剥離している。これは2次焼成により還元状態から酸化状態に器面の大部分が変化したものと思われる。器面内側は横ナデ、表面も残っている部分から見ると横ナデであったことを示す。

羽釜 羽釜は須恵器工人により製作されたものであり、土師器の「コ」の字状口縁甕の衰退な

第5章 調査成果の整理と考察

いしは消滅の時期に、それにとってかわる煮沸形態として登場してくる。またこの時期は前述のごとく、大原2号窯式の灰釉陶器が大量に集落に搬入された時期であり、灰釉陶器碗が、しだいに須恵器の環・碗の果たしてきた役割の一部を果たしていく時期である。須恵器工人達は羽釜という新しい器型製作へ力を注ぐ必然がそこに生じてくる。そのため羽釜は量産され、住居内より数多くの出土を見るようになる。須恵器であるため第3期の他の環・碗製品同様、初期の羽釜も還元焰焼成で焼かれているが、やがて第4期に入ると序々に酸化焰焼成へと転換していく、しかし羽釜は環や碗の終息と異なり、須恵器の主体的な製品となってゆくため、すべての羽釜が酸化焰焼成へと転化するのは第4期末または第5期に入ってからである。

編年に用いた羽釜は41号住11、44号住8、52号住17、31号住10である。41号住11は最も初期に出現した羽釜の1つである、還元焰焼成で焼かれており、灰色を呈している。焼成は良く、作りも丁寧である。口縁の整形は横ナデ、口唇部は平に削られ内側に強く傾斜し



第236図 第3期土器群(2)

ている。鈎は先端が平に削られており、断面は台形を呈し全体が上向きになっている。整形は胴上部より底部に向かい縦方向のヘラ削りがなされており、内側は横ナデ、内側の一部に紐作痕らしき凸凹が器面に認められる。44号住8も還元焰焼成の羽釜であり、口縁部は短く内傾している。口唇部も平でやや内傾している。鈎は断面三角形を呈し、上面は水平をなしている。52号17も一部に褐色を帯びているが還元焰焼成による羽釜である。全体に丸味を持ち、短い口縁が大きく内湾している。口唇部は平に切られており、大きく内傾している。鈎は断面三角形を呈し、細く弱々しい感じを受ける。最大径は胴中央部にあり、鈎貼付部ではない。器形でみれば最も古いものに属する可能性がある。31号住10は41号住11に似て固く焼かれた還元焰焼成の羽釜であり、短い口縁部が内傾している。これまでと異なる点として、羽釜の口唇部に弱い外反が現われることが指摘できる。この傾向は第4期、第5期へと一部で引きつがれていく傾向を持つ。

ここで古い羽釜についてその特色をまとめてみると以上である。

①羽釜全体が丸味を持っていること、②ほぼ還元焰焼成であること、③鈎から口唇部に至る口縁部が短いこと、④口縁部が大きく内傾していること、⑤羽釜全体の最大径は鈎貼付位置でなく胴上部にあること等があげられる。羽釜を詳しく観察すると鈎の果たしていた役割は、今日の鉄釜や土釜とは大きく異なっていることに気付く、今日見る鈎の役割には次の点が認められる。①カマドにかけるときカマド口に鈎をかけて、釜を支えること、②釜とカマドとの隙間を埋めること、③油煙や焙返しの際を持つこと等である。今日に見るそれらの役目を平安時代の羽釜は最初から果たしていたとは思えないのである。

灰軸陶器 第1期・第2期と住居内からの出土は4片のみであった灰軸陶器が、この時期より住居内に多く出土するようになる。灰軸陶器が量的に搬入されてくる時期は前述のごとく大原2号窯式以降であり、当遺跡でも大原2号窯式に先だつ製品は少ない。住居内より出土した灰軸陶器総量は104個、発掘区全体として溝その他住居内を合計すると1703片に及ぶ。この大部分が大原2号窯以降に当たるものと思われる。総量の中から碗・皿・瓶の割合を出してみると碗1234片、皿73片・瓶228片となり、碗が皿の約1.7倍、瓶の約5倍の量になり、碗の搬入が圧倒的に多いことを示している。第3期でほぼ完形の灰軸陶器を出土する住居は41号住・52号住である。破片を出土している住居は41号住で皿1片、碗13片、瓶2片で、44号住から碗2片、瓶2片、31号住から碗2片が出土している。破片でみる限り4軒のすべてから灰軸陶器を出土しており、第3期における灰軸陶器の普及度を示している。

編年に用いた灰軸陶器は、41号住7、41号住8、52号住10である。41号住7は愛知県陶磁資料館学芸員浅田員由、仲野泰裕両氏の御教示によれば、美濃窯の大原2号窯式にあたり、当遺跡内のはほぼ完形なものの中で古い1例である。高台は断面縦長の方形に近い形を呈し、高台内側は回転ナデにより糸切痕を丁寧に消している。体部下半にヘラ削りがなされており、軸は漬け掛けによりなされている。口縁は外に大きく開く浅い感じの施である。

41号住8もほぼ同じであるが、高台は太くなり、外面端部が少し削られている。体部下半の削りは認められない。52号住10は高台の断面が典型的な三ヶ月型を呈し、口唇部がやや外反しており、体部下半の一部にへら削りが認められる。浅田貞由、仲野泰裕両氏の御教示によれば光が丘1～大原2の段階にあたる。

④ 第4期類土器の概要について

土師質土器の出現をもって第4期とした。土師質土器の内容については第5章第2節③古代の遺物1「土師質土器について」を参照していただきたい。土師質土器は須恵器集団内での変化で生まれた埴・坏類を主体とする酸化焙焼成を中心とした土器である。この出現には社会・政治体制の変化に伴う社会的要請に応じて須恵器工人達の変貌、いっぽう灰釉陶器・木製埴等の出現と一般への普及が須恵器生産をおびやかす等のさまざまな背景があったと思われる。またこの段階には土師器・須恵器の衰退と変貌、灰釉陶器の大量搬入という第3期同様に大きな変革期でもある。この時期に出土する器種と器形は土師器で土釜、小型甕（台付甕）、須恵器で坏・埴・壺・甕・羽釜、土師質土器で坏・埴A・埴B・埴C、灰釉陶器で皿・埴・瓶等である。器種と器形が最も多く、多種多様な土器が出土する時期である。器種と器形が多いということは、それぞれが生産の頂部に達したことを意味しているのではなく、古い体制が衰退しつつ、新しい体制に変貌してゆく状況下であり、2つの流れが同時に存在しているためと考えられるのである。

第4期の土師器全体の様相

第3期の土師器全体様相の中で述べたように、第3段階で羽釜の出現により、統一性のある土師器は、古墳時代以来果たしてきた什器及び煮沸器としての役割をほぼ須恵器に譲っている。この第4段階では旧来の器種に近い小型甕が存続し、また新たな器種として土釜が出現してくる。これは土師器生産の転換期における新しい器種への試みである。

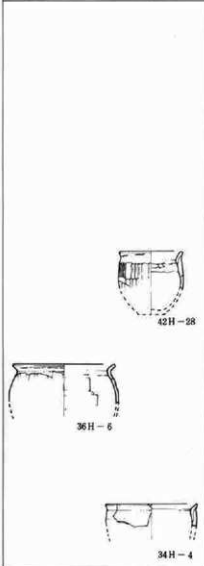
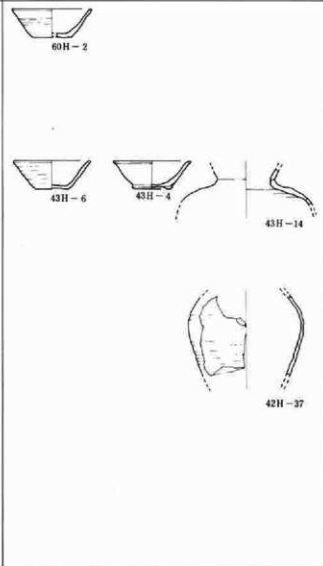
土師器土釜 第4期の土師質土器の出現をみる時期に、県内の多くの地域で土師器の「コ」の字状口縁の系列とは全く異質な系列上の甕が出土する。それは数種類があり、一群としてとらえにくい。器表を丁寧にへら削りで整形しているもの、粘土紐の形がよく識別できるような雑な作りのもの、丸い胴部を持つもの、長胴を持つもの、くの字状の口縁を持ち、最大径を口縁に持つもの、口縁が直立気味に立ち上がり、最大径を胴上部に持つもの等で、特徴は様々あり統一性に欠ける。この一群はすべて酸化焙焼成であり、轆轤も使用しておらず、窯体の使用も考えにくい。そのためこれを土師器工人達の延長上に位置し、出現したものと考えた。種々な形をなしているが、それを区分できるほどの出土量がなかったため、ここでは一括して扱う。その名称として県内では土釜と呼称されている。この名称や器形についての検討はなされていないが、それ以前の甕と区別するには通語かと思われる。ここでは先例にない用いることにした。さらに報告例が多くなり、実態が明らかきされた時点においてその正しい扱いがなされなければならないであろう。

編年に用いた土釜は36号住6である。口縁部は短く作られ外反し、横ナデにより調整さ

れている。口縁部は縦方向のヘラ削りで丁寧整形されている。焼成は酸化焰であり、かなり堅緻である。内面全体に横ナデがある。

土師器小型甕 第3期で「コ」の字状口縁の甕が消滅し、小型甕のみ残存してくる。これは第5期まで形を変えつつも存続している。

編年で用いた小型甕は42号住28、34号住4である。42号住28は器内の厚い甕であり、口縁部は「コ」の字状を呈していない。口縁は外反し胴部は丸味を持ち、口縁部に横ナデ、

土 師 器	須 恵 器
土 釜 小型甕	环 埴 甕
	

第237図 第4期土器群 (1)

第5章 調査成果の整理と考察

胴部上半に横方向へう削りが認められる。34号住4も器内が厚く、口縁部が強く外反する甕であり、内外面とも横ナデにより調整されている。

第4期の須恵器全体の様相

須恵器はこの段階で大きく変貌してゆく。坏はこの段階でほとんど酸化焰焼成に転換され、やがて消えてゆく。施も前段階の第3期より引き続き酸化焰焼成で焼かれ、やがて消滅する。貯蔵用の壺類はやや軟質になりながらも、この段階に至っても還元焰焼成で残る。大型甕は器形から来る制約のためか、かなり焼締られており、叩目も残り、須恵器本来の姿を残している。前段階に出現した羽釜は、この段階から次第に酸化焰焼成へと転換してゆくようで、還元のほか一部に酸化による褐色の混じった製品が多く現われる。この段階より出現した土師質土器は、当初から多くの器形をもうけ、大量に作られている。

須恵器環 60号住2は、須恵器環として酸化焰焼成に転化した初期段階のものである。施はすでに第3期より酸化焰焼成に変化しているが、旧来の器型上にある環は還元焰焼成を維持していた。しかし第4期になるとついに酸化焰焼成へと転化してしまうのである。器形も第3期後半は丁寧な作りで、口縁部のなだらかな外反が認められるが、第4期になると衰退し、粗雑な作りの環へと変化してゆき、口縁部の外反も少なくなる。43号住6は須恵器環の終末段階にあたり、これ以降にはほとんど出土しなくなる。数百年におよび一般に広く普及し、量産されてきた焼締、作りの丁寧な環であっても、灰釉陶器・土師質土器・木製品等新たな製品の出現により、社会の中で果たしてきた盛器としての役割が薄れ、次第に消えてゆくのである。この段階の環は底径が小さく、口縁部の外反も少なく全くの酸化焰焼成である。

須恵器塊 第3期末に高い高台を持つ塊が現われ、新しい動きとして病に新たな器形等を出現させるかと思われたが、それもなく環とともに第4期になると消失するのである。

編年に用いた塊は43号住4である。この塊は酸化焰焼成であり、器内が厚く全体的にはぼったりとした作りである。高台は低部糸切後粘土紐を粗雑に貼りつけて高台としている。口唇部はやや外反しているが、口縁部の外反はほとんど認められない。

須恵器壺 軟質ではあるが、還元焰焼成で焼かれている。須恵器環、塊の焼成技法の変化は還元焰焼成による焼締から、やや軟質な還元焰焼成へと移行し、ついに酸化焰焼成へと転化していくが、壺はこの段階まで還元焰焼成を保っている。

43号住14は肩部の強く張る壺である。器表はすべて横ナデ調整がなされており、色調は一部に褐色を帯びている。42号住37は肩部より胴上部のみの破片で、内側胴部に紐作り痕が認められ、焼成や整形等は43号住14にほぼ同じである。

須恵器甕 壺は数少ないとは言え、第3期より実測可能なものが出土している。しかし甕は破片のみの出土であった。実測可能な甕の大きな破片が42号住より出土している。壺と異なり大きなものを製品として製作するためか、成形、整形も壺と異なり、器表に平行叩き目、内面に凹状の当て目が認められる。非常に堅緻な焼物になっており、この時期の環、塊類にはほとんどなき

れなくなった焼締焼成による。このことは大型の器形のため旧来の技法で成作、焼成せざるを得ない事情と同時に須恵器工人達は旧来の技法を引き続き継承していることを示している。

羽蓋 第3期に出現した羽蓋は、還元焰焼成であった。それがこの段階に至ると次第に酸化焰焼成へと変化していく、しかし主体が酸化焰焼成に転換するのは第4期末から第5期に入ってからである。この時期は両者混在の時期であり、酸化焰焼成のものと、1個体の中で一部が酸化、一部が還元焰であるという状態のものがある。後半に至ると大部分が酸化気味の色調で一部に還元気味の部分が残るというような色調になる。口縁部は次第に内傾気味から立ち上がり、長さも増してくる。

編年に用いた羽蓋は60号住7、43号住18、42号住30、36号住7、34号住8である。60号住7は口縁が内傾しており、やや古い要素を持つ、胴下半の一部が酸化気味であるが大部分還元焼成である。断面四角形に近い鈎はやや下向き、端部中央に沈線がめぐり、ヘラ削りは胴中より下部に向かいなされている。43号住18は全体に淡い褐色を帯びており、酸化焰とも還元焰とも区別しにくい一群であるが、酸化焰焼成のものとして取り扱う。鈎は細く、端部は平になっており、口縁部はやや内傾しているが、それ以前のものと比較すると直立化が目立つ。口唇部は肥厚し、端部は平に削られており、器面外面とも横ナデである。42号住30も全体に淡い褐色を帯びており、43号住18に共通した焼成となっている。鈎は扁平で先端部はやや丸味を持ち、口縁はさらに長くなり、直立気味に立ち上がってゆく。口唇部は平に削られており、やや内斜している。口縁部～胴上部まで横ナデ、中央部より下は底部に向かい縦方向のヘラ削りである。36号住7は一部に強い褐色を帯び一部が灰白色を呈しており、一つの羽蓋内で両者が共存している。鈎は太く断面三角形を呈している。口縁部は長く、やや内傾しているが直立気味に立ち上がり、口唇部は平に削られ、やや内斜している。34号住18は灰褐色を帯びており、小さい鈎は断面三角形を呈しており、口縁部は長く、直立気味に立ち上がり、口唇部は肥厚し端部は平に削られている。

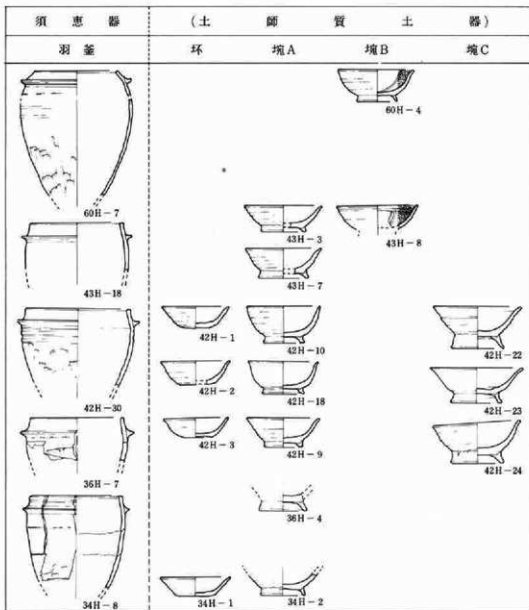
土師質土器 土師質土器碗には器形及び技法の特徴からA・B・Cと3区分できた。碗Bは内黒技法を持つものである。この技法を持つものの中にロクロ整形を主とするものと、ロクロ整形を用いず、削りにより整形していく一群の2者を含む。同じ内黒であってもこれは明らかに異なるものである。ここではロクロ整形を用いたもののみを土師質土器碗Bとして扱った。それ以外のは他に器種を考えていくべきであると考え、当遺跡では出土量あまりにも少ないため今後の課題とした。

土師質土器坏 底部糸切部分が極めて小さいことに対し、器高が低く口径が大きい特色を持つ。口唇部が少し外反しており、胎土は全体に砂質であり、表面の細かい胎土が多く剥落している。セロテープを表面に貼るとテープに胎土が付着し、器からテープがたやすくはがれてしまう特徴を持つ。大部分が42号住2にみられるように褐色を帯びているが、42号住3のように体部の1部分に焼しを受けているものも認められる。

第5章 調査成果の整理と考察

土師質土器塊A 土師質土器類の代表的な器型である。42号住10が中でも典型で、体部はやや内彎しつつ丸味を持ちながら立ち上がり、口唇部まではほぼ同じ厚みに整形されており、口縁部に至りやや薄くなり、口唇部を丸くまとめている。外観上は深い碗である。高台は前代の須恵器碗のような雉な体裁でなく、実に丁寧な作りである。高さ、幅、厚さなどの量目は一定しており、高台の先端内側に小さな沈線をめぐらしている。この技法は10世紀代の須恵器にはほぼ見られない独特なものである。焼成は環同様に大部分が一定し、褐色を呈している。

編年に使用した碗Aは43号住3、43号住7、42号住10、42号住18、42号住9、36号住4、



第238図 第4期土器群 (2)

34号住2である。43号住3は高台部内面に糸切痕を残し、高台は太く丁寧に貼付てある。体部は外傾気味に立ち上がり、丸い口唇部に至る。43号住7は高台がやや大きいのが、3にはほぼ共通している。42号住18は灰色を呈し、還元焰焼成の甕であり、器型は10に似ている。42号住9は高台部内面の糸切痕をナデ消し、再調整しているが、その他は43号住3に共通している。36号住4は高台部のみが残存であり、高台は42号住10に共通して丁寧に作りである。34号住2は高台部と体部下半のみが残存であり、高台部内面は糸切痕を消し、再調整している。高台は貼付後丁寧に整形している。

土師質土器境B 内面研磨した後に黒色処理を行なった内黒甕である。内黒とは旧来土師器の技法に認められたものである。それがこの時期に須恵器の一系列上にある土師質土器境に用いられてくるのである。これは前代の土師器からの内黒処理の影響下で成立したものか不明瞭であるが、器型上後代の木製甕に酷似するため、木製甕の急度の普及が当時介在したとすれば、この黒色処理は土師質土器製作者達が、木製甕製作者に対峙すべく、内黒処理を技法導入か創意したものと考えられる。この場合内黒処理の目的は、炭素分の吸着により器面の吸水率を減じ、塗製の木器甕の吸水率にせまろうとしたのではないだろうか。ここに漆塗の木製甕製作が土器製作に対峙していたことを想定しておきたい。出土量は多くないため、大量には使用されていなかったことを示していると考えられる。

編年に用いた甕Bは60号住4、43号住8である。60号住4の内黒甕は素地が灰褐色を帯びており、やや還元気味の酸化焰焼成となっている。断面形細長い高台がつき、内面はよく磨かれた後にへらにより「X」状の印が書かれていた。黒色処理の薄い内黒甕である。43号住8は内面をへらで良く磨いた後に内黒処理をしており、光沢を持つ。炭素分の吸着は内側のみでなく、口縁外側まで及んでいる。

土師質土器境C

高い高台を持つ甕である。整形や胎土、焼成等は土師質土器そのものであるが、口唇部に弱い外反を持つところから、須恵器境の影響をやや受けていると考えられる点で他と異なる。42号住23は灰白色を呈し、還元焰焼成で焼かれている。これと同じように土師質土器の中で還元焰焼成で焼かれているものに、42号住3の環、42号18の甕Aが認められる。このことから土師質土器は窯体を用いて焼成したと推定される。この窯体と、整形や切離時での轆轤使用の2点は、本来的には須恵器工人達の技術から来ているのである。

編年に用いた甕Cは42号住22・23・24である。42号住22は淡い褐色を呈しており、酸化焰焼成である。口縁部はやや外反し、底面には糸切痕が残る。糸切後の底部に、高く細長い高台を丁寧に貼付けている。体部に水挽成形では見られない粘土間の接合面が認められたため、紐作り成形の可能性が高い。42号住23は体部に回転を伴う横ナデにより丁寧に仕上げられている。高台端部がやや外側に張り出しており、底面は平に削られている。42号住24は22にはほぼ共通した器形整形がなされている。高台はやや太目で短く、高台貼付接

第5章 調査成果の整理と考察

合面によって割れ目がほぼ一周回っている。

第4期の灰軸陶器全体の様相

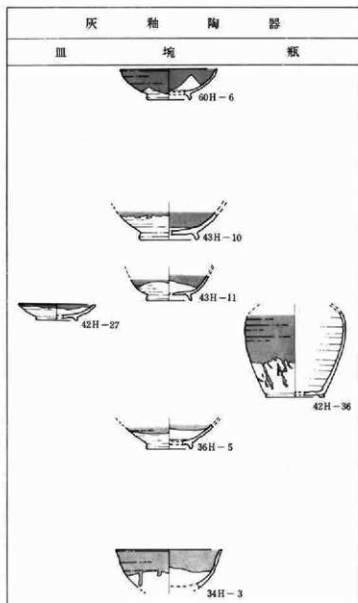
第3期から住居内に量的な出土を見た灰軸陶器は、第4期に至るとさらに数を増してくる。前代には破片しか出土しなかった皿、瓶が半分以上の残存をもって多量に出土してきており、埴は前代から引き続きほぼ完形のものが出土している。埴は前代から高台が三ヶ月型に変化しておりそれが次第に丸味を持つ三ヶ月型へと変化していくようである。さらに高台部内面の糸切痕は、第3期、第4期前半まではいいねいに再調整して消されていたものが、第4期後半の36号住の段階に至ると消されなくなる。

器形としては体部から口縁部にかけて大きく外側へ開いていたものが、直立気味になり、深さを増していく傾向にある。

灰軸陶器皿 この第4期にはほぼ完形の皿が伴っている。しかし、住居内からの出土量は埴に比べて少ないようである。

編年に用いた皿は42号住27である。器高の低い皿であり、高台も低く断面は台形を呈する。高台部内側は回転ナデにより丁寧に整形されており、糸切痕も丁寧に消されている。軸は演け掛けにより掛けられている。

灰軸陶器埴 前期の第3期にはほとんどが大原2号窯式に属しているが、この段階の第4期後半には大原2号窯式の製品と、後半に



第239図 第4期土器群(3)

は体部が直立気味に立ち上がり、深さを増してくる虎溪山1号窯式と思われる製品が住居内に搬入されてくる。

編年に用いた甕は60号住6、43号住10、43号住11、36号住5、34号住3である。60号住6は高台の断面が三角形を呈する甕である。43号住の10は太い高台が断面三ヶ月形を呈するが、鋭さを失い丸味を持っている。高台部内側は回転ナデにより丁寧に糸切痕を消している。43号住11は細い高台を持ち、端部は丸味を帯びている。高台内面は回転ナデにより丁寧に糸切痕を消している。体部はそれ以前のものより直立気味に立ち上がり、深い甕型になる傾向がある。36号住5は太い高台を持ち、端部は丸くなっている。高台部内側は糸切痕を残している。34号住3は深い甕になると思われる。

灰釉陶器瓶 前期の第3期から破片としての瓶は住居内より数点出土しているが、実例可能なものはほとんど認められなかった。またこの第4期でも量は少なく、第5期に至ると破片も出土しなくなっている。

編年に用いた瓶は42号住36である。この瓶は胴部～底部にかけて%以上を残している。

胴部内面と底部との境には接合痕が残り、高台は紐状の粘土を誰につけて高台としている。内外面横ナデ、施釉は胴上部のみ刷毛塗りによりなされている。

⑤ 第5期類の土器の概要について

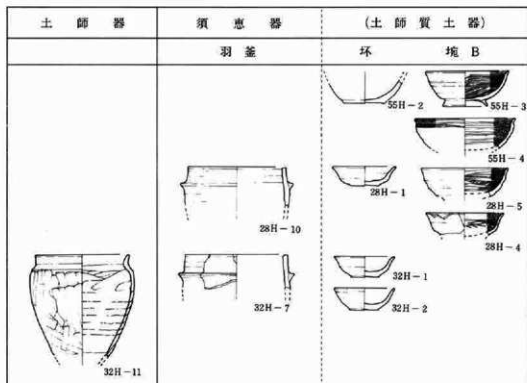
平安時代の焼物集団が器形と量を減少させ、衰退と没落の始まる段階である。編年基準としては土師質土器塊A、塊Cの消滅をもって第5期の始まりとしている。

この段階の焼物は、土師器工人達の延長上に位置し出現したと思われる土釜及び須恵器としては羽釜が多く出土するのみで、壺、甕では破片のみであり、環、塊類はほとんど出土しない傾向にあり、須恵器の系統の亜種である土師質土器は、前代に出現したにもかかわらず、この段階になるとすでに器形を減少させ衰退へと向かう。4器形あったものが2器形に減少してしまうのである。灰釉陶器は依然として大量に搬入されてくる。破片としては土師器小型甕、須恵器壺、甕が住居内より出土しており、使用されていた可能性の高いことを示している。

第5期の土師器全体の様相

第4期より出現してきた土釜が、この段階も引き続き利用されている。小型甕も実測可能なものは認められなかったが、存在していると思われる。旧来の土師器から変質したこの一群は次の第6期へも同様な器種揃で続いていくのである。

土師器土釜 土釜は第4期に出現した。それは前に述べたごとく、現状では不明な点が多い。そのため器形・整形・胎土の違いが時期差であるのか、土釜出現期における不斉一性からくる器形の違いなのか不明である。36号住6、33号住12、32号住11の3点とも器形、整形が異なっており、土師器工人の延長上にくる工人達の製作したものという共通性はあっても、そこに大きな不斉一性が認められるのである。他の遺跡を何うとさらに異なる器形、整形のものが存在している。それに加えて羽釜と同じ胎土、整形、焼成であり、胴部の破片を見るなら、羽釜・土釜のど



第240図 第5期土器群(1)

ちらに属するのかが不明なもので認められる。一部では羽釜と土釜が同じ工人の手により製作され焼成されているものもあるのであろう。このようにこれら土釜の一群については、今後の資料の増加を待って実態を追求してゆきたい。

編年に用いた土釜は32号住11である。この土釜は口縁部が外側にやや開くが、直立気味に立ち上がっており、36号住6の頸部がくの字状に外反しているのと比較すると大きな違いである。整形は外面縦方向へラ削り、胴下半は斜め方向のへら削りである。内面は横ナデであり、数ヶ所に粘土紐の紐き目が認められる。

第5期の須恵器全体の様相

第4期に多くの器形を持った須恵器は、この段階に至ると器形の淘汰とも云うべき減少を見せる。环埴はほぼ出土しなくなり、破片としては甕・壺が数点出土しており、羽釜のみが確実に住居内に残存していく。土師質土器は4器形から2器形に減少している。

羽釜 前代までの羽釜は、還元焰焼成と酸化焰焼成の混在したものであった。しかしこの段階になると完全に酸化焰焼成に落着いている。器形は口縁がさらに長くなり、直立気味に立ち上がっている。羽釜はこの段階において煮沸機能を持つ唯一のものと思われるため、他の器種や器形が減少しても依然として利用された傾向にある。

編年に用いた羽釜は28号10、32号住7である。28号住10は褐色を呈する酸化焰焼成の羽

釜である。鈚は断面三角形を呈し、口縁部は長くなり直立気味に立ち上がる。口唇部は一段と肥厚し、端部は平に削られている。口縁部内外面や鈚、胴上部は横ナデにより整形されている。32号住7も28号住10にはほぼ同様であるが、口縁部はさらに長く直立してゆく。

土師質土器 環 木製甕に原形を持つと思われる土師質土器も、出現期には大量に製作されそれなりに社会に受け入れられてきたと考えられる。しかしそれも木製甕の大量生産、大量流通が想定される状態の中では一時的な現象であり、盛器としての役割のほとんどは木製甕にとって変わられて減少していくと考えたい。4器形あった土師質土器は、この第5期に至ると2器形に減少してゆく、それも後に灯りとして利用された例の多い環と、土師質土器でもより丁寧に整形された甕Bの内黒甕の2器形であり、他は壊滅的減少傾向をたどるのである。この段階以降什器の盛器としての役割の大部分は、木製甕によって果たされてゆくものと考えたい。

編年に用いた環は55号住2、28号住1、32号住1・2である。55号住2は第4期からの流れの上に出現する環で、やや大形である。28号住1は底部が小さい環で、体部から口縁部への移行点で大きく口縁部が外反しており、体部と口縁部との間が明瞭に区画される。また体部下端と底面との間に弱い段を持っている。これらの特徴は前段階の環には認められなかったことである。この特徴は次の32号1・2にも共通して認められるため新しい要素であると考えたい。

土師質土器 甕B (内黒甕) 第4期に他の甕とともに出土した甕Bは、第5期に入ると出土量はやや増加してゆく傾向を示す。甕Bの変遷を読みとることは出土総数が全体的に少ないため現状ではできないが、可能性としては小型化へ向かうことが考えられる。この甕もやがて消失していく。

編年に用いた甕Bは55号住3・4、28号住4・5である。55号3は甕の内側をへらできれいに光沢を持つように磨いており、その後で炭素吸着による内黒処理を行なっている。へら磨きの方向は口縁部分が口縁と同様の横方向、内側底面は一定方向の直線で平行に磨いている。高台は細長く外側へ大きく開いており、高台部内側は回転ナデ調整を行なっている。28号住4や5も同様な整形である。28号住4は器内が薄くやや小型化した甕である。

第5期の灰釉陶器全体の様相

灰釉陶器は前段階の第4期に住居内より多く出土した。その段階が当遺跡では最も多くの灰釉陶器の搬入された段階と考えたい。製品としては光ヶ丘1号窯式及び虎溪山1号窯式の製品が一部で、多くは大原2号窯式のものと考えられる。この第5期に至ると、住居内より灰釉陶器の出土は確実に認められるが、その量はけっして前段階をしのぐ量ではなく、少なくなっているようである。製品としては大原2号窯式のものや丸石2号窯の製品を含み、丸石2号窯式の製品と思われる甕高台部内側には糸切痕が明瞭に残存している。このように灰釉陶器の終末期に近い段階の製品がしだいに搬入されてくるように思える。この段階以降、住居内に灰釉陶器が搬入される量は急速に減少していくものと思われる。

この第5期には口径の小さい小型の段皿が出現してくる。

第5章 調査成果の整理と考察

当遺跡における灰軸陶器は東濃を中心とした地域で生産された製品が搬入されたものであると考えられる。他国よりの搬入品であるため、全体としては光ヶ丘1号窯式→大原2号窯式→虎溪山1号窯式→丸山2号窯式の流れにそって住居内より出土していると考えられるが、大原2号窯式の製品は第3期～第5期まで住居内より出土しており、生産地と消費地における実体とがかならずしも一致していないことを示している。またこのことは、当遺跡へ搬入された製品の中で大原2号窯式の製品が最も多く、長期間にわたり搬入され続けた可能性を示している。

灰軸陶器段皿 灰軸陶器皿は前段階より出土しているが、段皿はこの段階から出土するようにする。しかし量は少なく整形や施軸もていねいになされていないものが多いようである。

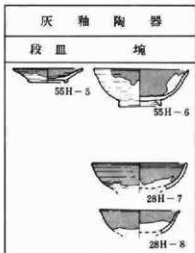
編年に用いた段皿は55号住5である。小型の段皿であり、段部は鋭い区画を持たずに、なだらかな段を成している。高台は太く低く全体に丸く整形している。高台部内面は回転ナデにより丁寧に糸切痕を消している。施軸は漬け掛けによりなされているが、非常に薄い。

灰軸陶器碗 前段階より引き続き深い碗が1部で出土している、破片を含めて出土量は減少していく。

編年に用いた碗は55号住6、28号住7・8である。55号住6は深い体部に高い高台を持つ碗であり、丸石2号窯式に属するものと思われる。高台部内面には明瞭な糸切痕を残している。28号住7は浅い体部の碗であると思われる。28号住8も似た器形であり、両者とも大原2号窯式に相当するものと思われる。

⑤ 第6期類の土器の概要について

古代土器製作集団の衰退と没落の段階であり、この段階を経過すると土器の大部分が出土しなくなる。おそらく従来からの土器は、ほとんどが作られなくなっていくものと思われる。同時に従来多くの土器を出土してきた竪穴穴住居もほとんど検出できなくなり、それに変わる新しい住居形態の検出もできなくなっている。遺物・遺構の再面とも不明確となり、現状における考古学的方法では解明されにくい時代へと入っていくのである。土器の減少、消滅とは、焼物の果たしてきた煮沸器、什器（盛器）貯蔵器等の役割を他のものが完全に交替してその役割を果たしてきたことを意味する。第6期以降の11世紀後半という時代は、住居形態、生活用具など生活様式全般にわたり、大きな変革を持たらした時期と考えられる。当遺跡でこの段階の住居は1軒確認された。



第241図 第5期土器群(2)

第6期の土師器全体の様相

第5期同様に土師器から変質したと考えられる一群の土釜・小型甕は、細々と続いてゆくようである。

土師器土釜 54号住に土釜は出土していない。しかし他の遺跡ではこれ以降も出土しており、第6期終末まで存在しているであろう。






土師器小型甕 器内の厚い小さな甕である。これも土釜同様に不明な点の多いものであり、土師器という範疇には入れて取り扱ったが、どの系列上に位置するものか不明である。

編年に用いた小型甕は54号住9である。この小型甕は器内の厚さが底部、胴部、口縁部とほぼ一定しており、器面内外面とも粘土紐の接合痕を多く残す整形である。比較的大きい底面には、粘土板の接合痕が残る。口縁部はゆるやかに弱く外反する。

第6期の須恵器全体の様相

須恵器は第5期に多くの器形が淘汰され減少した。この傾向は第6期に至るとさらに進み、土師質土器環、埴Bもこの段階にはほとんど出土しなくなる。新たに従来灯明皿と称されていた器形の土師質土器の皿が出現してくる。この皿の出土量は当遺跡では少ないが、住居内より多く出土している遺跡も県内で認められる。他に羽釜や、破片として甕・壺が出土している。

羽釜 煮沸機能を持つ羽釜は、確実に住居に伴っている。この段階になると一定の形に落ちついたためか、あまり器形上に顕著な変化はみられなくなる。第5期同様すべて酸化焙焼成で焼かれている。第6期以降になると、一部に羽釜は続くがその量は減少し、大部分は消滅してゆくものと思われる。このため煮沸機能が他に取って変わったとすれば、それは近年竪穴住居址から出土例のある鉄釜の存在を考慮しなければならぬであろう。また羽釜が鉄釜⁽¹¹⁾に変わる段階において、羽釜は何らかの変革を示し、それに対抗することが考えられる。新しい鉄釜を羽釜に写したものの存在が想定されるのである。それに関係したと思われる羽釜が県内で数点出土しており、今後資料の増加を待って検討していきたい。鉄釜自体は鉄の材料として再利用可能なため出土例はほとんどないであろう。しかし羽釜に変わる煮沸機能を持つものとして、鉄釜の存在を想定することは、あながち無理なことではないと思われる。

土 師 器	須 恵 器	(土 師 質 土 器)	灰 釉 陶 器
小型甕	羽釜	皿	皿
 54H-9	 54H-12	 54H-2  54H-1	 64H-7

第242図 第6期土器群

第5章 調査成果の整理と考察

編年に用いた羽釜は54号住12である。この羽釜は器内の厚さがほぼ一定し、胴部～口縁部がほぼ直立しており、口縁部は少し外反している。短い鐔は弱々しく貼付けてあり、断面三角形を呈する。口唇部はほぼ水平に削られている。胎土に多くの鉱物や砂粒を含む。

土師質土器皿 底径が大きく、器高の低い皿がこの段階から出現してくる。従来の環は底径が小さいが、器高は底径の半分以上あり、底径は口径の約 $\frac{1}{2}$ あった。それがしだいに小型化していく傾向にあった。それがこの段階に突如として器高は底径の $\frac{1}{2}$ 以下にまで低くなり、底部は大きく口径の $\frac{1}{2}$ 以上、 $\frac{2}{3}$ に近い状況までになっていく。この皿は他の遺跡でみるなら、次第に底径を増して発展し、B軽石直下の鳥羽S K332土壇の皿⁽¹²⁾へと近づいていくことが考えられる。

編年に用いた皿は54号住1・2である。54号住1は底径が大きく、底部の厚い皿である。口唇部に油煙が認められ、灯明皿として用いられていたことを示している。54号住2はさらに底径が大きくなり、体部もやや直立気味になってゆく。胎土も従来の土師質土器とは異なり、酸化鉄を多く含み、原料の選別自体にも異質土が認められる。

第6期の灰釉陶器全体の様相

灰釉陶器の生産は丸石2号窯式をもってほとんど終了し、山茶壺生産へと変貌してゆくと考えられている⁽¹³⁾。県内における灰釉陶器は最終段階の丸石2号窯式に相当する段階まで伴う。55号住5・6と54号住7は、その段階の製品と思われる。この3軒は同時に県内において灰釉陶器を出土する最終段階の住居の1つになる可能性が高い。

灰釉陶器段皿 この段階の住居は1軒のみの確認であり、灰釉陶器の県内搬入量が減少している段階にあると考えられるため住居内の出土例は少ない。54号住7の段皿1点のみであった。

編年に用いた段皿は54号住7である。この段皿の段部は鋭い区画を持たずに、なだらかな段となっている。高台は細長く、高台部内側は糸切痕を明瞭に残している。釉は薄く漬け掛けにより施釉されている。

4 年代観について

第1期～第6期に至る土器群の年代観について考えてみたい。これらの土器群は、平安時代における当地域の土器生産の在り方、あるいは流通、消費の状況を反映していると考えられる。それらの内容をより理解するため、それぞれの時期に実年代を与え、土器に反映された社会状況、土器生産体制の変化をくみ取り地域史の構成に寄与する必要があるであろう。しかし実年代を考える資料は少なく、その抽出は困難と不正確さを伴う。土器に与える年代観は、あくまでもその土器が使用され、廃棄された時点での年代観であり、製作時の年代ではないからである。そこで使用、廃棄され年代観を有する土器を、年代の基軸とし、住居相互の重複関係や、土器型式から、その間に位置すると思われる土器群をそこにあてはめ、推定年代を与えていく方法をとりたい。使用する年代の基本軸となりうるものは、あくまでも県内で確認できる資料を中心とし、県外のものも参考補足資料とした。

① 年代決定の軸とした資料の検討

1 貨幣に伴なう須恵器・埴の年代

実年代を知る方法として、鑄造時点の明瞭な貨幣と共存した土器から、その土器に年代観を与えていく方法が考えられる。貨幣は製作、使用、所有のあり方、価値観、廃棄理由等に多くの問題を含んでおり、さらに遺構の性格によっても異なってくる。そのため出土した貨幣の鑄造年代をもって貨幣の埋没年代に近いと考えるには大きな危険が伴う。しかし実年代を得る資料の貧しい遺物の中でその果たす役割は大きい。貨幣に伴なう土器は、その貨幣より新しいということが、通常の場合は考えるため、社会的背景や遺構の性格等を適切に検討すれば、有力な資料となり得るのであろう。県内において奈良、平安時代の貨幣、皇朝十二銭の出土例は下記のとおりである。

この中で、当遺跡に近い年代であり、伴出遺物を伴っている遺跡が2例あげられる。1つは万年通宝(860年初鑄)を伴っている松井田町愛宕山遺跡であり、他は貞観永宝と寛平大宝を出土している観音山古墳の周溝内の土坑である。両者は須恵器・埴を後者は埴を伴っている。

松井田町愛宕山遺跡4号住出土の須恵器は、第244図に示したセット関係を有している。埴はすべて糸切り後の無調整である。口径対底径比は約3:2であり、底径の大きさが目立つ。埴の体部は直線的に外傾し、体部に多くのクロ目を残す。埴蓋のつまみは中央部凹型となる。瓶は2ヶ体出土しており、土師器は埴の内黒1点のみに限られ、圧倒的に須恵器の占る割合が多い。万年通宝の初鑄は760年であり、この土器に8世紀末～9世紀初頭の年代観を与えたい。

観音山古墳の周溝を掘り込んで土坑が作られていた。その土坑内より須恵器埴1個体と鉄製品の一括が、貨幣を伴って出土した。貨幣は4枚重なって出土し、芯側の2枚のみ判読できた。貞観永宝(870年初鑄)と次の段階の寛平大宝(890年初鑄)である。須恵器埴は第245図に示したごとく、底径の小さな埴である。高台はきれいにはずれているが、高台を貼付けたときの粘土質

遺跡名	出土銭名	数量	性格	伴出遺物	
芳賀工業団地内遺跡 愛宕山遺跡4号住	神功開宝	1	集落址	須恵器瓶	談壳新聞による。 井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」群馬県史研究8昭和53年。 (高崎市教育委員会)「引間遺跡」1979年。 勢多郡宮城村誌(昭和48年)
	万年通宝	1	#	土師器埴(内黒) 須恵器蓋、埴、瓶	
引間遺跡2号古墳	和同開宝	1	古墳	須恵器壺、甕埴、 埴蓋	
白山古墳	和同開宝	8	古墳	蔵手太刀、鏡(佐 波理)、鉄環、直刀	
観音山古墳	貞観永宝	1	墓埴	鉄製品 須恵器埴	報告書近刊
	寛平大宝	1			
	不明	2			
熊野堂遺跡	和同開宝	1			現地見学会による 大江氏の御教示による
鳥羽遺跡	#	1			

奈良・平安時代における貨幣の出土例

が底部に残っている。底部糸切り痕も、高台の貼付に伴う整形を受けているため、明瞭さを欠いている。口縁部はゆるやかに大きく外反しており、清里、陣場遺跡の31号住3・5に高台はないがよく似ている。焼成は還元焰であり、やや軟質となっている。これに伴う須恵器碗に10世紀前半代の年代観を与えたい。

2 文献から考えられる須恵器杯の年代

天平13年(741年)聖武天皇は国分二寺の造営を発願した。上野国(群馬県)においても、これを受け国分二寺の建設へと動き出したと思われる。天宝勝宝元年(749年)に至り、それに対する地域の動きが具体的に史料に現われている。『続日本紀』11に上野国分寺に知識物を献する記事2例である。この年は東大寺大仏が開眼した年であり、天皇の発願からわずか8年後である。そのため史料時点での国分寺の実態が現在の遺構に相当するのかは疑問が残る。しかしこの文献から少なくとも国分二寺造営のための造寺司的組織は確立し、それに向けて動き出しが確かであったことを示すと考えられる。したがって今日残る基礎的な遺構はその時期に近い頃に存在したものである。国分寺造営創建瓦の生産は笠懸窯跡群にあり、創建期に作られた軒丸瓦は、上野国分寺式ともよべる独特な意匠を持ち、上野国分寺系瓦と呼びたい。それは第243図のとおり高句麗系と新羅系の両方の流れを汲んだと見なされ新しい意匠であった。これを焼成した笠懸窯跡群では創建軒丸瓦を焼いた窯跡に隣接して第243図の須恵器杯が出土している。その杯は褐色を呈しており、焼成は不良である。平底中央部以外は全面回転磨削により調整されており、底部中央は同心円状のヘラ削りとなっておらず、平行な整形痕が残る。それを糸切り痕とは明言できないものの、ヘラ削りとはし得ないため糸切りにより切り離された可能性ありと考えたい。平な底部は中央部に行くに従って上へ盛り上がっている。この点からも、糸切りの可能性は高い。この須恵器は、国分寺創建瓦を焼成した時期とほぼ同期にある可能性が高く、8世紀後半代その中でも8世紀第3・4半紀の年代を与えたい。

県外の資料であるが、関東地方では須恵器年代決定の大きな拠りどころとなっているものに武蔵新久窯跡出土の須恵器があげられる⁽¹⁴⁾。『続日本記』承和12年(845年)三月条に、武蔵国分寺七層塔が承和2年(835年)に焼失したとの記事が記されている。発掘の結果から報告者は国分僧寺塔再建のための遺瓦が行なわれたのが、新久窯そして八坂前窯・谷津池窯などの東金子窯跡群であったとした。瓦は窯址中、窯体の壁面及び天井部補強用、窯外排水施設、窯の周辺、瓦集石場から出土している。それらの窯跡群に伴ない多くの須恵器が出土している。これらの須恵器は9世紀後半以降と考えられている。それらの須恵器杯・碗を陣場遺跡出土のものと比較すると、第3・4期類のものとはほぼ共通していると思われる。

3 浅間山噴出山のB軽石及びそれに近い土器群の年代

群馬県は火山県であり、古代から火山による大きな災害を受けている。火山が多いため火山の噴火とともに、時には水田、耕地、集落が大規模に埋没してしまうことがある。しかし一方において古墳時代に噴出した軽石を石室構築材として利用している古墳も存在しているため、この軽

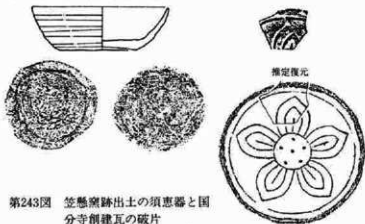
石使用古墳の年代決定の大きな依りどころとして利用されることもある。これら歴史時代における火山噴山物をくわしく研究し、その同一、同時期をつかむことができたなら、広域に文化層分離、把握が可能となり、各文化層の時代決定の大きな指標となり得るのである。そのため早くから研究されており、最近その成果がまとめられ、公表された⁽¹⁵⁾。弥生時代以降大きな噴出物を伴うものとして、浅間山が3回、榛名山の二峰、二ツ岳による給源が2回認められている。浅間山噴出の火山灰で4世紀代のもをC軽石、12世紀初頭と見られるものをB軽石、江戸時代、天明三年(1783年)の火山灰をA軽石と呼称している。平安時代の年代決定に援用できるのはB軽石である。B軽石の年代決定の根拠とされているのは317ページに示した『中右記』天仁元年9月5日の条である。

B軽石層直下の考古資料としては少なく、その実態はほとんど知られていない。それに最も近いものとして、第247図の鳥羽S K332土壇出土の皿があげられる⁽¹⁶⁾。これは底径が大きく器高の低い土器である。土壇は直径約3mの円形を呈し、中央部が盛り上がっている。小皿は掘り方面と木炭粒の多い層との間から出土し、B軽石はその上を覆っている。竪穴住居覆土にB軽石を含むものとして下濁名遺跡Ⅱ区91号住があげられる。出土遺物は高台碗、皿形土器を伴う。「この住居跡は浅間山給源のB軽石層が住居中央部で数cmの間層をはさんで覆っていた⁽¹⁵⁾」状態であった。残念ながら遺物実測図は公表されていない。この時代に近いものとして荒砥五反田8号住居跡があげられ、土釜、羽釜とともに皿を出している。これらが現在公表されているもの主なものである。B軽石の降下年代を補足する資料として最近灰釉陶器編年の成果があげられる。灰釉陶器の終末期は、中国陶器の白磁碗を写している玉縁口縁の段階と考えられている⁽¹²⁾。その時期はH-105号窯期にあたり、11世紀第4四分紀におかれている。それ以前の丸石2号窯式の灰釉陶器は、清里、陣場遺跡の第6期初頭に含まれるが、H-105号窯期の段階に近いと思われる竪穴住居は、上記のように調査された結果、灰釉陶器は搬入されていない。この段階を通過してB軽石が降下しているのである。最近の編年観をふまればB軽石の降下に12世紀初頭と考えて良い妥当性が生れる。B軽石降下の年代が前掲史料に一致するものであれば天仁元年(1108年)の可能性が高い。これらによりB軽石直下に近い鳥羽S K332号土壇の小皿は、11世紀末～12世紀初頭に位置すると考えたい。さらにそれに近い器形を出土する荒砥8号住出土の土器群は11世紀後半代となろう。

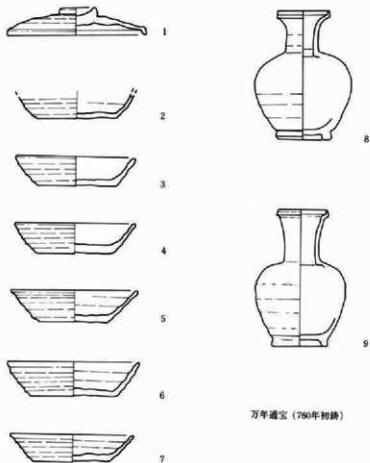
② 年 代 観

以上実年代をおさえられる遺物について検討してきた。第1期類の土器中の須恵器は、松井田町愛宕山遺跡4号住に似ているが、底径がやや小さくなり後出的である。愛宕山4号住は8世紀終末～9世紀初頭と考えられるため、第1期類土器はその後で、9世紀前半代の年代観が与えられる。第3期類土器中の須恵器環は、観音山古墳周溝中の土壇より出土した須恵器碗に多く共通している。その須恵器碗は10世紀前半の年代が考えられる。そこで第3期類土器に、10世紀前半代の年代観が与えられる。第2期は器型の変化や住居の重複から見ると、第1期類、第3期類の中

第5章 調査成果の整理と考察



第243図 笠懸窯跡出土の須恵器と国分寺創建瓦の破片

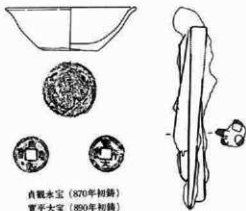


万年通宝 (760年初鑄)

第244図 松井田町愛宕山遺跡
第4号住居跡出土遺物

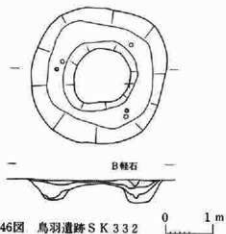
續日本紀卷十七 聖武天皇天平勝寶元年四月一閏五月 〇戊寅上野國碓氷郡人外從七位上石上郡若諸弟尾張國山田郡人外從七位下生江臣安久多伊豫國宇和郡人外大初位下几直鎌足等各獻當國々分寺知識物並授外從五位下。

續日本紀卷十七 聖武天皇(天平勝寶元年閏五月一七月) 上野國勢多郡小領外從七位下上毛野朝臣足人各獻當國々分寺知識物並授外從五位下。



第245圖 觀音山古墳周堀内土壇出土遺物

中右記 天仁元年(一一〇八)七月二十一日の条
 左申辨長忠於陣頭談云、近日上野國司進解狀云、國中
 有高山稱藏間峯、而從治曆間峯中細煙出來、其後微々
 也、從今年七月廿一日猛火燒山嶺、其煙厲天沙礫滿
 國、煙燼積庭、國內田畠依之已以滅亡、一國之災未有
 如此事、依希有之在所記置也、



第246圖 鳥羽遺跡 S K 332

中右記 天仁元年(一一〇八)九月二十三日の条
 今日午時許有軒廊御下、上柳源大納言、俊、上野國言上
 藏間山峯事、



第247圖 鳥羽遺跡 S K 332 出土遺物

間に位置している。9世紀後半代の年代観が考えられる。第6期類土器はB軽石降下に近い時代であるが、54号住は中でも初源的であり、11世紀中頃の年代観が与えられる。第4期、第5期はその中間にあたり、第4期を10世紀後半第5期を11世紀前半代とそれぞれに年代観を与えたい。

おわりに

平安時代の土器の器種は土師器・須恵器・灰釉陶器である。報告書作成に伴ない出土土器を細かく分類してゆくと、どの器種に属するのかわからない一群が出てきた。土釜、小型甕、羽釜、ロクロ使用の酸化焙焼成による堍・坏・内黒堍である。これらは最初の段階において土師器・須恵器のいずれに属するのか理解できなかつた。整理を進めてゆくなかで、前述の各土器の項で述べた理由で、土釜と第4期以降の小型甕を土師器に、ロクロ使用の酸化焙焼成による堍・坏・内黒堍を土師質土器と一括して呼称し、羽釜とともに須恵器として取り扱った。それによりほとんどの出土土器を土師器、須恵器、灰釉陶器という3器種に分類することができた。第4期以降の土師器、須恵器はそれ以前のものとは大きく異なり変質してきている。しかし従来の承譜を引いている以上やはり土師器、須恵器と呼び、新しい器種名の使用は避けるべきであろう。今後新しい資料の増加に伴ない、この器種区分も修正されてゆくと思われるが、基本的には今後もこの考え方をうたいたい。

器種分類の次に編年作業がある。従来の土器編年の中には、明確な編年基準や充分な面期をもって時期設定を行っていないためわかりにくいものもあった。土器編年は分類と異なり、何らかの社会状況・土器生産体制を反映したものでありたい。編年作業を進める中で、①わかりやすい編年基準を作ること②編年基準となりうる面期には、土器生産体制の変化を少なからず反映しているものであること、の2点を念頭に入れてきた。ここに示した編年作業がその目的に合ったものとは思えないが、一歩でもそれに近づくために努力したことを記しておきたい。

尚、本稿作成にあたり、大江正行、飯田陽一両氏に多大なる御教示、御鞭撻を得た。末尾ながら記して感謝の意を表わしたい。

(中沢)

(注)

- (1) 星野達雄「いわゆる「国分式土器」について」『原始古代社会研究3』1977
- (2) 杉原莊介・中山淳子「土師器」『日本考古学講座5』1955
- (3) 井上唯雄「入野遺跡」1962
- (4) 松島栄治「V遺物」『上野国分寺周辺地域発掘調査報告』(群馬県教育委員会)1971
- (5) 井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究 第8号』1978
- (6) 山下義信「天神風呂遺跡」(群馬県大胡町教育委員会)1981
- (7) 横崎彰一・斎藤孝正「集投窯編年の再検討について」『シンポジウム「平安時代の土器・陶器」発表要旨』1981
- (8) 大江正行氏の御教示による。
- (9) (群馬歴史考古同人会)『土器部会研究資料 No.1』1982の中に実測図が載せてある。

- (10) 井上唯雄氏が「甕塚五反田遺跡」(群馬県教育委員会)1978の中で使用している。
- (11) (武蔵村山市教育委員会)「赤塚」1981
- (12) (群馬県教育委員会鳥羽事務所)「鳥羽遺跡 No.8」1980
- (13) 柴垣勇夫「東海地方の灰釉陶器」『シンポジウム「平安時代の土器・陶器」発表要旨』1981
- (14) 坂詰秀一編「武蔵新久宿跡」1971
- (15) 『考古学ジャーナル No.157』特集・火山堆積物と遺跡Ⅰ 1979

参 考 文 献

- 大江正行「群馬県と周辺地域の中世土師質土器類」『群馬考古通信第7号』1980
- 佐々木和博「施釉陶器の実年代をめぐる研究史的検討」『史録第10号』1978
- 高橋一夫「国分武土器の編年、細分試験」『埼玉考古第13・14』1975
- 橋崎彰一編『白瓷』日本陶磁全集6 1976
- 松村恵司「山田水谷遺跡」山田遺跡調査会 日本道路公団 1974
(国士館大学文学部考古学研究室)「石井台遺跡」1973
(愛知県教育委員会)「徳政山西南麓古窯跡群分布調査報告(1)」1980

(2) 清里・陣場遺跡出土瓦の考古学的位置

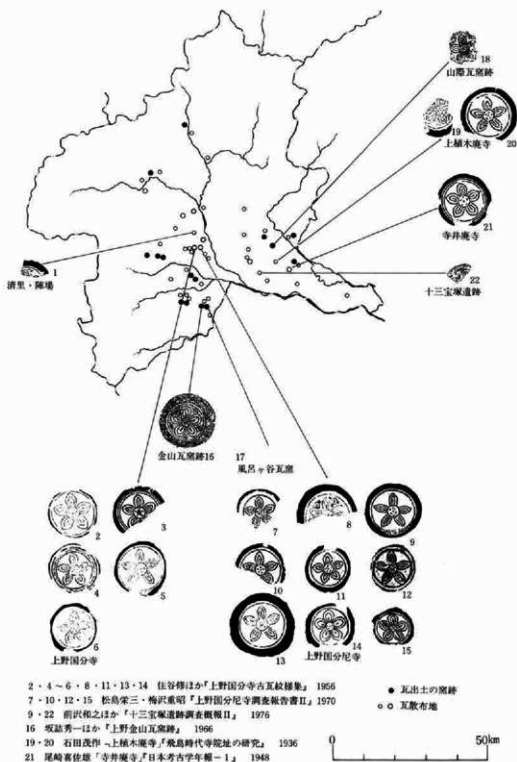
瓦類は観察の結果、平瓦では桶巻作りを2片認ることができ、総体を占める推定一枚作りとの間に作瓦技法の過渡的現象があり、軒丸瓦の年代的な見解と一致した。軒丸瓦は細片ながら、抽象文系の単弁2葉を数えることができ、直径20cmに対する円弧において5弁となり、弁端の尖形状、弁内部の郭形態から上野国分寺系瓦であることはほぼ誤りないところである。上野国分寺系は、上野国分二寺の建立に用いられた統一意匠をさし呼称されている。その上野国分寺の建立年代を瓦類から見た場合聖武天皇の詔の天平13年(741)に近い8世紀中頃と考えられる。それは次の解説理由による。

- 1 軒丸瓦の内、外区間の列点連珠文の盛行期は群馬県においてすこぶる短期であったと解釈される。連珠文の盛行期は群馬県の第Ⅳ期類にあるが、瓦種は豊富でなく畿内、諸国分寺様式の意匠に多く流布されていることと異っている。このことは上野国で連珠文が盛行のきざしにあった段階に上野国分寺の統一意匠が定められ、その強い影響で連珠文の反映がこぼまれたと考えられ、上野国分寺建立時期を知る有力根拠となる。
- 2 多胡郡の建郡は和銅4年(711)であり、旧多胡郡内から出土する瓦の中に、編年的な画期が認められる。群馬県の軒丸瓦の第Ⅳ期類に類される中に、現多野郡吉井町池、榎木見出土の複弁7葉・複弁6葉の軒丸瓦があり、両者は一系統上で前橋市山王廃寺の創建瓦の後続様式でもある。山王廃寺の複弁7葉瓦は瓦変遷の操作から第Ⅲ期に類され、7世紀終末の頃とされる。この山王廃寺の複弁7葉瓦の意匠の終末はこの吉井町の散布地をもって終りに近いと考えられ一画期となる。山王廃寺の複弁7葉瓦を7世紀終末とすれば、吉井町の散布地の複弁7葉、6葉瓦の年代を8世紀初頭と推考でき、多胡郡の建郡と直接関連のある年代と言える。このことは群馬県の上野国分寺前代にある第Ⅳ期類の年代を知る有力根拠となる。

この2傍証から、国分寺前代の第Ⅳ期類は8世紀の前半段階にあり、第Ⅳ期に類される中の連珠文の反映期は極めて短期であり、それに続く国分寺の建立着手年代も、諸国の中では早い着工であったと考えられる。

第209図-9は上野国分二寺のうち尼寺の創建瓦に近く、それは僧寺の創得意匠との間に、巾の広い弁形態、内置の端正さ、平縁周縁の狭さなどの後退様相が指摘されるためである。第209図-9を国分尼寺の創建段階に近いとした場合、尼寺の年代は国分寺の遺瓦工人に一世代以上のひらきがあったとしても8世紀後半段階を下らない所産と考えてさしつかえないであろう。

上野国分寺系の意匠の分布(248図)は上野国分二寺、上植木廃寺、寺井廃寺、十三宝塚遺跡などがあり、近年注目される資料が出された例に山王廃寺の発掘調査がある。同廃寺は、上野国分二寺より北東、約2kmの至近距離にありながら、上野国分寺系の軒丸瓦の影響種は存在するものの明確な出土例が知られておらず、あったとしても微弱と予測される。このことは、従来から山



第248図 上野国分寺系瓦分布図

王麿寺の建立に対して氏寺的とされたことと深く関連すると考えられる。さらに既成果である佐位郡衙の一端に目された十三宝塚遺跡から国分寺系瓦が出土した事実や県南平野郡の各造瓦生産地域にゆきわたるほど国を上げての造瓦生産体制が取られたことを伴せると、この5弁の上野国分寺系瓦を官衙系瓦であるとすることができよう。なお、上植木麿寺、寺井麿寺に既出の国分寺系瓦は創建段階の建寺目的や存在理由を考える寺、地域の援助を受けながらも、東国経営のために国家的な造寺と類推され、国分寺系瓦が用いられたことに疑問は生じない。これらのことから官衙の建築物には上野国分寺系瓦が葺かれたものと考えられるのである。

ここ清里・陣場遺跡において上野国分寺系の瓦が使用されたことは、当遺跡存在の性格づけに重要な意味がもたらされ、少なくとも、官衙の性格をおびる瓦葺の建物が周辺に存在したと推考される。平・丸瓦の整形技法や胎土には、質差があり単一な瓦供給でないことが明かで、造瓦生産地域が複数であったと考えられる。それは、清里・陣場遺跡を擁する地域は榛名山系およびその第四紀形成の地域に当り、瓦原料の得られる地域は周辺になく、供給には藤岡窯跡群、吉井窯跡群、乗付窯跡群、秋間古窯跡群、里見古窯跡群など県南部の生産地域が推測される。

当遺跡に近接する大規模造瓦生産地域は秋間窯跡群にあり、秋間窯跡群の形成された基盤上は秋間層とよばれる中に良土を産する。県内の須恵器生産地域としても最良質で、狭雑鉱物が少なく酸化鉄とされる黒色鉱物粒の存在が顕著で一見して判別が可能である。ここ数年来、県工業試験場において継続している胎土分析からこのことが裏付けされる。秋間窯跡群の瓦においても、意識的な原料合成をしているためか狭雑物は存在するものの、酸化鉱物粒の特徴が顕著にあらわれている。この特徴を持つ瓦類は、縄印による、平・丸瓦の一群で、平瓦6片、丸瓦2片で総数63片中、8%強の割り合となっている。軒丸瓦片を含むそのほかの瓦類は、大粒な白色鉱物粒をまじえるなど胎土傾向が異なるため、他の生産地域が考えられ、供給された瓦類に複数の需給関係が類推される。しかし秋間古窯跡群は近接しているものの、それより遠方の生産地域の製品に主体が推測されるため、なぜ遠距離生産地から主体量がもたらされているか新たな疑問点が生じる。このことは官衙に対する規制の働いた特殊な需給状況とも思われるが、今後、複数遺跡例の傾向を検討し、徐々に解釈の努力をしなければならないであろう。

(大江)

1. 大江正行「上野国分寺に先だつ軒丸瓦の諸段階」『金井麿寺遺跡』(吾妻町教育委員会)1980
2. 大江正行、川原喜久治「天台瓦窯の存在意義をめぐって」『天台瓦窯跡』(中之条町教育委員会)1982
3. 井上唯雄ほか「上野国分寺域縁辺の調査」(群馬町教育委員会)1975
4. 松島栄二、梅沢重昭「上野国分寺跡発掘調査報告書」(群馬県教育委員会)1969
松島栄二、梅沢重昭「上野国分寺跡発掘調査報告書Ⅱ」(群馬県教育委員会)1970
5. 石田茂作「上植木麿寺」『飛鳥時代寺院址の研究』1936
6. 尾崎喜佐雄「寺井麿寺」『日本考古学年報-1』1948
7. 前沢和之「瓦類」『十三宝塚遺跡発掘調査概報Ⅱ』1976
8. 1977-1979までに出された(前橋市教育委員会)『山王麿寺跡第3次-5次発掘調査概報』による。
9. 花岡延一「土器の胎土分析について」『塚廻り古墳群』(群馬県教育委員会)1980
花岡延一「瓦の胎土分析」『天代瓦窯跡』(中之条町教育委員会)1981

第5節 清里、陣場遺跡の特徴と問題点について

遺構と遺物の整理を通していくつかの特徴と問題点がでてきた。今回解決できなかった問題点をここに提示し、今後当遺跡研究の課題としたい。その問題点とは以下の通りである。

- (1) 竪穴住居址は大量に確認されたが、それ以外の住居形態は確認されなかった。大量の灰釉陶器・緑釉陶器及び金銅製丸柄、石製丸柄、海老錠等を遺跡内に搬入した有力者は、遺跡内で大量に確認された3 m前後の竪穴住居址に住んでいたのであろうか。あるいは別の住居形態であればどのようなものであったのだろうか。
- (2) 現状において、県内最大量と思われる灰釉陶器、緑釉陶器を出土している。なぜ当遺跡にはこれほど大量に搬入されたのであろうか。また国分寺系の単弁5葉軒丸瓦の破片が出土しており、県内でも例の少ない遺跡である。これらを遺跡内に搬入し、活用した人物はどのような者で、集落内で果たした役割はどのようなものであり、当時の社会においてどのような地位、身分、経済力の持ち主であったのであろうか。
- (3) 1～4号溝より出土した土器は、発掘された面積が少ないにもかかわらず、当遺跡出土総数の半分以上を占める量であり、埋没土の砂に混じり大量に重なり合い出土した。なぜこの溝からこれだけ大量の土器が出土したのであろうか。またそれらの出土土器を分類すると、大部分が壺器としての土師質土器碗と杯であり、煮沸器としての羽釜の出土量が余りにも少ない。煮沸器は羽釜の他にも存在したのであろうか。存在したなら遺物として確認できない現状において、その煮沸器とは一体何であったのだろうか。

これらの大きな問題点を解決するには、他の遺跡を含め考古資料の収集、それらの比較研究、遺跡をとりまく政治・経済の研究等により少しづつ追求してゆかなければならない。1遺跡の例でもって解決できる問題ではない。しかし当遺跡の発掘整理を通して、この問題点解決の方向について考えてみた。多くは推論の域を出ていないが、それぞれの問題点について考えたことを以下順を追って記してゆく。

(1) 大量の灰釉陶器、緑釉陶器等を集落内に搬入した有力者の住居は、竪穴住居ではないと考えたい。その理由は以下である。

- ① 当遺跡に東濃産の製品であり、須恵器に比べれば高級な焼物である灰釉陶器や緑釉陶器を大量に搬入した遺跡内の有力者が、3 m内外の竪穴住居に住んでいたと想定するには無理があらう。
- ② 灰釉陶器と緑釉陶器を最も多く出土した遺構は竪穴住居址ではなく、1～4号溝である。
- (2) 県内最大量と思われる灰釉陶器、緑釉陶器等が集落内に搬入されたのは、当遺跡の有力者が直接的に関与したためと考えられる。その人物は地域における支配階層に相当する把握者であると想定しておきたい。その把握者は国分寺系の瓦出土にみられるように、政治的、地

理的に強い影響力を持つ人物であったと同時に流通機構に有機的に関連を持っていた人物である可能性が考えられる。その理由は以下である。

- ① 主に東濃産の製品である灰釉陶器、緑釉陶器は異常とも思える量で集落内に搬入されている。このことからこの有力者は、それらの搬入つまり流通機構について深く関与していたことを想起することが可能である。
- ② 国分寺系の単弁5葉軒九瓦を出土した遺跡は、県内に22箇所認められる。それらの遺跡はいずれも官衛が想定されていたり、地域の枢要地である。当遺跡に上野国分寺系瓦の散布することは、従来の遺跡の性格とは無関係ではないと思われる。このことはこの地が地域的に枢要であったことを継承したものの可能性がある。
- (3) 1～4号溝から大量に遺物が出土したのは、この溝近くに有力者の住居に伴う厨房があったためと考えられる。またそれらの遺物の中で盛器が多く、煮沸器が少ないのは鉄鍋が使用されていた可能性が考えられる。それらの理由は以下である。
 - ① ①で考えたごとく、有力者の住居が遺跡内に存在したと考えられる。その位置は1～4号溝の近くであり、そこに住む人々の食事は厨房で作られた可能性がある。
 - ② 厨房で多人数の食事を煮沸するには大きな煮沸器で行なうのが理にかなう。煮沸器は大きいものが少量あればよく、各々人の盛り付けには各人ごとの盛器が必要であり、大量となる。煮沸器は遺物として出土しないものであり、盛器は土師質土器を中心としている。
 - ③ 出土しない煮沸器とは破損後すてられないものであり、再利用可能なものである。そこに鉄鍋の可能性が考えられる。武器、農耕具、その他における当時の製鉄技術をもってするならば、鉄鍋を作ることは充分可能である。

今回解決できなかった問題点について、遺跡の整理を通して考えてきたことについて記してきた。これらの多くは具体性に乏しく、説得力を欠いている。しかし多くの問題を少しでも事実に近いように、これらのことを考えつつ、今後も努力してゆきたい。

(中沢)

圖

版



発掘風景 単幹1号（西から）



試掘風景 耕114号（東から）

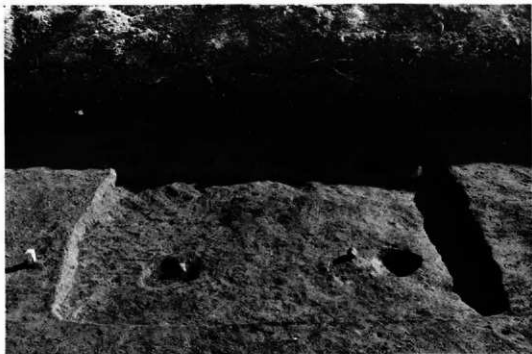
図版 2



単幹1号南北部全景（南から）



単幹1号東西部全景（東から）



1号住居址全景（北から）



2号住居址全景（南から）

図版 4



4号住居址全景（南から）



5号住居址全景（南から）



6号住居址全景（南から）



7号住居址全景（南から）

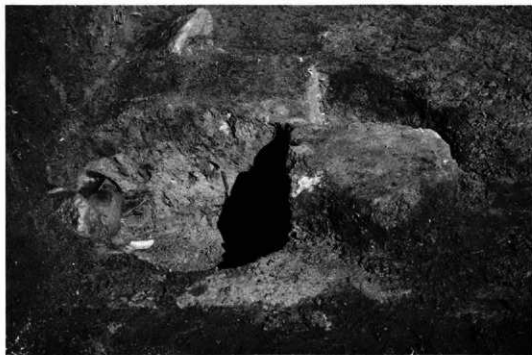
図版 6



8号住居址全景（東から）



同上 竈（東から）



13号住居址竈（南から）



同 上（東から）



31号住居址 竈・貯蔵穴（西から）



同 上 貯蔵穴遺物出土状況（西から）



32号住居址全景（西から）



同上 龜（西から）



33号住居址全景（南から）



35号住居址竈（南から）



34号住居址全景（北から）



同 上 竈（西から）



38号住居址全景（西から）



同上 竈（北から）



41号住居址全景（西から）



同上 竈（西から）



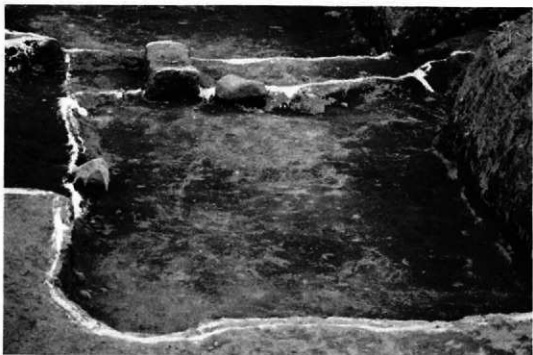
42号住居址全景（西から）



同 上 南西端部遺物出土状況（西から）



42号住居址全景 遺物出土状況（東から）



43号住居址全景（西から）



44号住居址全景（西から）



同上 竈（西から）



41～51号住居址全景（西から）



42・44号住居址全景（西から）

図版 18



47号住居址全景（西から）



同上 竈（西から）



48・49号住居址全景（西から）



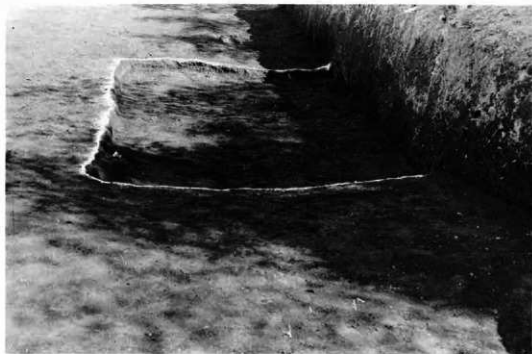
48号住居址竈（西から）



49号住居址全景（北から）



同 上 竈（北西から）



50号住居址全景（西から）



51号住居址全景（西から）



52号住居址全景（南から）



同上 竈（西から）



53号住居址全景（北から）



同上 竈（西から）



54号住居址全景（西から）

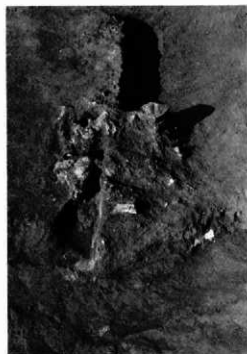


同 上 竈（西から）



55号住居址全景（西から）

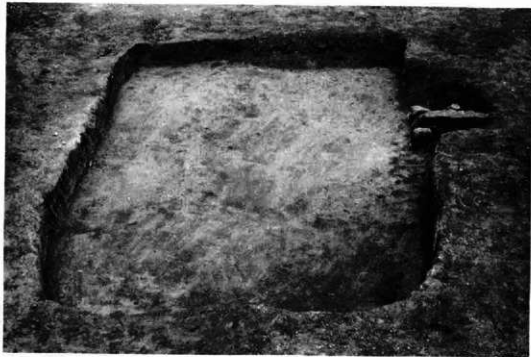
同 上 製鉄関連遺構（北から）



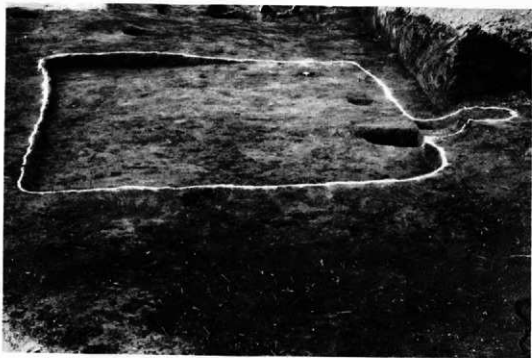
同 上 製鉄関連遺構（南から）



同 上 付属土壇（南から）



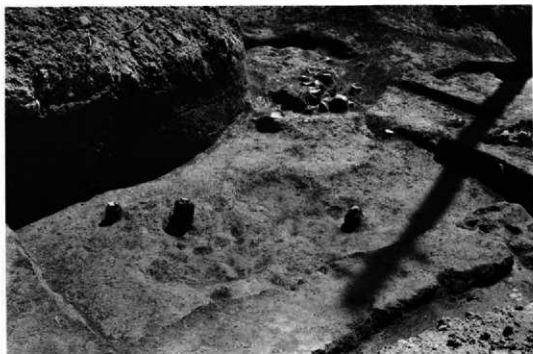
56号住居址全景（南から）



57号住居址全景（南から）



58～60号住居址全景（北から）



同 上 （北西から）



59号住居址竈・遺物出土状況（西から）



同上 竈（南から）



1～4・17号溝全景（西から）



2～4号溝全景（南から）



7・8号溝（西から）



9号溝（東から）



10号溝（北から）



11号溝（南から）



1号井戸



2号井戸



2号集石遺構（火葬墓）（南から）



1号集石遺構遺物出土状況（東から）



同 上 全景（東から）



縄文土壇（北東から）



2・3号土壇全景（南から）



1号土坑全景
(南から)



1号土坑
遺物出土状況
(西から)



1号土坑全景
(西から)



10号土城全景（北西から）



同 上・貨幣出土状況（南から）

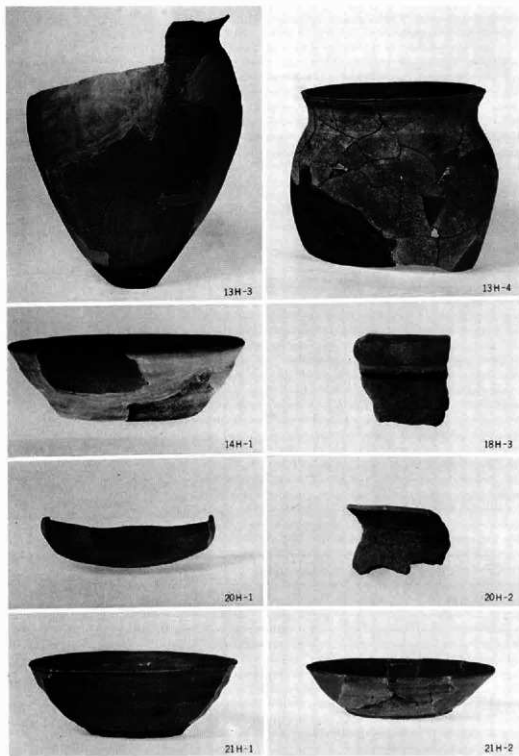


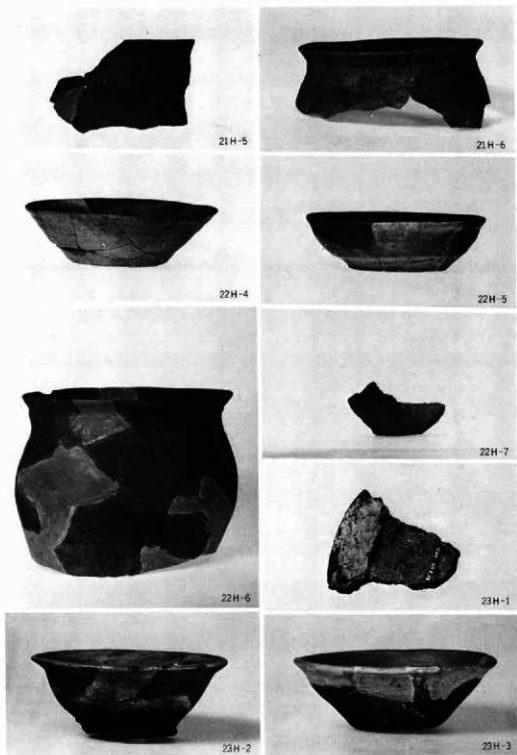
墓塚全景・遺物出土状況（南から）



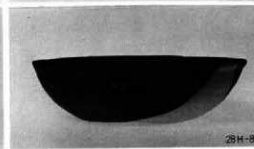
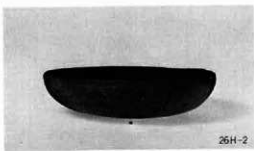
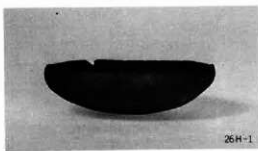
墓塚内人骨出土状況（南から）

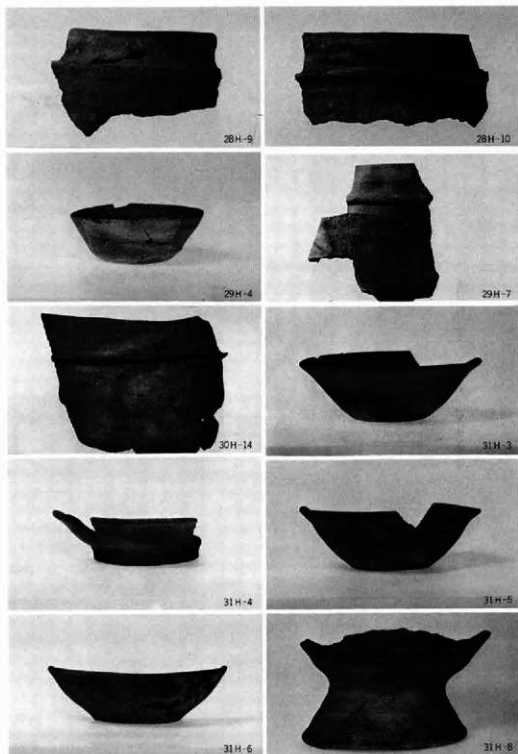






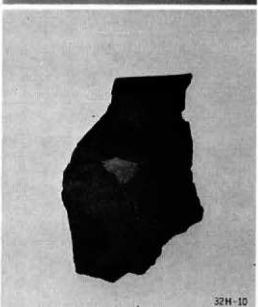
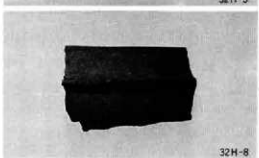
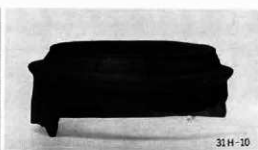
図版 40

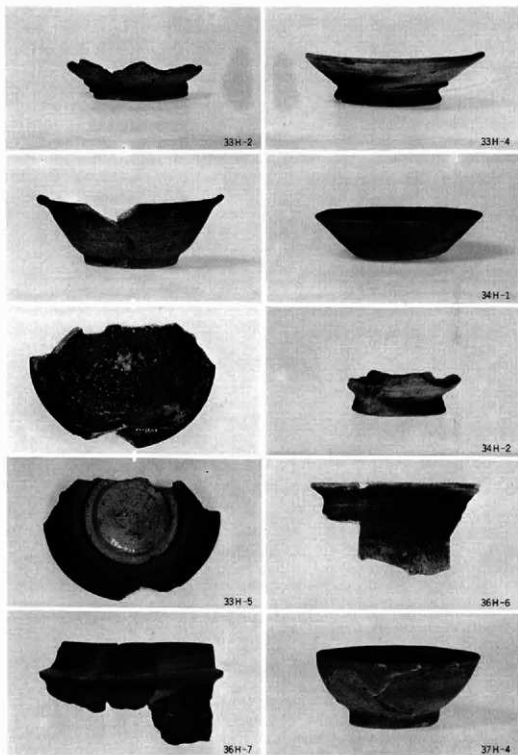


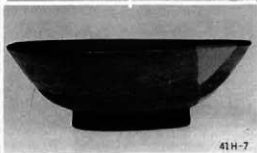


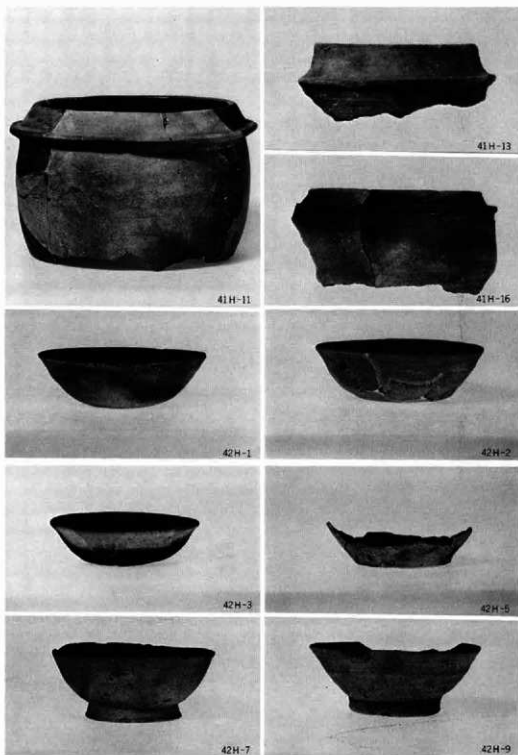
28・29・30・31号住居址出土遺物

図版 42

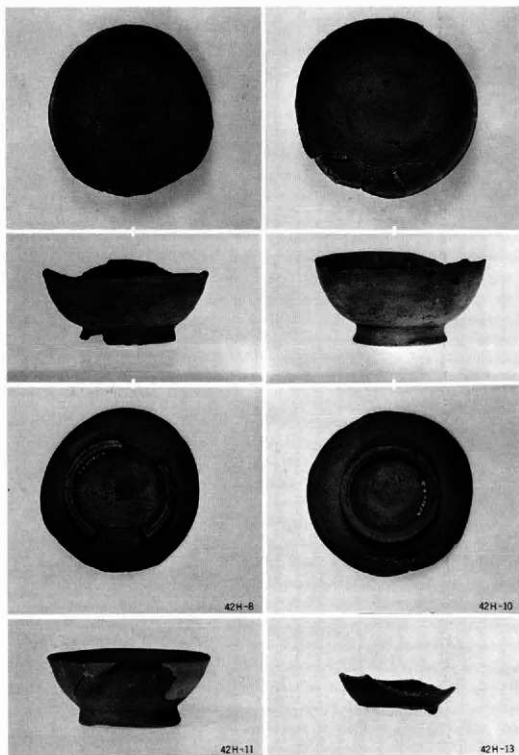




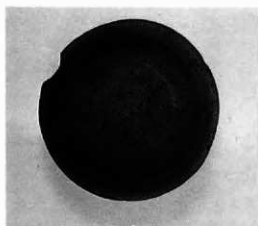




41・42号住居址出土遺物



42号住居址出土遺物



42H-12



42H-19



42H-14



42H-15



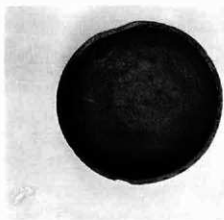
42H-16



42H-18



42H-22



42H-17



42H-28



42H-23



42H-24



42H-25



42H-32



42H-29



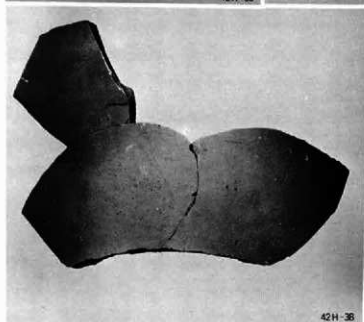
42H-33



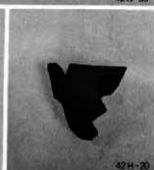
42H-35



42H-36



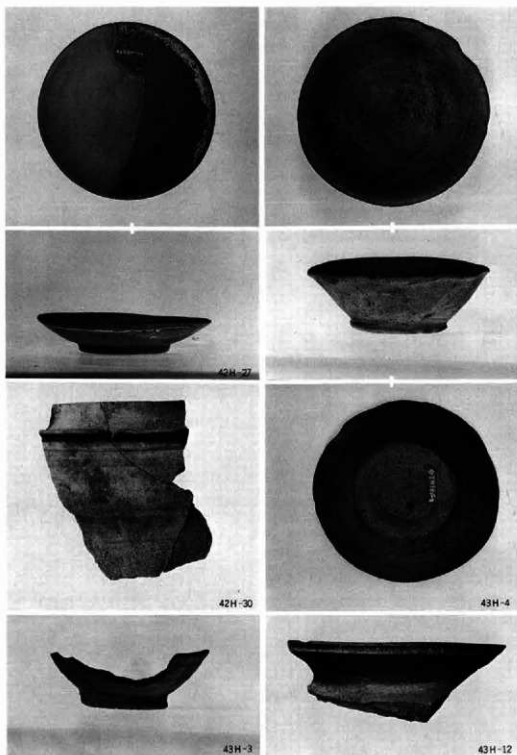
42H-38



42H-20



42H-26





43H-14



43H-8



43H-15



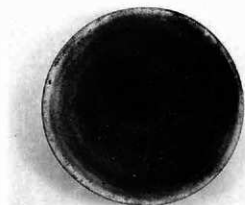
44H-2



43H-10



44H-7



44H-1



44H-5



44H-8



45H-1



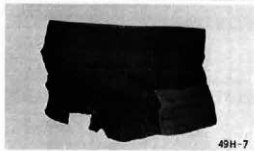
46H-3



46H-4



47・48・49号住居址出土遺物





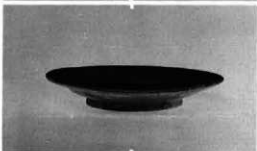
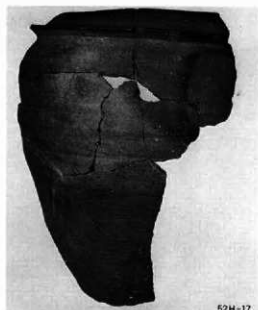
52H-3

52H-10



52H-12

52H-13

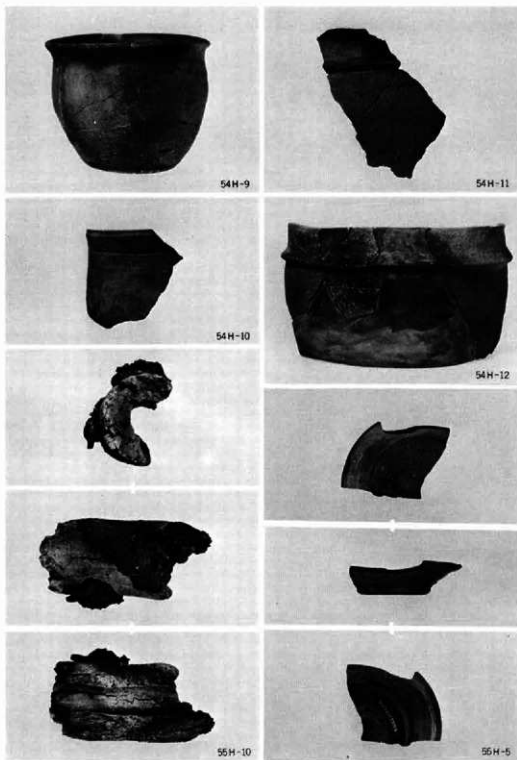


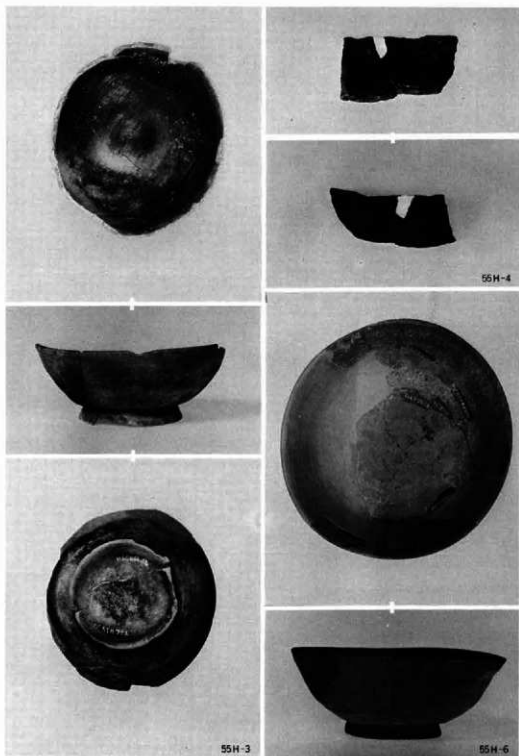


54H-14



54H-15





55号住居址出土遺物



57H-1





59H-7



59H-8



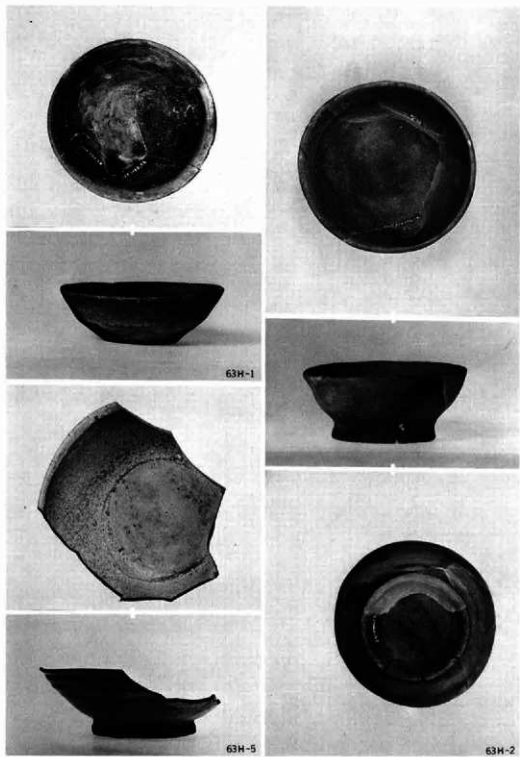
60H-2



60H-7



60H-4



63号住居址出土遺物

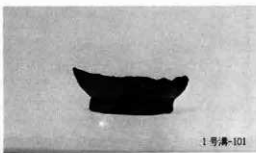


準幹1号 1号溝出土遺物

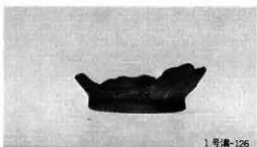




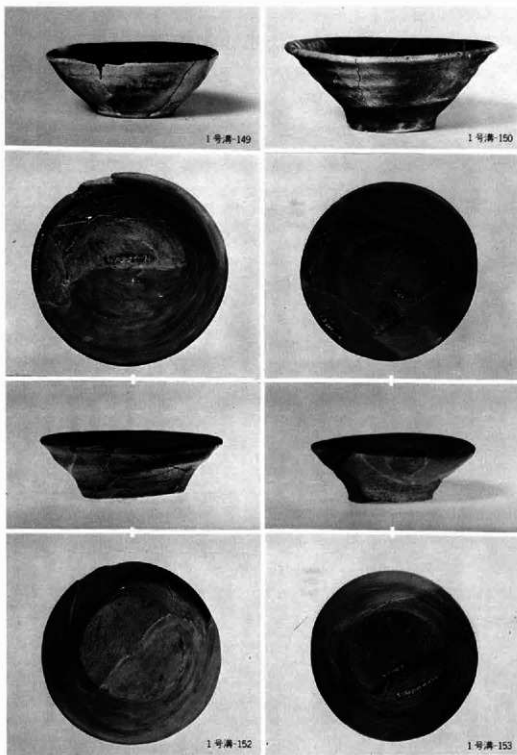
单幹1号 1号溝出土遺物



单幹1号 1号溝出土遺物



準幹1号 1号溝出土遺物



津幹1号 1号溝出土遺物



1号溝-156



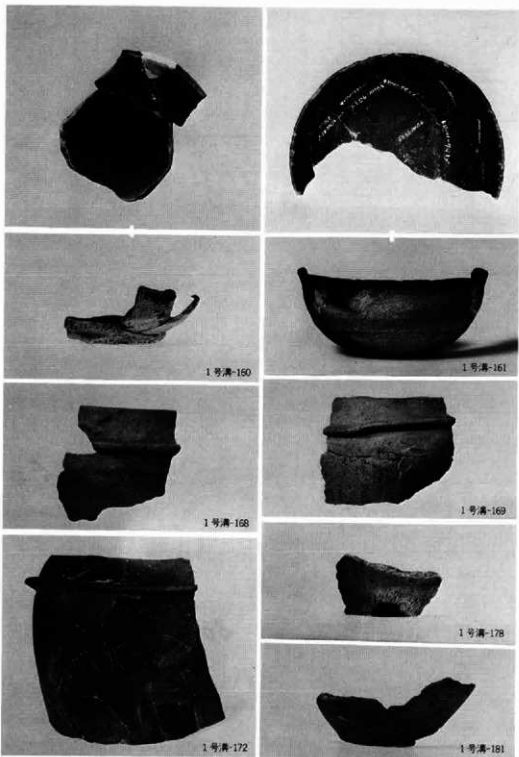
1号溝-154



1号溝-157



1号溝-158



单幹1号 1号溝出土遺物



1号溝-177



1号溝-185



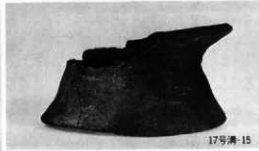
1号溝-183



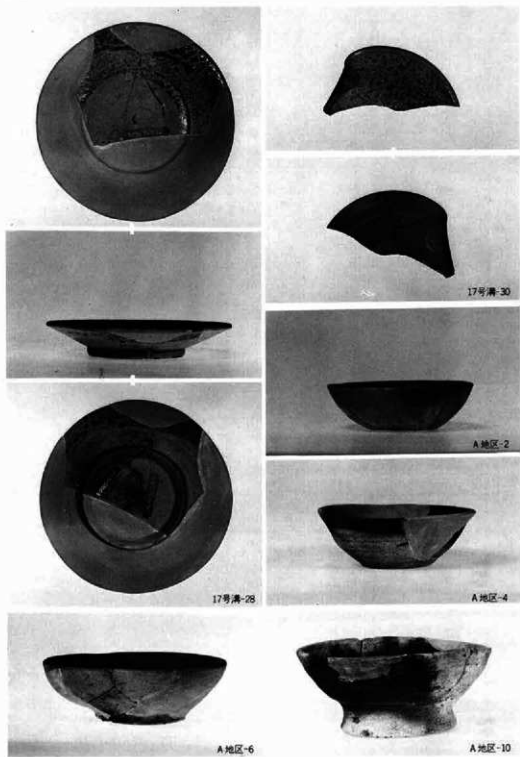
1号溝-187



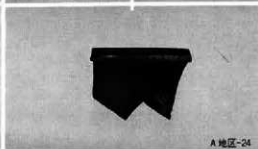
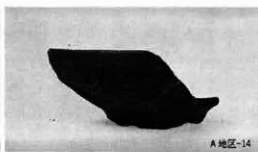
準幹1号 2-4号溝出土遺物



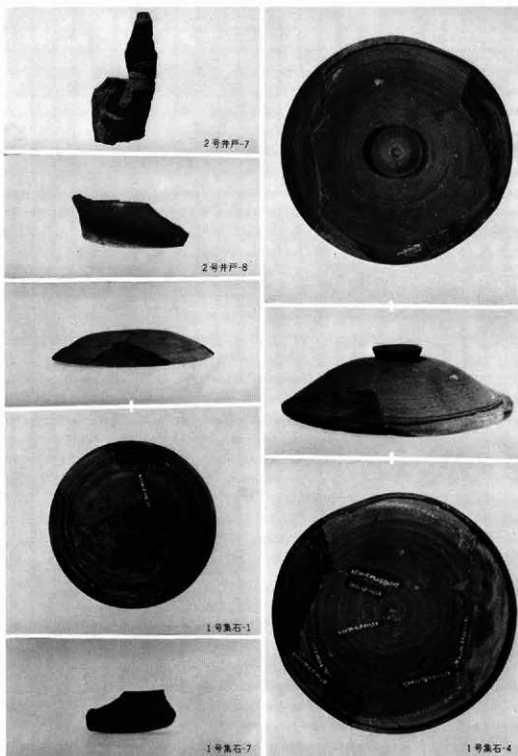
単幹1号 17号溝出土遺物



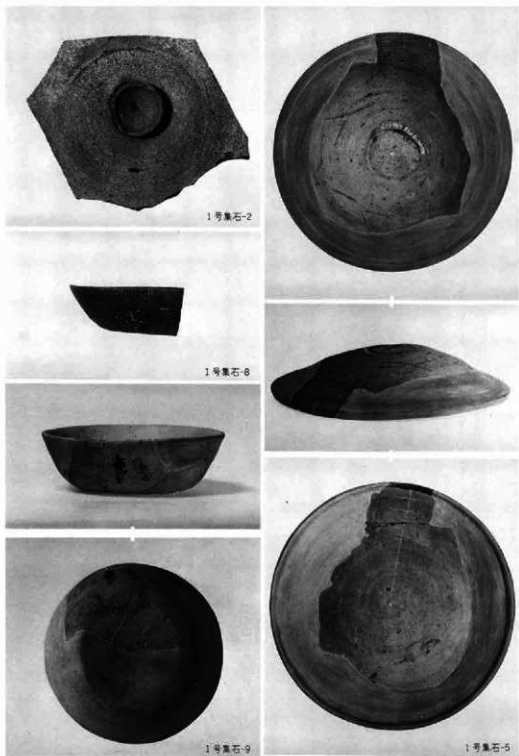
单铃1号 17号溝·A地区出土遗物



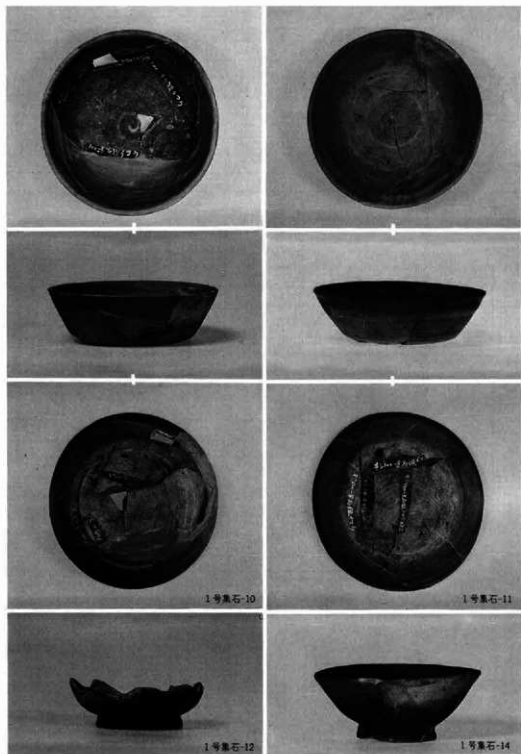
单幹1号 A地区·B地区出土遗物



2号井戸・1号集石出土遺物



1号集石出土遺物



1号集石出土遺物



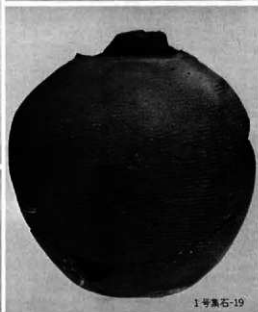
1号集石-17



1号集石-18



1号集石-13

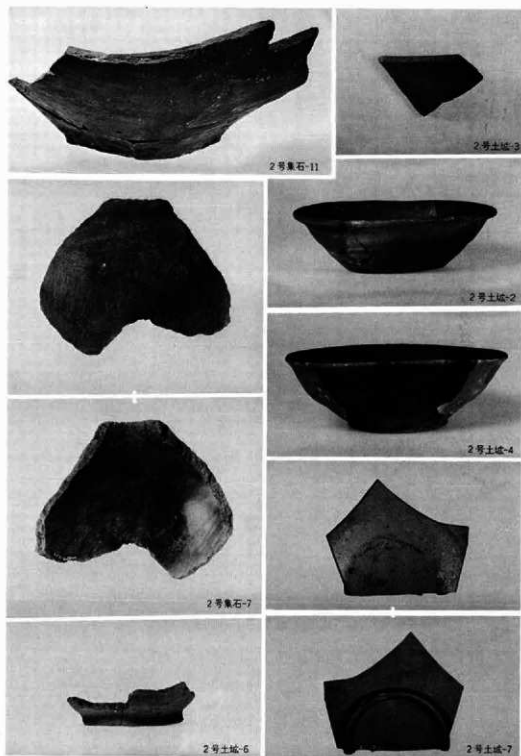


1号集石-19

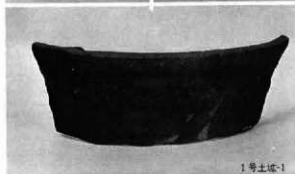


1号集石-21

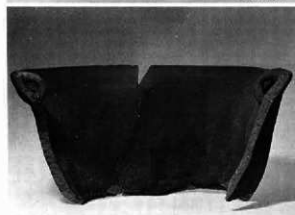




2号集石・2号土城出土遺物



1号土坑-1



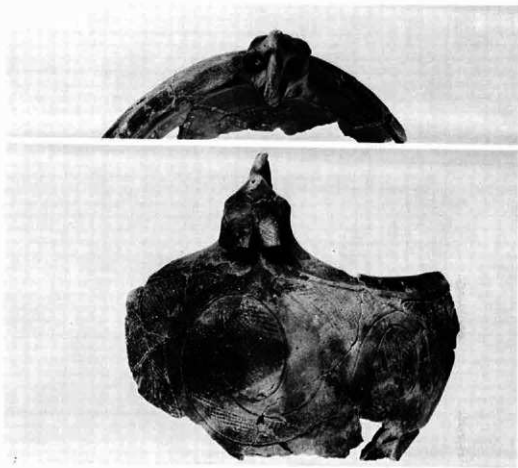
1号土坑-3



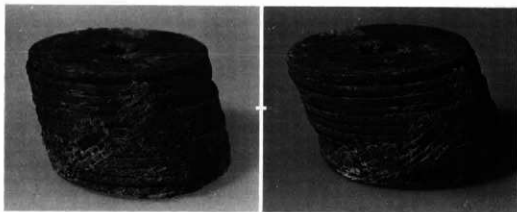
1号土坑-2 (局部放大)



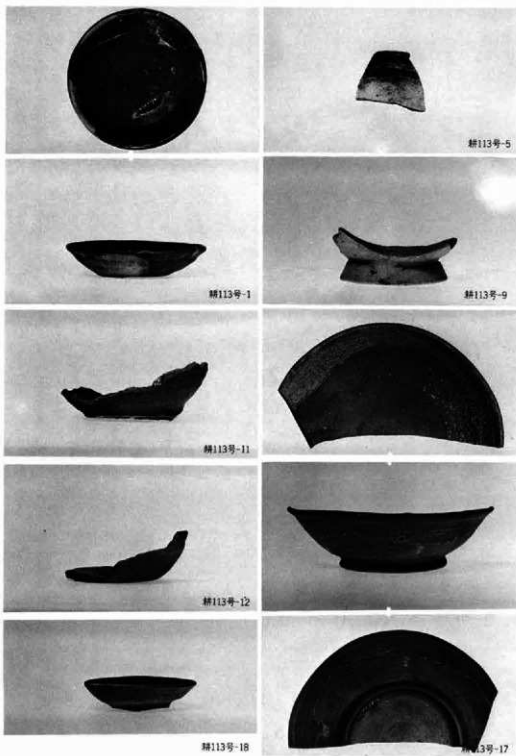
1号土坑-4 (局部放大)



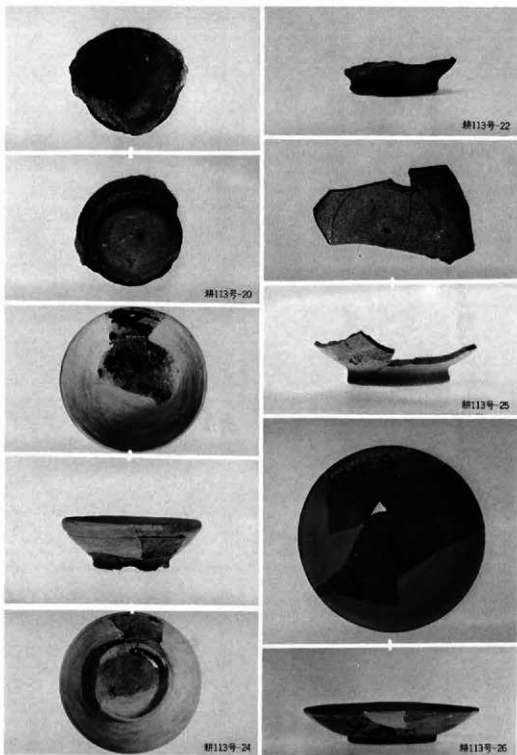
縄文土壇出土遺物



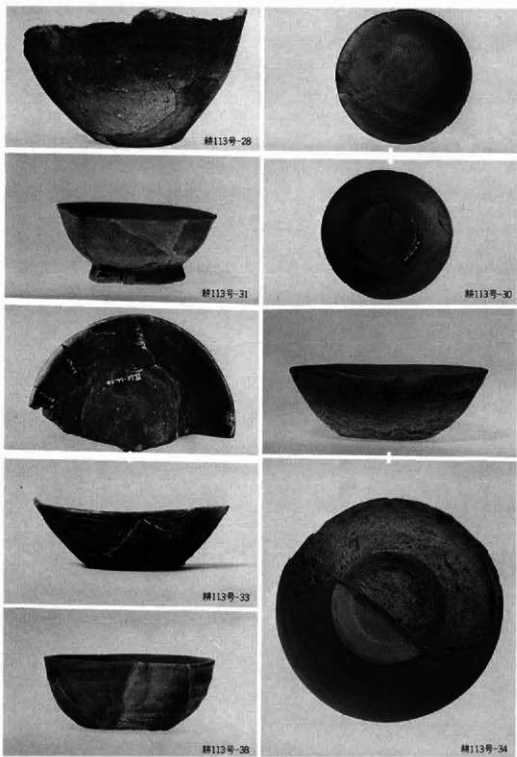
墓壇出土貨幣



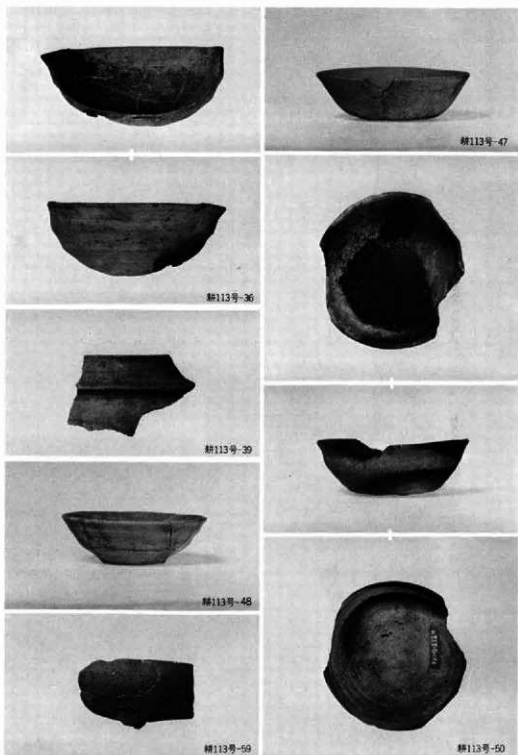
耕113号出土遺物



耕113号出土遺物



耕113号出土遺物



耕113号出土遺物



耕114号-3



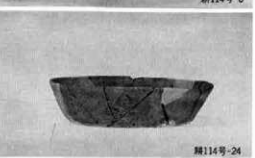
耕114号-8



耕114号-5



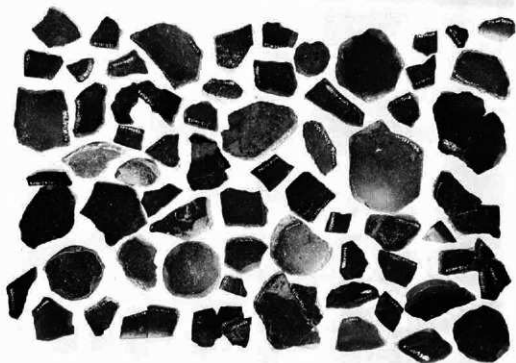
耕114号-6



耕114号-24



耕114号-29



1号溝出土・内黒土器の破片



1号溝出土灯明皿の破片



新114号-40



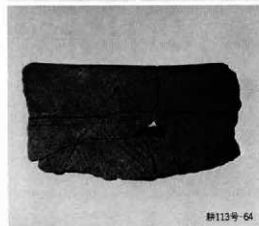
1号溝-241



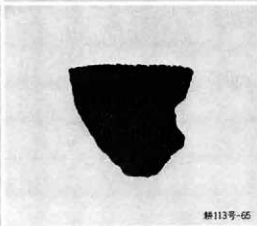
55H-14



13号溝-1



新113号-64



新113号-65



2

1号溝-220



3

1号溝-221



4

1号溝-222



10

1号溝-228



11

1号溝-229



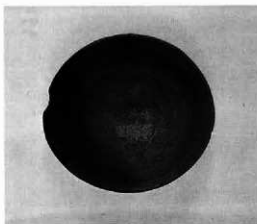
17

1号溝-234



19

1号溝-235



16

1号溝-151



18

1号溝-155



22

17号溝-31



24

17号溝-32



25

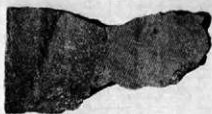
17号溝-33



4



新113号-61



5



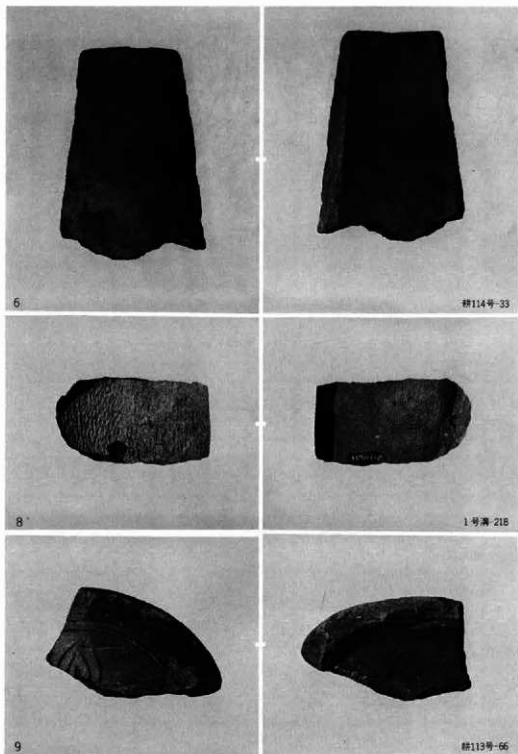
新114号-35

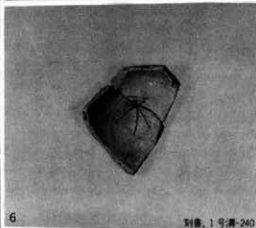
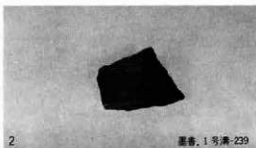


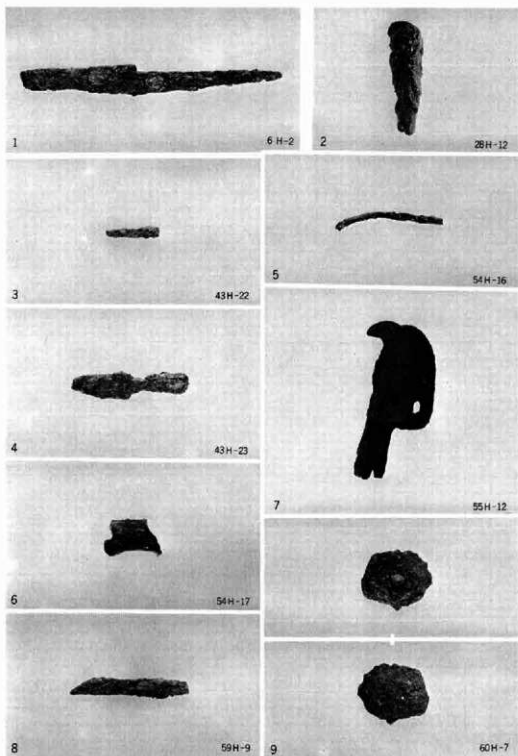
7

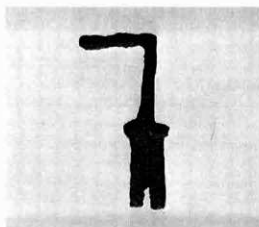


新114号-34









10

61H-4



16

1号溝-236



18

表録-8



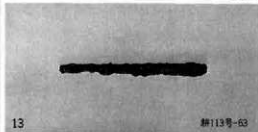
11

1号隼石-23



12

耕114号-38



13

耕113号-63



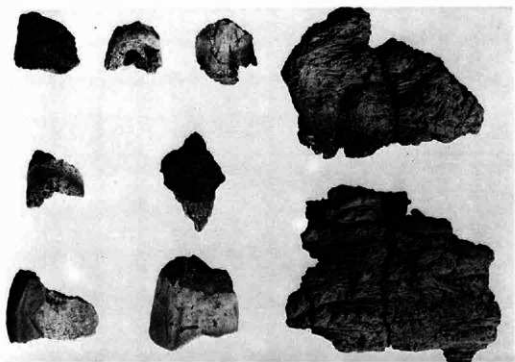
14

耕116号-19

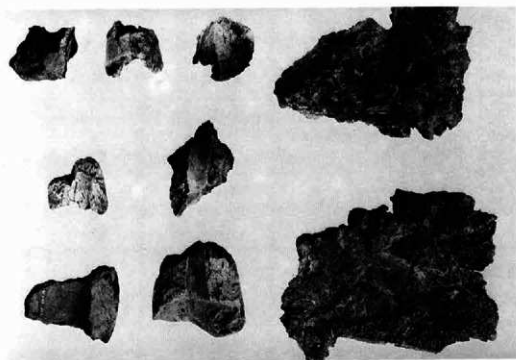


17

1号溝-237



羽口、鑄型、炉体一括（表面）



羽口、鑄型、炉体一括（裏面）

昭和53年度県営畑地帯総合土地改良事業
清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

清里・陣場遺跡

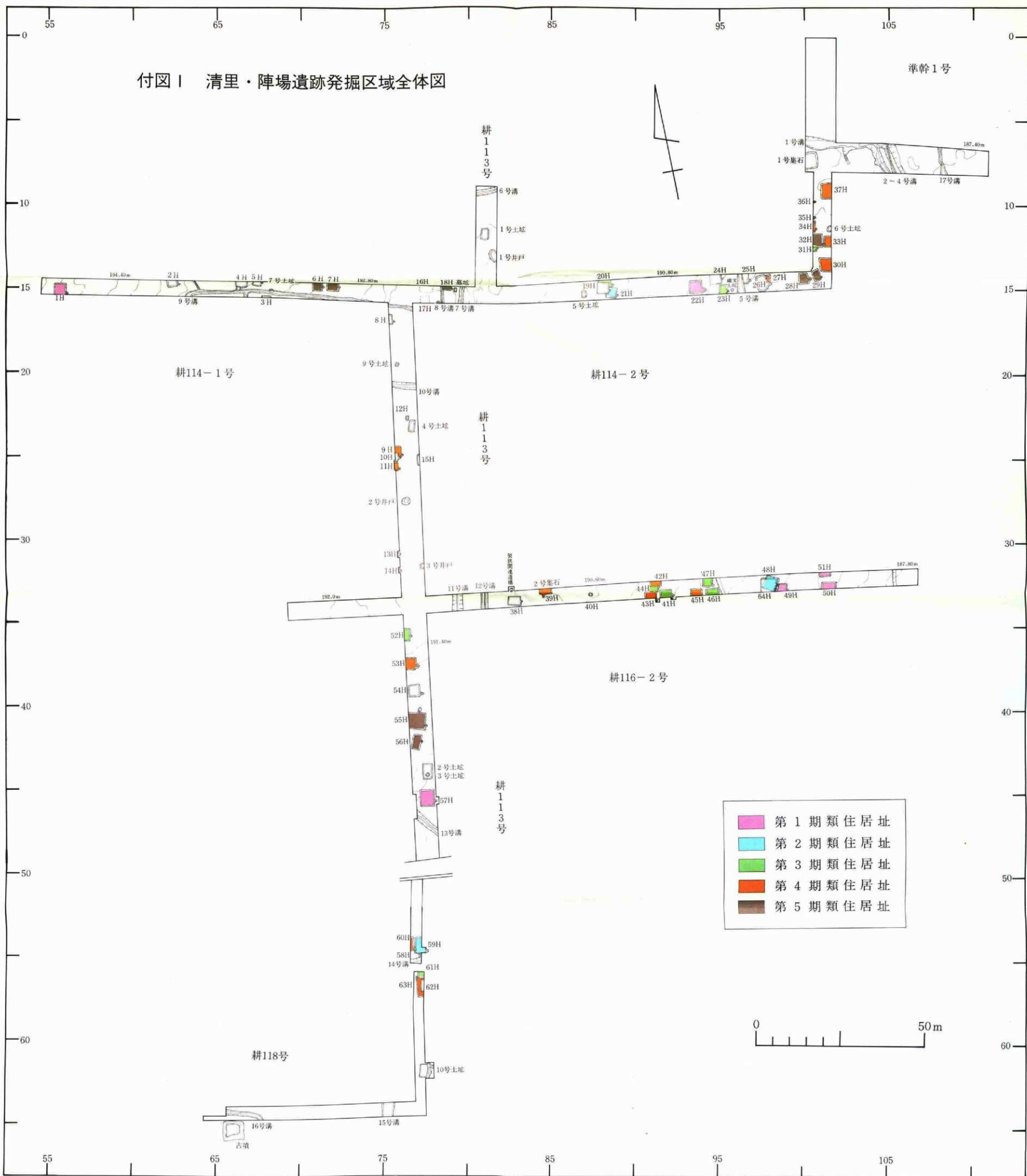
印刷 昭和57年3月29日

発行 昭和57年3月31日

編集・発行 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (027952)-2511(代表)

印刷 朝日印刷工業株式会社

付図1 清里・陣場遺跡発掘区域全体図



準幹1号

耕113号

耕114-1号

耕114-2号

耕113号

耕116-2号

耕113号

耕118号

- 第1期類住居址
- 第2期類住居址
- 第3期類住居址
- 第4期類住居址
- 第5期類住居址

0 50m

付図2 清里・陣場遺跡出土・平安時代土器編年序列図

時期	土師器			須恵器			(土師質土器)			灰釉陶器			住居			
	坏	甕	小型甕(台付甕)	坏	埴	壺・甕	羽釜	坏・皿	埴	A	B	C		皿	埴	瓶
第1期類																50H
																49H
第2期類																21H
																48H
第3期類																41H
																44H
第4期類																52H
																31H
第5期類																60H
																43H
第6期類																42H
																36H
第7期類																32H
																28H
第8期類																54H

※ 編年指標
 1期 須恵器坏の系切りとその後の無調整
 2期 須恵器坏に高右貼付以後
 3期 羽釜の出現
 4期 土師質土器の出現
 5期 土師質土器埴のA・Cの消滅
 6期 土師質土器皿の出現

※ 焼成方法の違いによる区分指標
 酸化焼成
 還元焼成
 酸化焼成と還元焼成の混在
 焼成